
編み物BABY

藍沢 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

編み物BABY

【Nコード】

N0162P

【作者名】

藍沢 要

【あらすじ】

裁縫、なかでも編み物が得意な神崎唯。そんな彼女は絶対に人には編まないという鉄則を持っている。

そんな彼女に「俺に編んでくれない？」と言ってくる人が。その人は学校の先生だった。

話数の表記は、漢数字が唯視点、数字が亨視点、0・5話視点が他者視点になります。

登場人物紹介（前書き）

登場人物は随時更新

登場人物紹介

カンザキユイ
神崎唯 16歳

私立高校1年生。

趣味は裁縫。なかでも編み物の腕はピカイチ。

周囲にのんびりした性格だと思われるが、わりと精神年齢は高め。

実父は唯が小さい頃に事故で他界、母も一年前に他界。裁縫は母から教わった。

義父と義兄、義姉がいる。

高校進学を機に名字も母の旧姓に変え、一人暮らしをしている。

編み物が好きだが、過去にあったある出来事から人には編んであげることができない。

エンドウトオル
遠藤亨 28歳

唯が通う高校の日本史教師

遠藤グループ総裁の直孫でありながら、教職に付く

外見が良いため、非常にモテる。学生時代はかなり遊んでいた模様。

唯の義兄、秀人の大学時代の後輩。

ハヤシマヤノ
林綾乃 16歳

唯の小学校時代からの親友。

サバサバした性格に見えるが乙女チックな一面も。

演劇部に所属している。

唯がなぜ他人に物を編んであげないかを知っている人物でもある。

キリユウヒデト
桐生秀人 29歳

世界的ファッションデザイナー桐生総一郎の長男。本人も才能を遺憾なく発揮して、国内外問わず有名デザイナー。よくメディアに出

ている。

唯の義兄。シスコン。

かなりの美形。でもシスコン。

亨とは大学時代の先輩後輩の間柄。

キリュウミナ
桐生美奈 25歳

総一郎の長女であり秀人の妹。唯の義姉。高校生の頃に始めたモデルで、いまやアジア圏にもファンがいるほど、人気と共に実力も兼ね備えている。

兄秀人に負けず劣らず唯至上主義。つまりシスコン。

キリュウソウイチロウ
桐生総一郎 55歳

世界的に有名なファッションデザイナーでありながら、企業家。

秀人、美奈の実父であり、唯の義父。亡き妻祥子と唯を溺愛している。

離婚した妻がいる。

キリュウショウコ
桐生（旧姓：神崎）祥子 享年46歳

唯の実母。裁縫が得意で、唯に熱心に教えていた。

タカハシゼロ
高橋零 30歳

秀人の秘書兼マネージャー。

秀人とは高校時代からの友人で、唯の事も自分の妹のように可愛がっている。

仕事面では秀人に対して容赦ない。妻と最近生まれた子供持ち。

登場人物紹介（後書き）

高橋孝一郎 高橋零に変更

第一話（前書き）

初投稿です。

第一話

ああ、暑い夏も終わってまた編み物の季節がやってきたなあ…。今年の夏は暑かったなあ…。

なんて事を考えながら、うららかな午後の日差しの中、唯は授業を聞いていた。

5時間目の授業は日本史。

眠いったらありやしない…。日本史嫌いだし…。

とうつらうつらしながら授業を受けていた。

「おい、神崎！！」

はっと目を開けたら、日本史の先生がこっちを睨んでいた。

「気持ち良さそうに寝てたねえ、神崎さん。」

「…すみません…」

うゝ…この先生嫌い…

再び教科書に目を移し、授業を再開し始めた先生。目なんてすっかり冴えてしまった。

隣の席からは友達の綾乃が羨ましそうな視線を送っている。

なんでそんなに羨ましそうなのかな。

私はそんなことは気にせず、興味の無いことが載っている教科書

をただ眺めた。

授業が終わり、綾乃が「災難だったね、唯」と言いながらも笑っている。

「災難って言いながらも、なんであんなに羨ましそうな視線してたの？」と疑問に思っていたことを口にする。

すると綾乃は「だって、あの遠藤先生に名前呼んでもらえるだけで羨ましいのにー！！」とわけのわからないことを言い出した。

「『あの？』」

「え、唯知らないの！？」

「何が？」

「遠藤亨、28歳、遠藤グループ総裁の孫にして、うちの高校の教師！！」

「うん、それで？」

「加えてあの美貌！！」

「…ふーん…」

「…え、唯…まさか遠藤先生見てときめいたりしないの？」

「しないけど…」

「『ええええー！！！！！！！！！！！！』」

おお！！

クラス中から大絶叫されて、びっくりしてしまう。

え、だって遠藤先生って言ったって、28じゃない。私たちより一回りも上でしょ。そりゃ綺麗な顔してるけど、いい評判って聞かないし。それに今日怒られたし。とっと思ってしまっ。ま、今日は私が寝てたからいけないんだけどさ。

綾乃や他のクラスメイト達が必死になって遠藤先生の魅力について語っている中、次の授業のチャイムが鳴った。

第一話（後書き）

唯が嫌いな日本史ですが、私は大好きだったりします。

第二話

放課後になり、各々クラスメイトは帰り支度や部活に行く準備をしている。

「唯、今日もバイト？」

「うっん、今日はお兄ちゃんの日なの。」

「あれ、帰って来たんだ。確かNYに行ってたんじゃないか？」

と綾乃が聞いてくるので、こくこくと頷く。

「おみやげ何買ってきたかな？」

と楽しそうに笑いながらうっききしてる彼女を見て、思わず苦笑してしまう。

「帰って来てもなあ…。『あの』うっとおしさを考えるとウンザリだよ…」

「ああ、まあ確かにね。でもま、久しぶりの兄孝行してあげなさいな。」

「…むう。」

演劇部に所属している綾乃とサヨナラし、学校をあとにする。

「ただいまー」

私は高校に入学する際に一人暮らしを始めた。だから帰宅しても「おかえり」という声が返ってくる事はない。

それももう半年も経つと大分慣れてきた。最初の頃は寂しくてしょうがなかったな。お母さんも半年前に亡くしたばかりだったし…。そんな事をつらつら考えながら、手洗いをしていると携帯が鳴りはじめる。

…お兄ちゃんだな。絶対…

携帯を見るとやっぱり『お兄ちゃん』の文字が。

「もしも『唯一』……!」

余りの声の大きさに思わず携帯を耳から離す。

「お兄ちゃん、うるさい!!」

『ああ、ごめんごめん。ついね。今どこにいるんだ?』

兄のすごく嬉しそうな声がする。くう…わざとだな…わざとおっきい声で呼んだな。

「もう部屋にいるけど、お兄ちゃんは?この時間だとまだ空港?」

『いや、今は唯のマンションに向かう車の中だ。あともう30分ぐらいで着くよ。』

「うん、わかった。部屋で待ってればいいんでしょ?」

『そうだね。久しぶりに唯に会えるから嬉しいよ。僕がNY行つてる間、何もなかった？』

「NY行つてる間って言つても、たった1ヶ月じゃない。何も無かつたよ。それに、お姉ちゃんが週2で訪ねてくるし、パパも毎日電話してくるし。」

「それでも！！唯は可愛いんだから、誰かにかどわかされたりしたらどうするの！！ああ、やっぱり一人暮らしなんか絶対止めるべきだった…」

ああ、始まった…。思わず眉間に皺がよる。

最早お馴染みになりつつある『一人暮らしは危ないから絶対にやめなさい』発言。

私が高校入学を機に、今まで住んでた家を出て一人暮らしをしようと言ったら、パパと兄姉は大反対をした。まだ高校生なのに今から一人暮らしをしてどうするんだとか、危ないから絶対駄目だとか…。あげくに、私達と一緒にいたくないの！？って言って姉が大号泣し始める始末…。

いやあ、あの時は完全にカオスだったな…。とどこか遠い目で思い出す。

結局カオス状態のまま受験を迎え、高校に無事合格。散々話し合い、妥協しあい（縋り付かれ）した結果、パパが借りたセキュリティの万全なマンションに住む事になった。

しかも、パパ、お兄ちゃん、お姉ちゃんの月何回かの自宅訪問（プラスお泊り）も付いた。ちなみにその日は、『パパの日』、『お兄ちゃんの日』、『お姉ちゃんの日』と決められている。

この時点で一人暮らしの意味はないのでは…とお兄ちゃんの電話越しの声を聞きながら、ひっそりとため息をこぼした。

第二話（後書き）

シスコン兄登場

第三話

キンコーンとチャイムの音がする。

お、お兄ちゃんだな。早いなあ、また運転手さんに無茶させたな。と苦笑しつつカメラを見てロックを解除する。

「唯——！！！！だたいま——！！！！」

いきなりむぎゅーと苦しい位抱きしめられた。

うぎゅ。お兄ちゃん…苦しいよ！！玄関の扉開けた瞬間抱きしめられて、私はあまりの苦しさにも声も出せずにいた。

「秀人様、唯様が苦しそうです。離してあげてください。」

と静かな優しい声が後ろから聞こえてくる。

その言葉を聞き、お兄ちゃんの腕の拘束が緩む。ああ。酸素万歳！呼吸を整えながら、思わず空気に感謝の意を示そうとしていたら、お兄ちゃんが「ごめん、ごめん」と謝ってくる。

…軽くお花畑がある川が見えたよ、お兄ちゃん。と涙まじりの顔をお兄ちゃんの後ろにいた高橋さんに向ける。

「おかえりなさい、高橋さん。お兄ちゃんのお世話お疲れ様でした。大変だったでしょう？お兄ちゃん、ワガママだから。あ、お兄ちゃん、おかえり。」

「え、唯。僕おまけなの？そんな軽い扱い？」

「だってお兄ちゃん、来るの早すぎ。絶対高橋さんと運転手さんに

無理言っただんでしょ。高橋さんも駄目ですよ、お兄ちゃん甘やかしちゃ。」

「そんなことはないよ！！道路空いてたんだ！！」

「混んでましたよ、唯様。」

「ばらすな、零！！」

都合の悪そうな顔をするお兄ちゃんと、飄々とした顔をした高橋さんについて吹き出した。

高橋さんはお兄ちゃんの秘書兼、マネージメントを務めている。お兄ちゃんと高橋さんとは、高校時代からの付き合いだそうで、お互いに遠慮がない。

「唯ちゃん、労ってやって。このバカ、本来ならもう2週間はかかるところを終わらせて帰って来たんだ。」

「零…口調が戻ってるぞ…」

「まあ、もう唯ちゃんしかいないし？ただいま、唯ちゃん。」

「おかえりなさい、高橋さん。とお疲れ様でした。」

「唯、僕は！？」

「はいはい、おかえりお兄ちゃん。それとお仕事頑張ったねー。お疲れ様。ところでもう離して。」

いつまでも私を離そうとしないお兄ちゃんが、もう一度むぎゅーと

抱きしめた後、ようやく離してくれた。

「ああ、やっぱり唯におかえりって言ってもらえるのが一番だね。で、零。お前いつまでいる気なんだ？さっさと帰れ。」

と私を片腕に抱きしめ、高橋さんにしつしと手を振っている。それを見てお兄ちゃんを睨みつけ、高橋さんに「ごめんなさい、高橋さん。大人気なくて。」と謝罪する。

高橋さんは「別に気にしなくていいよ。」と笑いながら、「今日は帰るよ。お疲れ、秀人。」と言ってひらひらと手を振って帰って行った。

第三話（後書き）

登場人物が増えていく…

11/26 高橋幸一郎の名前を変更しました。

第四話

高橋さんが帰って、私一人で住むには広すぎるリビングにお兄ちゃんと一緒に移動する。

お兄ちゃんは海外に行く度にたくさんのお土産を買ってきてくれる。毎回毎回、あまりの多さに次に海外行ってもお土産はいらないと言っても、それが通じることはないらしい。

今回もたくさんのお土産がテーブルの上に溢れている。

これ全部片付けるの大変だなあ。と思っていたら、小さな箱を見つけた。中を開けてみると、手のひらサイズ程のティアドロップのクリスタルだった。

「うわあ、可愛い！！お兄ちゃんこれ何？」

と聞きながら、思わず頬が緩む。

「ああ、これはペーパーウェイトなんだ。可愛いだろう？唯はこういうの好きだろうなと思ってね。NYの店でたまたま見かけた時に買ったんだ。」

「うん、好き。ありがとう、お兄ちゃん！！」

とお兄ちゃんに抱きついた。

なんだか、また流されてるような…

優しく私の頭を撫でていたお兄ちゃんが、ふと視線を上げた。

そこにはソファの脇に置いた私のマフラーと編み棒がある。

そろそろ今年用に新しく編もうかなと思って、去年使っていたマフ

ラーを解そうと考えていたものだった。
解した後の毛糸は、再び手袋か帽子にでも変身予定だ。

「唯、また何か編むの？」

と興味深そうに私の目をのぞき込んでくる。
その顔を手で遠ざけながら答える。

「お兄ちゃん、顔近いよ。うん、今年はね、赤系統の毛糸使って幅
が広めなマフラー編もうかなと思って。だからあのマフラー解すの。」

その言葉を聞き、キラキラとした顔をするお兄ちゃん。

「だったらその毛糸で僕のマフラー編んで!!!」

「やだ。」

間髪入れずに答える。

全く毎回毎回、何度言えばわかるのかな。

「私は人には編まないの。知ってるでしょ。」

「僕のたつての頼みでも？」

即却下されたショックからか、些か小声で聞いてくる。
それを見た私は「お兄ちゃんでもやだ。」とトドメをさす。

私は決めている。

『あの』時からもう二度と。

誰かの為に、編むことはないと。

第五話

表情を消した私を不思議そうに眺めていたお兄ちゃんだけど、NYから1ヶ月ぶりに帰ってきたんだから、疲れてるはず。そう思って、少し休んでもらうことにした。

「お兄ちゃん、ご飯出来るまで少し休んでたら？出来たら起こすから。」

その言葉を聞いて、お兄ちゃんは満面の笑みを浮かべる。

「唯が作ってくれるの？外に食べに行こうと思ってたけど、そっちの方が魅力的だね。何作ってくれるの？」

「うーん。久しぶりの日本食でしょ。だから鯖の味噌煮でも作ろうかなと思って。」

「ああ、いいねー。楽しみだ。」

ニコニコと笑うお兄ちゃんは、少し仮眠するために客室へ行く。

さあて、ご期待に沿うように腕を奮っちゃいますか！！私はエプロンをして、腕まくりをする。

しかし…このエプロンはどうにかならないものかね…と思う。お姉ちゃんの趣味が多分に入ったフリフリエプロン。お姉ちゃんだけじゃなく、パパもお兄ちゃんも「よくいいの見たな、美奈！！」と大絶賛の代物だ。自分達はデザイナーなんだからもう少し機能性のいい物を作ってくれてもいいのに…と内心ごちりながら、それでもありがたく使っている。

「もー、しょうがないなあ。何時ごろに来るの？パパも一緒なんですよ。」

『そうそう、パパが唯と食事したいって言ってたからね。一番喜ぶわよー、うふ。えーとね、パパと一緒に唯のマンションに行くからー…だいたい19時ちょっと過ぎたあたりかな。で！今日のご飯は何作ってるの？』

「19時ね。わかった。今日はお兄ちゃんが帰ってきて日本食食べたいだろうなと思って、鯖の味噌煮だよ。あーとは…ほづれん草の胡麻和えとか作ろうかなって…。あ、そうだ！味噌汁の具はお姉ちゃんに決めてもらおうかなー。何がいい？」

『本当にー！！早く帰りたいー！！マチさーん、早く帰りたいー！！い！！（後少しガマンしなさい！！）』

あ、お姉ちゃんのマナージャーさんのマチさんの声がする…。マチさんも高橋さんと同じく大変そうだなー。

『（美奈さんお願いしまーす）あ、ごめんね、唯、行かなきゃ！！具はワカメとお豆腐！…じゃああとでね！…』

「はい、わかった。あと少し頑張つてね。マチさんに迷惑かけちゃ駄目だよ。」

『わかってますよう。じゃあね！！』

電話を切つて、ふーと一息。パパとお姉ちゃんも来るのか。ご飯も少し炊かないと。さてさて鯖さーばつと。お姉ちゃんのリクエストのわかめとお豆腐のお味噌汁も作らないとねー。

鯖を煮込んでいる最中に、手早くほうれん草の胡麻和えも作ってしまふ。しばらくすると、キッチンにお味噌のいい香りが漂ってきた。うーん、いい匂いー。んふー。顔も綻ぶってもんでしようー！

と、冷蔵庫を見るとお豆腐がなかった。

あれ？買い置きなかったっけ…。うーん…今18時かあ。うーむ…ちょっとコンビニ行って買ってこようかな。コンビニはすぐそこだし、お兄ちゃんは起こしちゃ可哀想だし。さっさと行って買ってこようかな。

そう思って、財布と携帯、念のためキーを持って部屋を出て、コンビニへ向かった。

第五話（後書き）

シスコン兄に負けず劣らずのシスコン姉登場。

第六話

あの夏の暑さが嘘みたいに、最近はめっきり寒くなった。昼の暖かさがなりを潜めて、ひんやりとした空気に変わっている。

近くとは言え、私は根っからの寒がりなので、解す予定の白いマフラーを首に巻いてコンビニに向かった。

コンビニへ向かう道中、思い出したのは、日本史の遠藤先生だった。確かに女子…というか女の人にモテそうな容姿をしている。

はつきりした目鼻立ちで、それが絶妙なパーツ形成を取っている。

少し色素が薄い目、それにちよつとだけ癖のある焦茶の髪。180cmをゆうに超えた長身。

加えて、経済界でも有数の規模を誇る遠藤グループの御曹司。年は…28歳だっけ。

何よりふとした仕草が色気を纏っている…らしい。らしいと言うのは私が興味がないから、そこまで見ていないからで、皆から言わせれば『フェロモン垂れ流し』だそうで…

垂れ流しねえ…。そうなの？全然気にしてなかったな。

今日皆が教えてくれた話では、この学校には遠藤先生の非公認のファンクラブなるものまであるらしい。

学年や男女問わず（問わなきゃいけないんじゃない…）入会できるが、もし抜け駆けしたら、ファン全体から総攻撃される。

ファンクラブ内でもそうなのだから、もしもファンクラブ以外の誰かが先生の彼女になったら、大変な目に合いそうだ…。かと言って、

あの先生が高校生なんかに興味を持つとはとても考え難いのだけれど。

あと綾乃は、若い女の先生も狙ってるんだってーと教えてくれた。中でも家庭科の有紗先生が本命の彼女っぽい！！と興奮しながら話していた。

だけど、皆が騒ぐほど私は先生がいいとは思えない。

皆が感じているものが、どこか無機質に。とても冷たく見える。なーんか、すごい遊んでそうな雰囲気があるんだよねえ。って言ったら、クラスメイトによると、『来る者拒まず』主義だって言うてた。なんだ、やっぱり遊んでるんじゃない。と若干失礼な事を考えていたら、すでに目的地に着いていた。

コンビニに入って、すぐにお豆腐を手取る。

ちよつとだけ雑誌コーナーを覗くと、モデルをしているお姉ちゃんが表紙のファッション誌が何冊も置いてあったので、思わず近くの一冊を手を取った。

ふわー、お姉ちゃん綺麗ー。キラキラしてるよ。

そこには、艶やかな微笑みをたたえたお姉ちゃん。思わず見とれていると、見慣れた名前が表紙に載っていた。

目的のページまでパラパラと捲っていると、お兄ちゃんの特集が組まれていた。

兄弟で同じ雑誌出てるよ…。
と笑いながら、お兄ちゃんを見やる。
お兄ちゃんも遠藤先生に負けず劣らず美形だ。

お兄ちゃんは柔和な目元が印象的だ。中性的な顔立ちに、常に微笑みを浮かべたような淡い栗色の目。端正という言葉がよく似合う。

彼は大学に通っていた頃、パパがチーフデザイナーを務めていたブランドで、アジアの広告塔になった経歴を持っている。

もちろん、コネではなく実力で勝ち取ったらしい。

兄が広告になった写真の反響は凄まじく、今や広告界の伝説となっている。

それからは、自身がモデルだった経験を生かし、今や新進気鋭の若手デザイナーとして国内のみならず、海外でも活躍が有望視されている。

その為、メディアの関心も非常に高い。

端正な容姿に加えて、スラリとした背格好。新しい服を熱心に語る彼が載ってる雑誌は、売上げが驚異的に上がるらしい。

その恵まれた容姿だが、どうやら産みの母親らしい。

その彼女の写真を見せて貰ったけど、とても美人な人だった。彼女は、忙しい夫とのすれ違いに耐えられずに、子供達を置いて他の男の元に走った。詳しい話を知りたいけれども、義父や義兄、義姉の口からそれが語られる事はない。

まだ幼かった息子と娘を残して出て行った彼女を、彼等はとても嫌っている。

仕事では凄いのになー。なんであんなに私にべったりなんだろう。まったく、早くお兄ちゃんに彼女出来ないかなー。

パターンとページを閉じ、棚に戻した。来たついでに、新作のチョコレートも一緒に手に取りレジへ向かう。ありがとうございます！と言う店員の声を背に、家路へと急いだ。

第六話（後書き）

美形をどのように表現するのかって、意外に難しいものだっていうのがわかりました…（撃沈）
精進精進…

第七話

最近はだいぶ日が暮れるのが早くなってきたから、辺りは電灯が点り始め、既に薄暗くなっている。携帯で時間を確認すると、18時13分…。

これから部屋に戻って、お味噌汁作って、あと温野菜のサラダと…それにあわせて梅肉ドレッシングを作って…。あとは少し何か適当なのを作ったらちよんごお姉ちゃん達が来る時間かな。などと頭の中で計画を立てていた。

信号が赤に変わったので、何気なく辺りを見回す。

するとちよんご反対側のお店から、見知った人が出て来るのが見えた。

あそこを歩いているのは…有紗先生だ。

ふと綾乃の言葉を思い出した。

『遠藤先生の彼女に一番近いのは有紗先生なんだって！！なんでも休日と一緒に歩いているの見た子もいるみたいよ。いやー、美男美女でお似合いだよねえ。ま、あくまでも噂だから、真偽は不明だけどね。』

確かに、遠藤先生と有紗先生は一緒に並んで歩いても違和感がないほど、お似合いだ。

有紗先生は、お姉ちゃんとは違ったタイプだけど、間違いなく美人。アーモンド形のパッチリした目に、少しだけぼってりした唇。なんだか女優さんみたいなんだよなあ。おまけにスラッとしたスタイル

で、自分に似合った服装をしている。

校内では彼女に憧れている女子も多く、男子に至っては年上でも彼女にしたいとまで言わしめさせている。

かと言ってそれを鼻にかけたりすることはなく、むしろ親切に教えてくれたり、生徒目線で考えてくれる先生なので、評判はすこぶるいい。

誰か待つてるのかなー。と思っていると、先生が立っている側の道路に外車が停まった。

おっ！本当に待ち合わせ！？誰だろーと興味深々でガン見したら、信号が青に変わった。周りの人達と一緒に流れるように歩いて、少しだけ有紗先生の方を見てみた。

車の中から誰かが顔を出している。その瞬間、吸い寄せられるように先生がその人とキスをしていたのが見えた。

…え…あれって…うそ…遠藤先生…？

目を見開いて、思わず立ち止まった。

う…噂は本当だったんだー！！うわうわ、生ちゆうっ！！しかも公衆の面前！！きゃあー！！！！

私は現場を目の当たりにしてかなり興奮してるのがわかった。綾乃と一緒にいたら間違いなく叫んでいるはずだ。その時横断歩道の真ん中で立ち止まっている私に、クラクションが鳴らされる。慌てて歩道を渡りきった。

そしてもう一度有紗先生達の方をチラッと見ると、一瞬車中の遠藤先生と目があつたように感じた。

え…

こっち見た！？でもでも、私制服じゃなく私服だし、しかもマフラーで顔半分隠れてるし！おまけに暗いし、結構離れてるから見えてないよね！？見えないよね！？

内心動揺しまくりながら、慌てて目をそらした。それから急いでコンビニ袋をぎゅうつと握り直し、マンションまで半ば駆け足で帰った。

部屋に戻って荒い息を吐く。

さっき見たあれは…なんか内緒な感じしたー！正直かなりびっくり。あれはかなりお似合いだわ。

大人な二人って感じで！先生達も結婚するには早い年じゃないし、結婚とかするのかなー。素敵だわあ…。目の保養、目の保養。

遠藤先生、タキシード絶対似合うー。有紗先生もスタイルいいから難易度高めなウエディングドレスとかでも全然平気そうだな。

まあ、そんな事考えてたって私には直接関係無いし。お幸せになってことかしらね。

でも…さっき、一瞬目が合った気がしたけど…大丈夫…よねえ…。

けど、先生が私の顔なんて覚えてるわけないし。うん、平気か！！

ふんふん いい物見たなーっと気を取り直して、残りの献立の用意をし始める。

一抹の不安を頭の隅っこに押しやりながら。

第八話

19時少し前に晩御飯が出来た。あとはお姉ちゃん達が来るだけだな。

おっと、そろそろお兄ちゃんも起こさないと。

パタパタとお兄ちゃんが休んでいる部屋へ行き、コンコンとノックをして、少し控えめに声をかける。

「お兄ちゃん、入るよ。」

そろりとドアを開けると、お兄ちゃんは夢の中のようだ。まだ寝てる…。でもあんまり寝ちゃ夜に寝れなくなっちゃうし。

ふう、仕方ない。気持ちよさそうに寝てるのを起こすのは可哀相だけど、起きて貰わなきゃ。

「お兄ちゃん。ご飯出来たよ。起きてー。お兄ちゃん！おーきーてー！！」

羨ましい程長い睫毛がふるりと震えた。眉間に皺も寄っている…

うー…と唸りながら、起こすなどでも言ってるようだ。

あは、面白い…ニヤニヤしながら、お兄ちゃん、起きろー！！と繰り返す。瞬間、お兄ちゃんにベッドへ引きずり込まれた。

私をキツく抱き締めたお兄ちゃんは「まだ眠い…もう少しだけ寝させて…」と、非常に精神衛生上よろしくない色気を含んだ低く掠れた声で、しかも耳元で囁やかれた。

他の女の子だったら多分コレをされたら、十中八九落ちるんだろうな。しかし、そこは私だ。

「ちょっと、お兄ちゃん！！起きないんだったらご飯抜き！！いいの！？パパとお姉ちゃんにお兄ちゃんのお兄ちゃんの分全部あげちゃうよ！？」

「起きる！！起きます！！！」

ふっ。楽勝。

バツチリ目が覚めたらしい。ついでに腕も解いてくれないかな。ベッドの上で義兄に抱きしめられる図っているのは、一般論的にま
ずい。

お兄ちゃんのファンから見たら垂涎物だろうが、小さい頃からそれこそ数え切れないほどされているので、別に何てことはない。やっぱり早く彼女作ればいいのに…と内心愚痴る。

「んー…？父さんと美奈にあげるって…ひょっとして、二人とも今日来るの？」

お兄ちゃんが、もそもそと如何にもまだ眠そうに身を起こし聞いてきたので、私の体に回っている腕を外しながら、お兄ちゃんが寝ている間にお姉ちゃん達が来ることになった経緯を説明した。

「多分もうそろそろ来るよ。」と言っていると、チャイムの音が聞こえた。

お兄ちゃんと顔を見合わせて、ふふふと笑い合う。

「ほらね？」

「噂をすれば…か。唯、出迎えてきなさい。僕もすぐ行くから。」

お兄ちゃんがふわりと笑いながら、促すのでベッドを降り、玄関へ向かう。
ロックを解除し、ドアを開けると、お姉ちゃんがいきなり抱きついてきた。やっぱりお兄ちゃんとそっくりだ。

「唯い！お腹すいたよー！！」

ぎゅぎゅぎゅ抱きしめられながら、お腹空いたを繰り返すお姉ちゃん。

…この人って、本当にさつき見た雑誌の表紙飾ってた人…？

「こら、美奈。早く唯を離せ。俺も抱きしめたいんだから！」

この深くて渋い声…パパだ…。

…正真正銘、お兄ちゃんもお姉ちゃんもこの人の血を余すことなく受け継いでる！！！！間違いないよ！！！！

「ええー！？唯はパパに抱きしめられるのは嫌だつて。加齢臭がするから。ね、唯？」

にっこりと笑って、とんでもない事を実の父親に向かって吐いた。ヒクツと顔が引きつった。ちらつとパパの方を見ると、さながらこの世の終わりの様なショックを受けている。ああ！！そんなこと言わないでよ、お姉ちゃん！！これから宥めるの大変なのにつ！！

「ぱ…パパ…？あのね、そんなことな「そうなのか、唯！？嫌なのか！？父に抱きしめられるのは嫌なのか！？」」

ガツと両肩を掴まれ、がつくんがつくん揺さぶられる。

ちよつ…!!頭が…頭回る!!!

「小さい頃はあんなに俺に抱っこ抱っこってせがんでたじゃないか!!唯、もう父は嫌いか!?顔も見たくないのか!?やめてくれ、唯!!愛する祥子がいない今、俺は唯から嫌われたら生きていけない!!!」

がつくんがつくん揺さぶられてたのが収まったと思つたら、またぎゅぎゅぎゅされる。

苦しいなんてもんじゃない。

「僕と美奈から嫌われても生きていけるんだ。父さん…」

「当たり前じゃない。多少はダメージあるかもしれないけど、それ位でパパは死にやしないわよ。そんなヤワな人じゃないもの。それより、唯に嫌われたらあたしも生きていけない!!」

「同感だ!!」

いつの間にか会話に加わっていた、お兄ちゃんとお姉ちゃんの会話が遠くに聞こえる…

ああ…こりゃダメだ…意識が…

「とうか、父さん。いい加減離してあげたら?本当に唯に嫌われるよ?」

「それはいかんつ!!」

すぐにパパの腕から解放されて、ようやく息をつく。くそう、涙目になっちゃったじゃないか、パパめ!!

「もう！！帰れ！！ご飯食べないで帰れ！！今すぐ帰れ！！」

私はキレた。ええキレましたよ。

何だってこんな背骨が何回も何回も限界まで軋まなきやいけないんだ！！

むっすーと3人を睨み付ける。

案の定、すぐに3人とも謝ったけど。

ファッション業界のみならず、その他の業界にも知られまくっている桐生総一郎。

その跡を継ぐべく将来を有望視されている息子、秀人。

トップモデルとして、国内外で絶大な人気を誇る娘、美奈。

何を隠そう、彼ら全員私の事を溺愛しまくっているのである。

第八話（後書き）

桐生一家と書いて、唯至上主義ファミリーと読む。

第九話（前書き）

なかなか話が進まなくてすみません（滝汗）

第九話

私はぷりぷり怒りながら、さつさとリビングに戻った。怒られて、気持ち大人しくなった彼らも一緒にた付いて来る。

もともと「パパのせいで拗ねちゃったじゃない」とか「俺だけが原因じゃないだろ」とかゴチャゴチャ後ろで言ってるけど。

むっつりした顔で「ご飯食べるの」と無愛想に聞く。

「もちろん!!」「」

即答されたので、ちゃっちゃと用意して食べちゃおう。んでもって、さつさとお帰り願おう!!

ダイニングに行き、今日のメインである鯖の味噌煮やお味噌汁を温め直す。

私だって明日は学校だし、やることはそれなりにある。ああ、マフラー解体は明日学校に持って行ってやるのかな。でも明日バイトだ。ついでに、お店で毛糸買って来ちゃおうかな。

そう考えながら、温められたおかずを盛ってテーブルに並べた後、炊きたてのご飯をお茶碗によそう。うん、美味しそう。ああお腹空いた。

「出来たよ」と声をかけて、皆がテーブルを囲む。全員が着席した所で一息ついて、手を合わせたいただきますをする。

私は、ご飯を食べるときには必ず手を合わせていただきますをする。これは箸の使い方と共に、今は亡き母から厳しく躾られていたから

だ。

おかげで、箸の持ち方、扱い方には自信がある。

それを見てパパの顔がほくらんだ。

「そつやって飯食べ始める格好、祥子に似てきたな。」

「そりゃあ、お母さんの娘だからね。童顔なとこまで似ちゃった。」

大好きだった母に似ている事は嬉しい反面、複雑でもある。

母は可愛らしい顔をしていたが、童顔だった。そりゃあもう。

亡くなったのは50代より前だったが、周りからは30代にしか見えない！と言われしめさせた、さながらアンチエイジングの神である。

前妻と離婚した後、私の母と出逢うまで独身を通してはいた父は、海外の有名ブランドでデザイナーとして忙しく働きながらも数々の浮き名を流していた。といつだったかお兄ちゃんがため息を尽きながら教えてくれた。

兄と姉に当時を語らせると、シーズン毎に連れてた女の人が変わってたけど、そういうヒトは自分には会わせる事はなかったらしい。すごかったんだから。ゴシップ誌の常連だったし、バツイチ子持ちのくせに独身のセクシー男性ランキングで上位に入ってたんだよ！。等々。

とても今目の前にいる人とは同一人物なのかいまいち首を傾げてしまふ。

「唯が作るご飯も、祥子ママと同じよねー。唯、すっごく美味しい」

「よく祥子さんも鯖の味噌煮作ってたよね。僕は祥子さんに会って初めて美味しい鯖の味噌煮って食べた気がする。」

「本当？お母さんってすごいねえ。大絶賛されてる。」

くすくす笑いながら、箸が進んでいく。

皆からお母さんの話を聞くのは、無条件に楽しい。私が知らなかったお母さんの事をいろいろ知れるから。

食事が進むにつれ、パパとお母さんの馴れ初めになっていった。

「ねえ、パパ。今日こそ教えてよ。どうやってお母さんと知り合ったの？」

「あ、それ、あたしも知りたい！！ねえ、パパ！！教えてよ」

「それ、実は僕も興味あるんだよね。何だかんだで絶対教えてくれないんだから。」

「そうだよ？お母さんも教えてくれなかったもん。いーつつも、パパに聞きなさいって言うてはぐらかされてたし。」

パパは身を乗り出して聞いてくる私達を見てイタズラっ子みたいに

笑う。

「祥子が言わなかったんなら俺も言えないな。内緒だ、なーいーしよ。」

なんて言いながら唇に人差し指を当てて、片目を瞑る。

「ええー？またそれー？」

「人の恋路を邪魔すると馬に蹴られるぞ、唯。」

ニヤリと笑って、それで話は終わりとはかりに、ご馳走さんと言って席を立った。

お姉ちゃん曰わく、当時のセクシー男性で上位だったパパが何故お母さんと再婚したのか未だに謎だ。馴れ初めって気になるんだけどなあ。

食べ終わった後のお茶を静かに飲んでいるパパは、ふと何かに気づいたように「さては唯も気になる男でも出来たか」とからかい気味に聞いてきた。

それを聞いたお兄ちゃんとお姉ちゃんはすごい形相に変わった。

「はあ！？唯、まさか彼氏なんか出来たのか！？どこのどいつだ！？」

「嘘、本当！？ねえ、誰だれ？どんな子なの？同級生？年上？それ

とも年下？だめよ、唯。あたしは許可出来ないわ。まだ唯は穢れなき乙女でいてくれなきゃお姉ちゃん泣いちゃう！」

「そんな事あつてたまるか！！唯に手なんか出したら、その男消す！！！！」

「お兄ちゃん、あたしも手伝うわ！！！」

「えー…つと…あのねえ」

なんか頭痛くなってきた…。すごい剣幕で詰め寄られてるんですけど。もしも彼氏が本当にいるならいるって言えたらいいのに、生憎そんな人はいない。

ていうか、私は正直モテない。校内に好きな人もいないし、告白されたこともない。まあ、いいけどね。私は地味ーに穏やかーに日常生活がおくれれば。

「安心して。彼氏なんていないから。だいたい私モテないし。」

「ええー！？バカじゃないの、そいつら！！節穴なの！？こんなに可愛いあたしの唯を放っておくなんて信じられない！！！」

「美奈、確かに唯は地球上で一番可愛い。そんなの当たり前だ。その点は認める。でもな唯、唯の彼氏なんて僕は紹介されたとしても全力で反対するからな！！というか、幼気な唯に邪な気持ちで近づく野郎なんて許さないけど！！！」

…お母さん。

私に彼氏は出来るのでしょうか…。

第十話

今日は肌寒い。

それにどんよりとした天気で、お天気お姉さんによると『今日は午後から強い雨が予想されています。必ず傘を持ってお出かけ下さい。』だそうです。

寒さ対策でマフラーをして行こう。解す予定のマフラーが暖かい。

「おはよう、綾乃。天気悪いね。」

「おっはー！！傘ばっちり持ってきた…ってあんた凄いクマ！どうしたの？」

「昨日ほとんど寝てない…。」

「は？寝てないって、なんで？」

「昨日ね、お兄ちゃんの日だって言ったじゃない？そこにお姉ちゃんとパパまで加わって。三人がやっと帰ったの夜中の3時…。しかもお兄ちゃん泊まっていったし。」

「さっ…うわ…美奈さんだけじゃなくパパ君まで…それは…。大変だったね、唯…。」

私の溺愛っぷりを前から知っている綾乃は不憫そうな顔をして私を見ている。はははは…と乾いた笑いをしながら、昨晚の惨事を思い出した。

結局彼氏云々から端を発した喧騒が、お前は如何に可愛らしいか、唯は可愛いのに、自覚が無さすぎて危ない。等々。全く意味不明の事を滔々(とうとう)と力説された。

挙げ句、やっぱり一人暮らしはやめて家に戻っておいでやら、だいたい何で名字まで戻す必要があつたんだと散々話し合った事をほじくり返された。

私は名字を『神崎』に戻したと言っても、戸籍はまだ『桐生唯』のままだ。

学校側にはきちんと説明してあるが、父の知り合いであるという理事長と、学担、それと担任しか私が桐生総一郎の義理の娘である事を知らない。

綾乃には話してあるが、他のクラスメイトは、私は『神崎唯』と認識されている。

それは望んだ事だし、別に面倒だとは思わない。

ただそうやって、私はパパやお兄ちゃん達と距離を置こうとしている。

そうしないと駄目なんだ。

これから独りぼっちになっても…

「唯？」

はっと意識を戻すと、綾乃が心配そうな顔をして「あんまり眠いんだったら、保健室行ったら？」と聞いてきたが、「大丈夫。」と首を横に振った。

かなり頑張つて三時間目まで授業を受けたが、かなり限界が近い。眠くて眠くて仕方がない。

それもこれもお兄ちゃんのせいだ！！と心の中で理不尽な逆ギレを繰り返す。

ああ、雨降ってきたなあ…。本格的に寒くなる前に、新しいマフラー編めてたらいいんだけどなあ…。

「神崎！！」

いきなり大声で怒鳴られたので、急いで前を見ると、遠藤先生の綺麗な顔が私を不機嫌そうに睨み付けていた。

「お前は昨日も俺に起こされたなあ。そんなに眠いなら授業受けるな。帰って寝ろ。」

「…すみません…」

小声で謝り、俯く。

よりによって、また遠藤先生…。しかも今日はキツイ…。

昨日あんな光景見ちゃったとは言え、ちゃんと授業聞いてるつもりだったのに…。

…ヤバい。泣きそう…。

泣くな…どう言い訳しても私が悪いんだから、泣くな…と必死に涙を堪えた。

チャイムが鳴り、「じゃあここまで。号令。」と号令をするために立とうとした。

その瞬間、ぐるっと目の前が回った。

…やば…貧血…！

ガターン！！と大きな音がする。

甲高い悲鳴と誰かが大声で叫んだような気がしたけれども、私はそのまま意識を手放した。

第十一話

雨の音がする。どうやら凄い降ってるなー…とぼんやり思う。

目を開けて、一瞬ここがどこかわからなかったが、次第にはつきりしてくる。どうやらここは保健室らしい。

もぞもぞと首を動かすと、薄暗いカーテンの奥には電気が点けられている。誰かいることはわかったが、誰なのかわからない。

え、ちょっと待って、今何時！？今日バイトあるのに！！

眠気も吹っ飛び、ガバツと勢いよく起き上がった音を聞いて、シャツとカーテンが引かれる。

「あらー起きた？もう大丈夫かしら？あなた貧血で倒れたのよ。覚えてる？」

「あ、大丈夫です…。私倒れたんですか？」

「そうよー。睡眠不足からきた貧血みたいね。ちゃんと寝なきゃダメよ。寝不足は女の大敵なんだからねー！」

そう言っつて朗らかに笑う保健の先生に、大丈夫です。と改めて言う。

「だけどねえ、神崎さん、あなた役得よ！ここに運んできたのが、遠藤先生なんだからー。本当に羨ましいわー。私があと20年若かったら、絶対好きになってるものー。」

うっとりといった表情で遠くを見ている保健医の先生を見て、私は

「今？えーつと…5時ね。雨降ってるから余計暗いわねえ。」

「ご…5時！？完全にバイト間に合わないじゃない！！ヤバい！！急いで電話しなきゃ！！」

「あつ…あの、もう大丈夫なんで帰ります！！すみません、ご迷惑かけました！！」

「ちゃんと睡眠取りなさいねー。それじゃあ気を付けてね。」

「はい！さようなら！」

急いで保健室から出て、荷物を抱えて携帯を取り出す。
遅刻しますって連絡いれなきゃ！

「はい、アクア手芸店です。」

「あ、もしもし、桜さん、お疲れ様です。唯です。」

「あら、唯ちゃん。どうしたの？」

「あ、あの、すみません！！バイト30分位遅れます！！」

「あら、そう？あー…でもなあ…凄い雨降ってるから、午後から全然お客さんいないのよねえ。うーん…ねえ、唯ちゃん明日の土曜日フルで入ってもらえない？」

「はい、大丈夫です。」

「じゃあ今日は休みでいいわ。本当凄いい雨で、電車も何本か止まってるみたいだから、早く帰った方がいいわよ。」

「本当にすみません…。」

「ああ気にしないで。本当は、今日このままお客さん来ないだろうと思って、早めに閉めようとしてたから。じゃあ明日よろしくね！」

「

「はい、わかりました。ありがとうございます。じゃあ明日。お疲れ様でした。」

お疲れーという明るい声で、電話が切られた。

桜さんは、私がバイトをしている手芸店の店長さんだ。私が手芸をする際、お母さんと一緒に桜さんの店をよく利用していたのが縁で、高校に入ってバイトをしようとした時に『私の店でバイトしない？』と言ってくれたので、その言葉をありがたく受け取り、店でバイトをしている。

思いがけずバイト休みになったし、今日はゆっくり出来るかな。なのに玄関まで出てびっくりする。

何この雨ー！

雨が強すぎて、これじゃあ傘を指していても意味ないんじゃないと思うぐらい降っている。

ええー…すごい降ってるし…。せめて小降りになってくれればいいけど、そんな気配無いし…。仕方ない。濡れるけどしょうがないか…。と思い、傘を開いて意を決して一歩踏みだそうとした時、後ろから声がかかった。

「神崎？」

振り向いた先にいたのは遠藤先生だった。

「お前この雨の中帰るのか？」

「あ、はい。駅まで行けば、あとは電車なんで、何とかかなと思っ
て。」

「電車？今頃電車止まってるぞ。代替でバス出てるらしいが、まだ
混んでると思うがな。」

えー…マジで…。

一向に止みそうもない景色を眺めてみる。うーむ…バスか…。あん
まり得意じゃないんだよなあ…。でも早く帰りたいし…。

「俺が車で送るから、もう少しここで待ってる。」

…はい…？

今なんと…？

第十一話（後書き）

そろそろ展開していけるといいんですが…どうなることやら…

第十二話

なぜ今私は遠藤先生の車に乗ってるんだろう…。
断ったよね。私ちゃんと断ったよね！？なのになんで！？

雨が激しさを増す中、静かな車内の雰囲気息苦しい。
どうしよう、本当に気まずい…。は…話す事…なんて無いよ…！共
通の話題なんてあるわけないし…！どうしよう…。
そろりと先生の方を盗み見る。

やっぱり綺麗な顔してるわあ…。睫毛ながー…。

「何だ、何見てる。」

ひっ…！！

「いや！ああああの！保健室まで運んでいただいてありがとうございます
いましたー！！」

「ああ、別に。」

…ちーん。会話終了。

早く家帰りたいな…。こんなに気まずい思いする位だったら濡れて
帰った方が良かったんじゃないかと真剣に思ってしまう。しかも、
電車が停まった影響か渋滞が酷い。外を見れば、車のライトがキラ
キラしている。こういう状況じゃなければ、車の中だったら寝ちゃ
うんだけどな…。…。

「ところで身体は大丈夫なのか。」

「え？あ、はい。おかげ様で…。」

急に声をかけられてびっくりする。もう会話は終わったと思っていたから。

「お前、軽すぎ。ちゃんと飯食ってるのか。」

「た…食べてます。ていうか、なんで軽いつて…ああ…！」

「何だ急に…いきなりデカイ声出すな…！」

「すみません…！」

そつだよ、お姫様抱つことかっていう話じゃん…！ああ、もう忘れてたよ…！うわー！尚更気まずいじゃない…！どっ、どっしよう…！でもでもでも、意識無かつたし？ある意味セーフ？ていうか…。私はこみ上げてきた質問を先生に聞いてみた。

「あの先生、つかぬ事をお聞きしますが。もしかして、保健室まで生徒みんなの前通りました…？」

「当たり前だろう。休憩時間の中に保健室まで運んだからな。」

げっ…！まずい…！私ファンクラブの人達に殺される…！最悪だ…。まさかそんな中で運ばれたとは…。

急にどんよりとした空気を察したのか、先生がはぁーとため息を吐いた。

「安心しろ。お前顔色悪い、クマは凄い、意識は無いしで完璧に病人にしか見えなかったから。なんせ気になって保健室覗いても、全然起きる気配無いしな。」

「ぐっ…。もう本当にご迷惑かけてすみませんでした。あ、そこ右に入って行ってもらえますか。」

「ああ。わかった。」

明日が土曜日で本当に良かった…。とりあえず一呼吸おける。月曜日が怖いけど…。

そう悶々としているうちに、見慣れた景色になっていた。もうそろそろ雨も小降りになって来たし、ここらで降りてもらおう。先生は私の事情を知らないから、あんなに大きなマンションに一人で暮らしている事を不審に思うだろう。

それになんとなく、お兄ちゃんがいそうな感じがするんだよね…。

「あの、遠藤先生。そのコンビニで降りしてもらえませんか。雨も小降りになつて来たし、この辺から歩いて帰ります。」

「は？」

思いつきり不機嫌そうな顔になった。ひい！美形が凄むと怖いって本当だったんだ…！！

「お前、今日俺の授業の最後に倒れたんだぞ。それわかってるか？」

「はい、わかっていますけど…」

「だったら大人しく乗ってる。家まで送るから。」

ぐう…。何も言えねえ…。

やっぱりいいですと言おうとすると、睨まれるので口を噤んで大人しくしていた。

ここから車で5分もかからない場所にマンションがあるんだけど、仕方ないので、マンションの場所を教えて、ふと光っていた携帯を見る。…なんとなく嫌な予感が…。

携帯をじつと見ていたら、急に震えだした。まさかと思っただけで着信を見ると、やっぱり表示は「お兄ちゃん」

出たくないなあ…。ブーブーと鳴る携帯に気付いた先生が「出てもいいぞ」と言うので、仕方なく通話ボタンを押した。

「もしもし、お兄ちゃん？どうしたの、こんな時間に。仕事は？」

「ああ、唯。今日は仕事休みなんだ。ところで、唯、今何処？雨で電車停まつてるから迎えに行こうか？」

「え？大丈夫。先生に乗せてきてもらったから。もうマンションに着くよ。ていうか、お兄ちゃんこそ今何処？」

「唯のマンションの前」

はあ！？慌ててマンションの周りを注視すると、見慣れたお兄ちゃんの車が…。あんなとこになんているのよ！！

「あ、あの先生！！もうここでいいです！！マンションあれですから！！降ろしてください！！」

「は？待て、前まで行ってやるから。」

「いいですー！ー！！！！！！！！」

必死の説得も全然意味ない…。ああお兄ちゃんが見える…。半ば魂の抜けた目で、マンションを見上げた。

「ほら、着いたぞ。」

「ありがとうございます…。」

「なんだ、いきなり。酔ったのか？」

違うんだけどな。ああ、お兄ちゃんが先生の車の横に立ってる…。面倒くさいなあ…。

「おかえり、唯。」

「た…ただいまー…。」

先生の車から降りた私は、ニコニコと笑うお兄ちゃんに出迎えられた。ああ背中に注がれる視線が痛い。刺さってる刺さってる！そりゃそうだよな。こんな単なる女子高生が、話題の桐生秀人と一緒にいるんだから。

「…桐生さん？」

ん？何だ？後ろから声聞こえたような…。
声が見た方を見ると車から降りた先生が、お兄ちゃんを見て驚いている。

「やっぱり桐生さんだ。」

「え？」

お兄ちゃんの方を向くと、お兄ちゃんもびっくりした顔をしていた。え？何なに？先生、お兄ちゃんの事知ってるの？

お兄ちゃん…と聞こえた時、「うわ…」と囁くようにお兄ちゃんが口を開いた。

「桐生さん、久しぶりです。色々メディアに出て話題になってますね。」

「ああ、亨、やっぱりお前か。お前、何年経っても変わらないな。」

「失礼な。少しは成長してますよ。」

楽しそうに話す二人から取り残された私は、どうしたらいいんですよ…。

第十三話

「くしゅっ」

親密そうな会話が弾むお兄ちゃんと、遠藤先生をぽかーんと突っ立ったまま見ていたら、どうやら身体が冷えてきたみたいで、本人が思っていたより大きめのくしゃみが出た。その途端、お兄ちゃんが振り返った。

「寒いのか？唯、早く部屋に戻ってなさい。僕ももう少ししたら行くから。」

「ん？大丈夫だけど…ねえ、お兄ちゃんさ、まさか今日も泊まるわけじゃないよね？」

「そのつもりだけど？」

当たり前な事を聞くなよ的な顔をしているお兄ちゃんを見て、私はキレた。

「『そのつもりだけど？』じゃないよ！お兄ちゃんの家はここじゃないでしょ！！昨日は帰国したばかりだから仕方なく泊めたけど、今日はダメだからね！！」

「だって、あっちの家には唯がないじゃないか！！」

「当たり前じゃない、出たんだから！！大体、会社はあっちの方が近いでしょ！こっちから行くと遠回りになるじゃない！仕事行く前から疲れてどうするのよ！」

「明日は遅れて行くからいいんだよ。」

「嘘ばかり！NYから帰って来たって事は、こつちでの仕事も山ほどあるんでしょ？違うつて言っんなら、高橋さんに聞くからね！」

「なんでそこで零が出てくるんだ！やめろ、唯！あいつに電話したりしたら、僕今から出ていかなきゃならなくなる！！」

「行つたらいいんじゃない？そうしたら、家に帰る事出来るじゃない。えーつと、高橋さん高橋さん…あ、あつた。」

ボチボチと高橋さんの番号を探して携帯をいじっていたら、急に手に持っていたはずのそれが消えた。あつ！と思つた時にはもう遅く、お兄ちゃんが高く掲げていた。

お兄ちゃんと私とじゃ身長差がありすぎて、お兄ちゃんの腕で上げられたら全然届かない。

「ちよーつとお！携帯返してよー！！」

「ダメー。返したら唯、零に電話するんだろ？なんで休みの日まで零の声聞かなきゃならないんだ。」

「それ、あとでチクツてやる…。」

「あー。俺、聞きたい事あるんですけど、いいですか？桐生さんつて、神崎とどういう関係なんですか？」

あつ！！すっかり忘れてたよ！！そうだ、先生いたんだよ…。うわあ…これ全部見られたなんて…恥ずかしすぎる…。それに、先生は

知らないんだよね。私達が義理の兄妹って言う事。

まあ、側はたから見たらおかしな光景に見えると思う。有名な桐生秀人が、一般人の高校生とマンションの前で喧嘩してるんだし。それに気になるのは、先生とお兄ちゃんの関係もなただけだ…。

「あ、あのー…義理の兄なんです、この人。」

「そう、僕の世界一可愛い義妹の唯一。で、お前はなんで、唯の事知ってるんだ？」

「あのね、お兄ちゃん、遠藤先生はうちの学校の先生なの。」

「は！？お前が？」

「そうですよ。しかし、兄妹ってマジですか。妹ってあの美奈だけかと思ってました。」

本気で驚いた様で、先生は苦笑を浮かべつつ、私とお兄ちゃんを代わる代わる見て「義兄妹ねえ…」と呟いていた。

「あの、聞きたいんですけど、先生ってお兄ちゃんの事知ってるんですか？」

「ああ、そうか。言ってなかったか。桐生さんは俺の大学時代の先輩だ。」

「まー手の掛かる後輩だったけどね。」

「そんなことないでしょう」と笑いながらお兄ちゃんと話している先生を見ながら、大学時代の先輩後輩ねえ…と言われた言葉を反芻

していた。案外世間は狭いものらしい。

こんな近い所に知り合いがいたとはね。だけど、そろそろ帰ってもらわないといけない。いい加減寒いし、ここで話していると邪魔にもなるし。

そんなことを考えていると、先生が何か思い出したかのようにポンと手を叩いた。

「そういえば、桐生さん、今日妹さん倒れたんですよ。」

「倒れた！？どうした、唯、大丈夫か！？病院行くか！？」

なんでこの人は面倒くさい事を掘り返すんだ！ふと先生の顔を見ると、ニヤニヤ笑っていたので、わざとだと確信した。

先生って実はいい性格してる！？

「あのね、お兄ちゃん、大丈夫だから。単なる貧血。わかった？大丈夫だからね。あのさ、お兄ちゃん、本当にそろそろ帰りなよ。先生だって帰らないといけないんだから。いい加減エントランスにいるのも邪魔だし、車だってそこに置いておいてもしょうがないでしょ？それに、私明日はバイトあるの。だからゆっくりしたんだけど。」

「桜か…。唯、俺から桜に言っておくぞ。なんだったら、あそこ辞めてうちの会社でバイトするか？」

「しません。そんな事桜さんの耳に入ったら、また喧嘩するんですよ。いい加減素直になりなよ、お兄ちゃんさあ。」

「僕はいつも素直じゃないか。」

「はいはい、素直なお兄ちゃんだから今日も帰るんだよねー。じゃ、バイバイ。先生も、送ってくれてありがとうございました。お兄ちゃんには気にしないで帰っても大丈夫ですよ。じゃあ、さようなら。」

「無理するなよ。おやすみ。」

「唯…。」

お兄ちゃんのしょぼりした顔を見て、また先生は面白そうな顔をしていた。やつぱりいい性格しているんだと思いつつながら、エレベーターに乗り込んだ。

部屋に戻って、いつもなら静かな空間に寂しさを覚えるのだけれど、今日はなんだかあのやり取りで疲れてしまったのか、静寂が心地いい。

時計を見ると時間も、お腹も空いていたので夕飯を作ろうと思い、手洗いとうがいを済ませて、制服を脱ぎ、私服に着替えてフリフリエプロンを付けた。今日は何作ろうかなー。昨日は和食だったから、オムライスでも作ろうかなー。卵を冷蔵庫から出して、鶏肉と玉ねぎ、ピーマンなどの材料を切っていく。ついでにサラダとスープも作ろう、等と考えていた時に、そう言えば綾乃心配してるだろうな、後でメールしなきゃな。と思った。

ご飯を作り終わったので、メールしようと携帯を探した。だけど、どこを探しても無くて、そういえばお兄ちゃんから返してもらっていないと思い出して、急いで固定の電話からお兄ちゃんに電話をかけた。

「もしもし、お兄ちゃん？私の携帯持ってる？」

「ここにあるよー。今頃気付いた？」

「もー！返してよー！」

「どうしよっかなー 返して欲しいなら、土日は家に帰って来なさい。そしたら返してあげるよ。」

「どうしよっかなー じゃないわよ。全く三十路前のくせに……。実家に帰るのかー。久しぶりだし、いいか。」

「むー…仕方ないな。わかった。帰る。ナイトにも会えるし。」

「ナイトだけ？ま、いいか。明日バイト終わったら迎えに行くよ。何時に終わるの、お姫様？」

「明日は18時くらいまで入ってると思うよ。じゃあよろしくお願ひしますね、お兄様。」

「わかった。じゃあ暖かくして寝るんだよ。」

「あ、お兄ちゃん、先生とあのあとどうしたの？」

「今？亨とバーで飲んでるよ。」

「飲んでるの？二人とも車だったでしょ？」

「代行あるから大丈夫だよ。なに、唯、亨に何か言う事でもある？」

「うん、お兄ちゃんが迷惑かけます。って。」

「失礼な」とくすくす笑いながら、じゃあねと言ってそのまま切っ

た。
オムライスはすっかり冷えてしまった。

第13・5話：秀人（前書き）

シスコン兄、秀人視点です。

第13・5話：秀人

こいつが、唯の通ってる学校の教師だったとは。静かにスコッチを飲む、自分の隣に座っている男を見る。

男のわりに綺麗な顔をしていると思う。現に今も、バーにいる女の熱い視線が注がれている。

まあ、この男だけではなく自分もその視線は感じているが。

「だけど、驚きましたよ。まさかこんな形で桐生さんと会うとは。」

「僕だつて驚いた。お前が教師になったとは噂で聞いてたけど、唯がいる高校だったとはな。」

そう。この男はそもそもいわゆる『御曹司』というやつなのに、何故だかあのデカイ会社に入らずに、教員免許を取って、あっさり教師になった。

総帥の孫なのであれば、少なからずグループの内部に組み込まれるだろうと皆が思っていた事だったから、教師になったと聞いてひどく驚いた。

「亨、お前何で会社勤めしてないんだ？ てつきり僕は、そのまま入社するとはかり思ってたぞ。」

「会社は兄貴が継ぐのが決まっていますからね。兄貴がいるなら、俺がいなくても大丈夫だと思っただんです。それに、今は公務員の方が安定してるんで。」

「翼^{たすく}か。あいつはトップっていう柄でもないだろう。どちらかという^とと、お前が会社のトップで、翼の方が教師っていうのに向いてる。」

亨には翼という一卵性双生児の兄がいる。見た目はそっくりでも、性格が全く違う。兄の翼はおっとりとして、人と争う事を厭う性格なのに対して、弟の亨は積極的に攻撃的。それでいながらフォローを忘れないと言う、今風に言うなら、草食系の兄と肉食系の弟と言ったところか。

「お前が先生ねえ……。全然想像出来ない。」

「一応しっかりやってますよ。まあ、妹さんは俺の授業中よく寝てますけど。」

「唯が？お前担当何だ？」

「日本史です。」

ああなる程。唯は歴史関係が弱点だからな。苦笑しつつ、自分のウイスキーを飲む。

「唯は歴史嫌いなんだよ。僕と美奈が教えてもダメなんだ。相当嫌いなんだな。」

「しっかし……桐生さんって相当なシスコンだったんですね。」

隣の男は、思い出したかのように肩を震わせている。

別にシスコンだと言われるのは構わないが、それは唯に限った事であって、美奈にはあれほどではない。

「唯は特別だから。父さんも美奈も、僕に負けてないぞ。」

「は？それ本当ですか？」

啞然と言った表情を浮かべているこいつを見るのは、なんか腹が立つ。

なんだ、悪いのか。

「妹って言っても、義理でしょう？まさか恋愛感情絡んでるとか言いませんよね？」

「：お前それ本気で言ってる？本気だったら殴るぞ。唯をそんな目で見たことなんて、あるわけないだろ！」

このバカはふざけた事をぬかしやがる。なんだって、可愛い唯をわざわざ『女』で見なきゃいけないんだ。自分の抱いている感情は『妹』の唯だからで、『女』の唯ではない。

初めて唯に会ったのは、自分が大学1年、唯がまだ小学校に上がる前で、正直に言くと、父が本気で祥子さんと結婚するとは思っていなかった。

それまでの父は、ほぼ毎日タブロイド誌に載っていたほど、女性関係が派手だった。別れた妻が他の男の所に走った反動なのか、仕事で溜まったストレスなのか。詳しく知らないし、知りたくも無い。

当時、海外ブランドのチーフデザイナーを務めていた父と共に海外に住んでいた僕と美奈は、幼少時、母が自分達を捨てて出て行った事に傷ついていた。だからと言って、忙しい父に頻繁に構ってもらえるわけでもなく、ただっ広い家で、ナニーや家政婦達が面倒を見

てくれているだけと言う生活をしていた。

高校に上がる時に、自分だけ日本に帰国し、こちらの高校に入学した。その時に知り合ったのが零だ。

零は、人にズケズケとはつきり物を言う性質で裏表がない性格をしていた。そんなやつとなぜか馬があつた僕は、なかなか充実した高校生活をしていたと思う。

自分の容姿は、美人だと言われていた母の血を受け継いだらしく、女には事欠かなかった。こんな部分は父の血を引き継いだのか、気が付けば『遊び人』という通り名が付いた。別にそれで困らなかつたし、寄ってくる女共もそれがわかつて来るんだから、似たようなものだろう。

そんな自分を零はいつも注意していた。「いつか大事な女が出来ても、苦労するのは彼女だぞ」と言つて。

そのまま大学に入学した時に、父から紹介されたのが祥子さんと唯だ。

童顔の祥子さんはどう見ても、30を過ぎた子持ちには見えぬ、まだ自分と変わらない年に思えた。いや、下手したら、自分の方が年上に見えるかもしれない。

あの派手だつた女性関係が嘘だつたかのように、祥子さん一筋になつた父は、同じく娘の唯にもベタベタに構つていた。

それが何だが無性に腹が立つた。今思い出すと、つまらない嫉妬というやつだつたのだろう。幼い頃に自分に注いで貰えなかつた父の愛情を、その一身に受けている唯がムカついた。

祥子さんとはかく、とにかく唯を徹底的に避けた自分は、ある日家の居間でポツンと一人でクマのぬいぐるみで遊んでいる唯を見かけた。

そのまま無視して部屋に行こうとした時に、唯がこちらに気付いて走り寄ってきた。

「おにいちゃん、ゆいとあそんで。」

「は？なんで僕がお前と遊ばなきゃなんないわけ？」

「え…だっておにいちゃんはゆいのおにいちゃんだって、ぱぱがゆつてた。」

「パパ？」

「うん！ぱぱになってくれるって、おかあさんもぱぱもいつてもん！」

嬉しそうな顔をしている唯を見て、今まで耐えてきた汚い感情が溢れ出してくるのがわかった。

どうにかして、この小さい生き物を傷つけてやりたい。ただそれだけしか頭には無かった。

「父さんはお前のパパにはならない。どうせ祥子さんと結婚したとしても、お前はいらないんだってさ。だから僕の事もお兄ちゃんなんて呼ばないでくれる？お兄ちゃんって呼ぶのは美奈だけなんだよ。お前じゃあない。お前邪魔なんだよ。」

それだけを言って、そのまま部屋へ真っ直ぐ行った。

身体の震えが止まらなかった。

最後まで言い切った瞬間に見た唯の顔がチラついて仕方がない。傷付き、今にも泣き出してしまいそうな、そんな顔。

なんとか気持ちを切り換えたくて、適当な女に連絡を付けた。財布と携帯、車のキーだけ持って、玄関に出てみるとやけに静かだった。

だけど、家にいたくなくて車に乗り込んで、女と待ち合わせしている場所へと走らせた。

女と落ち合い、そのままホテルでコトをしようとしても、唯の顔がチラついて、眼前の快楽に入り込めない。どんなに女が奉仕しようが、気分が乗らない。

「悪い。今日はもういい。」

不平を言う女の腕を引っ張って、ホテルを出た後、何となく帰りたくなって、零に連絡を取って会うことにした。

「何、どうした？そんな顔して。さては、お前が女に振られたか？」

開口一番、そう話し出した零を見て、思わず苦笑する。

「振られてはいないさ。」

「だったら何なわけ、秀人君？この俺様が聞いてあげるよ。」

「何から話せばいいんだろつな。僕にもよくわからない…。」

はーとため息を付いた僕を見た零が眉を寄せた。

何があつたのか聞きたいんだろうな。だけど、自分も、この胸のもやもやが何なのかわからない。ただ、脳裏には唯の泣き出しそうな顔だけが浮かぶ。

「まあ、言いたくないんだつたら無理には聞かないけどな。ちゃんとう気持ちを整理して、言いたくなつたら言え。聞いてやるから。」

「はは…ありがとう、零。」

それからしばらくは当たり前障りのない会話を続けていた。そろそろ時間も深夜に近くなっている。携帯を見て驚いた。

父と祥子さん、それに美奈の名前で着信履歴が埋まっていた。メールも何通も届いている。

何かあつたのかと思い、急いで父に電話をした。

「父さん、どうしたの？なんかあつた？」

『秀人、お前今どこだ！？』

「今？零と一緒にいるけど…。」

『今すぐ戻ってこい！！』

「は？どうしたの、父さん、説明してくれないとわからないんだけどー。」

こんなにも切羽詰まった父は初めてで、隣にいる零も一体何事かという目でこちらを伺っている。

『唯がない。どこにも見つからないんだ。捜そうにも、どこにい

るのか検討も付かない。』

「いないって…。もう夜中になるじゃないか…。なんで…」

父が放った言葉を聞いた僕は、顔面から血の気が引くのがわかった。隣の零は、僕の顔色が変わったのと、話の内容でわかったのだろう。同様に、顔を強ばらせていた。

『とにかく一度戻ってこい。辺りをもう一度捜さなきゃならない。』

「あ…ああ、僕も辺りを捜してみながら、一度戻る。父さん、警察には…？」

『夜が明けるまでに見つからなかったら、警察に通報する。ただ、どこかで迷子になってるだけかもしれないから、夜が明けてからだ。それ以上は待てない。』

「わかった、すぐ帰る！」

「秀人、俺も行く！人手は多い方がいいだろ？」

「ありがとう、零。」

礼を言うのは早いぞと言う零と共に、薄ぼんやりとした街灯に照らされた辺りを気にしながら、急いで家に帰った。

深夜にも関わらず、家には煌々と灯りが灯され、一步入ると蒼白な顔をした祥子さんと美奈がいて、父はしきりに電話をしていた。

帰った僕に気付いた父は、電話を切り、「いたか？」と聞いてきか、その問いに、首を縦に振ることが出来なかった。

「なんでこんな事に…。」

「わからない。俺達より先に帰ってた美奈が気付いたんだ。だけど、美奈は俺か祥子と一緒にいると思っただけ。お前、美奈が帰った時、居なかつたらしいが、一度帰って来てるだろう。車がなかったからな。何か知らないか？」

その言葉を聞いて、自分が唯に言った言葉を思い出して、再び血の気が引いた。

唯が泣きそうな顔をしたあの言葉。

「…僕のせいだ…。僕が唯にお前なんていらないうって言ったから…だから唯…」

「こ…このバカやろう！！お前は言っていていいことと悪いことの区別も付かないのか！ましてや、あんな小さな子供になんて事言うんだ、このバカ！！」

「だって腹が立ったんだよ！僕らの事ほったらかした父さんが、あんなに唯を可愛がるなんて…！嫌みの一つも言いたくなるだろ！！」

「秀人、お前が唯ちゃんに言ったのは、嫌みじゃない。それは言葉の暴力だ。お前は、自分が受けられなかった愛情を受けている小さな子供に、嫉妬して暴力を振るっただ。『お前はいらないうって』って、この言葉の暴力を。」

静かに、それでも怒りが込められた零の言葉にはっとする。

そくだ。あれは言葉の暴力。紛れもなく、傷つけてやろうと思っ

放った言葉の刃。

唯の顔が離れない。どうしたらいい…？どうすればいい…？

「言い争いをしていても仕方ないし、時間は過ぎていく一方です。とりあえず、辺りをもう一度くまなく捜してみましよう。唯ちゃんのお母さん、唯ちゃんがよく行ってるよとか、好きな場所とかありますか？」

テキパキと場を仕切っている零を、ただ虚ろな目で眺めていると、頭を叩かれた。

あまりの痛さに、叩いた本人を睨みつける。

「呆けるんだったら、唯が見つかってからにしる。これからどんどん気温も下がるし、時間もだいぶ経ってる。先ずは、やることやって、それから次の事を考える。ただ、唯に嫌われてもしょうがないだけの事をお前は言ってる。あとでちゃんと謝っておけ。それから俺が説教するんだから、逃げるなよ。」

「わかった…。」

小さな人影を求めて、暗い街を必死に探す。

捜索を開始してから、1時間、2時間と自分達の焦燥を嘲笑うかのよう、無情に時間は過ぎていく。

捜している最中にも、自分が零に言われた言葉を噛み締める。認めたくないけれど、自分は唯に嫉妬していた。だからあんなにも腹が立っていた。

唯をあんな顔にさせたのは僕だ……。罪悪感が次々湧き出して、遂には近くにあった公園のベンチに腰掛けた。もしもこのまま、唯が見つからなかったら？謝ることも出来ないまま、傷付けたまま会えないかもしれない。もしそうになったらどうする。一生唯を傷付けた事実を背負うには辛すぎる。

膝に腕を付き、両手で顔を覆って重すぎるため息を付く。

両手を顔から外すと、視界の隅に何かが見えた。何かはわからない。ただ予感だけがした。

立ち上がり、視界の隅に見えた『何か』の所に行くと、そこにあつたのは唯が持っていたぬいぐるみで、すぐさま辺りを見回せば、公園の遊具の中で倒れている小さな人影を見つけた。急いで駆け寄り、身体を起こす。

「唯！！おい、唯！！」

くったりとしていたその身体は、尋常じゃないほど熱く、このままだとマズい事はすぐわかった。

急いで父に電話をして、唯が居たことを報告すると共に、救急車を呼ぶようにとも言っておいた。

唯を抱きかかえたまま家に戻り、すぐさま祥子さんに付き添われ、救急車で病院に運ばれた唯を見送った。

宣言通りに、延々と父に説教を受けた僕が唯が入院している病院に行ったのは、次の日の昼近くになってからだった。

診断の結果、肺炎の一手手前まで行っており、もう少し発見が遅れたら命の危険まであったらしい。

「祥子さん…少し休んで下さい。唯には僕が付いてますから。」

「あら、そう？だけど、あなたの方が疲れてるように見えるんだけど、大丈夫？あの話長いからね。説教も長かったでしょう。」

そう言って笑う彼女を見て、この人は本当に父の事を理解しているのだと、そう思った。

「はは…確かに長い説教でしたが、仕方ないです。僕がしたことは最低でしたから。それより、祥子さん。父の事宜しくお願いします。あんな父でもいいなら、一緒にいてやって下さい。僕も反対しません、祝福しますよ。」

そう言って彼女に笑いかけた時、泣きそうな顔をして、だけでもすごく嬉しそうな祥さんは、ただ「ありがとう」とだけ言った。

しばらくして唯が目を覚ました時、祥さんは休んでいたのですが、その場にいた僕を見て、唯はひどく驚いた顔をしていた。

「唯、大丈夫か？苦しくないか？」

ぶるぶると顔を振りながら、何か言いたそうな目には、今にもこぼれそうな涙が浮かんでいる。

「唯？やっぱり苦しいのか？先生呼ぶか？」

「…「じめんなぞ…」」

「何で唯が謝る？お前が謝ることなんてないだろう？」

「ゆいがいるとだめなの。ゆいはじゃまなの。いない方がいいの。だからゆい……」

そこまで言つて、唯は泣き出した。ごめんなさいを繰り返しながら。違う、唯が謝る必要なんてない。悪いのは僕だ、唯じゃない。

「唯…唯が謝ることなんてない。謝るのは僕の方だ。勝手に唯に嫉妬して、お前を傷付けた。唯…ごめんな。本当にごめん。」

泣きじゃくる唯を抱きしめる。華奢な身体は力を入れれば、すぐ折れそうなほど頼りない。

だけでも、この頼りない身体が何よりも愛おしい。

「唯、僕の事お兄ちゃんって呼んでくれる？」

涙でぐちゃぐちゃの顔を拭いてやりながら、聞いてみる。案の定、唯は首を横に振った。

「唯、僕は唯のお兄ちゃんになりたい。父さんも唯のパパになりたいんだ。もちろん美奈も唯のお姉ちゃんになりたい。唯、唯は僕らと家族になるのが嫌？」

頭を撫でながら、優しく聞く。困ったように顔を傾げた唯が「ゆいでもいいの？」と聞いてくるので、笑って「そうだよ、唯がいないとダメなんだ」と言い聞かせる。

「おにいちゃんってよんでいいの？ぱぱも？おねえちゃんも？」

「うん。唯が呼んでくれると、僕も父さんも美奈も皆嬉しい。呼んでくれる?」

「うん、おにいちゃん!」

ようやく満面の笑みが見れた事に心から安堵する。その後、泣きじやくった為少し熱が上がった唯に熱いおでこにキスをして、手を握って寝かしつけた。

唯の安心しきった寝顔を見て、これから何があっても唯の味方でいてやるうと心に決めた。

それがいつしか、シスコンとか、唯至上主義者とか言われている。あんなに「おにいちゃん、おにいちゃん」と可愛かった唯も、いつしか自分の事を上手くあしらうほど成長してしまった。嬉しいような悲しいような。いや、悲しすぎる。

だから唯の携帯をわざと返さず、自分に電話をかけさせるように仕向けた。ついでに、明日実家に帰ってくるようなので、迎えに行く事も了承させた。

満足げな僕の顔を見た隣の男は、「重症シスコン」とくつくつと笑っていたが。

「さて、そろそろ俺帰ります。ここは俺が支払いますよ。」

「そうか、有り難くご馳走になるよ。じゃあまたな。あ、そうだ、
亨！」

「はい？」

「お前、唯に手出すなよ。」

「出すわけないでしょう！！相手、子供じゃないですか、俺子供に
興味ないじゃないですから！」

「その言葉、忘れるなよ、お前。」

「あなた、どんだけシスコンなんですか…！」

もう呆れた視線を隠そうともしない亨を見送って、自分も帰るため
にタクシーに乗り込んだ。

第13・5話：秀人（後書き）

秀人の過去を盛り込んだので、他話より長くなりました。

読んでいただいた方、お疲れ様でした。

ちなみに『ナニー』とはベビーシッターの事です。アメリカなんかでは、子供一人残して外出すると虐待で通報されてしまうらしく、それを防ぐ意味でもナニーを雇っているって聞いた事あります。

第十四話

昨日の雨が嘘だったかのよ様な青空。雪が残っていて、キラキラ反射して綺麗だ。今日は暖かくなるらしい。

「おはようございます。」

「おはよう、唯ちゃん。昨日雨大変だったでしょう？電車止まっていなかった？」

「凄かったですね。電車は止まってたみたいですけど、学校の先生に送ってもらったんですよ。」

「あらら、それは良かったわね。」

いろいろと桜さんと話しながら、開店準備を始めている時に、そういえば今日はお兄ちゃんが迎えに来ることを思い出した。にやりと笑いながら、何気ない風を装い話し出す。

「そういえば、今日お兄ちゃんが来ますよ、桜さん。」

「えっ！？嘘、秀人が！？いつ！？」

「私上がる時に迎えに来るって言ってましたねー。今日実家帰るんですよ、久しぶりにナイトにも会えるんで楽しみですよー。」

「あ…あらそう…。ふーん…秀人がねー…」

挙動不審になつた桜さんを見て、ぶっ！と思わず吹き出してしまつ。
ああもう桜さん可愛いなー！！このツンデレめーっ！！

「ねえ、桜さん。お兄ちゃんに告白しないんですか？私絶対、お兄
ちゃんは桜さんの事好きだと思つんですけど。」

「はあ！？絶対無いから！！あの人畜有害シスコン男が私を好きと
か絶つ対無い！！告白とかも有り得ないわっ！！」

「そんなに必死に全否定しなくてもいいですよ。でも、桜さん、お
兄ちゃんの事好きでしょう？」

「……！！」

「桜さん、顔真つ赤ですよ。」

うりうりと頬を指でつついて、顔を覗き込んだ。恨めしそうな目を
しながら睨まれても、あまり怖くない。

桜さんとお兄ちゃんは、初めて会つた時から喧嘩していた。

昔、店番をしている桜さんと一緒に遊んでいた私は、迎えに来たお
兄ちゃんを存在を忘れていた。その時、お兄ちゃんは桜さんに一言
言った。

「おい、その唯に近づいてる男。唯から離れろ。」

と。

当時ベリーショートだった桜さんは、当然キレた。

「は？その顔だけ男。あたしの事男つて言つたか？コラ。」

「どっからどう見ても男だろ。まさか女って言わないよな。そんなどっちが背中なのかわかんないような体型で。」

「はぁ！？どこ見てるワケ！？このド変態が！！！」

「だから、見て騒ぐだけの体してないだろって言ってんだよ！！この自意識過剰がっ！！！」

「なんですって、顔だけ男が！！！」

それから、呆然と見守る私をしり目に、お母さんが止めに入るまで延々と喧嘩をしていた二人だが、未だに仲がいいんだか悪いんだか分からない。

「だけどなー、なんか二人ともお互い意識しちゃってるような雰囲気あるんだよねえ。桜さんなんて、絶対お兄ちゃんの事好きだし！」

むふふと笑いながら、品だしをして、一段落ついたところで、店内に飾るための見本品をカウンターで作り始める。

今日は、初心者用の簡単なビーズのストラップを作ろう。

ざっとキットの説明書を読み、アイテムを確認する。初心者用なだけあって、1時間もあれば出来上がりそうだ。

製作に入る旨を桜さんに説明し、とりあえずせつせつとビーズをテグスに通す。しばらくすると視線を感じたので、目線を上げるとそこには、上品なおばあちゃんが私のビーズストラップを見ていた。

「まあ、ごめんなさいね。邪魔をしてしまったかしら？」

「いいえ、大丈夫ですよ。お客様、この店初めてですか？」

「そうなの。私は恥ずかしながら、お裁縫が苦手なものだから手芸店には足を運んだ事が無かったのだけれど、表に飾ってあったデイベアがあまりに可愛らしくて、誘われる様に入ってしまったわ。」

「あ、そのデイベア、昔私の母が作ったんですよ。お店と懇意にしてたので、置かせてもらってるんです。」

思わず笑顔になってしまった。そう、店先に飾られてあるデイベアは母が作ったもので、変に愛嬌のある顔をしているというか、ちよっと作りが雑なのだ。

後から母に聞いたら「あれは昔のパパなの」と、謎めいた言葉を残して、くすくす笑いながらパパを見ていた。

パパはと言つと、デイベアを見て、すぐさま「これ、俺だろ」となんだかふてくされた顔をしていた。

「まあお母様が？」

「はい、義父がモデルらしいんですが、詳しく教えてくれなくて。」

「うふふ、そうなの。それで、あなた…あなたって言うのも何だか寂しいわねえ。店員さん、お名前は？」

「唯です。神崎唯って言います。」

「唯さん。可愛いあなたにぴったりね。私は珠緒たまおと言うの。よろしくね。」

「珠緒さんですか。素敵な名前ですね。」

「まあ、ありがとう。」

うふふと笑う、珠緒さんにつられて私も笑顔になってしまふ。上品な上に、優しいおばあちゃんだなあ。と感激していると、珠緒さんが私の手元に注目しているのに気付いた。

「あ、これですか？これはビーズのストラップなんです。テグスっていう、この糸に、こうやって通していくだけなので簡単ですよ。」
あと少しで出来上がる所だったので、珠緒さんが見ている中で完成してしまつた。

グリーンとクリスタルビーズのクローバーを模したストラップで、完成した時、珠緒さんは目を輝かせて拍手をしていた。

「凄いわ、唯さん。お裁縫が得意なのね！」

「はい、昔、母から教えて貰つて、好きなんです。特に編み物がすごく好きで、今度マフラー編もうと思つて、今日バイト終わつたら毛糸買っていこうと思つてるんです。」

「あらあら、編み物？私、編み物は本当に苦手でね？夫や子供、孫達にも編んであげたかつたんだけど、必ず失敗してしまうの。よく夫は、そんな私を見て笑うの。「珠緒は猫みたいだ」って。」

「猫ですか？」

「ほら、猫つて毛糸でじゃれるじゃない？まるでじゃれてるようにしか見えないんですって。あの人から見れば。全く失礼しちゃうわよねえ？」

ふんと可愛らしく怒りながらも、笑っている珠緒さんを見て、旦那さんと仲がいいんだろうなあと思って、「素敵なお夫婦ですね」と言い珠緒は「ありがとう」とまた笑った。

「あ、じゃあ！私が教えるので、旦那さんにマフラーを編んであげませんか？」

「え？唯さんが？でも私、本当に苦手なのよ。唯さん愛想尽かしてしまつぐらいなんだから。」

「大丈夫ですよー。私も習いたての頃、全然編めなくて、よく癪癪起こしてすぐ投げ出してたんです。だけど、その度に母が同じ所で止まって待っていてくれたんです。それを見て、私が編まなかったら、お母さんも完成出来ないんだーって思って、一生懸命編み上げてたんです。」

「素敵なお母様ね。今はどちらにいらつしやるの？」
「ぴちよんと心に波紋が広がる。」

「一年前に亡くなりました。」

「まあ…ごめんなさい、知らなくて…。」

「あ、いえ、大丈夫ですよ。」

軽く笑んで、珠緒さんに気を使わせないようにする。「…そう？」
と言いながら、私を見ている珠緒さんに「本当に大丈夫ですよ」と

念を押す。

本当は大丈夫なんかじゃない。

『お母さんが死んだ』という事実は受け止めた。だけでも、『お母さんがいない』事は、私の心に大きな穴を開けている。

だけでもいつもはそこに蓋をして、見ないように見ないようにしているのだが、どうしてだろう。珠緒さんを見ていると、蓋が開いてしまいそうな気がする。

「じゃあ私も頑張ってみようかしら！唯さん、本当に出来の悪い生徒だけど、見捨てないでね？」

「はい、大丈夫です！一緒に頑張らしましょうね！で、旦那さんにぎやふんと言わせてやりましょう！！」

「まあ、本当ね！」

くすくす笑いながら、編み棒と旦那さんに似合うという黒い毛糸を買って行った珠緒さんは、「また明日来るわね」と言い残し、店を後にした。

第十四話（後書き）

実はストラップキットと言っものを見たことはあっても、実際に作ったことはありません。あれって中にデグス入ってるんですよ…
（汗）

第十五話

今日は暖かいとは言え、季節が季節なだけに、やはり編み物関連の商品が売れる。

私が密かに目を付けている毛糸もなかなか売れ筋のようだ。桜さんに、取り置きをお願いしようかなとも思ったのだが、気を使わせちゃいけないと思ってやめておいた。

私が帰るまでに、必要な数を確保出来るといいんだけどなあ。

「唯ちゃん、そろそろお店閉めるから、片付けお願いい。」

「はあい。わかりましたー。」

店をせかせか掃いていたら、聞き覚えのあるエンジン音が聞こえてきた。

その途端、桜さんが拳動不審になる。ぷぷつ、桜さん、お兄ちゃん来ましたよー。ちらりと桜さんを見ると、目が泳いでる。

全く…早いとこ二人とも素直になっってくれないかなあ。

「ゆーいー！帰るよー！！」

にっこにこしながらお兄ちゃんが店に入ってきた。抱きつこうとしてきたので、とっさに逃げる。

「もう少し待ってね。あと少し片付けなきゃいけないから。」

「いいよ、唯。桜にやらせる。桜、唯は俺と帰るから。いいよな？」

と桜さんの方をチラリと見るお兄ちゃん。ああ、桜さんのコメカミに青筋が…。

「あら、顔だけ男。ご機嫌よう。おあいにく様だけど、唯ちゃんは私が雇ってる従業員なの。バイトでもね。だからシスコン男。いくら義妹が可愛いからって、社会のルールは守らなきゃいけないね。わかるわよね？い・ち・お・う社会人なんだから。」

「ほう？ではお聞きしようか。唯を雇ってる店長さん。唯は再来週の月曜日から期末テストだっていうこと知ってるか？唯の日本史担当の教師から聞いたんだが、唯は日本史の成績が芳しくないようであ。

げっ。忘れてたああ！！しかも、なんでお兄ちゃん、日本史の成績が悪いつて…。

そこで遠藤先生のニヤリと笑った顔が脳裏によぎった。そういえば、昨日二人で飲みに行ったって言ってたなあ。一体何話したんだろう…。いくら先輩後輩だからって、言わなくてもいいのに…。

がっくり肩を落としていると、ますますお兄ちゃんと桜さんの喧嘩はエスカレートしていた。

「だいたい、あんたは唯ちゃんに過干渉なのよ！唯ちゃんだって年頃の女の子なんだから彼氏欲しいでしょうに、あんたみたいにするさい兄がいたら、彼氏できるものもできないわ！」

「唯の彼氏！？俺の干渉ぐらいで諦めるぐらいの気持ちだったら、端から唯に手を出すな！！」

「あんたの干渉度合いがひどすぎるのよ！！あーあ、唯ちゃんも可哀相に。こんなシスコン男が近くにいたら彼氏出来ないわよねー？」

なんで私に振るんだろう…。彼氏なんて考えたことないから、別に欲しいとかないんだけどなあ。

それにお兄ちゃんが思いつ切り桜さん睨んでるんですけど。

「おい、桜。お前、唯の事より、自分の心配しろよ。お前彼氏いない歴何年だよ。もう30前だろ。売れ残るぞ。」

「ぐっ！！う…うるさいわね！！あなたに関係ないでしょ！！しかもまだ4年あるし！っていうか、あんた今年で30じゃない。さっさと結婚でもすれば？綺麗な彼女いっぱいいるじゃない？」

「ば…！おま…っ！！唯がいるんだぞ！！」

やたらと焦っているお兄ちゃんだけでも、私知ってるからいいんだけどなあ。

まだ小学生の私がお兄ちゃんと歩いていると、綺麗な女の人が私を見て「隠し子がいたなんて聞いてない！！」と言って、お兄ちゃんを平手打ちした。びっくりしている私をよそに、叩かれたお兄ちゃんも平然と「君、誰？」と言いつつ放った。

泣き出した彼女を冷たい目で見やったお兄ちゃんは、「さあ唯、行こうか」といつもの笑顔で私の手を取り、号泣している彼女を無視

して歩き去ったのである。

当時はさっぱり訳が分からなかったけれども、どうやらお兄ちゃんは相当女性関係が派手らしい。その辺は、流石にはつきりと聞いたことがないので、詳しい事はわからないが。

「お兄ちゃんサイテー。」

とぼそりと呟くと、今まで桜さんと喧嘩していたのはどこ吹く風で、「いや、違うんだ」と言い訳を始めたので、面倒くさくなった私はさっさと帰り支度をしに更衣室へ向かった。

着替えを済ませ、更衣室を出ようとして、まだ毛糸を買っていなかった事に気付き、慌てて店の方へ足を運んだら、なんと桜さんがお兄ちゃんを慰めていた。

驚いたが、せっかくのチャンスだと思い、しばらくそのままにしておこうと思ったのだが、今日はマンションではなく実家に帰るのだと思い出し、残念だけど二人に声をかけた。

「桜さん、私毛糸何個か買っていきたいんですけど、いいですか？」

「あら、帰り支度出来たのね。ほあら、バカ男。いい加減元気出さないよ。で、唯ちゃん、どの毛糸？あぁ、それね。何個？」

縫るような目線で私を見ているお兄ちゃんを放って置いて、目的の毛糸を手に取り「とりあえず5個位かな」と大まかな目安の数量を

桜さんに教え、会計を済ませる。
帰ろうとお兄ちゃんを見ると、わかりやすく凹んでいた。
もー本当面倒くさいなあ。

「お兄ちゃん、帰ろうよ。」

がばつと私を見たお兄ちゃんは「あのな、唯」と言い掛けたのだが、
いい加減帰りたかった私は息を一つ吐いて、お兄ちゃんを見た。

「もういいよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんは私から見ても格好いいし、
モテるのわかるよ。だけど、それで傷付くのは、お兄ちゃんが本気
になった彼女だと思っけど。」

言葉を飲み込んだお兄ちゃんは、私を見てぼそつと「零と同じこと
言ってる」と呟いたのだが、私にはあいにく聞こえなかった。
黙って私達を見ていた桜さんは、苦笑しつつ、「ほらほら、暗くな
ってんだから、早く帰んなさいよ」と言っって、店から追い出した。

帰りの車中は、気まずく、空気が重かった。別に悪い事を言ったわ
けじゃないんだけど、なんだろう。このジトツとした空気。

「あのね、お兄ちゃんさ。」

「……………」

「桜さんの事好きでしょ。」

キキキー！……！と急ブレーキがかかり、シートベルトが体に食い
込んだ。

あ…あぶ…危ないなー！！文句を言おうとお兄ちゃんの方を見ると、目が限界まで開かれたお兄ちゃんが私を凝視していた。

「ちょっと、お兄ちゃん！危ないじゃな「僕が桜が好き？」」

「お兄ちゃん？」

「いやいやいや、有り得ないから。唯。僕と桜はあんなに仲悪いじゃないか。それがどう転んだら、恋愛感情が絡んでくるんだ？」

「……………」

嘘でしょう…。

お兄ちゃんまさか自分で気付いてないわけ？もしかして、お兄ちゃんって本気になった彼女って今まで居なかったの？

うわぁ…これは…桜さん前途多難…。まさかお兄ちゃんが恋愛音痴だとは…。

がつくりとうなだれながら、気の抜けた薄ら笑いで「そうだね…」とお兄ちゃんに返事をして、私達は実家へと再び車を走らせたのだった。

第十五話（後書き）

女性関係百戦錬磨な人が、自分の恋愛には疎かったり。王道を外さない男、桐生秀人。

そのうち、スピノフ出せたらいいなあ。読みたい人いるかな…（汗）

第十六話

「ただいま〜！」

その家の玄関を開けた瞬間、黒い物体が私に向かって突っ込んできた。よろけた私をお兄ちゃんが苦笑しながら、支えてくれる。

足下を見ると、尻尾を振り切れんばかりにぶんぶん振りながら、嬉しくて仕方がないと言った風に立ち上がって私を円らな目で見る黒いラブドールがいる。

「久しぶり、ナイト〜！！元気だったー？」

ナイトの首にしがみつき、抱き締める。ナイトもベロベロ私の顔を舐めて、撫でて撫でて尻尾を振って私に促している。

わっしやわっしやとナイトを撫で回し、お手、お座りなど一通りの事をして、ようやくナイト以外に目をやる。

苦笑しながら濡れたタオルを差し出したお兄ちゃんに感謝しながら、リビングへ行く。もちろんナイトが私の側を離れず付いてくる。ああもう、やっぱりナイトは騎士（Knight）だわ〜。いいコ、いいコ。

リビングに入ると、キッチンから出て来た家政婦の道代さんが「あらあら、唯お嬢様！」と驚いていた。

「お迎え出来なくてごめんなさいね。ナイト君がやたらそわそわしてたから、どうしたのかしらと思っていましたよ。」

「いいえ〜、いいんですよ、道代さん。あれ？お兄ちゃん、今日私

来るって言うてなかったの？」

「そうだよ。唯をサプライズで連れてきてあげようと思ってねえ。」
へらつと笑って、ナイトを撫でているお兄ちゃんを見て苦笑する。
サプライズって…。

「道代さん、私急に来ちゃって大丈夫でした？ご飯足りないんだっ
たら、私自分で作りますよ？」

「あらっ！大丈夫ですよ。私これでもこの家の家政婦ですから！一
人増えたぐらいなんてことありませんから、少し待ってて下さい！
！美味しいの作って差し上げますね！」

「あ、じゃあ私手伝います。」

「いえいえ、唯お嬢様はゆっくりして下さいます。お久しぶり
でございますから。先ず、お母様にご挨拶していらっしやいませ。」

「あ、そうだね。お母さんに挨拶してくる。」

そう言っつて、お母さんの遺影がある和室へとナイトと一緒に足を運
び、お兄ちゃんのご飯の用意が出来るまで、少し仕事してるからと
言っつて自室へと引っ込んだ。

「お母さん、ただいま。しばらく来れなくてごめんね。」

写真で微笑むお母さんに手を合わせ、静かに黙祷する。

お母さんは二年に癌を告知された。

余命半年。

そのあまりにも衝撃的な内容に、自分が一番取り乱す立場だったのに、お母さんは笑ってそれを受け入れた。逆に気を使ったのはこちらの方で、私はただ毎日を泣いて過ごしていた。

そんな私を見かねたパパは、話があると家で二人、向かい合って話をした。

「唯、お前ろくに寝てないだろ。ちゃんと睡眠ぐらいは取れ。祥子も気にしてるぞ。」

「……………」

「お前が先にしんどくなつてたら駄目だろ。これから実際に辛いのは祥子なんだぞ。それをちゃんと俺達が支えてやらなくてどうする。」

パパの静かな声を聞きながら、私はただ俯いて口を噤んでいただけだった。そんな私を見ていたパパは、はー…と一息吐いた。

「そういうところは千歳そっくりだな。全く頑固で可愛げがない。」

「…千歳…？お父さん？」

そういえば、お父さんとパパって幼なじみだったっていうのを聞い

た事がある。そういつとこって…。

「千歳も都合悪くなると、無言になってそっぽ向いてたからな。おまけに自分の信念を絶対に曲げない頑固者だったし。よく似てる、お前はやっぱり千歳の娘だ。」

そう言つてパパは、優しく私の頭を撫でた。

撫でられて張り詰めていた緊張の糸が切れて、もう枯れてもいいだけ流したはずなのに、一向に枯れる事がない涙が流れた。

「…わ…私、お母さんがいなくなったら…どうしたらいいの？」

ぼたぼた涙を流しながら、パパを見る。痛ましそうに顔を歪ませながら、パパは私を抱き締めた。抱き締められたことで更に鳴き声まであげて、しばらくそのまま泣いていた。

ようやく落ち着いてきた頃、静かにパパが口を開いた。

「唯、祥子がいなくなったら俺もどうしたらいいかわからない。ただ、ただな、唯。俺達がそんな顔しても、一番悲しむのは祥子だ。祥子のそんな姿は見たくないだろ？」

「…うん…」

「だったら、せめて笑つて俺達は過ぎさないか。変に気を使われたり、凹んだりしても祥子は喜ばないし、俺達もいつかは保たなくなる。だからな、唯。お前は自分が後悔しないように、祥子がいる時間を過ごせ。祥子が居なくなつてから、あれがしたかつたつて思つても意味がないからな。わかつたか？」

パパの胸に顔を埋めたまま、何度も頷く。
そんな私をただパパは優しく抱きしめていてくれた。

それから私は、パパに言われたことを自分なりにちゃんと考えた。
後悔はしたくない。自分がお母さんに出来る事をしてあげようと思
った。だから、それからちゃんと睡眠を取り、笑えるようになって
いた。

お母さんは余命半年と言われていたけれど、宣告後半年を過ぎても
お母さんは元気で、結局亡くなったのは、それから更に半年後の事
だった。

「お母さん、私後悔してないよ。自分がこの家出たことも、名字も
『神崎』に戻した事も。って言っても、籍はまだこの家にあるんだ
けどね？」

返事が返ることはないけれど、お母さんがくすくす笑って「全く、
しょうがない子なんだから」と言っている光景が浮かぶ。

ナイトを撫でながら、お母さんと会話をしていると、襖の奥から声
がかかった。

「唯、帰ってたのか。どうりでナイトが出迎えに来ないと思ったら。

」

パパがチラッとナイトを見ると、ナイトはぶいっと言った風に私に
すり寄ってきた。

それを見て軽く笑いながら、ナイトを撫で「お帰りなさい。パパ」と言つて、立ち上がった。そろそろご飯も出来た頃だろうなと思ひ、ナイトと一緒にリビングへ行こうと、パパにも声をかけた。

「パパ？ご飯出来た頃だから、食べようよ。私、お腹空いたー。ねー？ナイト？」

「ワンツッ！！」

「はは、ナイト、お前最近太ったぞ。唯、先に行つててくれ。祥子にたただいまつて言わないと。」

「そう？あ、お姉ちゃんは？」

「もうすぐ帰ってくるぞ。」

「2、3日前にも一緒にご飯食べたのにね。まあいいか。じゃあ先に行つてるね。」

そう言つて、和室を後にした。

リビングに戻ると、いい匂いがして、思わずキッチンを覗き込む。今日はおでんらしい。道代さんの作るおでんは、大根にちょうど良く味が染み込んでいて美味しい。

お腹減ったなあ。ナイトと一緒に遊んでいると、お姉ちゃんが帰ってきた音が聞こえた。

「ただいまー。あれ…？…もしかして唯！？帰ってきてるのー！？」

はいはい、帰ってきてるよ。

「お帰り、お姉ちゃん。お疲れ様。」

「ただいま、唯。やっぱり唯はいつ見ても可愛いわ。ね、ナイトもそう思うでしょ？」

「わふっ！！」

お姉ちゃんは私を胸に抱き締めながら、ナイトに同意を求める。どうやらナイトも賛成らしい。全くお姉ちゃんは『一言目には』可愛いなんだから。

「お姉ちゃんさ、私別に可愛くないけど？」

「うっん、唯はもう最っ高に可愛い！！私が男だったら、絶対自分のものにしてるわ。なんだって唯はこんなに無自覚なのかしら？」

「無自覚って…。私お母さんに似て、凄い童顔なだけじゃない？」

「祥子ママに似た童顔なのは認めるけどね？唯って、背はちっちゃくて細いけど、ちゃんと発育してるじゃない？出てるとこ出てるし。」

にやりと笑ってお姉ちゃんは私の胸を触り始めた。

きゃああっ！お姉ちゃんどこ触ってるのよー！！

急いでお姉ちゃんから離れようとしたけど、なかなか離してくれずに心底困っていると、いつの間にか現れたお兄ちゃんが、お姉ちゃ

んのおでこにデロポンをヒットさせた。

「こら、美奈。唯にセクハラするな。」

「何よ、痛いわね！セクハラじゃないわよ、スキンシップよ。ねえ唯？」

「…セクハラだもん…。」

若干涙目になりながら、お姉ちゃんから離れてナイトにしがみつく。ナイトは私を慰めようとしているのか、べろんと顔を舐めた。そこへパパが姿を見せ、夕食を食べるために皆、テーブルへついた。

第十六話（後書き）

私は犬派ではなく、猫派なのですが、なんとなく唯は犬好きっぽいので犬飼いにしました。

ちなみに、私もラブラドルは好きです。

第十七話

「え？お兄ちゃん、今なんて言ったの？」

思わず箸を落とした。

足元には、大人しくナイトが鎮座していて、落とした箸の持ち主を見上げている。

「だからー。唯は日本史の成績悪いんでしょ？だから、亨に特別に教えてやってって頼んだんだ。」

…そんな、どや顔されても全っ然嬉しくないし！！バカ！お兄ちゃんのバカ！！

「なんでそんな余計なことするの！？…確かに日本史の成績は悪いけど…だからってわざわざ先生に頼むことないじゃない！！」

「何なに？唯はその先生嫌いなの？ていうか、お兄ちゃん、その先生と知り合いなわけ？」

「お前多分知ってるだろ。亨だよ。遠藤亨。」

その名前を聞いた瞬間、お姉ちゃんの顔が般若に変わった。ひっ！滅多にお目にかかれないこの顔をしたお姉ちゃんは、非っ常に怖い。

「遠藤亨？遠藤亨ってあたしが知ってる『あの』遠藤亨かしら？なに？あの男が唯の先生なんてしてるわけ？」

「日本史担当らしいけどね。」

「最つ悪！！！」

あれ、お兄ちゃんだけじゃなく、お姉ちゃんも知り合いなの？
思いつき顔をしかめたお姉ちゃんをぽかんと見つめていると、思っている疑問が顔に出たのか、お兄ちゃんが私を見て苦笑した。

「ああ、そうか。唯は知らないんだな。美奈は亨の事嫌いなんだよ。昔からね。」

「当たり前じゃない！あたしの友達が何人あの男に泣かされたと思っっているのよ！」

「泣かされた？」

きよとんとお姉ちゃんに問いかけると、盛大にため息を付きながら、大きく頷いた。

「そう！遠藤亨、別名モデル喰いの遠藤！あの男は、昔、片っ端からモデルの女の子を喰いまくってた。しかも、全員彼女扱いじゃなかったって聞いている。二股、三股当たり前だったらしいわよ。それにね？モデルだけじゃなく、いろんな子に手を出してたみたい。」

「うわぁ…」

「それにね？あの男ってすごいモテてたくせに、絶対女の子に好きだって言ったこと無かったんだって。要は皆遊びだったって事ね。」

「こら、美奈。一応、亨は今唯の先生なんだから、そんな事教えて唯が悪感情持ったらダメだろう。」

「いいんじゃない？唯、あの男の特別授業なんて受けなくていいわよ。あたしが許す！」

ドンとテーブルを叩いて私を見ているお姉ちゃん。

そうかぁ。先生はそんなに遊んでたのかぁ。でも、今は有紗先生がいるから、今はもう遊んでないと思うんだけどなぁ。

私がそんなことを考えていると、それまで黙って聞いていたパパが口を開いた。

「唯、お前二学期中間の英語の点数何点だった？」

「え？英語？確か98点。」

「あら、2点間違えちゃったの？」

「うん、スペル間違えちゃったの。」

「まあ、唯は英語はネイティブだしな。一応イタリア語とフランス語も大丈夫なんだから問題はないんじゃない。」

私は一応マルチリンガルと言うやつだ。小中学生の長期休暇になると、パパの仕事も兼ねてミラノやパリ、NYやロンドンにも連れて行かれ、そのお陰で、イタリア語とフランス語は会話で不自由ない程度に喋れるし、英語に至っては、ネイティブスピーカーだ。

「じゃあ数学は？」

「数学？えーっと…90点だったかな…。」

「現国は？」

「うーんと…確か92点…。」

「生物。」

「95点。」

「家庭科。」

「100点。」

「あら、唯って成績優秀。」

「そうだね。」

にこにこ笑っていたお兄ちゃんとお姉ちゃんだったが、次の瞬間絶句した。

「じゃあ日本史。」

「……………んじゅう…2点。」

「あ？聞こえないぞ。唯。」

「……………32点…。」

「「32点!?」「」

何よ、そんなに大きい声で復唱しないでよ！だから日本史苦手って皆知ってるくせにー！！

ちよつとお兄ちゃん、何なの、その痛ましい物を見る目は！！お姉ちゃん、目見開き過ぎ！！パパに至っては、頭を抱えちゃってるし！！

「何よー！赤点じゃないからいいじゃない。他の教科は90点代なんだから、問題ないでしょ？」

「問題あるだろ！何で日本史だけ32点なんだ！！勉強しなかったのか!?」

「したもん！頑張つて32点だもん！」

「唯？威張れる事じゃないわよ？」

「亨が言つた事より更に悪いな…。まさか32点とは…。」

「32点32点つて連呼しないで!!」

「32点なんだから仕方ないだろうが。全く…。唯、その遠藤っていう先生にちゃんと特別授業してもらえ。」

はーっと言った感じで髪をかきあげ、お味噌汁を飲んだパパを見て、思いつきり顔をしかめる。

「ええ〜！遠藤先生に特別授業とかしてもらったのが学校の皆に知られたら、私あの学校いられないんだけど。」

「どうということ？」

お姉ちゃんがご飯のお茶碗を持ったまま、首を傾げている。言っっちゃっても大丈夫かな。

「学校じゃ先生、すごい人気だもん。それに、教師が生徒を鼻屑つてマズくない？」

「他に歴史の先生いないの？」

「いることはいるんだけど。」

そう、いることはいる。けどその先生は女子生徒から評判が良くない先生で、私も正直苦手だ。厳しいというより、単純に怖い。

「唯、来週からテスト始まるんでしょ？だったら少しでも点数上げないと。」

「そうだけどー…。」

「言い訳無用。ちゃんと勉強しろ。いい点取れたらクリスマスはパりに連れてってやる。」

「え？別にいいよ。」

いきなりパリって言われても…大体パパは仕事で行くんだし、お母さんがいない今、パリを一人でうろつくのはちょっとなあ。しかも、クリスマスに…。

「マリベルに会いたくないか？しばらく会ってないんだろ？」

「マリー？会いたい！」

「だったら勉強しろ。マリベルにブッシュドノエル作っておくように言っておくから。」

「わかった。頑張る…。」

先生の特別授業は嫌だけど。

むむむと言う顔をしていると、お姉ちゃんが吹き出した。

「マリーのケーキ、あたしも食べたいなー。美味しいのよねえ。昔はよく食べてたわ。」

「僕はしばらく前に会ってきたけど、全然変わらないんだよね、マリー。クリスマスか…。僕も一緒に行こうかな。」

「お兄ちゃん、クリスマスだよ？彼女いないの？あの桜って子誘えばー？まんざらでもないんでしょ？」

ニヤニヤ笑いながら、お姉ちゃんがお兄ちゃんを見ているが、お兄

ちゃんは眉間に皺を寄せている。

「なんで桜とクリスマスと一緒に過ごすんだ。僕は唯と過ごす！クリスマスは家族で！鉄則だろう。」

「秀人、クリスマスはお前仕事だろ。あの高橋がサボらせるわけがない。諦める。」

「零め…。あいつ自分の家族と過ごすに決まってる。子供が産まれて初めてのクリスマスだからな、僕に仕事押し付けるだけ押し付ける気だ。絶対…」

「ま、仕方ないんじゃない？頑張つてね。じゃあ今年のクリスマスはパパが唯独り占めかあ。あたしは彰義君あきよしと一緒に過ごすし。クリスマスの朝にメール送るわね。」

「彰義さんと上手くいつてるんだね、お姉ちゃん？」

うふふと笑って、お姉ちゃんは肯定する。彰義さんとはお姉ちゃんの彼氏だ。

お姉ちゃんが高校の時から付き合っているので、10年近くの付き合い。10年経っても、お互いらぶらぶで目のやり場に困るぐらいだ。パパもお兄ちゃんも公認で、そろそろ結婚話も出るんじゃないかなと思っっている。

クリスマスだから、彰義さんもプロポーズとかしちゃうんじゃないかなー。

「美奈、彰義によろしくな。唯はちゃんと勉強しろよ。」

「わかってるよー…。」

意気消沈しながら、「ご飯を食べ終えた。」

第十七話（後書き）

フランスならクリスマスは本来なら『ノエル』って言うんですよね？統一する為に『クリスマス』で。

ちなみに私は、ブッシュドノエル食べたことないです。

第十八話（前書き）

ちよくちよく手直ししています。誤字脱字ばかりなので、読み返してひやひやしています。

第十八話

次の日の朝、私はナイトの散歩をしていた。

久しぶりに私と散歩が出来るナイトは、早朝から私を起こして早く早くと強請っていたので、私も眠い目を擦りながら朝の冷たい空気の中、散歩に出かけた。

寒そうだなと思って、マフラーを探したのだが見つからず、仕方がないのでお姉ちゃんのストールを借りて来た。

「寒いねー、ナイト。」

「わんっ！」

んふーと笑って、ナイトを撫でる。途中で行き違った散歩をしている人とも挨拶を交わし、家に戻った。

今日は、珠緒さんが来るって言うてたよね。何時頃に来るかなあ。ナイトの脚を拭きながら、そんな事を考えていると、パパとお兄ちゃんも既に起きていて、仕事に行こうとしていた。

「おはよう、パパ、お兄ちゃん。」

「おはよう、唯。早いな、さてはナイトに起こされたか。」

「おはよう。外寒かったでしょう？早く中入って暖かいご飯食べなさい。僕達はもう出るから、今日送っていけないけど、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。今日は午後から3時間しかバイトないし、ゆつくりめに出ても大丈夫。二人とも気をつけて行ってらっしゃい。」

仕事頑張っつてね。」

「あ、そうだ。唯、はい携帯。」

「ありゃ、忘れてた。えーっと。わ、綾乃からいっぱい来てる。」

「綾乃ちゃんも元気？しばらく会ってないけど。」

「うん、すごい元気だよ。」

「秀人、そろそろ行くぞ。じゃあ唯、行ってくる。気をつけて帰れよ。」

ぎゅーっとパパにハグされて、それを見ていたお兄ちゃんにもハグをされた。それから二人は、ナイトを撫でて、仕事に出かけて行った。

お姉ちゃんは、今日休みだって言ってたから、まだ寝ているようだ。

「さーナイト、ご飯食べようか！」

尻尾を振り、私に付いてくるナイトに破顔しながら、道代さんの作ってくれた美味しい朝ご飯を食べた。

綾乃にメールしようとしていると、お姉ちゃんがのっそりと起きてきた。お姉ちゃんは低血圧気味で朝が弱い。今日も例に漏れず、目が開いていない。

「…おはよう、唯い…。」

「おはよう、お姉ちゃん。相変わらず朝弱いんだね。」

「仕方ないのよお…。あたし朝はダメなんだから…」

フラフラしながらシャワーを浴びに行ったお姉ちゃんを生暖かい目で見守りながら、綾乃にメールを打った。

まだ朝早いから電話は迷惑だよね。

【おはよう、綾乃。連絡くれてたみたいなのに、返せなくてごめん！金曜日は荷物ありがとう。身体はすっかり大丈夫だよー。心配かけてごめんね。】

よし、送信っと。

しばらくナイトと遊ぼうかなと思って、おもちゃを取りに行こうと腰を上げた時、携帯が鳴った。

『もしもし、唯？やーっと連絡着いたよー！金曜日からずっと電話してたし、メールもしたのに、全然繋がらないんだもん。どうしたのかと思ってたよ。身体は大丈夫なの？』

「おはよう、綾乃。ごめんねー、いっぱい着信あったのにびっくりしたよ。携帯、お兄ちゃんに取られてて、返してもらったのさつきなの。あ、身体は全然大丈夫だよー。」

『本当？良かったあ。唯ったらいきなり倒れるんだもん。遠藤先生もかなりびっくりしてたんだからー。そうだ、唯！！唯ったら遠藤先生にお姫様抱っこされて保健室まで行ったんだよお！あー、超羨ましいー！…！』

うつわ… やっぱりお姫様抱っこされたのか…。軽く頭を抱えて、綾乃の次の言葉を待った。

『あの後、教室騒然よ。まさか先生が、お姫様抱っこで唯を連れて行くと思わなかったからね。キヤーキヤー言われてたよ。』

「…本当に？うつわぁ、明日学校行きたくない…。私教室入るまでに生きていられるかな…。」

『大丈夫じゃない？いくらお姫様抱っこって言え、唯は倒れたんだから。それ教室にいる子なら全員知ってるしね。』

本当かな…。それに明日学校に行ったら、お兄ちゃんに頼まれたって言う特別授業があるみたいだし。綾乃にも言った方がいいよね。

「ねえ、綾乃。実はさ、お兄ちゃんと遠藤先生って同じ大学の先輩後輩で、知り合いだったの。なんかすごい仲良さそうな雰囲気だった。」

『え！？そんなの！？』

「うん、それでねー…」

『ちょっと待って、唯。仲良さそうな雰囲気って、唯、その場にいるの？』

「うん、いた。あの日すごい雨だったじゃない？それで、先生の車でマンションまで送ってもらったんだよね。」

『送ってもらったの！？先生の車で！？』

あれ、なんでそんなに驚いてるんだろう…。一応私断だったって言うのも言っておかないと思っていたら、綾乃が物凄い勢いで話し始めた。

『唯、さすがにヤバいかも！あのファンクラブの人達に、先生に送ってもらったってバレたら、呼び出しとか来るかもよ！！』

えええ…マジで？

送ってもらっただけで呼び出してことは…私が特別授業とかやつちゃうと相当危ないんじゃないのかな。なんか身の危険を感じてきた…。

「あのさ、綾乃…先生がお兄ちゃんに私の成績バラしちゃったみたいで、それで先生に特別授業っていうのを頼んじゃったみたいなの。どうしよう…」

『うわ…、唯は日本史死んでるからね…。でもさ、明日からテスト前週間だから準備室とか入れないんじゃない？で、今回のテスト頑張れば特別授業っていうの受けなくていいかもよ。』

「そうだよね！頑張れば！！」

「32点が頑張れるのー？」

後ろから私の禁句が聞こえ、それと同時に、背中に重さがかかる。いつの間にシャワーから浴びたお姉ちゃんが、ほかほか湯気を上げ

ながら、私の頭に顎を乗せて覆いかぶさっていた。

「お姉ちゃん。今電話中なんだけど。」

「綾乃ちゃんでしょう？綾乃ちゃん、おはよー！」

『美奈さん？おはようございます。元気してました？』

「してるよー。唯、携帯貸してくれる？ちょっとあたし、綾乃ちゃんと話したい事あるの。いい？」

綾乃と話したい事？なんだろうと思いつつも、お姉ちゃんに携帯を手渡し、その光景を見ていようと思っていたのに、お姉ちゃんは歩いてリビングから出て行ってしまった。

全く…一体何話してるんだか…。

5分位すると、お姉ちゃんはなにやらご機嫌で戻ってきて私に携帯を返しがてら、にっこり微笑んで「唯、安心しなさい」と何やら意味不明な言葉を残し、ご飯を食べにダイニングに行ってしまった。

「もしもし、綾乃？お姉ちゃんと何話したの？」

『んー？何て事はないよ。でもね、唯、安心しなさい。美奈さんからいい事聞いたから！先生にも何も言われなくて済むかも！』

「え？本当？」

「うん！ーじゃあ、私これで切るね。詳しくは明日ちゃんと話すよ。じゃあねー。」

「う、うん。じゃあバイバイ。」

些か（いささ）疑問を持ちながら、そのまま電話を切った。

第十九話

「ここをこうやって…そう、そうです。」

今私は、珠緒さんにマフラーの編み方を教えている。本人が編み物は苦手だと言っていた通り、ちよつと目を離すと目数が合わなかったり、毛糸がとんでもない事になっていたり…。

確かに旦那さんが言っていた通り猫っぽい…。そんな失礼な事を考えていたら、ついに珠緒さんが編み棒を放り出した。

「やっぱりダメだわ、唯さん！何度やっても上手くいかないんだもの！」

「そんな事無いですよって言ってあげたいんですけど…。珠緒さん、本当に苦手なんですわ…。」

苦笑いをしつつ、珠緒さんを見ると綺麗に整えられた髪に手を差し込んで、軽く頭を抱えていた。

「珠緒さん、元気出して下さい。ちよつと目数合わなかったりしても、投げ出しちゃダメですよ！それに、編み物はその人を思っただけで編むんですから、買った品とかじゃ感じられない温かさがありますよ。」

頭を抱えていた珠緒さんが、私に視線を向けると目を細めた。

「唯さんは誰かに編んだ事あるの？」

「…ありますよー。ちよつと嫌な思い出も付いちゃったんですけど

ね……」

言葉に詰まるかと思ったが、意外に冷静な声が出た。案外私は凶太いのもかもしれないなあ。

そう。『彼』の為に私は一生懸命マフラーを編んだ。

『彼』の事を思って。受け取ってくれるかな。喜んでくれるかな。ただそれだけを考えているだけで、心が温かくなったり、苦しくなったりした。

『彼』が好きだった。

幼い恋心。

初恋だった。

それが粉々に砕かれた時、私はもう二度と誰かの為に編み物をしないと決めた。

以来、私は誰にも編んでいない。自分用の物は編んでいる。それを見たパパは、俺の跡を継がないかなどと茶化したりしているが、私

にはその気はさらさら無いし、大体後継者はお兄ちゃんだ。少しだけ心残りなのは、お母さんに少しだけでも編んであげられればよかった事。だけど、お母さんは私が編まなくなった理由を知っている。

「私に無理して編まなくていいのよ。また誰かに編んであげられる日が必ず来るから、その時まで取っておきなさい。」

そう言って微笑んだお母さんの顔は、かなりやつれていた。それから何日も経たずに、お母さんはお父さんに会いに行った。

「唯さん？」

はっと気が付くと、珠緒さんが私を不思議そうな顔で見ている、慌てて話を変える。

「いえ、何でもありません。お腹減ったなーって思ってただけですわー！」

時計を見ると、既に18時を回っていた。今日は何食べようかなーと思っていると、珠緒さんから思いもよらない話が飛び出した。

「ねえ、唯さん。編み物を教えてくれるお礼に、私と夕飯を一緒にどうかしら？」

「え？そんなお礼なんてとんでもないですよ。私がしたくてしてるんですから！」

慌てて手を振って固辞したのだが、珠緒さんは見かけによらずかな

り強引だった。

結局、バイトを上がった私は珠緒さんを迎えに来たと思われる、黒塗りのでっかい車に乗せられて、高級料亭に連れられてきていた。

…ここって、財界人御用達って言われてる料亭だよな…。しかも離れの個室…。うわーん、居心地悪いよー…。

目の前でニコニコしている珠緒さんをちらつと見る。さっきの車といい、この料亭といい…珠緒さんって一体何者なんだろう…。

私の視線に気付いた珠緒さんは、「もうあと二人来るから、それまでもう少しだけ待ってね」と私に言った。

…もう二人も来るの？ヤバイよー、居心地悪すぎるー！！内心冷や汗をかきながら、なんて声をかけようか迷っていた時に、襖の奥から女将と思われる人の声がかかった。

「遠藤様、お二人様がいらっしやいました。お通ししてよろしいですか？」

「ようやく来たのね。ええ、通してくれる？それと食事もよろしくね。」

「はい。すぐにお持ちいたしますね。」

…女将さん、今なんて言いました？

遠藤様…？いや、まさかまさかでしょう。遠藤なんて名字は日本にありふれてるし、世間は狭いって言うてもそんなに狭くはないでしょー。

引きつった笑いをして、珠緒さんに声をかけようとした時、襖がす
らりと開いた。

…世間って狭すぎる…。

そこにいたのは、間違えようもない遠藤亨、その人だった。
但し、同じ顔がもう一人側に立っていたが…。

第十九話（後書き）

唯ちゃん、急展開。

高級料亭って想像も付かないので、私の妄想空想になりますが、こ
愛嬌で許して下さい（土下座）

第二十話

驚いたのは、私だけではなかった。先生も驚いて、目を見開いている。

「亨、どうかした？あれ？おばあ様、この子はどなたですか？」

先生と同じ顔の人がそう言った。おばあ様…。

おばあ様！？

慌てて珠緒さんを見ると、私を見て優しく微笑んだ。

「ほら、亨、そんなところで突っ立ってないで、中に入りなさい。この子はね、私に編み物を教えてくれているの。そのお礼で今日は連れて来ちゃった。だから二人とも気にしないでね。」

「そうなんですか。お嬢さん、お名前は？」

「あ、私「神崎唯だ。」」

割って入った先生の声に、珠緒さん達は先生の方を見た。

「あら、亨知ってるの？」

「知ってるも何も…俺の生徒です。」

そこまで言っただけで先生はため息を付きながら、私の前に胡座をかいて座った。

先生の隣には、同じ顔の男の人が座っている。
先生って双子だったんだ…。この顔が二つも…。心臓に悪いなあ。
だけど、この状況…。先生思いつ切り私見てるし！

「こら、亨、そんなに睨むなよ。怯えちゃってるじゃないか。ごめんねー、弟が怖くて。これじゃあ先生やってるときも怖いでしょう。」

「^{たすく}翼、俺は睨んでないぞ。」

「あら、睨んでいるじゃない。」

「あー…。」

三人とも一斉に私を見た。うっ！居心地悪さ倍増！！
もう帰りたーい！！

「珠緒さんって、先生のお祖母ちゃんなんですか？」

「おばあ様、何も話してなかったんですか？」

翼と呼ばれた人が珠緒さんを見た。先生は相変わらず私を凝視している。

「えーっと、唯ちゃんだっけ？見ての通り、君の先生の亨は僕の双子の弟、それはわかるよね。ちなみに、僕は亨の兄で翼。『つばさ』って書いて『たすく』って読むからよろしくね。」

「はい、初めまして。唯です。」

「うん、それでね。遠藤珠緒は僕らの祖母なんだよ。」

「まさか亨の生徒だったとはねえ。世間は狭いわあ。」

うふふと笑った珠緒さんは何だかすごく楽しそうだ。

楽しくないですよ、珠緒さん…。

「で？なんで神崎がおばあ様の編み物なんて教えてるんだ？」

「唯さんのお母様が作ったテイベアを、たまたま通りかかったお店で見かけたの。そうしたら、唯さんが私の編み物音痴を励ましてくれて、教えるから一緒に作りましようっていうことになったの。」

あなた達にも編んであげたいけど、貴方達のおじい様に編むだけで精一杯だわ。」

「おばあ様が？唯ちゃん、大変でしょう。おばあ様は猫みたいで。」

くすくす笑いながら、翼さんは食事をしている。あ、左利きなんだ。へー。双子って言っても、違うんだなあ。しかも、珠緒さんの旦那さんに言われてた事と同じ事言ってるし。

「ええ、まあ…。でも頑張って編んでるんですよ。私も一緒に教えているので、完成したら褒めて上げてくださいね。」

「へー。唯ちゃんは編み物得意なの？」

「ええまあ…。」

「お前の義父から教えてもらったのか？」

今まで黙々と食事を食べていた先生が、箸を止め、ここで口を開いた。

くそー…また面倒な事になっちゃったな。珠緒さんと翼さんは、思いも寄らぬ先生の一言に凍っているように見えるし。義父って言うても、お父さんは死んでるし、別に何て事はないんだけどなあ。

「違います。母です。パパは編み物出来ませんから。あ、ちなみにお兄ちゃんとお姉ちゃんも壊滅的です。」

「ふうん。桐生さんがねえ…。」

「亨、どういう事？なんで唯さんのご家族の事を知っているの？それに桐生って？唯さんの名字は神崎でしょう？」

くすくす笑っている先生に対して、珠緒さんが問いかけた。翼さんも首を傾げている。

「翼、こいつは桐生さんの義妹だ。おばあ様、桐生総一郎をご存知ですか。母さんが好きな『カサブランカ』のデザイナーの。」

「桐生…もしかして秀人さんの義妹？」

「『カサブランカ』？知っているけど…。桐生総一郎って、確か前に『Dupont』のデザイナーじゃなかった？あのブランドを世界的なブランドにしたのよね。それまでイタリアの老舗ブランドだったけど、国内を出るほどのブランドじゃなかったのを、有名にしたので凄く世間を騒がせたのを覚えているわ。その桐生総一郎がどうしたの？」

「その桐生総一郎は、私の義父です。」

珠緒さんは驚いて、私を穴が開くんじやないかって位見つめている。翼さんは、「秀人さんの義妹…」と、以前先生が、私とお兄ちゃんの関係を知った時と同じ反応してるし。うーん、なんか居心地悪いな、やっぱり…。

「でも、唯さん神崎って言うてるわね。どうして？」

「おばあ様、それは踏み込みすぎです。神崎、別に答えなくていいぞ。」

「はあ…。」

正直言いたくなかったので、先生の申し出は嬉しかった。

止まっていた食事を再開したのだが、こんな雰囲気じゃなかったら、きつともっと美味しいんだろうなと思わせる食事なのに…もったいない。

見た目にも美しい食事を終えてお茶を飲んでいると、携帯が鳴っていた。すいませんと断って、部屋から出て電話に出るとパパだった。

『唯？お前もうマンション帰ってるか？帰ってるんだったら頼みたいことあるんだが。』

「ううん、まだ帰ってない。あのね、ちょっと今、食事に連れてきてもらってるの。」

『食事？誰にだ？』

…なんて言えばいいんだろう。昨日知りあったバイト先のお客さん

のおばあちゃんに、食事に連れてきてもらってるって言えばいいんだろうか……。うーんと悩んでいると、パパが電話口で改めて私の名前を呼んだので、ここは正直に話すことにした。

「バイト先のお客さんの人に連れてきてもらったの。」

『お客って、まさか男じゃないだろうな。』

「違うよ、おばあちゃんだよ。」

『ふーん……。ならいいけど、お礼は忘れるなよ。』

「それで、パパ、何頼みたかったの？」

『ああ、お前の部屋にあった書類持ってきて欲しくてな。でも、今日はもう遅いからいい。明日、誰かに取りに行かせるから、お前、何時に学校から戻ってる？』

「明日からテスト前週間だから、4時位には戻ってると思う。」

『わかった。じゃあ、気を付けて帰れよ。』

「うん、わかった。じゃあね、パパ。」

そうして電話を切って、再び部屋に入ると、何故か私を見る視線が生暖かった。

一体何事……？

訝しんでいると、珠緒さんがそろそろ帰りましようかと声をかけてくれたので、慌てて食事のお礼をした。

「あの、今日はご馳走様でした。とっても美味しかったです。」

「いいえ、いいのよ。やっぱり女の子はいいわね。場が華やかになるわ。また一緒にご飯食べましょうね?」

にっこりと笑いかけられたけど、私はどう返せばいいのかわからず、曖昧に言葉を濁した。

ここからマンションまで帰るのは時間かかるな。と思っていたら、先生が私に声をかけてきた。

「おい、神崎、俺が送って行く。ここからお前のマンションまでじゃ時間かかるだろ。」

「え!? 嫌です!!」

あ、しまった、本音が…っ! 先生が凄い勢いで不機嫌になるのがわかった。

だって、嫌なんだもん!!

「あら、亨、嫌われてるわえ。でも、唯さん、亨に送って行ってもらって? 私もこの子達に乗せて行ってもらう気で、車を帰してしまつたのよ。亨が嫌いでも我慢してね?」

「いや、あのー…。」

「いいから乗れ。翼、おばあ様を乗せて行ってくれないか。俺はこいつ送って行くから。」

「いいよ。じゃあね、唯ちゃん。あ、秀人さんよろしく言ってお

いてね。」

「あ、はい…?」

「ほら、行くぞ。」

あれ？翼さんもお兄ちゃん知ってる？ぽかんとしている私の腕を掴んだ先生は、そのまま車に乗り込み、私のマンションまでの道のりを静かに走り始めた。

第二十話（後書き）

お待たせしました。

先生の双子の兄、翼登場です。と言っても、あまり自立していないようにも感じますが…。

追加登場人物紹介（前書き）

第二十話までの追加の登場人物紹介です。

追加登場人物紹介

カッラギサクラ
葛城桜 26歳

唯のバイト先である、アクア手芸店の店長。さっぱりした性格をしている。

秀人の事が好きだが、素直になれず、いつも喧嘩をしている。唯に言わせると、ツンデレ。

エンドウタマオ
遠藤珠緒 74歳

唯のバイト先に、着ているお客さん。実は遠藤グループ総裁の妻であり、亨の祖母。

編み物が苦手で、唯に教えてもらっているが、イマイチうまくならない。夫曰く、毛糸でじゃれている猫。ちよっと強引。運命絶対論信者。

エンドウタスク
遠藤翼 28歳

亨の双子の兄。遠藤グループの正式な後継者。現在は一族の会社で、企画開発部部长を務めている。

秀人曰く、草食系。左利き。

サオトメユウキ
早乙女悠生 23歳

唯の高校に今年新任してきた英語教師。

泣きボクロとメタルフレームのメガネが印象的な人気教師。唯の事が好き。

第21話(前書き)

ようやく先生視点が書けます。お待たせしました。

第21話

全く妙な事になったものだ。

祖母から翼も一緒に食事をしましょうと呼ばれたのはいいが、まさかこいつがいるとは。

桐生一家に溺愛されているという、神崎唯。

まさか、あの桐生さんがあそこまでデレデレになっている姿なんて俺が大学時代の時なら絶対お目にかかれなかったはずだ。

ちらりと助手席を見る。

小さな体が居心地悪そうに更に縮こまっている。ふとこの子は学校内で密かに、そして絶大なる人気があるのを思い出した。

今年の入学式。

まだ着慣れていない真新しい制服で、新たな学び舎の門をくぐった新入生の中で、一際目立っていた。

癖のない真っ直ぐな髪は背中の中ほど、見るからに華奢で小さな体だが、一番目が行ったのは、思い切り童顔だったところ。

その童顔な彼女は、くりくりとした黒目がちな大きな目が印象的でとても可愛らしい。

俺は最初に神崎を見た時、小学生が紛れ込んだのかと思った。だが、間違いないうちの高校の制服を着ているし、新入生代表で壇上にも立っていた。

たどたどしくも、初々しい挨拶。

小さな彼女を見た生徒が沸き立つのは当然の事だったと思う。噂を聞きつけた2年3年も次々と彼女に近付いたらしいが、ことごとく玉碎しているのか、二学期の半ばを過ぎても、未だに誰かの彼女になったという話は聞かれない。

そういえば…。

今年の新任英語教師が、彼女に本気で惚れていると以前言っていたはずだったが…。

どう考えても、ロリコンだろうと思う。

一回りも年の離れた女なんて、まだまだ子供にしか見えない。現に、助手席に乗った俺の生徒は高校生にすら見えないと言っている。

密かに短いため息をつく、彼女はそれに気付いたのか、俺の方を見た。

「あの、本当にすみません…遠いのに、わざわざ。」

「いや、あの店まで行ったのはばあさんだからな。気にしなくていい。」

「はい…。でも、まさか先生が珠緒さんの孫だったなんて…。孫はいるって言ってたけど…。」

珠緒さん…ねえ。

俺だって、料亭の座敷に祖母と一緒に座っているこいつを見て驚いた。

なんで神崎がこんなところにいるんだ？

疑問ばかりだった俺の問いに、祖母はいとも容易く答えをくれた。

編み物音痴な祖母に、この子はわざわざ教えているらしい。

大丈夫なのか？

箱入りの典型的なお嬢様だった祖母は、祖父に嫁ぐ時に一通り、花嫁修行というものをして来ていたはずなのに、家事は出来ない、料理は出来ない、極めつけが裁縫だった。

ボタンがあつたはずの場所に無かったり、袖がそのまま縫いつけられて腕が出せなかつたり…。

料理等は、涙ぐましい努力　巻き込まれた祖父や父達が　をし
てなんとか自分の物にしたが、裁縫だけはダメだった。以来、祖母には裁縫をさせないようにと家内で暗黙の了解が取られている。

そんな祖母が編み物…。

翼も言っていた通り、祖母は猫だ。そう言っていたのは、祖父だったがまさに言い得て妙。悪戦苦闘して、最終的には毛糸に遊ばれている祖母の姿が、冬の我が家のお馴染みの光景だった。

「お前、よく編み物なんて教えてるな。大変だろ、下手で。」

「…否定出来ないのが、珠緒さんには悪いですけど…。でも、頑張ってますよ。」

「へえ。ところで、お前。来週の月曜からテストなのはわかってるんだよね？」

「…わ…わかってます…。」

「桐生さんから、お前の勉強みてやってくれって言われ、「見てくれなくて結構です、全然！！」」

…即答かよ。

見なくても良いって言ってもな。

「お前、自分の日本史の点数わかって言ってるんだろっな？」

「……………」

「日本史だけ赤点スレスレ。英語と家庭科はほぼパーフェクトなくせに、日本史『だけ』！」

そう、こいつは入学式で新入生代表までやったくせに、俺の担当している日本史だけ常に赤点ぎりぎりの成績だった。

こつというのは珍しくなかった。俺に気がある生徒達がわざと点数を落として補習を受けようとする事が多かったせいで、俺は補習は受け持たない事になった。

そのおかげで、日本史の点数は安定するようになったが、今度は補習を受け持つことになった教師からは嫌みを言われ、生徒からは俺に補習をして欲しいと言われたりするおかげで、煩わしさは変わらない。

神崎もその類かと思っただが、違っただらしい。
答案用紙を見ると、壊滅状態な解答……。どこをどう読んだら、この
答えになるのか……。そして、解答欄に書かれた正体不明の人物。頭
を抱えたのは一度や二度じゃなかった。

「いい機会だ。ちゃんと日本史の基礎を叩き込んでやる。桐生さん
にも許可は得たしな。」

「お兄ちゃんの言う事なんて無視していいですー！だいたいなんで、
お兄ちゃんに私の成績言うんですか！」

「それはお前……。あまりに楽観視出来る成績じゃなかったからだな。
桐生さんも嘆いてたぞ。」

桐生秀人。

俺の大学時代の先輩だ。

大学に入学した俺は、すぐさま話題の桐生秀人という人を見かけた。
当時『Dupont』のアジア向け広告のモデルだった桐生さんは、
話してみると気取った所や偉ぶった感じも無く、とても話しやすく、
楽しい人だった。

モデルをしていた桐生さんは、気さくな人柄も相まって大学内でも
断然モテていた。だけど、不思議と学内の誰かと付き合っていると
かは無かった。

まあ、あの人の事だ。確実に学内ではなく、外で遊んでいたと思っ
たが。

俺は、俺で特定の相手を作らず遊んでいたが、双子の兄、翼は大学から付き合っている年下の彼女と今も続いている。

「お兄ちゃんめ…。」

「そつえば、美奈は元気か？」

「…モデル喰い…」

「は？」

「お姉ちゃんが、ボロクソに言っていましたよ。先生、お姉ちゃんに相当嫌われてるみたいですね。」

「ぶっ！ははははっ！！相変わらず美奈はキツいな。よくあの性格をメディアで隠してるな！」

思わず爆笑してしまう。

桐生さんの妹、桐生美奈は俺がモデルの女と遊んでいる時に、もの凄い勢いで俺に掴みかかってきた。その場に桐生さんがいなかったら、確実に俺は殴られていたと思う。

「ごんの節操なしがあー！」

捨て台詞としては完璧。

だが、俺には面白くて仕方がなかった。
ただ美奈がモデルの仕事をしていたせいで、俺が他のモデルの女と遊んでいる話は美奈に筒抜けだったらしく、桐生さんにつんざりと言った口調でいつも愚痴られていた。

「頼むから、モデルは止めてくれ。美奈を宥めるのが大変だ。」

そう言われたが、遊びが楽しかった俺は、しばらくの間はモデル達と遊んだ。

そして美奈に『モデル喰いの遠藤』と不名誉なあだ名を付けられたが…。

「そつえば…先生双子だったんですね。双子って近くで見たの初めてですけど、顔と雰囲気似てるけど似てないもんですね。」

「え？」

「翼さんと先生。似てるけど、似てないです。」

そんな事言われたのは初めてと言ってもいい。
はっきり言うと、服装や口調等をシンクロしていると、親ですら気付かないだろう。

翼は左利きだが、俺は違う。幼い頃は、そういう些細な点で見分けを付けていたと思う。

それ位俺達はそっくりだった。今や、性格も変わり、進む道も分か

れてしまったが。

それなのに、初めて翼にあったこいつが何で似てないと言っただ？

「お前に俺達の何がわかるんだよ。」

思わず、声に苛立ちが出てしまった。

俺は、俺達の事がわかっていているような事を言われるのが嫌いだった。昔から。ひとまとめにされるのは嫌だったし、わかった風な言われ方をするのが好きではなかった。

「す…すいません…。」

畏縮した返事が耳に届き、我に返る。

しまった。

こいつを怖がらせてどうする。一応生徒なのに。と自分で自分を戒める。

小さな声で謝った後、それきり黙ってしまった彼女は、マンションに着くまでの間、一言も口を開くことはなかった。

第21話（後書き）

秀人と亨は所謂、類友というやつなのかもしれ…

「「なんか言った?」「」

いいえ、滅相もないです。お二人とも…。

第21・5話：翼・珠緒（前書き）

ちよつと違う視点からお送りします。

第21・5話：翼・珠緒

「なにやら楽しそうですね、おばあ様。」

「ええ、とても楽しいわ。そして、驚いているのよ。まさか唯さんが亨の教え子だなんてね。びっくりしちゃうじゃない？いくら世間は狭いなんて言ってはみても、唯さんのお義兄さんともあなたは知り合いなのでしょう？狭すぎるでしょう？」

「それもそうですね。それに、おばあ様と唯ちゃんが編み物の縁で繋がったのも奇縁と言う感じがしますから。」

珠緒と翼はくすくすと笑い合う。

脳裏に浮かんでいるのは、小学生のように幼いが、とても愛らしい教え子を苛立った様子で送り届けている、亨である。

「運命って感じよねえ。」

「出ましたね、おばあ様の運命絶対論。」

「あら！信じてないのね、私の運命論。私はあの人や、あなた達の両親の時にも運命を感じたのよ。それは外れてないでしょう？当たるんだから、私の運命の勘は！！」

「はいはい、そう言う事にしておきますよ！！」

「全く、信じてないのね。でもまあ見てなさい、翼。私は絶対、亨

が唯さんに夢中になると思いますよ。」

珠緒は、うふふふと笑いながら、唯が私の孫だったら良かったのに
―と軽くむくれた。

それを見た翼は、やれやれ、亨も大変だな。と双子の弟に向けて苦笑を洩した。

第21・5話：翼・珠緒（後書き）

珠緒おばあ様はロマンチスト。

第22話(前書き)

引き続き亨視点

第22話

静かな車内に、行き交う車の喧騒だけが響く。

あれから何も会話は生まれず、ただ息苦しい沈黙だけが俺と彼女の間を取り巻いている。

さっきは感情的になりすぎた。さすがに俺も悪いと思って、謝ろうとしていた最中、マンションに着いた。

さっさとシートベルトを外し、ドアを開けて車外へ出ようとして、ようやく沈黙が破られた。

「さっきは本当にすみませんでした。送ってくれて、ありがとうございます。珠緒さんにもごちそうさまでしたって伝えて下さい。」

「ああ、いや…。」

「先生、特別授業とか本当に結構ですから。じゃあ、さようなら。」

目すら合わさぬまま有無を言わさぬ早さで、マンションの中に入っていた神崎をただ呆然と見送った。

何なんだ、一体。

大体気分を害したのは俺の方だろう。なんで、俺の方が悪者みたいな気分になるんだ？

ため息を付いて、髪をかきあげた。ふとバックシートに目をやると、

白いマフラーが写った。
そういえば、金曜に送ってきた時神崎が車の中に忘れて行ったので、月曜に学校で渡そうと思っていたものだった。
ちよつとマンションまで来ている。車を来客スペースに停めて、エントランスに入った。

高層マンションに女子高生の独り暮らし。こんな所に住んでるなんて生意気以外の何者でもないが、彼女の義父は桐生総一郎だ。ここの家賃くらいならポンと出したのだろう。
受付に壮年ほどの男性コンシェルジュがいたので、俺の名前で預けようと思った。

「すみません。」

「はい、どうされましたか？」

「こちらに住んでる神崎唯にこれを渡してもらえますか？」

「神崎様でございますか？失礼ですが、どちら様でいらっしやいますでしょうか。」

「神崎の通っている学校の教師です。遠藤つて言えばわかると思います。」

「申し訳ありません。神崎様と言う方はこちらに住んではおりませんか？」

「あー、くそ。めんどくせー。」

神崎じゃなく桐生か、もしかして。

もう一度コンシェルジュに頼もうとして、けたたましい叫び声で、後ろを振り向いた。そこには、黒いラブラドルレトリバーのリードを握った懐かしい顔が、如何にも嫌そうな態度で立っていた。

「なんであんたがここにいるのよー!!」

「…騒音迷惑だな。」

「騒音迷惑じゃないわよ!あたしは、なんであんたが唯のマンションにいるのかわかんないだけよ!」

「少しは声を抑えろよ、美奈。」

キーキーうるさいこの女。久し振りに会ったが、全く変わらない彼女は、桐生美奈。

昔、俺に暴言を吐き、掴みかかった女だ。今も、視線で殺せるもんなら殺しているだろう視線で俺を見ている。

別になんにもしねーよ。

俺はマフラーを片手にひらひらと振ってみせた。ラブラドルがお座りしながら、つぶらな目で俺を見ている。

「これ。お前の義妹のやつだろ。俺の車に忘れてったんだよ。コンシェルジュに預けようと思ったんだが、お前の義妹、『桐生』でここに住んでんのか?」

「…そうよ。唯は桐生唯だもの。」

じゃあなんで学校では『神崎』なんだ？

その質問をしようとした時、それまで大人しく座っていた犬が、急にそわそわしだし、エレベーターに行こうと美奈を引っ張った。

「こら、ナイト！ちよっ！待ちなさい、ナイト！」

「お前、犬に遊ばれてるぞ…。」

「うるさいわね！」

ギツと美奈に睨まれた瞬間、エレベーターが一階に着いた音がして、扉が開いたと思った時には既に、美奈はリードを放していた。

犬が突っ込んだ先にいたのは、ベロベロ舐められている、さっき別れたばかりの彼女だった。

「わっ！ナイト！こーら、少し待って！もう、私エレベーターから降りられないでしょ？ね？」

わしわしと犬を撫でながら、エレベーターを降りてきた神崎は、美奈に話しかけようとして俺に気づいた。

ただでさえ大きい目が、驚きで更に見開かれている。

「先生、帰ったんじゃないんですか？」

「そうよ、そうよ、さっさと帰りなさいよ。」

しゅしゅと手を振りながら、自分より華奢な義妹を抱きしめている美奈を呆れ顔で眺めている自覚はある。

俺の顔に気付いた神崎が、お姉ちゃん！と諫めつつ俺に申し訳なさそうな目線で謝っていた。

俺もマフラーを渡してさっさと帰ろう。

「神崎、お前これ金曜に俺の車に忘れてっただろ。」

「あれ？探してたんですけど、先生の車にあったんですか。すいませんでした。」

「これ、お前の手編み？」

「そうですけど。」

「へえ…上手いな。買ったって言っても通じるんじゃないか？」

「でしょー？唯が作るのって既製品と変わらないのよねえ。」

何故か美奈の方が威張っている。お前が作ったわけじゃないだと心の中で突っ込みながら、ふと悪戯心が湧いた。

「じゃあ、俺にも何か編んでくれない？」

そう俺が言った瞬間、神崎の目に感情が宿らなくなった。

「嫌です。」

第23話(前書き)

今回も亨視点でお送りします。

第23話

冷たい目をした神崎を呆然としながら見ていると、ナイトと呼ばれた犬がくーんと鳴いた。
それを見た神崎が一撫でした。

「編みませんよ。大体先生だったら、私じゃなくてもいるんなもの編んでくれる人いるでしょう？ わざわざ生徒の私に編んでくれる？ なんて誤解を招くような事聞かなくてもいいじゃないですか。面白い反応が得られると思っただけなら、止めて下さい、本気でムカつきます。」

「……………」

「帰らないんですか？」

「そつよねー？ さつさと帰れ！！ バカ遠藤！！」

冷たい態度と、冷たい目。

一体この子は誰だ？

少なくとも、学校では見たことがない。その彼女の変化に驚いて、素直に謝罪の言葉を口にしていた。

「悪かった。さっきの事も謝る。」

「別に謝って貰うことでもないですし、さっきのは私が悪かったん

です。先生が謝る必要ないです。」

「いや、でも…。」

「何かあったの？ちよつと、バカ遠藤！あんた唯に何したのよ！！」

バカバカうるさい美奈はこの際無視だ。

ここまで頑なな態度を取られるとは思っていなかったので、大人しく帰ろう。そう思って、出口に体の向きを変えた。

「ああ。じゃあ帰る。悪かったな。」

「お姉ちゃん、お姉ちゃんも帰るんでしょ？彰義さんとデートなんじゃないの？」

「うん、じゃあ唯、ナイトをよろしくね。じゃあねー、ナイト。唯もね。」

そう言つて、犬を撫でて神崎をもう一度ハグした後、頬にちゅつとキスしてから、俺と一緒にマンションのエントランスを出た美奈は俺を物凄い目線で睨んでいた。

大体言いたい事はわかっていているから、ため息一つ付いて、美奈に向き直つた。

「なんだ。」

「あんた、唯の地雷踏んだわね。どうすんのよ、あれ。暫く機嫌直らないじゃない。」

「はあ？からかったことか？機嫌なんて直るだろ、最近の女子高生なんだから。」

そこまで言つて、美奈は呆れたと言わんばかりの態度を取っていた。なんだ、一体。何でそんな目線で見られなきゃいけないんだ。ああ、もう面倒だ。

「そうね、あんたが付きあつて来てた女なら何か買つてあげたりしたら機嫌直るでしょうね。」

「随分棘があるな。ていうか、付きあつてたわけじゃないんだが。」

「あーら、そうだった、そうだった！遊んでたんだったわ。でも、唯の機嫌はそんなんじゃないのよ。：祥子ママももういないのに、あんなに機嫌悪くなつた唯を宥められる人っていないのよね。全く：暫く唯に会えないか：。」

「なあ：聞いて良いか。何で、『神崎』なんだ、あいつ。本当は桐生なんだろう？」

ずっとそれが疑問だった事だった。祖母には追求するなど言つたはずが、俺が気になつて聞いてしまった。ここまで生徒の事に首を突っ込む気は無かつた。だけど、さっきの年不相応な態度と冷たい目気になつてしよつがなかつた。

その答えは、何故か桐生さんより美奈の方教えてくれるような気がしたので、そのまま聞いてみる事にした。

美奈は目を器用に片方の眉を上げ、俺を一瞥した。

「『神崎』って言うのは、唯の實の父親の姓なのよ。祥子ママ…唯の母親なんだけど、祥子ママが死んでから、半年位経ってから唯が突然言ったのよ。『高校に入ったら、この家を出て、神崎に戻る』って。当然皆反対したわ、特にパパがね。だけど、唯の決心は変わらなかった。仕方ないから、あんたんこの理事長に話を通して、桐生っていうのは伏せておいて貰ってる。確か唯があたしたちと義理の家族だつて知ってるのって、理事長と学担、担任だけだったはずよ。そう言う事だから、あんたも喋るんじゃないわよ。」

「ああ、誰にも言うつもりはない。だけど、なんで家を出たんだ？お前の父親とも不仲じゃないんだろ？」

「それがわからないのよね。あまりに突然の決断だったから…。理由を知ってるはずのパパも何も教えてくれないしね…。」

「そうか…。あ、あと一つ。あいつの地雷つて何の事だ？」

「…あんたが何か編んでくれないかって言った事。」

「はあ？ たつたそれだけ？」

「それだけであんなに態度が急変するものか？」

「わからないって顔してるわね。まあ、当然か。あの一言は唯にとつては禁句なの。何も知らなかったからいいけど、知ってて言うって完璧、唯に嫌われる。それくらい唯には地雷なの。お兄ちゃんも

時々編んでつて言ってるけど、それでも編んでくれないわ。ていうか、お兄ちゃんもなんで編まなくなったか理由知らないから、唯に嫌われて無いただけなんだけど。」

「どういう事だ？」

「何も知らなくていいのよ、あんたは。どうせ唯は誰にも編まないんだもの。天変地異が起きても、あんたに編んであげるなんて事はありえないわ。じゃあ、話はここまでね。私行くから。」

くるりと向きを変えた美奈は、長い脚にヒールを響かせ颯爽と歩き、駐車場に停めてあつた車に乗り込んだ。

俺の前を通り過ぎて行く時、車のウィンドウを開けた彼女。何かを言い忘れたのかと思って、それを見た。

「あんた、唯に手、出すんじゃないわよ。」

「それ…お前の兄も言ってたぞ…。」

「お兄ちゃんも言ってたかもしれないけど、一応ね。唯に手出したら殺すからね。わかった？あ、そうそう。特別授業とか言っつぶざけた事も止めてくれる？じゃあね。」

勢いよくエンジンを噴かせて車道に出て行った美奈を見送って、再度ため息を付いた。

美奈に聞かされた話に、先ほどの神崎の態度を思い出す。

誰にも編まない？

だけど、祖母には編んであげてる……いや、違う、祖母には教えているだけだ。

編んで『あげている』わけではない。

なんだか、せつかくの休みだと言うのに疲れた。

明日からはテスト問題も作成しないといけない。俺も帰ろうと、自分の車に乗り込んだ。ふわりと香ったのは、車の香りでも俺の香水の香りでもない、神崎の甘い匂いだった。

第23話（後書き）

次から唯視点に戻ります。

第二十四話

『唯ちゃん、小さいのに編み物上手なんだねえ。』

『僕に編んでくれたの？本当に！？ありがとう、すごい嬉しい！』

『大好きだよ。』

ウンツキ

目が覚めたら、私は泣いていた。

枕元にいたナイトが、心配そうに私を見ている。手を伸ばしてナイトの毛並みを梳いてから抱き締めた。

久し振りに見た『あの人』の夢。

最近は見なくなってたのに……。ぐしぐしと目をこすって涙を拭いた。先生にからかい半分で言われた言葉に、私は久し振りにキレたと思う。

いつもならあんなにキツク言わないはずなのに。だけど、嫌な記憶が蘇ったのも本場で、だから感情が高ぶって、あんな夢を見たんだろう。

気分が悪いまま、先生の事を思い出した。

私、キレたんだよね……。それだけに今日学校で会うのが気まずくて仕方がない。

嫌だなー、会いたくないなー。

でも今日からテスト前週間だから行かなきゃならない。ああ気が重い。救いなのは、今日授業ないことかも……。

「おはよー、唯！」

「あ、綾乃。おはよう。金曜日はごめんね。びっくりしたでしょ？」

「うん、まあびっくりしたっちゃあしたわね。お姫様抱っ・っ・こ！」

うっ！またそれか！！せっかく忘れてたのに！！

でも周囲を見ても、別に何かを噂されたりしてない所を見ると、意外に広まってないのかも。

「もうそれはいいよ…。」

朝から肩をがっくり落としながら、教室に入った。

放課後になっても先生と会うことはなく、このまま無事帰れる！
テスト前なので部活がない綾乃と一緒に帰ろうと声をかけた。

部活の事でちょっと先輩と話してくるから待っててと言われたので、綾乃が来るまでがらんとした教室に残って、待っている間マフラーを編んでいようと持ってきていた毛糸と編み棒を出して、編み始めた。

赤い毛糸がするすると編めていく。

放課後特有のざわめきがBGMとなつて、かなり気分が落ち着く。
指を動かしながら、珠緒さんの事をふと思った。

ちゃんと編めてるかなあ。また目数合わなくなっていないかなー。

今週、来週はテストあるからバイト行けないんだよね。

でもどうやってか連絡取りたいんだけどどうしようかな…。一番簡単なのは、先生なんだけど会いたくないし…。
むー…。

「おい。」

どうしよう、珠緒さん携帯持つてるかなー。

持ってそうだよね、まさかスマートフォンとか持ってたりして！

「おい！」

「うえっ!?!」

いきなり声をかけられて、文字通り飛び上がって驚いた。後ろをバツと振り返ると、そこには先生が機嫌悪そうに仁王立ちでいた。

ななななんでこんな所に…って学校だから当たり前か！

会いたくないと思つてた次の瞬間に会うなんて、運悪すぎじゃない!?!私!?!

「ど…どうかしましたか…。」

動揺で言葉がどもる。

不機嫌なのを隠そうともしない先生は、白衣を着て、そのポケットに両手を突っ込みながら椅子に座った私を見下ろしていた。

おもむろに片手をポケットから出すと、その手には小さな手紙が握られていた。

「これ、うちのばあさんから。多分連絡先とか書いてるはずだ。」

?マークが私の頭の上を漂っていたはずだ。先生が私の顔を見て吹

き出したから。

「お前、『珠緒さんの編み物の先生』なんだろ？教えてやるには、連絡先知らないと駄目じゃないか。昨日、実家に寄った時チラッと見たけど、もうヤバいぞ、あれ。」

「ヤバいつて…？」

「なんかおかしい場所に棒が刺さってたぞ。」

…珠緒さん…一体何したんですか…。

何だか想像に固くない光景が浮かんでしまい、思わず苦笑してしまった。先生は私の編んでいるマフラーを手にとって見ていた。

「お前たちマフラー編んでるんだろ？お前が編んでると、ばあさんが編んでるのが全く別物になってる。早く連絡してやれ。と言っても、先にテストか。…言っとくが、今回範囲広いぞ。」

「え！？マジですか!？」

嘘でしょ！？範囲広いつてかなりヤバいんですけど！！マフラーなんて編んでる場合じゃないじゃん！！

私は慌てて、マフラーを片付けて勉強をしようとした。

のだけれど…。

「先生、放してくれませんか。私勉強しないとヤバいんですけど。」

じーっとマフラーを手に取ったまま私を見ている先生に、内心首を傾げた。

…な…なに…？そんなにジロジロ見られると気まずいんですけど…。

「お前さー…、」

「ゆーいっ！お待たせ！帰ろー！！あれ？遠藤先生…？。もしかしてお話中でした？」

「ああ、テストの事で少しな。林、今回の日本史は範囲広いから、一応クラスの奴に教えてやれ。じゃあな、早く帰れよ。」

そう言って、私の頭に手を置いてぼんぼんと軽く弾ませた後、先生は教室を出て行った。

第二十四話（後書き）

昔は私もテスト範囲で四苦八苦したもんですよ…（黄昏）

第二十五話

さあて帰ろうと立ち上がり綾乃を見ると、なぜか目をキラキラ輝かせて私を見ていた。
な…なに!?

「綾乃？」

がっとう肩を掴まれて、キラキラ光線を身に受けた。うっ！眩しい！目を細めて綾乃を見ると、彼女は興奮した様子で私に詰め寄ってきた。

「羨ましいわ、唯！遠藤先生に頭撫でて貰えるなんて!!」

「へ？」

「撫でられてたじゃない！それに私、あんな顔してるの初めて見たかも。いつつも仏頂面っていうか、あんま笑わないじゃない、先生って？それがよ、唯！微笑んだわ、遠藤先生がっ！！凄いわ、イケメンオーラが出まくってた!!」

い…イケメンオーラ…ですか…。

若干引き気味で綾乃を見てみると、綾乃は落ち着いてきたのか、まあねーと笑いながらカバンが置いてある机まで行くと、さあ帰るかーと今までの勢いはなんだったんだと言わんばかりの落ち着きよう

だった。

「ま、唯にはあのイケメンオーラわかんないかもね。家族が家族だし。」

「どづいう事？」

廊下を歩きながら、二人で話す。

家族って…パパとお兄ちゃんとお姉ちゃん…だよねえ。多分。わからなくて首をひねっていると、綾乃は大袈裟にリアクションを取った。さすが演劇部、リアクションが派手だ！

「あんだ、すごい美形に囲まれてるのわかってる？お兄ちゃんはあの人気若手イケメンデザイナー、お姉ちゃんはアジアで引つ張りだこのモデル、パパっちに至ってはフェロモンの帝王よ、帝王！！私未だに唯の家族に会うと息切れしそうになるくらいドッキドキなんだからね！」

「そうなの？」

「そうなのよ。濃い。桐生家の美形濃度って、カルピの原液くらい濃いわ！！」

カピスって…。パパ、お兄ちゃん、お姉ちゃん。あなた達はカルピスだったんだね。知らなかったよ。

「ああ、でも昔、お母さんがパパを『オスください』って言ってたなあ。それってフェロモンの帝王って事だからかなあ？」

「…ゆ…唯、それ言っちゃダメなんじゃ…。」

「ん？」

「なんか、すごい内容の話してんね。神崎ちゃん。」

後ろから声がかかったので、振り向くと、そこには楽しそうにくすくす笑う英語の先生が立っていた。

「早乙女先生。聞いてたんですか？」

「『フェロモンの帝王』辺りからかな。一体何話してたの、君らは。」

楽しそうにメガネの奥で目を細めているのは、早乙女悠生先生。はやとめゆうせい
今年新任の英語教師で、泣きボクロとメタルフレームのメガネが印象的な人気教師だ。

「先生、どうかしたんですか？」

「えー？ないと言えば無いし、あると言えばある。」

「なに、それー？」

綾乃と二人で目を合わせて、お互い首を傾げた。
あ、もしかしてテストの事かな。

「テスト？今回、英語の範囲広いですか？」

「うん？ああテストね。そんなに広くないよ。ていうか、神崎ちゃんも範囲とか関係なくない？俺、いつも丸ばかり付けてるのは気のせい？」

「先生、それあたしに対するイヤミ？どうせあたしは英語苦手ですよっ！」

「林ちゃんは、ちょーっと真面目にやらなきゃヤバいかも…。」

「マジで！？いやああ！唯、英語教えてええ！！！」

綾乃は英語が苦手だ。私の日本史と変わらない点数をさまよっている。お互い笑えない…。

「綾乃、勉強しよう！私、今回日本史ダメっぽいもん。赤点取ったら、パパに雷落とされる！」

「そうね！早乙女先生、あたし頑張ります！目標40点で！！！」

「低っつー！林ちゃん、せめて60点とか言おうよ。俺、担任の先生に怒られちゃうじゃん。」

「先生、あたしが60点とか取れると思ってる？」

「…無理だねえ…」

早乙女先生と声が被った。ぶはつと吹き出したら、綾乃は何よーと怒ってさっさと行ってしまったので、仕方なく追いかけてようと先生に挨拶しようとしたらバランスを崩し、よろけた。

「おっ…と。大丈夫？」

その声が聞こえたのは頭の上で、顔を上げて見ると私が先生の胸に寄りかかるように倒れ込んでいた。

「あ、すみません。先生にご迷惑かけますね。」

「いやー？迷惑じゃなかったりするし、むしろ歓迎するけど。」

「？」

「ねえ、神崎ちゃんさあ、か「ゆーいー！早くー！…！」

「あ、綾乃が呼んでる。じゃあ先生、ありがとうございます。さよならー。」

「ああ…うん。気をつけて。」

なんか舌打ちっぽいの聞こえたけど、気のせいかな。
今度こそ帰ろうと、綾乃と一緒に玄関を出た。

第二十五話（後書き）

亨が言っていた、英語の新任教師登場。

第26話

昨日神崎のマンション前で美奈と別れて車に乗り込み、エンジンをかけた瞬間に携帯が鳴った。表示を見ると祖母だった。

「もしもし。おばあ様、どうかしましたか。」

『もしもし、亨？あなたちゃんと唯さんを送ってさしあげた？』

「はい。もう家に入りましたよ。俺はこれから帰るところなんです。何か用ですか。」

『あのね、亨、帰る前に少し家に寄ってちょうだい。あなたに渡して欲しい物があるのよ。』

渡して欲しい物？一体何だと思いつつ、実家へと車を走らせた。門をぐぐり玄関前に車を止めて、中へと歩を進める。

広い洋館のような実家は、祖母と母の趣味が融合したような内装に調えられている。

嫁と姑の間柄でありながら、二人はとても仲がよい。父と母は恋愛結婚らしく、運命論に彩られている祖母は諸手をあげて祝福した。見事に趣味も一致した母達は、端から見たら実の親子のように見える時が多々ある。そこが頭が痛いところでもあるが。

「おかえりなさいませ、亨様。いかがなさいました？」

「おばあ様に呼ばれたんだ。用事が済んだらマンションに帰る。で、おばあ様は？」

「大奥様は奥様とご一緒にお茶をさせていただきます。お呼びしてきましようか？」

「いや、俺が行く。」

我が家の執事である渡瀬を押しとどめた。
屋敷の二画にある茶室へ向かう途中で翼と行き会った。

「帰って来てたのか。」

「いや、ばあさんに呼ばれたただけだ。すぐ帰る。」

「ふーん。あ、そうそう、唯ちゃん！秀人さんの義妹ってマジか！？」

「マジ。驚くなかれ、桐生さんが重度のシスコンだぞ。しかも美奈も。桐生さん曰わく、家族中に溺愛されてるって言った。てことは……」

「あの桐生総一郎もか……」

あの桐生総一郎……。

翼が呟いた言葉に思わず笑いが漏れた。

デザイナーでありながら、起業家でもある桐生総一郎の辣腕ぶりは
アパレル業界のみならず、で各業界の評判が高い。

うちの遠藤グループも昨日、桐生総一郎をアドバイザーとして迎え、
新しいファッションビルをオープンさせたばかりだ。翼は企画開発
部の部長だという事もあり、その仕事を桐生総一郎と一緒にしたは
ずだ。

「お前、桐生総一郎と仕事したんだろ？どんな人だった？」

「男が惚れる男っていうか、まあ女も間違いないく惚れる色気も凄か
ったけどな。素晴らしく男っぷりがよかった。女性スタッフが軒並
みメモメモだっただけじゃなく、男性スタッフもかなり評判良かつ
た。」

「色気かよ。しかし、それは凄いな…。桐生さんもかなり色気ある
と思ったら、それ以上なのか。」

「まあ、秀人さんの親だからな。大人の色気ってやつか？それに、
仕事方面でも色んな意見聞きつつ、それも踏まえた上で自分の意見
を出す。一緒になってプロジェクトをやり遂げたっていう気になる
んだ。あれは誰でも惚れるよ。」

「へえ…。」

どうやら辣腕と言う噂は本当らしい。おまけに人たらし。一度会っ
てみたい気もするが、俺は一応一教師なわけだから、会うことはな
いと思う。

思案していると、茶室の前まで来ていた。そこで翼と別れて、襖の

奥に声をかける。祖母の返事は是。

「失礼します、おばあ様。」

「あら、来たのね。最近うちに顔を見せないんだもの。お父さんも心配しているわよ。」

「母さんは元気そうだな。父さんは会わなくても、翼から話は聞いている。相変わらずそうで何よりだと伝えてくれれば、それでいい。」

「全く、あなただったら…。お義母さんも何とか言ってくださいな。」

「まあまあ、雅さん、亨の言いたい事もわかるわ。それよりも、亨、この手紙を唯さんに渡してくれるかしら。」

手紙？

差し出された小さな手紙に目を向ける。

「唯さんに連絡先を教えるのを失念していたわ。これに携帯の番号が書いてあるわ。渡してちょうだいね。」

ニツコリと笑った祖母にため息を付いた。

面倒くせえ…。

渡してちょうだいねって、学校でって事だよな。さっき、あいつを

怒らせたばかりなんだが…。

「お義母さん、唯さんってどなた？」

「うふっ、私の編み物の先生なの。どうやら亨の教え子らしくてね、それでこの子呼んだのよ。」

「編み物の？お義母さん、大丈夫なんですか？」

「大丈夫とは何ですか、失礼な。でも、雅さん、これを見て？どうやってここから進むのかしら…。」

祖母の脇に置いてあつた編み棒と毛糸が織りなす物体をチラリと見て、瞠目した。

悲しいにも程があるほどの、毛糸の残骸…もとい編み物…。わかつてはいるが、一応確認を…。

「おばあ様、申し訳ありませんが、それは一体何でしょう…。」

「マフラーよ！！」

「おじい様に差し上げるんですよね、それ。」

「そうよ、いけないかしら？」

いけないだろう、それは…。

また祖父に猫だと言われている光景がありありと目に浮かぶ。頭を軽く振って、何も言わず、しかし態度でしっかりと俺の反応を伝えてから、帰ろうと立ち上がった。

「頑張ってください、おばあ様。じゃあ俺は帰ります。母さんもまたな。」

「全く、失礼しちゃうわ！じゃあ、唯さんに手紙を頼んだわよ、亨。」

「わかりました。ああ、でも来週まで頼むのは駄目ですよ。来週期末テストが始まるので、勉強してもらわないと困るんです。」

「あら、そうなの？どうしようかしら…。」

何やら悩んでいる祖母と、それを不思議そうに眺めている母を茶室に残して、玄関に向かう。

これから仕事しないといけないのだが、今日はいろんな事がありすぎて疲れた。さっさと寝ようかと思ってしまう。

渡瀬がお帰りでございますかと聞いてくるので、そのままあと返事をした。

次の日、放課後になって廊下を歩いているときに、教室で一人残って編み物をしている神崎を見つけた。

無心になって何かを編んでいる彼女は、放課後のオレンジがかった陽だまりの中にいた。なるほど、ロリ系好きの男に人気のあるはず

だ。と不謹慎に思ってしまった。

「おい。」

声をかけても返事が無い。

無視かよ。

そういえば、美奈が機嫌が直るのに時間がかかるとかって言ったな。まさか今も機嫌悪いのか？そう考えながら、今度は大きめの声を出した。

今度は気付いたらしいが、驚いたのか妙な返事で振り返った。大きい目が更に大きくなっている。

祖母からの手紙を渡して、ふと彼女が編んでいる物を見る。比べるのは酷だが、祖母のと全然違う。編み始めとはいえ、家神崎のやつはやはり既製品と言ってもおかしくない出来栄えだと思う。いつになったら、祖母はここまで編めるようになるのだろう。

とはいえ、今はテストだ。

今回も赤点すれすれの点数なんて取られては困る。しかし、今度のテストは期末。中間より範囲は広めだ。それを伝えると、神崎の顔色が変わった。急いで勉強したいのだろう、編みかけのマフラーをしまおうとしたが、俺はそれを離さなかった。

昨日の事を改めて謝ろうとしたのと、なんで誰にも編まなくなったのか。それを聞こうとしたら、彼女の友人が勢い良く教室へ入ってきたので、結局うやむやにしてその場を立ち去った。

頭を撫でたのは、単なる気まぐれだ。桐生さんと美奈があんなに可

愛がつている彼女が気になっていたから。見た目通り、小さな頭は俺の手のひらにおさまるんじゃないかと思うくらいだ。だから日本史が駄目なのか。そんな事を考えながら、準備室に戻った。

日本史準備室の窓から、校舎に面している廊下が見える。そこにいたのは、先ほど別れた神崎と林。

それに、神崎に惚れていると言う早乙女。なにやら三人で仲良く話していたが、林が先に行ってしまった。追いかけてしようとした神崎がバランスを崩して、それを早乙女が抱き止めた。

その体勢は、なんだかキスでもせがんでいるようなヤバイものだったが、さっさと神崎は帰ったようだ。

苦い顔をしている早乙女を見て、笑いがこみ上げた。

頑張れ、早乙女。

あいつを落としても、その家族がもっと手ごわいぞ。

そう、心の中で密かに笑った。

第26話（後書き）

翼は実家住まい、亨は祖父所有のマンションに一人暮らししています。

第二十七話

綾乃と別れてマンションに帰った。

コンシエルジュの羽生さんにただいまと挨拶をして、おかえりなさいませと笑顔で返してもらった。何となく、そういうやりとりが嬉しい。

部屋に戻ると預かっているナイトが勢いよく飛びかかってきた。相変わらず甘えん坊さんだわ。

わっさわさとナイトを撫でる手を止めて、リビングへ足を進めた。そう言えば、パパの書類ってどこにあるんだろう。そう言えば何の書類かも聞いて無いな。うーん……。今電話しちゃ駄目だね、仕事中だろうし。メールして聞いてみようかなあ。

【今日持って行く書類ってなんのやつ？どこに置いてあるのか教えて。】

そうパパにメールして、珠緒さんから貰った手紙を読む事にした。膝にはしっかりとナイトが頭を乗せている。その毛並みを梳きつつ、流麗な字で書かれた手紙を読んだ。

『こんにちは、唯さん。編み物の先生になってくれると言うのに、連絡先を教えて無かった事に気付いて筆を取りました。私も携帯電話を持ってるので、そちらに直接連絡をくれても大丈夫よ。もしも、私の携帯電話が通じなかったときの為にも、うちの執事の連絡先も教えておきます。渡瀬と言うのだけれど、彼に言付けをしてく

れば、私が折り返し連絡するわ。じゃあ、先生。ごきげんよう。
珠緒』

ご機嫌よう、珠緒さん。

手紙を読み終わって、ふふふと笑いをこぼした。先生って、ただ編み物教えてるだけなんだけどな！。

そう言えば、先生が珠緒さんのマフラーが大変な事になってるって言ってた…。どうなってるのか知りたいな！。今から電話しても大丈夫かなあ。

手紙に書かれた携帯の番号を、自分の携帯に登録しているときに電話が鳴った。パパだ。

「もしもし、パパ？」

『ああ、唯。書類のことだろう？えーつとな、俺の書斎…の書類棚の上にある封筒に入ってるあるやつなんだが、わかるか？』

「えーつと、ちょっと待ってね、書斎まで行くから。でも、仕事で使う書類なんでしょ？なんでうちにあるの？」

『俺がその部屋使ってた時に置きっぱなしで、そのまま今まで忘れてたんだよ。』

「あ、そうなんだ。えーつと…うーん…これかなあ。『カサブランカ』の今までのコレクション写真？」

『おお、それだ、それ！それ、高橋に渡してくれればいいから。』

高橋？なんで高橋さん？そう疑問に思った私は、パパに素直に聞いた。

「なんで高橋さん？お兄ちゃんの仕事はいいの？」

『取りに行くやつ探してたら、丁度高橋が外に出る用事があるって言うってたからな。ついでに取って来いって頼んだんだ。』

「ふーん。ていうか、パパ。来年入ったらすぐに今年の『カサブラシカ』コレクションの時期なのに、パリに行つて大丈夫なの？無理ならいいんだよ。」

『パリ行きにはあつちでの仕事の関係もあるからな。俺のクリスマス休暇も兼ねてあるからいいんだよ。ただお前、もうパリ行く気か？来週なんだろう、テスト。ちゃんと勉強しろよ…』と呼んでるから行かないと、じゃあな唯。』

「うん、わかつてるよ。じゃあね。」

元々このマンションは、パパが仕事の書類やデザインを考えるために借りていた部屋で、私が独り暮らしをすると言つてからこの部屋を借り受けた。と言つても、家賃はパパ持ちだけど…。だつてペントハウスではないものの、このフロア二部屋しかないし…。家賃は…怖くて聞けない。

広すぎて掃除もしきれないので、週に一回道代さんに来てもらっている。

パパの大概の荷物は貸し倉庫や職場に持ち込まれたけど、運びきれなかった書類や、写真などは書斎にそのまま残してあるので、今日みたいな事がたまにあったりする。

置いてあった写真を手に取った。パパとお母さんのラブイ写真が所狭しと並んでいる。何回見ても恥ずかしいいたらありやしない。

その中に、パパとお父さんが肩を組んで笑っている写真がある。

私はお父さんを二歳の時に事故で亡くしているので、よく覚えていない。お父さんと過ごした時間より、パパという時間の方が長いくらいだ、覚えているはずもない。

ただ、暖かい大きな手だったというのは記憶にある。

アメリカ、シカゴで外傷外科医をしていたお父さんは、日本から両親を呼び寄せて、ようやく取れた休暇をお母さんと私も一緒に過ごすとした際に、信号無視のトラックに突っ込まれた。

私のおじいちゃん、おばあちゃんは即死、お父さんも一週間意識不明だった。一時的に意識も回復して話せるようにもなったらしいが、内臓へのダメージが大きく、大量出血を起こしてそのまま亡くなった。

お母さんは、お父さんの幼なじみで親友だったパパに連絡した。当時、パリにいたパパは一番早い便でシカゴに飛び、友人の病室へ駆け込んだ。

そこからは、二人とも教えてくれない。

お父さんの最後の言葉がなんだったのか、どうして私達がパパの元

に身を寄せたのか。

ただ、お父さんは安らかな顔で逝ったとパパが悲しそうな顔でポツリとこぼした事があった。

そしてその話をした時、お母さんは泣いた。それをパパは優しく抱き締めていた。

パパがデザインする日本限定のレーベル、『カサブランカ』のコレクションは毎年一回だけしか行われない。

その日は毎年同じ日に開催される。

その日は、お父さんとお母さんの結婚記念日。

その時にパパは、『カサブランカ』の前身となったドレスを作った。

お母さんのウェディングドレスだ。

何でも、お父さんと約束したらしい。

自分が結婚する時、ウェディングドレスを作ってくれと。その約束を守って、当時忙しかったであろうパパは二つ返事で引き受けた。

そしてその時のドレスこそ、パパが唯一作ったウェディングドレスになっている。

それ以後、いくら依頼されてもウェディングドレスは作っていない。

お母さんと再婚した時にパパは『Dupont』を辞め、新しいブランドを世界に向けて展開し、その中の日本限定ブランドが『カサブランカ』。

日本人体型に合わせたサイズと、日本的なデザインは日本のみならず世界的にも評判がいい。

そろそろコレクションの季節か。今年はどんな服が出るのか楽しみだなー。

写真を棚に戻して、書斎を後にした。

第二十八話（前書き）

なんとか今年中に更新できました（短いですが）
良かったですー！

第二十八話

パパの書類を持ってリビングに行くと、チャイムが鳴った。

「はい。」

『あ、唯ちゃん？零だけど、社長から聞いてるよね？』

「高橋さん！ちょうどいいタイミングでした。今開けますね。」

『あ、俺エントランスで待ってるから、唯ちゃん出てくれる？』

そう言われて高橋さん部屋入らないのかな。と思ったけど、ついでにナイトの散歩も兼ねて下に降りよう。

少し待ってて下さいと言って、ナイトにハーネスを付けて書類を持ってエントランスに降りてみると、羽生さんと仲良く話していた高橋さんは、私を見ると破顔した。

「こんにちは、高橋さん。これですよね、書類。」

「ああうん、ありがとう。唯ちゃんこれから散歩？途中まで一緒に行くのか？」

「いえ、いいですよ。高橋さん早く会社に帰らなきゃいけないでしょ？でも高橋さん、なんで部屋に上がらなかつたんですか？私はナイトの散歩もあるからいいですけどね。」

そう言っと、高橋さんは苦笑してナイトを撫でていた手を止めた。

ん？一体なに？

「え？」

「いや、何でもないよ。唯ちゃん、簡単に男を部屋に上げちゃダメだぞ。危ないからな。」

「なんで？高橋さんは昔から知ってるじゃない。それに、私、こんな子供なのに襲う人なんていないよ。」

「うーん…唯ちゃん無自覚だから危ないな。秀人もその辺しつかり教えてやりゃあいいのに…」

ぼそつと呟いたその声は私に聞こえることはなかったけど、高橋さんは私の頭をポンと軽く叩くと、じゃあ会社に戻るからと言ってマンションを後にした。

散歩に出かけて、近くにあり公園で少しナイトのリードを外して自由にさせた。その途端、近所の子だろう、2、3人の小さな人たちとナイトは仲良く遊んでいた。

それを笑顔で見ながら、私は珠緒さんに連絡を取ることにして、ベソチに腰掛け、手紙に書かれてあった番号に電話した。

『はい、もしもし？』

「もしもし、珠緒さん？唯です。急に電話してすみません、今大丈夫でしたか？」

『あら、唯さん！亨から渡してもらったみたいね。良かったわー。』

「はい、ちゃんと受け取りましたよ。先生からマフラーが大変な事になってるって聞きましたけど、どんな状況なんでしょう。」

そう、どうなってるのかなり気になる。

私が日曜日に見た限り、かなりヤバい事になってそうだし…。先生もおかしなところから編み棒出てるって言うってたし…。

『まったく亨ったら、大げさなのよねえ。また編み目がわからなくなったの。今から教えてもらいたいけれど、唯さん、テストがあるんでしょっ？』

「あ、はい。来週からなんですけど、今週はテスト前なのでバイトにも行けないんですよ。どうしましょうか…。」

編み目がわからなくなった位で、そこまでひどくなるはずはないのだけれど、前回は前回なだけにかなり信憑性にかける…。でもどうしようかなあ…。悩んでいると、珠緒さんから、そうだわ！と弾んだ声が電話口から聞こえた。

『テストが終わったら、一度うちに遊びにいらっしやいな。そうね、来週の土曜日はどう？なんだったら、泊まっていてもいいのよ。』

「え…？さすがに泊まりは駄目ですけど、家にお邪魔するのもご迷惑になりませんか？私、テスト終わったらバイト行きますから、その時…」

『唯さん、家にいらっしやい。亨は一人暮らしだからいないし、翼は休みの日でも仕事があるだろうから、日中はいないわ。ね？おいでなさい。ああ、唯さん、家がわからないわね、渡瀬に迎えに行かせましよう。』

「いや、あの…」

『唯さん、どこ住んでいるの？』

「え、あの、」

『ああ！！亨が知ってるわね。亨から聞きましょう。来週土曜日のお昼に迎えに行かせます。準備してらっしやいね？』

「あ、はい。」

『嬉しいわ。じゃあね、唯さん。楽しみにしてるわね。』

「はい、それじゃあ…。」

そのまま電話が切られた。

…あれ？私、行かなきゃいけなくなったのかな…？

あまりの展開の早さに半ば呆然としながら携帯を見つめた。

第二十八話（後書き）

強引な珠緒に太刀打ちできない唯の図。

第二十九話

脅威の吸引力…じゃない、強引な珠緒さんからご招待を受けてしまった。

どうしよう…。

来週行かなきゃいけないなあ。先生と翼さんはいないって言ったけど、珠緒さん一人なわけじゃないよね…。むむむ…。

ていうか。

その前にテストだよ!!!!!

その事をようやく思い出して、こつこつと勉強を始めた。

日本史以外の教科は、教科書やノート、出されたプリントなどをもう一度やり返したり、読み返すことで覚えるのだけれど、日本史はどうもそれが出来ない。

いつしか、今週の学校も終わりになる。テスト日程も出た。一番嫌な二日目…。終わってる。

必死に放課後の今も勉強しているけれど、全く成果が感じられない。名前がややこしいんだよおお!!!誰、水野忠邦って!!!なにやっただの、この人…。

何で徳川幕府ってこんなに將軍いるんだろう…。覚えられない…。わかんないいい!!!

キーと頭を掻き毟っていると、隣にいた綾乃も同じく、英語で躓い

て机に突っ伏している。

綾乃は文法というか、文章の立て方が理解できないらしく、私が教えてもイマイチわかつているのか怪しい時ばかりだ。

そんな綾乃に、休憩する？と声をかけ、なにか飲み物を買に行こうと思つて席を立つ。ついでに綾乃も分も頼まれたので、それを買いに購買へ向かった。

購買ではパックのオレンジジュースを買い、綾乃に頼まれたイチゴオレも一緒に買った。

それを手にして、廊下をてくてく歩いていると、日本史準備室の前で遠藤先生とばったり会うはめになってしまった。

「こんにちはー…。」

「まだいたのか。早く帰った方がいいぞ、今暗くなるのが早いからな。」

「あー…そうですねえ。」

窓の外を見回して、暗くなり始めた空を見上げた。

言われたとおり、そろそろ帰ろうかなー。そう思つてその場から立ち去ろうとしたら、先生からおい。と声がかかった。

「お前、今度の土曜日うちに招待されたらしいな、ばあさんからお前の住んでる住所教えろつて連絡きたぞ。」

「そ…そうなんですよー。断ろうと思つてたんですけど、そんな事はさむ暇もなく決まつてたんです。」

「ははっ、あの人らしい。で？行くんだろ？」

「本当は遠慮したいところですけどね。」

「あれー？神崎ちゃん、まだいたの？早く帰んな。」

先生と話していると、後ろから早乙女先生の声がしたので、振り返って早乙女先生を見ると、プリントを作っていたのだろう、沢山のプリントがその手に積まれていた。

「早乙女先生。いっぱいプリント持ってますね。重くないですか？半分持ちましようか。」

「いやいやいや、神崎ちゃん、女の子なんだから重いもの持ちっちゃ駄目だよ。これは、遠藤先生に持ってもらうからいいよ。」

「は？なんで俺が。」

「いいじゃないですかー！これかなり重いんですよ、俺落としちゃいますって。ね？遠藤先生、助けて？」

「あほか。自分で運べ。」

「一も二も無く断った遠藤先生に、早乙女先生は冷たいねー？と私に笑いかけている。」

「ていうか、神崎お前本当に早く帰らないと暗くなるぞ、だいたいなんでこんな時間まで残ってるんだ。」

「綾乃と勉強してたんです。日本史ヤバイし…。あ、綾乃は綾乃で英語勉強して瀕死状態ですよ。」

「来週だもんね、テスト。なに？神崎ちゃん、日本史駄目なの？」

「毎回赤点ギリギリだ。」

「なんでそんなことバラすんですかー！？先生！忘れてください！
！お願いしますー！！」

なんだって、そんな恥ずかしい事を言うかな！！思わず遠藤先生を睨んだ。と言っても先生は全く気にしていない様子だけど。
その態度が更にムカつく。

「んー？なかなか忘れられないかも。あ、じゃあさ、忘れたら神崎ちゃん、来週の土曜日俺とデートしてよ。」

「あ、無理です。」

だってその日は珠緒さんと約束あるし。

そう言わなかったけれど、何故か早乙女先生はがっくり肩を落としているように見える。どうしたのかな、あ、プリント重いとか？

「先生？プリント重いんだったら、やっぱり私が…。」

「いや、俺が持つ。おい、早乙女、さっさと来い、行くぞ。じゃあな、気を付けて帰れよ。」

「あ、はい。じゃあ遠藤先生、早乙女先生さよなら。」

「ああ。」

「…うん…。気を付けて帰ってね、神崎ちゃん…。」

なんだかいきなり元気が無くなった早乙女先生と、それを面白そうにみている遠藤先生を不思議に思いながら、綾乃の待つ教室へ戻って、イチゴオレを渡して、帰り支度をして、それから二人で学校を後にした。

第二十九話（後書き）

早乙女悠生撃沈。 ……か？！

第29・5話・悠生（前書き）

早乙女先生視点。

第29・5話：悠生

長い黒髪をサラサラと背中に流しながら去っていく、俺が好きな子を見送って、隣にいる男を見る。

ニヤニヤと人の悪そうな笑みを浮かべているその人は、俺の先輩に当たる先生で、恐ろしく顔が調っている。今はその顔に浮かぶソレに腹が立つが。

「愉しそうですね、遠藤先生。」

「いや？そんな事ないけど？」

「良いですよ、笑ってくれた方が楽なんですけど！」

そう俺が言うと、遠藤先生は「プリントよこせ」と俺が抱えていたプリントを半分自分の手へ移動させ、さっさと行ってしまおうとしていたので慌てて追いかけた。

「はあー、やつぱ彼氏いるんですかねー、神崎ちゃん。あんな可愛いのにいないのはおかしいかあ…。」

「いや、多分いないと思うぞ。」

「うっそ、マジですか！？その情報どこから！？遠藤先生教えて！」

「うるさいな。ここ学校なんだぞ、おおっぴらにそんなデカイ声で

話すなよ。目つけられたら教師辞めなきゃいけないってでもいいのか、お前。」

全くその通りの言葉にぐうの音も出ず、再びため息を付いた。

プリントを職員室まで運び終えた俺は、ダメ元で遠藤先生を飲みに誘ってみようと思い、声をかけようとした。

だけどその時、あいにく、遠藤先生に家庭科の有紗先生が先に声をかけていた。何かを話しているようだが、遠くにいたので聞こえない。

しかし、あの二人は画になるなあー。

有紗先生はこの学校のマドンナ的存在で、生徒からの人気は勿論、教師内でもかなり評判がいい。

モデルのようなスタイルと美人と言って間違いない顔をしているのも相まって、憧れている先生方もかなりいるらしい。

学生時代はミスキャンパスにもなったと他の先生が教えてくれた。

だけど、俺興味ないんだよねえ。

なんて言うか、彼女から感じる違和感っていうのが妙に気になる。

それに、俺は神崎ちゃん好きだし。

話が終わったらしい二人は、遠藤先生が職員室に残り、有紗先生は帰ったようなので、改めて遠藤先生に声をかけた。

「遠藤先生、今日暇ですか？飯でも食いに行きませんか？」

「別にいいけど。じゃあお前の奢りな。」

「ぐっ……。わかりました。居酒屋でいいですよね。」

「ああ。」

そして、居酒屋に着くと早速ビールと簡単なツマミを頼んで、二人でささやかに乾杯した。

「じゃあ、お疲れ様でした。」

「ああ、お疲れ。」

カチンとグラスを合わせ、ビールを半分くらいまで飲み干す。枝豆を摘みながら、知りたかったことを単刀直入に聞いてみることにした。

222

「遠藤先生、何で神崎ちゃんに彼氏いないって断言したんですか？」

既にビールを飲み干した先生は、既に二杯目に入っている。

「お前、まだ言ってるのか？本当に好きなんだな、神崎の事。」

「勿論ですよ！！俺、はつきり言っただ目惚れなんですよね、神崎ちゃん。でも、英語担当するようになって、いろいろ話すじゃないですかー。したら、超可愛いんですもん！！ああ、マジ付き合いた

い！！だけど、神崎ちゃん、天然なんですよね。」

「天然？」

「あれ？遠藤先生知りませんか？彼女、入学してから同学年から二、三年年に致るまで結構告白されてるみたいなんですけど、それ全部断ってるらしいですよ。しかも、告白を告白って取ってもらえなかったみたいで…。『またまた。何からかってるんですかー』って言われて、全員玉砕みたいですよ。まあ、それが効をそうしたのか最近は告白されるのが少なくなっただけですけれどね。」

「へえ…。それで誰とも付き合っていないわけか。でも、よくそれで皆引き下がったな。根性無くないか？」

「ああ、まあ確かに。でも生徒内で、生徒会が圧力かけてるっていう噂もありますけど。」

「生徒会？なんであいつらが？」

「生徒会長の龍前寺、狙ってるらしいです。」

りゅうぜんじかける
龍前寺翔。うちの学校の生徒会長にして、現理事長の息子。

顔も勉強もスポーツもなんでも出来る、スーパー高校生。今は二年だが、聞くところによると入学した頃から生徒会長を務めているらしい。

「ねえ遠藤先生、龍前寺って一年の時から会長してるんですよね？」

「そう。入学して、一ヶ月も経たないうちに生徒会長になったんだよ。最初の内は、理事長の孫だからだろと思っただけど、案外予想は外れたみたいだな。あいつはよくやってる。」

「カリスマ性ありますもんねえ。」

そう言っただけ、目の前には焼酎を呑んだ。大分酔いが回っているが、まだまだ大丈夫だろう。

遠藤先生は、酒が強いらしく、全く顔が変わらない。それが少し羨ましい。

「だけど、龍前寺かー。高校生には勝てないかもなあ。神崎ちゃんも年近い方がいいだろうし。」

「お前、いくつだっけ。二十四？」

「惜しい！二十三です。七歳差って結構デカイ。」

「ふーん、いいんじゃないか。別に。お前、本気で神崎好きなんだろう？年の差って関係ないんじゃないのか？」

妙に背中を押してくれる遠藤先生が神のように見えてきた。そっぴりだな、愛があれば七歳差なんて乗り越えられる！！

「そうですよね、遠藤先生！！ありがとうございます！！俺、頑張ります！！ついでに、これから先生の事、亨さんって呼びます！！

あ、亨さん、俺の事は悠生でいいですから。」

「なんでいきなり名前…別にいいけど…。まあ、頑張れ、悠生。」

「はい！頑張ります！！」

鼻息を荒くして意気込む俺を見ていた亨さんが「ま、あの家族に太刀打ち出来ればな」と呟いたのは、俺には都合よく聞こえなかった。

第29・5話…悠生（後書き）

あけましておめでとございませう。今年一年、なるべく週2〜3更新を目指していきますんで、よろしくお願ひします。

第30話

『ねえ、亨。唯さんの住んでる住所を教えてくださいな。』

「…は？」

テスト問題を作っている最中に祖母から電話があったので、出てみたら、開口一番これだ。

一体どこをどうやったたら、神崎の住所なんてものを知りたがるのか…。俺には非常に謎だ。

「あの、おばあ様、話が見えないんですが…。」

『んもう、あなたは唯さんの住所を教えてくださいなさい。ほら、ちやつちやと言いなさい。』

ちやつちやとじゃねえ！

と怒鳴りたい衝動を、意志の力でなんとか押さえつけ、仕方がないので、神崎が住んでいるマンションの住所を教えることにする。
一通り聞いた祖母は、いかにも楽しみでしようがないと言った感じで、『ありがとう、じゃあね』と言い残して、そのまま電話を切った。

本来ならば、生徒の住所は個人情報のあるので第三者には教えるわけにはいかないのだが、祖母と神崎は知り合いなのだからまあいいやと思って、そのままマンションの住所を教えたのだ。

一体何をするつもりなのか。
俄にわかに感じる嫌な予感をため息を付いて押しやり、テスト問題を
作る事に専念した。

次の日の夜、珍しく翼たすくから電話がかかってきたので、出てみると、
翼は面白いおもちゃでも見つけたような弾んだ声をしていた。

『おばあ様が唯ちゃんを来週の土曜にうちへ招待したらしいよ。あ
れは相当気にいっちゃったみたいだね。』

「…マジかよ…。」

思わず唖あって、頭を抱えてしまう。

人を招くのが好きな祖母は、昔からいろいろな人を家に連れてきて
はパーティーやらをしていたが、まさか俺の教え子まで招かれると
は思ってもみない事だ。

『亨、おばあ様に唯ちゃんの住所聞かれただろ？』

「ああ、昨日な。そんな事なら教えなかったんだが…。全く何考え
てるんだか…。」

『まあまあ。おばあ様は、泊まりでも構わないのにねえって言うつ
たんだぞ。それを考えたら、あの人が何考えてるのかとかさっぱり
だろ？』

「…頭痛くなってきた…」

本格的に祖母に気にいられ出した神崎をどうするべきか…。

あまりに生徒と近すぎるのはヤバすぎる。かと言って、無碍にする
と祖母がうるさい。あれこれ考えていると、翼が一段低い声で俺に
話しかけた。

『なあ、亨。有紗、どうしてる。』

問いかけられた内容に一瞬眉をひそめた。
だが、何事もなかったかのように翼に返す。

「どうって？別に変わりないけど。何？今更未練あるとか言わない
よな？」

『はっ！バカ言つなよ亨。僕は有紗と別れてもう何年も経ってる。
僕の事じゃなく、お前だよ。お前。』

「俺？」

『お前、有紗と寝てるだろ。』

すうっと目を細めた。

流石は双子。あの女とヤツてる事はわかってたか。まあ、バレても
大した影響はないが。

「ふん、だったら？お前ら、別れてるんだろ？だったら、別にそこまでつべこべ言われる筋合いないんだが。」

『…あの女に本気になるなよ、亨。』

「別に本気じゃない。有紗だってそれはわかってる。割り切った関係、それだけだ。」

『…それだけならいいんだがな…。』

「やけに歯切れが悪いな。何だよ、はっきり言ってくれないか。」

いまいち的を得ない会話にイライラしてきた頃に、ようやく翼は重い口を開いた。

その内容は酷く俺を驚かせたし、逆に、ああやっぱりな。と納得させるものでもあったのだが。

『気をつけるよ、亨。』

「ははっ、俺はそんなに間抜けじゃないがな。」

『ま、そうだな。僕が気にし過ぎただけだろ。それより、唯ちゃんだな。残念ながら僕は仕事だから居られないんだよねー。お前は来なくていいのか？』

「はあ？なんで俺が。」

『いいのカー？多分母さんも一緒になつて、唯ちゃんいじくり回すぞ、きつと。賭けてもいい。絶対母さんの好み、ド真ん中！』

……。
容易に想像出来る光景に、更に頭痛が酷くなつた気がする。

えんどうみやび
遠藤雅。

俺達の母であり、現遠藤グループ社長夫人。着物が似合う和風美人で、おっとりとした物腰に穏やかな性格で、祖母と非常に仲がいい。だが見かけに反して、超が付くほどの少女趣味の持ち主だ。ロココ調の調度品に、フリルたっぷりの洋服。ピンクが大好きで、気が付けば、我が家は少女趣味が満遍なく散りばめられた屋敷へと変貌を遂げた。

それには流石に、祖父と父からストップがかかり、現在は落ち着いたものだが、趣味の部屋と称した母の私室は見事なまでのお姫様仕様なのである。

そんな母と祖母は、少女趣味と運命論信者。気が合わないわけがない。おかげで、二人仲良く宝塚や恋愛映画を観に行ったりしている。最近の流行りは、例に漏れず韓流だ。

何とかつてという俳優がお気に入りらしく、最近二人で韓国旅行へ行つてきた。

土産を手渡された俺は、何時間もその話に付き合わされ、祖父から同情の眼差しを送られていた。きつと、祖父も何時間も同じ話を聞かされたのであろう。視線が合った俺と祖父は、仕方ないよな。と暗黙の了解とばかりにただひたすら、その拷問のような時間を過ごしたのである。

その少女趣味全開の母が、小さな童顔の美少女を見たらどうなるのか…。

十中八九、私室のクローゼットの中に飾ってあるフリルたっぷりのドレスを着せて、着せかえ人形にするに決まってる。

しかも、俺は何気に知っている。あの魔のピンクとフリルの間には、これまたピンクとフリルたっぷりのメイド服があることも。

そして絶対言わせるに決まってる。

もちろん、あのセリフを…。

その後は祖母も入れて、三人仲良く宝塚を観に行くかもしれない。いや、別にいいんだが。いいんだが…。

「…俺…なんだか寒気がする…。」

『…うーん…僕も唯ちゃんが不憫に感じてきたな…。お前もいろいろ大変だな、亨。ま、頑張つて!!じゃあな。』

陽気に電話を切った翼と入れ代わりたと思ったのは、今日を置いて他にはない。

第30話（後書き）

双子の母の設定を考えてる時、すごく楽しかったです。雅さん、早く出してあげたい。

第31話

テスト問題の作成も終わり、後は来週行われるテスト本番まで一息付けられる。

久しぶりに週末はのんびり出来るなど、そんな事をつらつら考えながら準備室のドアを開けると、廊下を歩いている神崎にばったり会った。

彼女の手にはパックのオレンジジュースとイチゴオレが握られている。なんとなく神崎はイチゴオレのイメージがあるのだが。

「まだいたのか。早く帰った方がいいぞ、今暗くなるのが早いからな。」

その声をかけてやると、神崎は外を見てあらーっという抜けた表情をした。こんな表情はまるで子供だ。

いや、実際子供なんだが。

そんな彼女に来週、祖母に誘われて家に招待されたんだと聞いてみると、相当困ったような顔をして、俺に答えた。

「そ…そうなんですよー。断ろうと思ってたんですけど、そんな事はさむ暇もなく決まってたんです。」

「ははっ、あの人らしい。で？行くんだろ？」

「本当は遠慮したいところですけどね。」

意外に分別は弁えてわかまいるらしい。

しかし、やはり祖母は強引に決めてたのか。あの人はそんなところが多々ある。神崎が強引な祖母に困っている光景がありありと浮かんで思わず笑っていた時、後ろから声が掛かったので彼女の後方を見ると、プリントを山のように抱えた早乙女が、嬉しそうに神崎に話しかけていた。

持っていたプリントの量はそれなりに多い。抱えきれないほどではないが、結構重いだらう。

それに気付いた神崎が、持ちましようかと聞いたが、早乙女は何故か俺を指名してきたので一喝した後、改めて神崎に帰るように促した。今週は今日で学校は終わりとは言え、テスト週間。放課後に遅く残るのは禁止されている。

残っている理由を聞くと、やはりテスト勉強をしていた様だ。

範囲が広めな日本史を、真面目に勉強しているのは素直に感心する。だが、林の英語の状態もこいつと同じだとは…。類友とはよく言ったものだ。

早乙女に彼女の日本史の状況を話すと、神崎は顔を真っ赤にして忘れてくれと懇願していた。

「んー？なかなか忘れられないかも。あ、じゃあさ、忘れたら神崎ちゃん、来週の土曜日俺とデートしてよ。」

「あ、無理です。」

ぶっ！！

即答かよ、おい。

吹き出しそうになるのをなんとか堪え、しょんぼりしている早乙女の持っているプリントを俺が持つことを伝え、ようやく神崎は帰って行った。

まあ、来週の土曜日とはタイミングが悪かったな、早乙女。

「愉しそうですね、遠藤先生。」

ぶすつとした早乙女が俺に軽く当たってきた。八つ当たりされては困るのだが

「ああ嬉しいさ。お前が振られた神崎のデートの相手はうちの祖母だからな。」

とはまさか言えないので、こいつの持っていたプリントを半分取り、さっさと歩き出す。

慌てて付いて来た早乙女は、神崎に彼氏いるのかとかぐちぐち言っているので、多分ないだろうと答えておいた。

詳しく聞きたがる早乙女を軽く叱って、職員室へ行くとそこには有紗があたかも偶然を装って俺に話しかけてきた。

「遠藤先生、今日はもう終わりですか？」

「ええ、まあ。」

昨日、翼から聞いた話が脳裏をよぎる。

『気をつけるよ、亨。』

有紗は、期末テスト後の補習授業についての相談があるのかなんとかいふ内容の話だったが、要約すれば『今日会えない？』って事だ。特に予定はないが、昨日の今日だ、遠慮したいところでもある。それにそろそろ、この関係にも終止符を打つタイミングなのかもしれない。

さがいありひ
相良有紗。

俺達を通った学園の中等部からの後輩で、昔から美人でスタイルがよく、入学した時から注目の的だった。そして、高校時代の翼の彼女だ。

と言っても、僅か半年で有紗が大学生と二股をかけていたのが発覚して、翼と別れた。

それでも翼に未練があったのか、ちよくちよく付きまとっていたように思える。

妙な事に翼は有紗と別れた後、新しい彼女が出来ても続かなかった。長くて1ヶ月、短い時は3日も保たなかった。それから俺達と有紗は大学が分かれば、翼もそこで今付き合っている彼女とようやく落ち着いた。

翼は俺と違って、付き合っている彼女だけを見ている。有紗に浮気されたから尚更、女を見る目が厳しくなっただけはずなのに、どうして

が続かないのを不思議に思っていたのだが、それがようやく、翼の言葉で納得がいった。

『あいつさ、僕の彼女にかなり陰湿な嫌がらせしてたみたいなんだ。同じ学園の彼女には、女子を巻き込んで苛めたり、他校の場合にはその知り合いにあることないこと吹き込んで噂を立てたり。挙げ句の果てに、男に襲われそうになった子もいた。すんでのところで、僕が見つけて事なきを得たけどね。』

どうやらあの女は、かなりえげつない事をしたようだ。

彼女が襲われた一件で激怒した翼は、有紗に詰め寄って二度と自分に近づくなと言ったようだが、あの女はすつとぼけて、最後には泣き出してしまった。

完璧、嘘泣きだな…。

そう思ったのは翼らしい。それから、翼は有紗を徹底的に無視し、大学も彼女の学力では厳しい所へ進んで、今ようやく平穩を得たようだ。

翼に対する執着は、俺も薄々気付いていた。大体、声をかけてきたのも有紗だった。

翼と有紗が付き合っていた事を知っていながら、自分から誘ってきた。

身体だけの関係よと言って。

その言葉は正しく、有紗は理想的なセフレだと思う。

ただ、やはり俺と翼を重ねている。俺を見ながら、翼を見ているのだ。そこに気づかぬ程、俺は経験が浅いわけではない。

「いや、今日は用事があるので無理です。」

「あら…、そうですか…。じゃあまた今度相談に乗って下さいね。じゃあ、お先に失礼します。」

「お疲れ様でした。」

口からサラリと出任せを言い、有紗の誘いを断った。

彼女は如何にも残念そうに、軽くうなだれながら帰って行ったが、あれは演技だ。あの女は、あんなにしおらしくはない。

美しいのは外見だけ。

性格はもの凄く悪い。

学校の皆は上手くあいつの表面上の仮面に騙されているようだが、仮面を外したあいつは、生徒や同僚教師を相当嫌っている。

不満や悪口を何度も聞いている俺には、日頃の笑みなど通用しない。

冷めた目で有紗の出て行った職員室のドアを一瞥して、机に置かれ

た資料を読んでいると、早乙女から飯を食いに行かないかと誘われた。

こいつに誘われたのは何回かあるが、何故だかいつも俺が奢っていたので、今日はこいつに奢らせる事にして、有紗にしたのと真逆の答えを、つまり行くと答えた。

第31話（後書き）

有紗のプロフはここにします。

サガラアリス
相良有紗

27歳

唯が通う高校の家庭科教師。

翼の元カノ。自身の二股が原因で破局。現在は、亨とセフレ関係。女子大のミスキャンパスだった美貌とスタイル、教え方も丁寧で、生徒の立場で物を考えてくれると評判で、生徒や同僚教師に憧れられている。

しかし、性格は利己的で、自己中。

翼の彼女たちに嫌がらせをしていて、別れさせていた。

第32話

「じゃあ、お疲れ様でした。」

「ああ、お疲れ。」

カチリとグラスを合わせて、ビールをあおる。一緒にいる早乙女は、いかにも美味そうに呑んでいる。

枝豆を摘んでいる早乙女は、未だに神崎に彼氏がいるのかしつこく聞いてきた。

一杯目を飲み干して、二杯目に手を付けた。

断言って言ってもな。桐生さんと、美奈の様子から察するに、神崎に彼氏の『か』の字もないことは容易に想像できる。義妹とは言え、あれだけシスコンな兄姉だ。男は引く。完璧引く。

おまけに、あの二人は伝説的元モデルと現トップモデルだ、隣に立つことすら憚^{はばか}られるほどの美貌は、二人並ぶと凄みさえ感じる。

…それを考えると、神崎ってすげえな。

あの二人に囲まれてもビクともしないのか…。いや、近くに居すぎで、美形に鈍いのかもしれない。

そういえば、神崎は俺の容姿に感心を示していないようだ。

自惚れではないが、女生徒やら同僚教師からのその手の視線はすぐわかる。それはそれで鬱陶しいのだが、神崎の視線にそれを感じた事はない。

「お前そんなに神崎が好きなのか。」

と聞くと、早乙女はウザい位に話に食いついた。

「一目惚れだの、超可愛いだの…。」

うぜえ…。うんざりしながら、早乙女が頬を染めて神崎に恋い焦がれている様を見ていると、発言の中に生徒会が出てきたことに驚いた。

「龍前寺、狙ってるらしいです。」

龍前寺って…あのカリスマ生徒会長が？

奴は入学したての頃から存在感を発揮し、一年生ながらもわずか一ヶ月も経たずに生徒会長に就任した。

顔良し、学業良し、スポーツ良し。おまけに現理事長の息子。更に性格までいい。そこまで行くと出来過ぎて胡散臭いが、力を入れるところと抜くところの境目をよく見ているのだと俺は思う。

事実、俺と龍前寺は年が離れていながらも、何故か馬が合う。多分考え方が同じなのだろう。あいつも案外損な性格をしているのかもしれないと自嘲する。

予想はしていたが、やはり神崎はモテるらしい。

ま、頑張ってくれよと早乙女に軽くメールを送ると、えらく感激している。なぜか名前で呼ばれる破目になったが、まあいいか。

「そつえば、亨さんってなんで教師やってるんですか？遠藤の会社にだって入れたでしょ？」

「あ？なんでいきなりそんな話になるんだ。つか、お前に関係ないだろ。」

「ええー！？俺と亨さんの仲じゃないですかあ！教えて下さいよー！！」

「声でけえんだよ、お前！しかも、俺とお前の仲って何だよ！気持ち悪い事言っんじゃねえ！」

「えー！？亨さん、冷たい！！俺泣いちゃいますよ？良いんですか、号泣しますよ！？」

「勝手に泣け！！」

焼酎のロックを一気した。焼け付く喉ごしが心地よい。

泣き真似をしている悠生は、これまた話題を変えてこようとしたが、これ以上騒がれるのは店に迷惑がかかるので、仕方がないので少しだけ教えることにした。

「俺が人生の目標にしてる人がいるんだよ。その人は教師じゃないけど、もしも違う職業を選ぶとしたら教師になるって言った。その影響だろうな。」

悠生は目をぱちくりさせて、俺を凝視している。

多分、もっと違う事を想像していたのだろう。例えば、親との確執とか…。あいにく、親とも祖父母とも仲は良好だ。

「何だ、そんなに意外だったのか？」

「え？あ、はい。意外…ってというか…。想像と違ってたって言うか…。」

「何？父親と仲悪かったりはしないぞ、俺。」

くつくつ笑って、つまみを摘んだ。

「だけど、その人って亨さんにとって相当影響与えたんですね。今どうしてるんですか？」

「俺が十一の時、二年アメリカにいた時知り合った人だからな。多分、今もシカゴでドクターをしていると思う。」

「ドクター…？医者ですか？」

「ああ。外傷外科のドクターだ。」

「へ…。再会はしたんですか、その人と。あ、亨さん、タバコ吸ってもいいですか？」

「ああ、どうぞ。」

そう言うと、悠生はタバコに火を付けて煙を吸い込んで、軽く咳き

込んだ。

「あれ、そう言えば亨さんってタバコ吸わないんですか？なんか吸いそうなイメージあるのに。」

「吸わないわけじゃない。俺、吸う時限られてるからな。」

「へえ。どんな時ですか、それって。」

「ヤツた後。」

ブツ！！

「きつたねんだよ、お前！！」

飲んでいた焼酎を吹き出した悠生の頭を思いつ切り叩いた。叩かれた悠生は、すいません、すいませんと謝りながら、真っ赤な顔で汚したテーブルをお絞りで拭いている。

それを軽く睨んで、自分は新しい酒を頼んだ。

「悠生、お前まさか「なっ！違いますよ！！」そうか。」

「つーか、亨さん、いきなりそんな事言わないで下さいよ。俺びっくりするじゃないですか！！」

知るかと一蹴して、運ばれてきた新しい酒を飲んだ。さっきのロックと違う種類を頼んだので、口辺りの違うそれを楽しむ。

「興味本位で聞きますけど、亨さんって彼女いるんですか？」

「いない。」

「うっそ、マジで？亨さんぐらいなら、より取り見取りでしょ？そう言えば、学校で噂になってる有紗先生とはどうなんですか。」

「お前、学校の噂詳しいのな。神崎といい、相良といい…。相良とはなんでもないけど。」

「いやー、聞こえてくる噂って結構面白いのもあるんですよ、これが。しかし、そうなのか。有紗先生と付きあってないんですねー。さっき二人でいるの見て、画になるなーって思ってたんですけどね。そっかー。じゃあ言っちゃってもいいか。」

「何を？」

「俺、有紗先生苦手なんですよね。なんて言うか、違和感あるんですよ、あの人。上手く言えなんですけど…、なんだろうな、あれ、もしかして俺バカにされてる？みたいな感じが本当になんか瞬間感じるんですよ。」

こいつは意外にするどい。

そう、あの女は得意だというフランス語で平気で悪態を付いたりする。だが、フランス語がわかる生徒や、教師がいない為に『あな

た達を褒めた』内容のフランス語だと周囲には言っている。実際は真逆なのだ。

「へー…。相良に関心無いやつも珍しいな。」

「え？だって俺には神崎ちゃんいますし！！ああ、やっぱり神崎ちゃんの彼氏になりたー！！！！い！！！！」

「結局そこに戻るのか…。」

うんざりしながら、既に酔っ払っている悠生を眺めた。

第32話（後書き）

悠生、酒乱です。

第33話

奢られるはずが、酔っ払った悠生を解放して逆に奢る破目に。
やたらと絡もうとするこいつをタクシーに押し込んで、自分も代行車でマンションへ帰った。

部屋に帰って、真っ直ぐ冷蔵庫へ向かい、水を取り出し一口飲んだ。久しぶりにドクターの事を誰かに話した気がする。あの人の事は翼たすくしか知らない。

俺達は十一歳の時、父の仕事の関係で二年間アメリカのシカゴに住んでいた。

当時、日本から遠く離れたアメリカに住むことに納得していなかった俺は、自宅近くの公園でブスツと座っていた。その時声をかけてきたのが、ドクターだった。

「君、日本人だよな？どうしたの、こんな所で。親は？」

「…おじさん、誰…？」

「おじっ…！…俺？俺はあそこの病院で医者してるんだ。今、コーヒー買いに出て来た所。あ、ちょっと待ってな。」

そう言って、手術着の上に白衣を着たその人は、コーヒーを2つ持

ってまた俺の所に戻って来た。

「はい、どうぞ。コーヒーでいいかな？」

「…ありがとうございます…。」

温かいコーヒーを受け取り、一口飲んだ。日本の物とは違うそれに顔をしかめる。

隣を見ると医者と名乗ったその人は、コーヒーを飲んで一息付いていた。

俺の視線に気付いた彼は、ああと破顔して俺に向き直った。

「そういえば、君の名前聞くの忘れたな。名前は？」

「…知らない人に言えるわけないだろ…。」

「うわあ、君は口悪いねえ。今から直しておきなよ。大人になったら苦労するから。とは言え、君の言うことも一理あるな。俺は千歳よろしくな。」

「亨…です。」

「亨か。いい名前だな。」

そう言って、俺の頭にぼんと手を置いた。

大きな掌だった。少しだけ消毒液の匂いがする、温かい掌。

「で？亨はなんでここに一人でいるの？観光でもしてて迷子になった？」

ふわりと笑んだ先生は、また一口コーヒーを飲んだ。

口を噤んだ俺が何かを話すことはなかったが、彼は黙って俺の隣に座っていたまま、それ以上聞こうとはしない。

沈黙が俺達を包んでいた時、ピーピーと電子音が鳴った。先生はポケットからポケベルを取り出して、顔を引き締めて小さな画面を凝視している。

「…どうしたんですか？」

「ああ、病院から呼び出した。近くで追突事故があったらしい。俺は行くけど、亨はどうする？迷子だったら警察が来るまで、病院で待つこともできるけど。」

「いや、俺この辺に住んでるんで、大丈夫です。」

「そうなのか。じゃあ、俺病院に戻るから。気を付けて帰れよ。」

「はい。あ、コーヒーごちそう様でした。」

「いいえー。今度病院へ遊びにおいで。って、病院に遊びに来るって言うのもおかしい方か。まあ、いいか。千歳って言えば大概は通じるから。おっと、ヤバイ、サイレン鳴ってるな。じゃあな！」

ぺこりと頭を下げ、お礼をした。
先生は既に病院へ走って向かっている。それを見ながら、俺は公園を後にし自宅へと戻った。

それから俺は頻繁に先生のいる病院へ遊びに行った。
英語ばかりの周囲に嫌気がさしていたのも手伝って、家族以外の日本語は当時の俺には貴重な酸素みたいなものだ。そんな俺に多分、先生は気付いていたと思う。俺との会話は常に日本語だったから。先生の仕事ぶりは近くで見ていると凄さがわかった。

「亨、こつち来るな！あつちで大人しく待つてろ！！」

そんな風に言う時の先生は、必死の形相で患者を救おうとしているのがありありとわかる。ケープもグローブも血まみれで、看護師や、同じ医師に早口の英語でいろいろ指示している。
ばたばたしている処置室の前で黙って立っていると、いつの間にか隣には翼がいた。

以前、俺を探していた翼は、先生と一緒にいる俺を見て目を丸くしていた。いつの間に病院の先生なんかと仲良くなっただんだと思っていたのだろう、いろいろ俺と先生に聞いた拳句、先生に会いに行くと言つと、僕も一緒に行くと言つて聞かなかつた。
以来、俺達は先生を訪ねて病院に来ているので、周りのスタッフとも顔見知りになっていた。

「先生、大丈夫かな。亨は、あの人助かると思う？」

「どうだろうな…。血いっぱい出てたし。駄目なんじゃない？」

忙しそうな先生に、今日は帰ると伝言を残してその日は翼と帰った。次の日、翼と一緒に病院に行こうと近くを通っていると、先生が奥さんらしい人と二人で歩いていた。俺達に気付いた先生は、笑顔で手を振って、隣の女性と一緒に俺達の方へ寄ってきたので、俺達も走った。

「先生、こんにちは。」

「こんにちは。今日は翼も一緒か。昨日は悪かったな、相手してやれなくて。」

「いいえ、いいんです。それより、先生、あの人どうなったんですか？やっぱりダメだった？」

「助かったよ。一時は危なかったんだけどね、なんとか持ちなおした。今はICUにいるけど、近いうちに一般病棟へ移る事になるだろう。」

正直、俺も翼もダメだろうと思っていたので、驚いて先生を見てみると、隣にいた女性が声をたてて笑った。よく見ると、お腹が大きい。

「千歳君、私をこの子達に紹介してくれないの？冷たいわね、ねえ

「？」

そう言つて、彼女はイタズラっぽく微笑んで俺達を見ている。それを見た先生は、しまったなと言いながら彼女の肩に手を置いて

「翼、亨。紹介するよ。俺の奥さん、祥子だ。祥子、この子達は「翼君に、亨君ね」その通り。」

と簡単に紹介したので、俺達も頭を下げた。祥子さんは妊娠中で、もうすぐ産まれるの、とお腹を撫でてとても幸せそうな顔をしていた。先生もそれを見て微笑んだ。

「よかつたら、触ってみる？今日はこの子、良く動くのよ。」

「いいんですか？」

「どうぞ。ほら、亨君も遠慮しないで。」

言われて、二人で祥子さんのお腹に恐る恐る手を当てた。その時、どんっ！と手のひらに衝撃が走る。翼を顔を見合わせ、すぐに自分の手を見た。

確かに感じる、その衝撃。

「ほら、今日はとっても元気なの。」

「すごい！！」

「あ、また動いた！！」

その確かに感じる衝撃に感動していた、一カ月後。

祥子さんは、無事小さな女の子を出産した。千歳さんは、その女の子に『唯』と名前を付けた。

なんでその名前なの？と聞いた事があった。先生は、いつものようにふわつと笑ったあと、こう答えた。

「俺が愛してる祥子が産んでくれた、俺の唯一無二の大切な子供だから。だから『唯』。」

俺と翼は、その子に夢中になった。構って、遊んで、笑って。

唯はとても可愛い。泣いてるときも、寝てるときも。何よりも笑った顔が一番可愛い。

唯が初めて自分の名前を呼んでくれた時は、本当に嬉しかった。

「とー、りゅ？」

「とーおーる。亨だよ、唯。」

「とーりゅ。」

「何回聞いても『とーりゅ』だな。じゃあ、唯、たすく。たーすーく。」

「たしゅ、く？」

「僕の方近くない？なあ、亨。」

「いや、お前も違うだろ。な、唯？」

「とー…る。」

びつくりして唯を見た。ニコニコしながら、俺の膝によじ登って抱き付いてきたので、抱えなおして抱っこしてやった。翼は必死になつて自分の名前を呼ばせようとしているが、何度聞いても『たうくにしか聞こえない。なんて言うか、優越感…。そして、感動。何よりも単純に嬉しかった。

唯を囲んだ日常。先生は相変わらず命の現場で働いて、祥子さんは唯を大切に育てている。

彼ら三人の幸せそうな顔を、今も、俺は覚えている。

唯がハイハイを卒業して、一人で歩けるようになった頃俺達は日本に戻る事になった。

二年が経ってアメリカにも慣れ、当初持っていた疎外感も感じなくなっていたが、やはりふとした時に日本に帰りたいたいと感じていたのも事実で。

帰国する事に異存は無かった。だけど、唯と離れるのが寂しくて。翼も一緒だったと思う。帰国一週間前から、俺達は時間の許す限り

唯と一緒に過ごした。

「たしゆく。」

「最後まで僕の名前呼べないままで終われるか！唯、僕の名前ちゃんと呼んで。たーすく。たすく。」

「たー、しゅー、く。」

「しゅじゃないよ。唯。」

「とーる、たしゆくいじめる。」

「そうだな、唯。翼は唯をいじめてるよなー？」

「うん。いじめるー。」

「いじめてないだろー！！」

「やー、たしゆく、こわい。とーる、たしゆくこわい。」

よたよたと覚束ない足取りで、俺の前まで歩いて来て、そのまま大人しく抱っこされている唯と離れるのは本当に辛い。祥子さんが丁寧に揃えている、長くて細い髪を梳きながら撫でてやると、にこーっと唯が笑って、俺にしがみ付く。それを見て、本当に心から愛しさが湧いてくる。

そのまま思った事を口にした。

「あー…。唯を日本に連れて行きたいな…。そう思わないか、翼。」
「そうだなー。せめて僕の名前ちゃんと呼べるようになるまででもいいから、一緒にいたいよね。」

「おいおい、聞き捨てならないな、ガキ共。悪いが、唯はまだ嫁には出さないぞ！ほら、おいで、唯。」

「おとーたん！」

唯は、するりと俺の腕から先生の腕に抱かれて嬉しそうにしている。その時、チリツと走った痛みはなんだったのか。

わかることがないまま、俺達は日本へ帰国した。結局最後まで、翼は『たしゆく』のままだった。

先生どうしてるだろう…。元気だろうか。祥子さんも元気してるかな。
唯もでかくなっただろうかな。

そう言えば…神崎も名前が『唯』だったな。

まさかそんながあるはずが無い。大体、先生はずっとアメリカにいてって言ってたし。あの『唯』もアメリカのハイスクールに通っているだろう。

なんだか、今夜は懐かしい夢が見れそうだ。
そんな事をつらつら考えながら、心地よい酔いも手伝って俺は眠り
に落ちた。

第33話（後書き）

次は唯視点に戻ります。

第三十四話

「…唯…生きてる…？」

綾乃の声が聞こえる。

だけど私は頭を上げることが出来ない。シャーペンを握りしめたまま、机に撃沈。

日本史…

終わった…。

いろんな意味で終わった。燃え尽きた。

まだ明日残ってる教科があるとか、そんなのはもう考えたくない。返ってくる答案用紙も見たくない。

ついでに、あの散々な解答を遠藤先生が採点する様を想像するだけで身震いが…。

「綾乃…帰ろっか…。」

「そうだね…。唯、元気出して、ね？明日で最終日だから、テスト終わったらどっか寄って帰ろうよ。」

「…うん…。」

「…唯…相当ダメだったんだね。どれ、問題用紙見せて。答え書い

てるでしょ?」

言われた通りに答えを書いた問題用紙を綾乃に渡した。

綾乃の顔色が見る見るうちに変わっていくのを、やっぱり…と半ば諦めの目で眺める。

「唯…帰ろつか…」

「…そうだね…。綾乃、明日は英語あるしね。大丈夫?」

「明日はあたしを慰めてよね。」

「ふふっ、わかった。」

なんか虚しい会話をして、学校を出ると、テストが終わって帰宅する生徒がたくさんいる。

電車で通学している私もその行列に並んで、電車に乗った。

綾乃は別の路線なので、駅で別れた。

「唯、この電車なの?」

「龍前寺会長。会長もこの電車なんですか?」

「そう、二駅先。唯は?」

「私は会長が降りる駅から一駅先です。結構近いのに、今まで会わ

ないのも不思議ですね。」

「時間が違うんだろうなあ。ほら、一応オレ生徒会長様だから。」

くすくす笑っている龍前寺会長だが、実はすごい人だって言うのは有名で。

一年生で生徒会長になっただけではなく、理事長の息子。おまけに何でも出来ちゃうスーパー高校生。と来れば、モテないはずはないけれど…。

「会長：まだ好きな人に振り向いてもらえないですか？」

「いやあ、なかなか厳しいねえ。彼女ガード堅くて大変。」

「年も離れてますしねえ…。」

「離れてるって言っても、十歳だし？オレ絶対落とす！」

「あはっ、すごい自信ですね。頑張ってくださいよ、会長。応援しますから！」

龍前寺会長が好きなのは、有紗先生だったりする。

私が入学する時に、私が『桐生』だと内緒にする代わりに、自分の相談にも乗るようにと交換条件を出された。

なんだか、パパとも密約があるらしいけど、二人ともそれは教えてくれない。

「そう？ありがとう。あ、そういえば、もうすぐ『カサブランカ』の新作コレクションだろ？親父さん、忙しいかな。」

「年明けて早々ですからねえ。どうしました？」

「母さんが観たいらしいんだよ、コレクション。チケット手に入りたいんだけど、親父さんに直で話つけた方がいいだろ？」

「あー…そうですねえ。関係者席がギリギリあるかもしれないですけど、どうだろう…。一応聞いてみましようか。何枚ですか？」

「マジで？マジありがたい！母さんと姉が行きたいって言ってたら、2枚かな。」

「わかりました。聞いてみますね。」

「あれ？唯は行かないの？」

「今年から行かないようにしようと思ってて…。」

驚いている会長を見て、苦笑。

私は今年はおろか、もう『カサブランカ』のコレクションを観ない事にしようと思っている。新作は楽しみだけど、マスコミ関係が集まる場所に出たくない。それは、実家を出た時、名字を『神崎』にした時に密かに考えていた事でもあった。

ただ、惜しいのはやはりそれが『カサブランカ』だからだ。

『カサブランカ』はパパがお母さんの為に作ったレーベルだと言っ

ても過言ではない。

お母さんが大好きだったカサブランカをそのままブランド名にしちやっただけ、パパのお母さんに対する溺愛っぷりが伺える。

それに、お父さんとお母さんのウェディングドレスが元となったブランドだ。

私はそのウェディングドレスの実物を見たことがない。お兄ちゃんとお姉ちゃんも無いと言っていたから、多分パパがどこかに保管していると思うのだけど…。

私が辛うじてそのウェディングドレスを知っているのは、残っているお父さん達の結婚式の写真を持っているから。お母さんのために作ったと言うそのドレスはともお母さんに似合っている。長いベールが更にそのドレスを神秘的に見せていて、とてもこの世の物とは思えない。

だけど、写真の中で幸せそうに微笑んでいる二人はもうこの世にいない。

「唯？」

「あれ、会長、降りる駅通り過ぎちゃいましたけど…」

「いや…大丈夫？」

「え…？何がですか？」

「…自分で気付いてないのか…。」

ちよつと怖い顔で私を見ている会長。どうしたんだろう。

「はー…仕方ない。送って行くよ。」

「ええええ…。別にいいですよ。会長だって明日テストなんですよ。勉強しなくていいんですか？」

「今頃やってるようじゃダメだろ。オレはそんな無計画に勉強しないから。」

「うわっ！さすが学年トップ！！言う事が違いますね。二年って明日の教科なんですか？」

「数学と化学、現代史。そっちは？」

「英語、家庭科、古典ですね。有紗先生来ますよ、会長。」

うりうりと腕で会長を突いて、反応を見ようと思ったけど、さすがにこっちの方が上手だった。ふんと鼻を鳴らしたただけだった。

電車を降りてマンションへ帰る途中、会長がおもむろに口を開いた。

「なあ、唯。お前やっぱり生徒会に入る気ないか？会計とか書記とかでいいんだけど。」

「まだ言ってるんですか？私、生徒会に入る気はないって何回言え
ばわかるんですか。ダメです。私、バイトあるんですから。」

「お前入ってくれるといろいろ楽なんだけどなー…。」

「諦め悪いですね、会長。」

「じゃなきゃ会長やってないって。お前ぐらいだよ、オレの誘い断
るなんて。」

「じゃあ貴重じゃないですか。大事にしてくださいね。」

「はいはい、お姫様。じゃなきゃ帝王に怒られるしね。」

「帝王？」

「いや、こっちの事。じゃあ、ここだな。ちゃんと勉強しろよー。」

「わかってますよ。じゃあありがとうございます。」

ぺこっと頭を下げて、会長が帰って行くのを見送って、マンション
のエントランスに入った。

第三十四話（後書き）

会長のプロフィールもここに。

リュウゼンジカケル
龍前寺翔 17歳

唯の通う高校の生徒会長であり、現理事長の息子。

顔良し、頭良し、運動神経良し、おまけに金持ち、性格良しのスーパー高校生。

入学から1ヶ月も経たない内に生徒会長に推薦された。カリスマ性があり、歴代会長の中で最も優れていると言う評判高い人。
有紗が好きで、落とそうと画策中。亨とは仲がいいらしい。

総一郎から、唯に近づく男を排除しろと厳命されている。

第三十五話

「それじゃあテストを返す。」

遂に来ちゃった…。

テストが返ってきてますよ、逃げたいですよ。いや、マジで。

私の出席番号は前から数えた方が早い。悲喜交々（ひきこもこも）の表情を浮かべながら呼ばれているクラスメイトを眺めていると、私の名前が呼ばれてしまった。

「神崎。」

「…はい…。」

のろのろと教卓の前まで進むと、先生が私にしか聞こえないように囁いた。

「お前再試だからな。」

…!!

いやああー!!

赤点!? 赤点なの!?

マリー…ごめんね。私、クリスマスにマリーに会えないよ…。ブツ
シュ・ド・ノエル食べたかったな…。

涙目で答案用紙を恐る恐る見る。ああ…バツばかりだ。点数が怖くて見れない…。

「今回赤点取った奴は、放課後補習か、冬休み返上で補習のどっちか選べる。だけどその前に、来週もう一度同じ問題で再試をやつて、それで今回の平均以下だったら補習組決定。ちなみにこのクラスの今回の平均は61点。もう少し頑張れよ、お前ら…。」

「範囲が広すぎるんですよ!」

「南北朝時代から江戸時代後期までって広すぎでしょー!」

なんかみんながいろいろ言ってるけど、もう私の頭の中には追試の二文字しかない。

ああ追試…頑張らないと…。

昼休みにパパとお兄ちゃんからメールが届いた。きつとテストの点数知りたいんだろうな。

【日本史の結果どうだった?】

【赤点取ってないよね、唯?】

ごめんなさい。赤点です。

怖くて見れなかった点数を、綾乃が勢いよくめくって私に見せてく

れた。

…24点…

哀しくて泣けてくる。

パパとお兄ちゃんに報告するのやだなあ。でも、少なくともパパには言わなきゃ。追試がダメだったらパリに行けないし…。

メールで報告するのやだな…。今日実家帰ろうかな…。そろそろナイトも連れて帰らなきゃいけないしね。

【今日実家に帰るから、その時に点数教えるよ。ナイトも連れて帰るからね。】

まあ、わかってはいたけど、食い付き方が凄い。なぜかお姉ちゃんからもメールが届いてびつくり。

今日はバイトもないし、大人しく家に行こうかな…。

「唯ちゃん、遠藤先生が呼んでたよ。日本史資料室に來いだって。…再試なんだね…。」

同じクラスの愛理ちゃんえりが、こそこそと追試の事を聞いてくる。項なだ垂れて、そうなのと小さい声で答えた。ちなみに、このクラスで赤点の再試なのは私だけだ。

終わってる…。

「…うん…。再試頑張らなきゃ放課後か冬休み潰れちゃう。」

「放課後はともかく、冬休み返上は嫌よね。しかも、補習って遠藤先生じゃないんでしょう？だったら尚更頑張ってるね！」

「う…うん？行ってきまーす…。」

資料室に着いて、二回ノックをして中に入る。

「失礼します、神崎です。」

「ああ、来たか。なんで呼ばれたかわかってるよな。」

「うっ…。はい、再テストの事ですよね…。」

とりあえず座れと言われたので、先生の座っている椅子の目の前にあるパイプ椅子に腰掛けた。

白衣を脱いで、ワイシャツ姿の先生。寒くないのかな。

「まさか24点とはな。全クラス中最下位だぞ、お前。」

「嘘…。そ…そんなに？」

「そんなに。再試自体、お前を救済するようなものなんだぞ。受け

る人数も五人以下。それも休んで受けられなかったりした奴らだ。真面目にやっつてこの点数なのはお前だけ。全く…。そんなに日本史苦手なら、なんで日本史選択したんだ。社会は選択だっただろ。」

「う…、世界史は日本史以上に範囲広いし、学年上がったら必修じゃないですか。地理はそんなに嫌いじゃないですけど、中学の時に習ったし…。だったら苦手克服のために日本史にしようかな…と」

「その心意気は褒めてやる。だけど、点数がこれじゃあな…。」

先生は、はーとため息を付いて、脚を組んだ。脚長いから様になる。なにか考えているようで、頬杖を付きながらパラパラと問題を捲めくっている。

黙ってそれを見ていると、そうだ。と何か思いついたようだ。

「お前、土曜日うちに来るんだっつたな。」

「あ、はい。」

「仕方ない。俺も土曜日戻るから、その時教えてやる。ばあさんには言っておくから。」

「え…？いいんですか？」

「良いも何も。お前、このまま再試しても平均以上の点数取れるのか？…無理なんだな、その顔じゃ。放課後はバイトあるんだろ。冬休みも追試じゃ桐生さんがうるさそうだしな。クリスマスも返上な

「んだぞ。いいのか？」

「クリスマスは…パパがパリに行くって言うので…補習は避けたいです…。お兄ちゃんはどうせ仕事なので…。」

「ははっと笑った先生だけど、先生が補習受け持つんじゃないんだから、そんなに気にする事ないんじゃないの？有紗先生と過ごすんじゃないの？」

「龍前寺会長もエライ人がライバルだよね…。ていうか、略奪！？そうなら凄い修羅場になりそうなんですけど！！」

「先生、補習授業しないんですよね？」

「ああ。俺がやらない代わりに違う先生が受け持つことになってる。だから嫌味言われるんだよ、『こういう教え方してるんですか。いくら補習授業しないからって』ってな。だから、追試で何としても61点以上取れ。いいか？俺が休日返上で教えるんだ、これで補習なんてことになったら、どうなるかわかってるよな？」

「ひっ…！聞きたくないけど…どうなるんですか…？」

「毎日課題出すからな。お前にだけ。」

「頑張らせていただきます。」

「下に下にー。」

もう髪の毛が床に付きそうな位まで頭を下げる。長くなりすぎた髪

をどうしようかな…と頭の片隅で考えていると、予鈴が鳴った。次の授業は確か…英語だ。綾乃の撃沈姿が目につかぶ。

「鳴ったな。教室戻ってもいいぞ。じゃあ土曜日な。ちゃんとテスト問題と解答持って来いよ。」

「わかりました。あ、じゃあ先生のうちの執事さんを待ってれば迎えに来てくれるんですよね？」

「渡瀬が？ああそういう約束してたのか。そうだな。時間はばあさんに言うておくから、渡瀬が迎えに行くまで待ってる。」

「はい、わかりました。じゃあ、もういいんですよね。失礼しました。」

「おう。授業遅れるなよ。」

そう言って私に背を向けた先生を見て、私も教室に戻った。

第三十六話

「唯…とりあえずそこに正座しなさい。」

恐る恐る日本史の結果を見せたわけですよ。誰ってパパにね…。そしたら、みるみる内に顔色が変わっちゃったわけですよ。この変わり方は非常にまずい。それも、正座付き…。怖い。怖すぎる…。

生憎、今日はまだお兄ちゃんもお姉ちゃんも帰って来てなくて、現在この家にいるのは、にこやかに微笑んでソファーに長い脚を組んで座っている魔王と、正座して雷を待っている私、いつもは私の味方をしてくれるのに、今は裏切ってダイニングに逃げ込んだナイトのみだ。

せめて道代さんがいれば…。だけど、道代さんはお孫さんが熱を出したので今日はお休みだ。つまりは…雷をこの身一身に受けるしかないわけで…。

「ほおう、これまた珍しい点数を取ったようだ。唯、確認するが、このテストは何点満点なんだ？」

…こっ…!!怖い!!怖いよー!!

お母さん、パパが魔王化してるー!!こっとなったパパを宥められるのは、お母さんだけなのに…。

「ひゃ…100点満点です。」

「そうだな、100点満点だな。だが今、俺が見ている点数…何点だ？唯？」

「…にじゅうよんでんです……。」

そこまで言うと、パパはこれまでにないくらいに素敵な笑みをこぼした。その威力たるや、泣く子も黙るほどだ。だけど、このあとの揺り返しが凄まじいのも私は知っている。

そして、私は次の瞬間の落雷に備えて身構えた。

「あれだけ言ったのに、なんで24点なんだ！！中間の時間が32点で、期末が24点！？上がるならまだしも、下がるってどういう事だ！！！」

ひいひい！！直撃ですよー！！ 避雷針はー！？
とは言え、反撃できる立場じゃないから、黙ってパパの説教を受けるしかない。

項垂れて、大人しく説教を受けている私を見て、パパは深い深いため溜め息を付いた。

「全く、誰に似たんだか…。知ってるか、唯。千歳は元々歴史が得意でな。中学までは教師になりたがってたんだ。」

「そ…そうなの？初耳…。」

「医者になった事は後悔してないだろうが、それでも読んでも本は歴史関係のばかりだったからな。あいつは、特に戦国時代が好きだったみたいで、修学旅行先じゃ城から離れようとしなくて、バスに乗り遅れそうになったんだからな。それをあいつは俺のせいにしたんだぞ！？俺が、現地の女をナンパしてたからとかって言ってる！」

「ば…パパ…？」

「それを当時付き合ってた彼女が聞きつけて、俺は平手打ちされて別れたんだぞ！？修学旅行で！その時、千歳はなんて言ったと思う？『災難だったな、総一郎。ま、お前だったらすぐ次の彼女出来るって。気にすんなよ。』だぞ！？」

「……………」

啞然としてパパを見てみると、当時の事を次々思い出しているのか、パパの勢いは止まらなくなってきた。

普段パパはそんなに激昂したりしないのだけれど、お父さんの思い出にはかなり思う所があるのか、段々感情が高ぶってくるのが常だった。

「千歳はいつもそんな逃げ方してた！あいつは要領よくて、俺が何故かとばっちり食ってたんだ。あーもう腹立ってきた！唯、ハグさせろ！！」

「なんで！？」

「ハグの刑だっ！ほら、来い！」

パパが腕を広げて待っているの、仕方なく正座を崩して膝立ちでソファの前まで行く。

脇の下からひょいっと持ち上げられて、思いつ切りぎゅうぎゅうされる。

苦しいけど、文句言ったらまた説教されちゃうから大人しくハグされておいた。

パパは55歳だけど、全然そうは見えない。見る人によっては30代に見えるらしい。身体付きだつてメタボってない。パパはよくふざけて「若い奴らに負けてられないからな」って言ってるけど、ちゃんとジムに行つて鍛えているのを知っている。じゃなきゃ、こんなに引き締まった身体してないと思う。

しばらくパパにハグと言う名の拘束をされている時、玄関の方から物音がして、リビングにお兄ちゃんが入って来て、私がパパにハグされているのを見るなり、叫んだ。

「父さん何やってるんだよ！！父さんだけ独り占めなんてセコい！」

「羨ましいか、秀人。でもダメだぞ、今はまだ説教の最中だからな。」

「説教？」

「唯の日本史の点数聞きたいか？」

「…あー…。なるほど…。唯、ごめんね？亭から聞いちゃった。」

うつそおお！？思わずお兄ちゃんを凝視したけど、あの顔は間違いない。知ってる。なんで、先生もばらしちゃうかな！？

もう知ってるんだっだらいいか。半ばヤケクソで、お兄ちゃんにも手を伸ばした。

嬉しそうな顔をしたお兄ちゃんにすぐさまハグされる。勿論、パパをひっpegして。

その内、お姉ちゃんも帰ってきてまたハグされる。

「ゆーいー！！大好きー！！」

「もういいだろ、美奈！！元々俺がハグの刑で説教の代わりにと思っつてハグしてたんだぞ！！」

「父さんは一番最初にハグしてただろ！次、僕の番だよ！！」

「ぎゃー！！ナイト助けてえー！！」

「ぎゅうん…」

何時ものように笑って。

何時ものようにハグされて。

何時ものように愛されて。

それがいつまでも続かないの知ってる。

でも、今だけ。

今だけでいいの。

このままでもいいさせて。

第三十七話

ハグの嵐が通り過ぎ、ようやくパパ達が平静を取り戻してくれた。となると、やっぱり言われるのは…

「唯、再テスト頑張つてね。」

「お兄ちゃん、何で知ってるの…って先生…しかないよね。」

「うん、亨。」

にっこりと微笑まれたら、もはや逃げ場はない。パパは既に腕を組んで考えこんでるし、お姉ちゃんに至っては、ナイトのご飯を用意しに行ってしまった。

「再テストでダメだったらどうなるんだ？」

「放課後が補習で潰れるか、冬休みが潰れるかのどっちかだつて。私、放課後はバイトあるから補習受けられないし…冬休みつて事になっちゃう。」

「じゃあ、クリスマスは日本にいるってことじゃないか！唯、補習受けよう？再テストは合格点取れなくていいからさ。いやー、桜のバイトも意外に役にたつなあ。」

「…なんでそんなに嬉しそうなの、お兄ちゃん。ちょっと、見てよ、

パパ……ひっ！！」

ギリギリとこちらを睨んでいるパパが怖くて、思わずお兄ちゃんにしがみついた。しがみつかれたお兄ちゃんも、あまりのパパの形相に顔色が変わっている。

そう、この視線が意味するものは……説教。

「バカか、秀人！！唯に再試も合格点取れないように勧めてどうする！！お前、クリスマス仕事だって何回言えばわかるんだ！！」

「なんで僕だけ！？父さんは唯連れてパリ行ってくって言ってるし、仕事入れなくてもいいじゃないか！」

「パリはともかく、仕事云々の文句は高橋に言え！お前のスケジュール管理はあいつだろ！だいたい、中途採用の高橋を秘書にしたのは秀人、お前だったな。」

そうなの？ぐっと詰まったお兄ちゃんを見て、首を傾げた。

高橋さんって、お兄ちゃんの高校時代からの友達だって聞いている。確か大学だって同じだ。……って事は先生の事も知ってるのかな……。

「中途採用って……高橋さんって、新卒でパパの会社に入ったんじゃないの？」

「……零は元々、霞ヶ関の官僚だったんだよ。退官してうちに入った。」

思いがけない言葉にびっくりした。

「官僚？そうなんだ…。あれ、でも、何で私それ知らないの？」

「官僚って言っても、一年か二年で辞めたからね。あの頃は唯が小学生だったから、知らなくても無理ない。」

「へえ…。何で辞めたのか、お兄ちゃん知ってるの？」

「まあ、一応ね…。」

お兄ちゃんは珍しく言葉を濁して、顔を背けた。

きつと何かあったんだろう。でも、言いたく無いことを無理矢理聞いてはいけない。

それに、今、高橋さんはお兄ちゃんと一緒に仕事をして楽しんでそう。それでいい事にしちゃおう。

「そつか。じゃあクリスマスはお兄ちゃん仕事なのね。」

「ぐっ…！」

「唯、再試は何としても合格点…いや、満点を取れ！なんだったら、俺が教えて「パパは仕事あるでしょ！」」

「それに、先生が教えてくれるらしいから、頑張るよ。」

「バカ遠藤が？」

いつの間にか、ナイトのご飯を用意して戻ってきたお姉ちゃんが、むっつりした口調で『先生』という単語に食いついた。しかし、お姉ちゃん…バカ遠藤って…。お兄ちゃんも苦笑するしかないのか、バカ遠藤ねえと呟いている。

「うん、あのね。この前、バイト先でお客さんと仲良くなったんだけど、そのお客さんが先生のおばあちゃんだったの。」

「前に、飯連れて行ってもらったっていう、あれか？」

パパが思い出すかのように言ったので、頷いて、そうそうと言った。お兄ちゃんはかなり驚いている様子だ。天下の遠藤グループ総帥の奥様と知り合いなんだもん。そりゃ、驚くよね。

「唯、凄いね。遠藤グループ総帥の奥方とも仲良くなってるとは…。」

「遠藤グループ総帥の奥方って…：そんな人に連れて行ってもらったのか。ちゃんとお礼言ったか？」

「言ったよ！！なんかね、訳わかんない内に料亭に連れて行かれたの。そしたらね、先生と先生のお兄さんが…。」

「翼？翼にも会ったの？」

その名前を聞くと、パパがピクツと反応した。

「…たすく？遠藤翼か？」

「うん、そう言えば父さん、この前遠藤の会社と一緒に仕事したんじゃないかったっけ？」

「ああ…遠藤企画開発部長な。若いのに部長って…と思ったけど意外にやるな、あれは。まだ少しだけ脇が甘いが…な。」

くすくす笑ってるパパを見て、お兄ちゃんは苦笑を、お姉ちゃんは不思議そうな顔をしている。

「バカ遠藤ってお兄さんいたの？」

「うん、双子なんだよー。」

「うそー！？あの顔がもう一人！？」

「こら、美奈。翼と亨に失礼だろ。だけど、最近唯の周りに遠藤の輪が広がってるね。」

「…唯、気をつけてね。バカ遠藤に何かされたら、あたしに言って

ね。すぐに行くから。」

そう言いながら、お姉ちゃん私の頭を撫でてくるので、思わず頷いてしまった。

別に何にもないと思うけどね。

「でね…土曜日、遠藤先生の実家に招かれて…」

「…実家に招かれた?」「」

ハモった!

「う…うん。本当は珠緒さん…先生のおばあちゃんただけど、珠緒さんに編み物教えてただけど、それで招かれたの。そしたら、あ…赤点取っちゃったから、先生がそこで勉強見てくれるって。」

「編み物教えてるって、唯、お前…。」

相当驚いたのか、パパが前のめりになって私の顔を覗きこんだ。パパはお母さんから私が編まなくなった理由を知っているらしい。はつきりと言われた事はないけど、お母さんの事だ。きっと教えているはず。

「うん、教えてるだけ。バイト先で知り合ったんだけど、そのきつ

かけがお母さんのテディベアなの。そうそう、パパのね。」

くすくす笑ってパパの反応を伺った。案の定渋い顔してるし。

お姉ちゃんもその顔を見て笑ってる。あのテディベアは、家族の中で『昔のパパ』と言えば通じるぐらい浸透している。そのテディベアを桜さんの店に置くことに誰も反対しなかった。

お母さんは裁縫が好きだった。パパのデザイナーとしての華やかな仕事の方より、自分の手で作った温かい雰囲気の方が好きなの、と昔こっそり教えてくれた。そのお母さんの作ったテディベアだ。裁縫店に置いてあるのは本望だろう。

渋い顔をしていたパパはふっと息を吐くと、またソファアの背もたれにもたれた。

「そうか。編み物もいいけど、唯、ちゃんと勉強教えて貰えよ。もうマリベルに連絡したんだからな。」

「うっ…。わかってるよう…。」

ちゃんと勉強しないと、今度こそヤバイ。色んな意味で…。

頭の片隅で、珠緒さんのマフラーがどうなってるか、そのことにも少しだけ身震いした。

第三十八話

道代さんがいないので、夕飯を作ろうとダイニングへ行った。そこでは、ナイトがガフガフご飯を食べている。

美味しい？と聞いて、一撫で。

…なんか今まで見て見ぬふりしてたけど、ナイトちょっと太った…。そう言えば、テストあったから散歩も少ししかしてない。ヤバいな…。

足りない…と物悲しい目で訴えるナイトだけど、心を鬼にしてお皿を片付けた。

冷蔵庫にあるものを適当に切っていたら、隣にパパが立って手伝ってくれる。パパは昔、ミラノで独り暮らししていただけあって、料理の腕は私よりうまい。

なのに、私やお母さんに作らせていたのは「だってお前達の味の方が好きなんだもん」というなんだかわからない屁理屈で、パパはたまの記念日なんかにはしか料理は作らない。パパのイタリアン、美味しいのに。

「そういえば、パパ。龍前寺会長が、カサブランカのコレクションのチケット欲しいって言ってたんだけど、まだ手に入る？」

「龍前寺会長って事は…翔か？招待券だったらまだ何枚かあるが、何枚欲しいんだ？」

「2枚って言ってた。あ、玉ねぎ炒めてくれる？」

「ああ。2枚な。わかった、近いうちに届ける。翔も元気にしてる

か？」

そう言つて、フライパンに玉ねぎを投入して炒め始めたパパは、手馴れた感じでフライパンを返している。

「元気だよー。今年のカサブランカはどうなの？去年はお母さんの事もあつたから、控えめだったけど、今年は例年どおり？」

「ふっ…。まあ、そうだな。秀人には内緒だけど、唯…、今年は美奈が出る。」

「嘘！？お姉ちゃんが！？」

びっくりして手元の箸を落としてしまった。

お姉ちゃんはパパのコレクションに出たことがない。それはパパのコレクションに出る事を、コネだとか

、親の七光りと言われるのが大嫌いなお姉ちゃんが意識的に避けていたせいでもあるけど、何よりもパパのブランドのモデル選考は厳しいと業界でも有名だからだ。

有名なスーパーモデルですらなかなか出れないと言われている、そんなパパの選考基準ってどんなんだろうって思うけど、でもコレクションを見る限り、モデルに似合つてると言わざるを得ない。

「お姉ちゃん出るの…。私、今年行かないのに…。」

「行かない？唯、お前、コレクション来ないのか？関係者席取つて

あるんだぞ。」

「うん…。今年だけじゃなく、私、これからも行かないつもりなんだけど。」

「は？ちよつと待て、俺はそんな話聞いて無いぞ。」

炒めてたフライパンを火から降ろして、パパは私の顔を覗きこんだ。聞いてないって…。今初めて言ったんだけど、タイミング悪かったな、これ。

「とりあえず、ご飯作っちゃおうよ、パパ。お兄ちゃん達お腹減ってるよ。」

「…ああ、わかってる。後で話聞いてやるから、書斎に来いよ、唯。」

「うん。」

パパと二人で夕飯を作って、お兄ちゃんとお姉ちゃんも一緒に食べた。

片づけをして、お風呂に入って。パパの書斎に入る前に、お母さんの仏壇の前に座った。

ねえ、お母さん。

私さ、すごい幸せなんだよ？

パパとお兄ちゃんとお姉ちゃん、それにナイトにも。こんなにいつ

ばい愛してもらってる。

それを手放そうとしてる私ってバカかな。

でもね、私はこの家にいちゃいけないんだ。

だって、お母さんがいないもん。

ここは『桐生』の家なんだよね。『桐生』の血が流れてるの。

私は違う。

ここにいちゃ、いけない。

ごめんね、お母さん。

わがままな娘で、ごめんなさい。

「…どうしても来ない気か？」

「お姉ちゃんがランウェイ歩くのは凄く見たいけどね。こればっかりは決めてた事だから。」

「頑固だな。」

「ふふっ、お父さんの娘だからね。」

「本当だよ。」

「ねえ、パパ…。」

「なんだ？」

「迷惑かけてごめんね。」

「…はーっ…。迷惑かけてると思うんだったら、この家から出なきやいいんだよ。お前はまだ子供なんだから、もう少し甘える。」

「…十分甘えてるよ…。」

「だったら泣きそうな顔するな。ほら、来い。」

「…っふ…っ…っえ…」「…」「めんなせ…」

「よしよし…」

パパが撫でてくれる手は温かくて。
抱き締めてくれる腕が大きくて。

その日、私はパパが優しく抱き締めてくれる腕の中で泣いた。

第38・5話：総一郎（前書き）

総一郎パパの視点で。

第38・5話：総一郎

「泣き疲れて寝たか…。」

涙の跡を指で拭って、そのまま頭を撫でる。

幼い子供にやるように、膝に抱き上げてゆっくりと揺らしながら宥めていた義理の娘は泣き疲れたのか、静かに寝息をたてて眠っていた。

暫くそうした後、そのまま抱き上げて部屋に運んで、ベッドに寝かせた。ベッドの脇に腰掛けて、また頭を撫でた。

開いていたドアからナイトが入って来て、唯が寝ているベッド下のいつも寝ている定位置に陣取っている。それに少しだけ笑って、唯におやすみと髪に軽くキスをした。願わくは、幸せな夢が見れるようにと。

ナイトの頭も少し撫でて、唯の部屋を出る。

そして、真っ直ぐキッチンに行つてグラスを3つとウイスキーのボトルを持って書斎に戻った。

書斎に戻つて、3つのグラスにそれぞれウイスキーを注いで、千歳と祥子の写真の前にそれを2つ置く。残ったグラスを手にとって今は亡き二人に掲げると、一口飲んだ。

千歳と祥子が遺した愛娘は、彼ら両親を亡くし、健気に笑って立ち振舞ってはいるが、その実、とても寂しがりなのを知っている。それなのに、祥子と一緒に住んでいた想い出と共に、俺の手を離れようとしている。

血の繋がりが何だって言うんだ。唯は俺の娘だ。俺が千歳と祥子に託された。

今も鮮明に覚えている、亡き親友の今際の言葉。

『総一郎、祥子と唯を頼む。俺はもう駄目だと思うから…。』

『な…なに気弱な事言ってるんだ！お前なら大丈夫だ、第一、殺しても死なないだろ！』

『はは…いくら何でも殺したら死ぬだろ…。…俺は医者だからな。自分の事だし、誰よりもわかるんだよ。総一郎、俺は死ぬ。』

『…ふざけんなよ…。』

『総一郎、頼んだぞ。おい、泣いてないで、返事は？』

『…泣いてねえよ…。わかった、頼まれてやるよ。ていうか、お前は死なないんだから、俺がその頼みを叶える事はないんだからな！いいか！？』

『ふ…そうだな。』

その半日後。

千歳は死んだ。自分が予言した通りに。

唯が自分達と血が繋がっていない事を気にやんで、この家を出よう

としたのが、祥子が死んだ半年後だった。猛反対したが、それを撤回することはなかった。現に今も独りで大丈夫だと虚勢を張っているように見える。誰よりも寂しがり屋で甘ったれなくせに。秀人や美奈もそれに気付いているのだろう、だからこそ、唯を独りにしないように頻繁に会いに行っているのだ。

「お前達の娘は、なんであんなに脆そうに見えるのに、全く頑固だ……。俺らは甘えて欲しいのにな……。」

机の上に飾ってある千歳と祥子の写真を見て、そう呟いた。返事をするように、置かれていたグラスのうちの一つの氷がカラんと鳴った。

第38・5話…総一郎（後書き）

今回は唯の実父、千歳の遺言でした。実母、祥子の遺言はまた今度。

第三十九話

「おはようございます、神崎様。お迎えに参りました。」

今、私の目の前には、でんと黒いロールスロイスが止まっています。その脇では、執事服を着たパパよりも少し年上に見える男の人が立って、私にお辞儀をしている。多分この人が、遠藤家の執事さん……渡瀬さんだっけ。なんだろうなあ。

「おはようございます。あの……今日はわざわざ迎えに来てもらっちゃって、すみません。お手数かけます。」

そう言つて、ぺこつと頭を下げた。

渡瀬さんは笑んでそれを押し止め、後部座席のドアを開けてくれたので、私もそれに従い、車に乗り込んだ。

渡瀬さんが運転するのかなと思つてたら、運転手さんは別にいたみたいだ。

さすがお金持ち……。と思つていると、車が発進した。

「あの、今日は先生も来るって……。」

「はい、左様でございます。神崎様のお勉強をお教えすると、亨坊ちゃんから連絡がございましたので、大奥様もそのようにお時間を取られているようですよ。」

そう言って、にこりと笑った渡瀬さん。

…亨坊ちゃん…

坊ちゃん…。

頭の中で、坊ちゃんがリフレインしそうなのを何とか押しやって、渡瀬さんを見た。

優しそうな人だなあ。…おじいちゃんって言う年でもないんだけど、なんか和む。そんな人に様付けされるのって、妙に落ち着かない。私なんかただの小娘だしね。

「あの、様付け止めてもらえませんか？」

「しかし、それでは、」

「私、全然偉くもないし、ただの高校生ですから。普通に唯でいいですよ？ね？お願いします。」

そう言って頭を少しだけ下げると、渡瀬さんは仕方がないと言った表情を浮かべてしまった。

やっぱり駄目かなあ…。そう思っていると、頭上からふつと笑い声が漏れたので、顔を上げると、苦笑している渡瀬さんがいた。

「こんなに可愛いお嬢様のお願いとあっては仕方ありませんね。」

では、唯様と呼ばせて頂きます。」

「唯様…。」

「こればかりはご了承下さい。私は遠藤家に仕えて45年。お客様
の願いとは言え、私にも譲れないものはございます。」

そんなものなのか。でも45年も執事さんしてたら、そうなのかも
なあ。

「わかりました。唯様で良いです。なんかくすぐったいって言うか、
恥ずかしいんですけど、それでお願ひします。」

「はい、唯様。」

うふふと二人で笑っていると、渡瀬さんは運転手さんにも声をかけ
てくれた。運転手さんは、後藤さんと言っらしい。その後藤さんに
も、唯様と呼ばれて何だかふわふわした雰囲気になっていると、車
が止まった。

どうやら遠藤邸に着いたらしい。

渡瀬さんが恭しくドアを開けてくれた。そして、私の目に飛び込ん
だのが…お屋敷っていうか、お城？洋館？みたいな大豪邸。

で…でかいっ！！

え？ここって、都心に近いよね？なのに、この広さ！？

どっかの洋館かと思っちゃうくらい大きい！

「唯様？如何なさいました？」

はっ！渡瀬さんが笑ってる！うわあ、恥ずかしい。

「いやっ、あの…大きいお宅だなんて…。」

「ふふ、左様でございますか。では、参りましょうか。」

参りましょうか！？ここが玄関じゃないの！？

頭の中では小人さん達がやんやんやんと大騒ぎしているけど、平静を装って渡瀬さんにくつくついて行く。

少しだけ歩くと、ようやく玄関らしいドアが見えてきた。渡瀬さんが着きましたよと優しく微笑んでくれたので、緊張が少しだけほぐれた感じがする。

「遠藤家へようこそいらっしやいました。大奥様を呼んで参りますので、少々お待ち下さい。」

「はい。」

と返事はしたものの、緊張って言うか、恐怖だ！

玄関を見た時に嫌な予感はしたけど、まさかこんなに大きい家だななんて…。

エントランスは吹き抜け、目の前にある階段は螺旋階段、多分この

床は大理石…。上にキラキラででんつと主張しているのはクリスタルのシャンデリア。

…何となく、置かれてる装飾品もロココっぽい感じが…。お姉ちゃんが好きそうだなあ。

「あら、お客様かしら？」

ふと声がした方を振り返ると、そこには着物を着た見惚れるような和風美人が。

…このお城みたいなお屋敷に着物。ミスマツチなのに、違和感がないのは、多分ここに住んでいる人だからなんだろう。

…って…この人ってさあ。もしかして、て言うか…やっぱり…？絶対？

「あら、唯さん、いらっしやい！」

「珠緒さん、今日はお招き頂いてありがとうございます。」

「いえいえ、お久しぶりね。私は首を長くして待っていたのよ。唯さん、紹介が遅れたわね。この子が唯さんよ。唯さん、こちらは唯さん。翼と亨の母親よ。」

やっぱり…！！！！！！！！！！

先生のお母さんだ…！！！！！！！！あああ、挨拶しなきゃ！！

「はじめまして、神崎唯です！先生にはお世話になってます！」

慌てて挨拶をして最敬礼並のお辞儀をした。この際、髪がどんな事になるうが構ってられないと思う。結ってくればよかった。後悔先に立たずってこの事を言うんだね、お母さん。正に実体験だよ。当の雅さんと呼ばれた先生のお母さんは、びっくりとも動かずに、じーっと私を見てるし…。

うう…何か…歓迎されてない？困って珠緒さんを見ると、うふって笑んでくるし。

どどどどうしたら…。

内心キョドっていたら、がばつといきなり抱きつかれた。

「きゃー！なんて可愛らしい！！お義母さん、この子なんて可愛らしいんでしょう！！そう思いませんか！？」

「うふふふ、そうですね、雅さん。私、貴女の好みなんじゃないかしらと思っていたら、当たったみたいね。」

「ええ、お義母さん！！私の好みのド真ん中ですわ！！ねえ、お義母さん！私、この子にママって呼ばれてみたいですよ！」

「あらあら、それはまだ早いのではなくって？でも、私もおばあ様って呼ばれてみたいのよー？」

…えーっと。…一体何の話？

第三十九話（後書き）

遂に出ました、雅ママ。次回、波乱の予感……？唯が遊ばれるだけか
もしれませんが、そこはご愛嬌。

第四十話

「ねえ、唯ちゃん、こっちの服着てみて？絶対似合うと思うの！！
そう思いませんか、お義母さん！！」

「あら、そちらの服よりこちらの方がいいんじゃないかしら。ほら、
唯さんの可愛らしさが前面に出るデザインよ？」

「あら、本当ですねー。本当可愛いわ、唯ちゃん！でも、やっぱり
こっちも捨てがたいのよねえ。」

「そうねえ、それは髪を結び上げるともつと素敵になるんじゃない
？ねえ、雅さん。」

「唯ちゃん、こっちおいでなさい！髪結ってあげるわ！！」

…かれこれ小一時間この状態ですよ。
完全に珠緒さんと、雅ちゃん（雅ちゃんって呼んでつて哀願された）
、それにメイドさんらしい人達数人に、よって集^{たか}って着せ替え人形
にされている私。あまりの強烈さに、小さい頃、お姉ちゃんが持つ
てた着せ替え人形の真似させられたな…なんてぼんやり思い始めて
いる。

あれ、今日一体何しに来たんだっけ…。

「二人とも、何してるんですか。」

冷静な声が、きゃあきゃああと騒いでいた部屋に響いた。

声が出た方を見ると、無表情な先生が腕組みしながらこちらをガン見。チラリと私を見た先生は、盛大に顔を顰めた。

「神崎、遊ぶつもりで家に来たんなら俺は帰るぞ。」

「いえっ！！違います！！」

慌てて訂正したけど、この格好じゃ遊んでるって思われてもしょうがないよね。

だってさ…ピンクのメイドさんの格好なんだよ、今…。ニーソに、ヘッドドレスまで装備。フリルたっぷりのスカートが短いつたら無い。

「あら、亨、帰って来たの？もー、もう少し遅く来てくれればいいのに、気のきかない子ねえ。折角、唯ちゃんにメイド服着せてこれから遊ぼうと思っていたのに！」

「母さん、俺はそんな事をさせる為に神崎をこの家に呼んだんじゃないんだ。おい、神崎、早く着替えて勉強道具一式持って、リビングまで来い。」

「ええ〜！？亨ったら、なんていけず！ねえ、唯ちゃん、この子本当に先生してるの？いーつもこんなむすつとした顔してるんじゃない？」

え！話を私に振らないでくださいよ！！しかも、そんな答えにくい質問を本人の目の前で答えると？

ほら、先生思いつきり睨んでるし！！おおう…なんて言えば…。
珠緒さんの方を見て助けを求めたけど、わかっているのかわからないの
か、珠緒さんはただ、うふふと微笑むばかりだ。あ…駄目だ。当て
にならない…。途方に暮れていると、先生が携帯を取り出して何や
らいじり始めた。あ、あい おんだ…。

「神崎、こっち向け。」

「はい？」

カシャ

一瞬何が起きたのかわからなくて、ぱちぱちと瞬きをした。
先生を見ると、何やら黒い…真っ黒い笑顔を浮かべて…

「これ、桐生さんに送られなくなったら、さっさと着替える。」

と言われて携帯の画面を見せられた。写っているのは、今のメイド
服を着ている…私！？

「えー！？やだやだやだ！ちょっと、それ消してくださいよー！！」

「何度も言わせるな。消して欲しかったら早く勉強するぞ。ほら、
いーち、にー」

「わわわかりましたから、ちょ、出てってください！！すみません、珠緒さんと雅ちゃんも…」

「…雅ちゃん…？」

低い声でそう言った後、先生は雅ちゃんを凝視していた。雅ちゃんは悪びれる事無く、先生の鋭い視線をさらっと受け流している。さすが、遠藤グループの社長妻。ちよつとやそつとの睨みじゃビクともしませんよー！

…ていうか、私は正直それどころではないんだけど。早く着替えないと、あの写メをお兄ちゃんに送られる。と言う事は…あまりにも想像に難くない事に背筋が冷えた。

今日は土曜日と言え、お兄ちゃんは仕事のはずだ。それをほっぽり出そうとして、高橋さんにごつ酷く雷を落とされるに違いない。そして、雷を落とされたのにも関わらず、何事も無かったかのように私の所に来るはずだ。勿論、その写メはパパとお姉ちゃんにももれなく転送されるだろう。そして…うわ、怖い。怖すぎる…。

「あらやーだ、亨ったらこわあい。じゃあお義母さん、仕方ないですな、私達もリビングに行きましょうか。唯ちゃん、着替え方わかる？なんだつたらお手伝いするわよ？」

ちつとも怖いなんか思っていない声で、私で遊ぶのに満足した…若干物足りなさそうだけど…雅ちゃんは、私を手伝いを断ると、珠緒さんと先生を伴ってリビングに移動してくれた。

このメイド服、脱ぐのがちよつと面倒くさい。そういうところは残

ったメイドさんが介助してくれて、ようやくこの家に着て来た服に戻った。

手が隠れるぐらいのニットカーデに、ショートパンツ。まあ、ニーソに関しては、来た時から穿いてたからいいんだけど。

でもあのメイドさんのニーソさあ…必死に拒否したけど、本当はガーター付きだったんだよね…。一体雅さんの趣味ってどうなってるの？

不思議に思うことは幾つかあったけど、まあいつか。着替え終わって勉強道具の入ったカバンを持ち、メイドさんに案内されてリビングに行く、そこにはアンティークと思われるソファアームに座って、優雅にお茶を楽しんでいる風には見えない遠藤家の面々が。なのに、なんだろう。穏やかに見える水面下でバチバチやり合っている雰囲気…。

「あの…すみません、お待たせしました。」

「唯ちゃん！待ってたわー！！お勉強する前に、お茶を一杯どうぞね、亨、それ位はいいでしょう。」

「…お好きにどうぞ。」

仕方がないと言った風情で、先生はカップを口に運んでいた。

どこに座ればいいんだろう。と思ったら、珠緒さんが自分が座っている隣をポンポンと叩いて私を促したので、大人しくそこに座ることにした。

「本当にお久しぶりね。元気にしてた？」

「はい、とても。珠緒さんもお元気そうですね。」

「そうね、私も代わりはないわよ。そうそう、唯さんのバイト先のお店に行って、店長さんにも編みかけのマフラーを見てもらったんだけどね、どうもしっくりこないのよ。」

「桜さんですか？あ、じゃあ後でどうなってるか、見せてもらえますか？一緒に編みましょうね。」

「うふふ、ありがとう。」

にこにこ笑っている珠緒さんと一緒に和んでいると、渡瀬さんがお茶を出してくれた。

「ありがとうございますと言って手に持ったカップは…これはあの有名磁器メーカーのやつですか。怖くて触れないんですけど！恐る恐るお茶を口に運ぶと、雅ちゃんが身を乗り出して来た。」

「ねえねえ、まさか唯ちゃんが今着てるお洋服も自分で編んだの？」

「あ、はい。私、身体が小さいので手間なく編めるんです。」

「え、本当！？唯さん、すごいわ。本当に編み物上手なのねえ！私にも何か編んで貰いたいわ！」

期待を込め、キラキラした目で私を見てるけど、私には珠緒さんだ

けじゃなく、誰にも編んであげられない。

だから、心の中でごめんなさいを繰り返す。

繰り返し。

繰り返し。

「すみません。私あんまり人に編んであげるのが得意じゃなくて

…」

そう言うと、珠緒さんと雅ちゃんに怪訝そうな顔をされた。

当たり前だよ。自分には編むのに人には編めないんだから。

俯いてカップをいじっていると、黙っていた先生が立ち上がった。私もつられて視線を上げた。

「もういいですか。そろそろ勉強したいんですが。」

「あら、そうね。じゃあお勉強が終わったらまたリビングにいらっしやい。亨、何時くらいまでかかりそう?」

「そうですね、昼には一旦下りてきます。とりあえず、今はそうとしか言えません。おい、行くぞ神崎。」

「え？リビングで勉強するんじゃないんですか？」

そう言うと、先生はあからさまにバカにしたように、はんと鼻で笑った。

！？何さー！！

「お前の悲惨な点数を曝さらしたいんなら、ここですか？別に俺は構わないが、せつかくお前の事を慮おもんばかって俺の部屋で教えてやろうとし「行きます！是非とも先生の部屋で！！」よし、じゃあ行くぞ。」

「唯ちゃん、頑張つてね。」

ひらひらと手を降つて送り出してくれた珠緒さんと雅ちゃん。

それに笑って先生の後に着いていこうとしたら、雅ちゃんが後ろから先生を呼び止めた。

「亨、唯ちゃんに手出しちゃ駄目よ。ロリコンよ。」

「あらまあ、雅さん。亨ったらそういう趣味があるの？知らなかったわあ。」

「そうならないように、私達がしっかり見守っていけなくては、唯ちゃんのご家族に申し訳がたたな「ふっざけんなっつっ！……！！」まあ怖い。」

静かな休日に怒声を震わせた先生が、怒りとともに私を引っ張って
さっさと先生の自室に引っ込んだのは言うまでもない。

第四十話（後書き）

雅ママ大暴走。ってことで、雅ちゃんのプロフ。

エンドウミママで
遠藤雅

年齢不詳

翼、亨の母親であり、遠藤グループ社長夫人。

着物が似合う和風美人で自身も着物好き。洋装は『カサブランカ』ブランドがお気に入り。めったに怒ることがない穏やかな性格。

だが途轍もない少女趣味で、義父や夫の出張中に遠藤邸を趣味全開の屋敷に変貌させた猛者。結局出張から戻った二人に説得の上、懇願され元の屋敷に戻ったが、そこにロココ調の調度品が並んでいる。

現在は趣味の部屋と称した自室がある。亨曰わく、魔ピンクの間。

夫婦仲、親子関係共に良好。

唯がお気に入り。

第四十一話

「違う！年代を適当に書くな！名前を勝手に造るな！」

「江戸の三大改革を行った人物達がバラバラ、しかもなんでこの江戸時代に建武の新政が出てくるんだ？」

「お前は…織田信長、豊臣秀吉、徳川家康くらい覚えておけよ…。」

…ちーん…。

心なしかシャーペンを持つ手がふるふる震えてるのは、気のせいじゃないはず。そして、目の前のテスト問題に向き合ってる私が撃沈するのも近いと思う。

隣に座っている先生は既に、可哀想なものを見る目を隠そうともしない。でも文句は言えない。言える立場じゃない。

「壊滅的だな、お前…。それでよく新入生代表やったな。」

「うー…すみません…。あれ…先生、よく覚えてましたね、私が新入生代表だつて。すっかり龍前寺会長の影になって、結構忘れてる人も多かったのに。」

そう、私は一応新入生代表で入学式で新入生の挨拶を読んでいた。でも、別に目立った感じはしなかった。ていうか、私の挨拶後の龍前寺会長挨拶の方が大変だったせいで、私の挨拶はかき消されたよ
うなものだ。

「ああ、龍前寺な、確かに。」

うんうんと同意してくれる先生を横目で見て、日本史から現実逃避をしようと当時の事を思い出した。

「生徒会長挨拶。生徒会長、龍前寺翔。」

「はい。」

そう名前を呼ばれて、壇上上がった会長。それを見て盛り上がったのは、かなり派手な子達の集まりだった。後から聞いたのだけど、彼女達は幼稚舎からの持ち上がり組だったらしく、高等部の入学式では固まりになって騒いでいて、かなり悪目立ちしていた。

この学校は有名な私立学校だけあって、中高の倍率は結構高く、偏差値もなかなかだったりする。だけど、幼稚舎、小等部の入学基準はそんなに厳しくない。なので、その持ち上がり組と、中・高等部の入学組はクラス分けされていて勉強内容も全然違うらしい。その結果、持ち上がり組と新入学組はあまり仲が良くないとされている。

私はそんな事ないと思うんだけど、結構そついう風に感じてる子はいるみたい。

現に、愛理ちゃんを持ち上がり組が苦手らしい。すれ違い様、あからさまにイヤミ言われたとかって言うてるから。

「きゃー！翔さまー！！」

「かつこいいですー！！こっち向いてくださーい！！」

「龍前寺かいちよー！！！！」

キヤーキヤーと騒ぐ彼女達に、私達は驚いて何事かと思っっているし、中学からの子達はあからさまにうんざりした顔をしていた。そして、その内の何人かが壇上前に駆け寄って行こうと席を立った。あまりの光景に先生達が席に戻れ！！とか、なにやってるんだとかって一時騒然となった時に、マイクから静かな声がした。

「そのの持ち上がり4人。今から1週間の停学処分を下す。さっさとこの会場から出ていけ。目障りだ。」

「え…でもあたし達…」

呆然としている彼女達を尻目に、更に会長は追い討ちをかけた。

「聞こえなかったのか？全く当校の恥さらしも良いところだ。だから何時まで経つても『持ち上がり組』と揶揄されるんだ。すまないが、篠宮副会長、この4人をここから出してくれ。邪魔だ。」

「わかりました。そのの4人、早く来なさい。」

無表情なままの龍前寺会長に見向きもされなかった4人は、篠宮副会長に連れられて頂^{うなだ}垂れながら会場を出て行った。中には泣いている子もいたみたいで、他の騒いでいた子達も一気に大人しくなっていた。

再び静かになった会場は、今までの出来事を改めて振り返っていた。そして、皆である一つの結論に達する。

『生徒会には絶対に逆らうな』

これは今でも一年の間で暗黙の了解だったりする。それから、何事もなかったかの様ににこやかに挨拶をした龍前寺会長と、戻って来て微笑みをたたえながら私達新生に拍手を送ってくれた篠宮副会長を見て、更にその思いは固くなったのである。

と言っても、私は龍前寺会長を入学前から知っていたし、新入生代表をやる時に親切にしてもらった篠宮先輩とも親しかったりするのだけ。

その入学式の帰り、生徒会室に呼ばれた私は、涙を流して爆笑する篠宮副会長と、だるーんとソファーに寝転がっている会長を見かける事となる。

「もーさあ、何であの場面で出てくるんだよー！絶対夜にオヤジから説教だよ。あーもう、オレのせいじゃねーのに！！」

「あははははっ！！！！あー！！！！もう駄目、お腹痛ーい！！！！ねえねえ

神崎ちゃんさあ、翔ったらこうなる事わかってたのに、結局今日まで対策立てられなかったのー！！ばっかよねえ！」

「バカってなんだ、ナツ！大体気づいてながら、ナツも止めなかっただろ！」

「だってあたし、あの子達の勢いに勝てないし。か弱いから。」

「か弱い？か弱いって言ったか？なあ唯、聞いた？ナツがか弱そうに見えるか！？」

え、私？とびつくりして、思わず篠宮先輩を見てしまった。

篠宮先輩は、少しだけ茶色いショートボブに緩やかなウェーブがかかった髪で、切れ長で意思の強そうな目をした凛々しい美人さんだ。だけど哀しいかな、か弱そうには見えない。それに、剣道部の副部長も兼務してるって紹介されてたし。しかも何気に強いらしい。そうだなあ。篠宮先輩を形容する言葉は、『か弱い』ではなく…

「雄々しいです、篠宮副会長。」

その後、ビシッと空気が凍ったのは言うまでもない。

「おいこらっ！勝手にトリップしてんなっ…！」

はっ！

そうだ、今は勉強中だったんだ！

コンコンとペンを机に叩きながら、私を見ている先生にうつすらと角が見える気がする。

「お前のこの小さい頭ん中は、一体何考えてんだろっちなあ？あ？」

「ごめんなさいい！」

「だから、適当に年代を書くなっつってんだろ！！！」

結局、昼食でございますよと救世主の渡瀬さんに呼びに来られるまで、散々怒鳴られた午前中。

だって、改革が多すぎるんだもん！！！！これで本当に大丈夫なんだろうか、私…。

第四十一話（後書き）

またまたキャラが増えた…。

シノミヤナシ
篠宮奈津美

17歳

唯の高校の生徒会副会長。剣道部副部長と兼務している。剣道の腕前は有数。

薄い茶色のショートホブ。切れ長の目で、意志が強そうな凛々しい印象を与えている。唯は雄々しいと感じているらしい。
笑い上戸。翔にはナツと呼ばれている。

第四十二話

「ありがとうございます。またご馳走になってしまって。すごく美味しかったです。」

そう、すごい美味しかった。

どっかのコース料理じゃないかと思うほど豪華な料理ばかり出て、内心ヒヤヒヤしてた。

この前連れて行ってもらった料亭もだったけど、どうしてこつも美味しい物ばかり食べさせてもらっちゃうんだろう。

「お口に合ったようで何よりだね。それに、テーブルマナーが完璧ね。関心だね。」

「ありがとうございます。小さい頃から海外に連れて行ってもらってたので、マナーはそこで身に付けたんです。」

珠緒さんがへえと声を上げた。先生は関係ないとばかりに、食後のコーヒーを飲んでいる。

ニコニコと笑っていた雅ちゃんが、ふと思いついたように私を見た。

「海外と言えば…。唯ちゃんのお父様って桐生総一郎なんですって？」

「あ、はい。義理の父ですけど。」

「私ね、桐生総一郎の『カサブランカ』が好きなのよー！毎年、年明けにコレクションがあるでしょう？私、いつも行ってるの。次のコレクションも行くわよー！！」

ウキウキとしている雅ちゃんを見て、思わず苦笑してしまった。そうかあ、会場に雅ちゃんが居たのか。あれ、言うことは、私も見られてたかも？でも、私もお母さんも毎回関係者席にいたし、後のパーティーも出てないから…。

「次のコレクションでは、義兄にも知らせてないサプライズがあるらしいですよ。楽しみにしてて下さいね。」

「サプライズ？」

「はい、サプライズです。」

お姉ちゃんが出るんですよとは言えないから、にっこり笑って言葉を濁す。雅ちゃんは何なのかしら〜と楽しそうだ。

「もしかして…桐生総一郎唯一のウエディングドレスが見れるの！？」

「あ、それは違います。」

「えええ〜！！ねえ、何だと思えますか、お義母さん！」

「わからないわあ。それより、桐生総一郎がウエディングドレスを作ったの？聞いたことが無いわ。ねえ、亨、知ってる？」

いきなり話を振られた先生は、興味無いと言った感じで素っ気なくこちらを見て、立ち上がった。

「俺に聞かないで下さい。すみません、少し出てきます。」

リビングダイニングを出て行った先生を見送って、また珠緒さんが私に向き直った。

「全く、あの子は…愛想がないんだから。話を戻しても大丈夫？唯さんのお義父様がウエディングドレスを作ったっていうのは？」

「一般にはあまり知られてないんですけどね。元々、あのウエディングドレスは商業用に作ったわけではないので、ほとんど知ってる人はいないんですよ。よく知ってましたね、雅ちゃん。」

「だってね、そのウエディングドレスが『カサブランカ』の原型なんでしょう？桐生総一郎ファンとしては、知らないわけがないわ！」

「…ファンなんですか？」

驚いてそう聞くと、うっとりした表情を浮かべた雅ちゃんが、ほう

とため息をついた。心なしか顔が赤い。珠緒さんもそうよねえと頷いてるし。

「本当に素敵よねえ。あの見た目と身体付きじゃ、とても55歳に見えないのよね。なんて言うの？そう、セクシー！桐生総一郎はセクシーなの！！それに、あの声！近くで囁かれたら、絶対腰に来るわ！」

「こら、雅さん、はしたないですよ。でもね、実際素敵な殿方だと思うのよ。私くらいの年齢でも素敵だなと思うんですもの。常に女性を気遣ってくれると言うし。なかなか日本人は出来ないじゃない？そういうった気遣いは。さり気なく、それも嫌味じゃない気遣いをしてくださる男性はおのずと、女性の関心を引きやすいんでしょうね。そう言った意味でも、唯さんのお義父様は素敵な方だと思いますよ。」

…そうなんだ。パパってそんなにセクシーなのか。モテるのは知ってたけど、そんな風に見られてるんだな。

まあ、パパもそうだけど、お兄ちゃんもイタリアに住んでたからそういうレディーファースト的な事は意図せずにやってるんだろうと思う。今まで意識してみた事無かったから、改めてそういう事をさりとやるパパとお兄ちゃんを尊敬してしまう。

「ねえ、唯さんはそのウエディングドレスを見た事があるの？」

「あー…、見た事はある事はあるんですけど、実物じゃなくて、写真なんですよ。実物はどこにあるかわからないんです。多分、義父

がどこかに保管してあると思うんですけど、それがどこなのかは全然知らなくて。」

「へえ、そうなの？残念ねえ。じゃあそのウエディングドレスは誰が着たの？」

「私の母です。」

「唯さんのお母様？…そう言えば、この前亡くなったって…。」

「え？あの奥様が、唯ちゃんのお母さんなの？」

「気遣うように珠緒さんに言われて苦笑する。
大丈夫。私は笑える。」

「はい。桐生祥子は私の実の母です。もう亡くなって一年経ちますけどね。」

「ごめんなさい。辛い事を思い出させてしまったわね…。」

「ふふ…、大丈夫です。もう慣れましたから…。」

「ああ、本当にごめんなさい！唯ちゃん、泣かないで？」

おろおろと慌てた様子で私の前に屈んだ雅ちゃんは、優しく頭を撫でて泣かないでと言っている。泣いてないし、大丈夫と言っても信じてくれないんだろうなあ。少しだけされるがままにしておこう。

なんか懐かしい。お母さんと雅ちゃんは、年齢こそ違つかもしれないけど、同じ母親。母親に撫でられる感じって忘れてたなあ。撫でてくれる手が優しくくて、縋り付きたくなる。だけど、いくらなんでもそれは出来ない。

雅ちゃんの目をしっかり見て、もう大丈夫ですよと笑っておいた。直も心配そうな顔をしている雅ちゃんの気を逸らそうと、そうだと声を上げた。

「折角だから、そのウエディングドレスの写真見ます？」

「え？いいの？」

「はい。あ、着てるのは母ですけど、隣に立ってるのは義父じゃないですよ。」

「そうなの！？私てつきり、あのオシドリ夫婦ぶりからして桐生総一郎が結婚するから作ったんだと思ったわ！確か、お互い再婚だったわよね？」

「なんだ、母さん。ゴシップ？」

そう言っただけの方へと歩いてきたのは、先日会った翼さんだった。あれ、仕事だったのかな。休日なのに…社会人って大変だ。先生も休みなのに、私に時間割いて貰っちゃってる。しかも、勉強、ぼろぼろだし。

おっと、いけない。挨拶、挨拶。

「翼さん、こんにちは。お邪魔してます。」

「こんにちは、唯ちゃん。…今はスーツ着てるからあれだけど…。よく僕が亨じゃないってわかったね。大概間違えるのに…。」

「え？なんで間違えるんですか？全然似てないのに。」

と言うと、何故か皆黙ってしまった。…え、私なんか変なこと言った…？

不安になっていると、翼さんが突然吹き出した。なんだ、なんだ？

「ふはっ！凄いな、唯ちゃん！うちの親でも間違えるのに、全然似てないって！知り合ったばかりなのに、負けたね。母さん。」

「本当。見分けが付くようになったのはここ何年かなのよ？どうやって見分けてるの？」

「え？んー…なんとなく雰囲気とか、身に纏ってる色のマッチングとかですかねえ。翼さんは黒が似合わないけど、先生は似合う。逆に、先生は青とかは似合わないけど、翼さんは似合いますよ。」

「…へー…さすがファッション一家で育っただけはあるなあ。そんな見分け方があるとはね。」

ふむふむと言った感じで見つめられるけど、なんだか…。いくら雰囲気が違うと言っても、先生と同じ顔でガン見されるのは、ちょっと…。

そう言えば先生はどうしたんだろ。なかなか帰って来ないなあ。多分同じ事を考えていたのか、珠緒さんが翼さんに聞くと、テラスで何か考え事でもしてるようですよ。と言っていた。

「あ！それより、桐生総一郎のウエディングドレスの写真！！唯ちやん、見せて見せて！！」

「ちょっと待ってくださいねー。えっと…」

ごそごそとカバンの中を漁って、手帳を取り出した。その中から、目当ての写真を取り出す。何回見ても、お父さんとお母さんは幸せな時間を切り取られたまま、そこに存在している。それにふっと笑って、雅ちゃんと珠緒さんに見せた。

「…凄い綺麗だわ…。そして、似合ってる。ここまで花嫁に似合ってるウエディングドレスを見たのは初めてよ。」

「本当に。今までこんなドレス見た事ないわね。隣にいるのは、唯さんのお父様かしら？」

「はい、そうです。」

ほうと息を付いて写真に見入っている二人に、翼さんも僕も見たいなあと言って、それに覗きこむ格好で見た。

その瞬間、翼さんは目を見張って止まった。え？どうしたの？と思っただのは私だけじゃなかったらしい。雅さんと珠緒さんも、訝しげ

な目を翼さんに向けている。絶句している翼さん写真を手に取り、直もその写真を凝視して、次いで私を見た。

「まさか…そんな…こんな偶然あるのか…？」

「どうしたの、翼？」

「何やってんだ、翼。」

先生が部屋に入ってきて来て、その異様な空気を嗅ぎ取ったのだろう。すぐさま翼さんに近寄っていくと、翼さんは手に持っていた写真を、先生に渡した。何だとはかりにその写真を見た先生もまた、雷に打たれたかのような反応を示した。そして、ようやく口を開いたかと思っただらそれは私の想像を超えた。

「…千歳先生…」

第四十二話（後書き）

ようやくここまで…。

話がダラダラしすぎて、いつまでも進展がないまま50話超えたらどうしよう！あながち、笑い話どころの騒ぎじゃない…。

次は亨視点です。やっぱり速度が遅すぎる…。すみません。

第43話

雨が夜景をやけに綺麗に魅せる。

紫煙がけぶる薄暗い部屋の中、俺は水滴が付いたガラス越しに、決して消える事の無い夜景を見ていた。

ホテルの部屋が高層階なのもあって、とても美しい。タバコを吸いながら夜景を見ていると、後ろから物音がして、その音のした方を見るとどうやら女が目を覚ましたようだった。

「ん…亨…？」

「起きたか。俺帰るけど、そのまま泊まってもいいぞ。ルームサービスでも何でも好きな頼め。」

「ん…そうね…。どうしようかな…。」

もぞもぞとベッドから女がこちらを見ているが、俺は一瞥しただけですぐに外の夜景に目を戻した。手にあるタバコは既にだいぶ短くなっている。灰皿に押し付けて消した後、再びベッドを見ると、そこにいる女が艶かしく微笑んでいる。退廃的な情景に目を細めるが、女の誘いには乗らないつもりだった。

「この関係ももう潮時だな。」

口火を切ったのは俺で、彼女は酷く驚いた顔をしているが、それが

演技なのはわかってる。わざわざそれを口に出すつもりも無い。俯いている風の彼女が、口を開いた。

「…そう…誰か好きな人でも出来た？」

「お前にそんな事を言う義理はない。」

「あはっ、出来たんだ！おめでとうっていつべき？ねえ、誰？私の知ってる人？教えてよー！！」

やけにしつこい女に内心イライラしたが、平静を装った。面倒くさい。それが頭にあつたが、この女を下手に扱つと翼の二の舞になるのが目に見えている。直もしつこく食い下がる彼女に、俺達の間にはそんな感情を持ち込まないことを思い出させようと思った。

「『都合のいい関係』の俺に何かの感情でもあつたのか？そんな事ないよな。」

ぐつと言葉に詰まつた彼女は、シーツを握り締めたまま再び俯いていた。

それを見て部屋を出ようと思つて、ベッド脇を通りすぎようとした時に手を引かれた。見ると、彼女が涙を浮かべて上目遣いで俺を見ている。大抵の男はそれで落ちるだろうが、使う相手を間違えてると思う。

「放してくれないか。」

「…確かに都合のいい関係だと思ってた…。でも、亨…私…！」

「そうやって、俺の中に翼を見るんだろ。いい加減、お前も気付けよ。お前は俺じゃなくて、今も翼が好きなんだって。」

目を見開いて俺を凝視している彼女の手を振り払わないように、慎重に外す。ぱたりと力無く投げ出された腕と共に、彼女はただはらはらと涙を流していた。顔を背けて、それを見ない様にした。なんでもかわかないが、堪らなく不愉快になったのだ。

泣く位好きで、双子の俺に翼の面影を見るくらいだったら、何故翼と付き合ってる時に二股なんて真似をしたのだろう。二股が発覚して翼と別れた後こいつは、二股した相手と付き合う事がなかった。だが翼だとて、二股で傷ついたはずだ。暫く彼女を作ることがなかったがようやく傷が癒えて、新しく付き合い始めたと思ったら、今度はコイツが妨害して結局何人も別れる事になっている。

コイツと翼の間で何があったのか知らない。ただ、俺がそれに巻きこまれるのは真っ平ごめんだと思う。

…抱いた後で言うのもなんだが。

「…最後に…キスしてくれる…？」

「何で。」

「最後だから…。お願い。」

再び伸ばされた腕を振り払う事は無かった。
触れるだけの軽いキス。伝わる温度はあるのに、全く感じないソレ。
俺とコイツには、何も無い。
確認と同時に終わる関係。

それだけだ。

「じゃあな、有紗。明日、学校でな。」

「…亨って、本当残酷な男…」

パタンとドアが閉まる瞬間聞こえた声に、俺が振り返る事は無かった。

第43話（後書き）

亨がタバコを吸うのはー…？
はい、御名答

第44話

有紗と別れてからテストがあつたお陰で、あれからは廊下ですれ違ふ位で何の接触を持っていない。あつちは何か言いたそうな顔だったが、無視しておいた。

今更何を話すような事でもないし、あいつが見ているのは今も昔も翼だけだ。その事を俺にはつきり言われた事で自覚すればいいのだが。

「…24点って…」

ていうか、有紗の事なんか考えてられなかった。

昨日今日と行われたテストの採点をさっさとしてしまおうと、まずは一年の分を取り出した。俺は一年と三年の中高入学組を受け持っている。そのために、テストもあと一日を残して俺は既に暇なわけだ。まあ、採点が残っているが、それも今からやればテスト終わりの次の日にはテストを返せる。片付けるのは早いに越したことはない。

さすがに期末試験だけあつて範囲は広い為、点数も余り伸びてはいない。

神崎のクラスは高校入学組だが、日本史、世界史、地理の社会は選択の為、中学入学組と混合クラスだ。

一年で日本史を選択しているのは、持ち上がりを含めて合計三クラス。たった三クラスだが、そこそこの奴らが集まっているので、赤点も少なく補習もまだ行われていない。

それなのに、24点を取った神崎。ぶつちぎりでも最低点数を獲得したこいつに、点数を出した瞬間、思わず頭を抱えてしまった。

おい、これどうするよ…。

これじゃあ再試も怪しいもんだろ…。

補習の担当は俺ではなく、もう一人いる持ち上がり組を担当している日本史教師のだが、このクソジジイは如何せん底意地っつーものが悪い。

ネチネチ嫌みを言われた後、『若い先生はいいですねえ、時間が沢山あって。空いた時間何してるんですか全く私にはわかりませんなあ』と軽くセクハラじみた言動を繰り返すおかげで、教員連中…とりわけ若い教員からすこぶる評判が悪い。

しかも自分が、さも仕事をしていきます的な雰囲気を出しているのが癪に障る。実際の仕事量は俺の半分にも満たなくせに、あのクソジジイ。

実際、あまりの仕事量の少なさから、理事長から目を付けられているという事は本人だけが知らない事実だ。

救いの無い事に生徒からの人気もあまりよくないようで、あからさまに嫌っている子達も多数いる。男女学年問わず嫌われたクソジジイを微々たる程度にだけ気の毒には思うが、俺は全てを許容出来る程広い心の持ち主ではない。

とりあえず再試をなんとかすれば補習はないのだが、この点数と解答を見る限り、はつきり言って難しいかもしれない。

放課後を潰すか、冬休みを潰すか…補習を受けるとしたらどっちかなんだが、冬休みを潰すとなると桐生さんや美奈がうるさそうだ。

と言っか、絶対文句を言いそうだ。

何せ補習授業はクリスマスにも行われる。神崎に彼氏がいないのはわかってはいるが、あのシスコン兄妹が義妹の為には自身のクリスマスをも放棄しそうな勢いだから、絶対に補習は避けさせてあげたい。

これはどうしたものかと悩んだが、結局は本人次第なんだよな、こういうのって…と思い直した。追試と言っても、問題は期末の問題をそのまま出題するので、死に物狂いでやればなんとかなるだろう。

…多分。

一息つこうとコーヒーを煎れて、再びデスクの前に戻ったら携帯が鳴っていた。時間を見ると、22時。こんな時間に一体誰だと思って、表示を見ると桐生さんだった。

あまりのタイミングの良さに少し笑ってから電話に出た。

「もしもし。」

『あ、亨？僕だけど、今大丈夫？』

「はい、大丈夫ですけど、どうかしました？」

『悪いな、こんな時間に。あのさー、少し頼みがあるんだけど、聞いてもらえないかな。』

頼み？なんか、嫌な予感がするのは気のせいかな？

「内容にもよります。」

『おっ、じゃあ内容によってはいいんだな？』

「だから内容によります。合コンの数合わせとかマジでやめて下さいよ。桐生さんだったら合コン行かなくても間に合ってるでしょう。」

「

『ははっ、合コンじゃないって。大体合コンなんて行ったことないし。…と言ってもまあ、当たらずとも遠からずってところかな…。』

「じゃあ嫌です、お断りします。ていうか、桐生さん合コン行ったことないんですか？」

『だって零からお前は来るなって言われてたから行ったことないよ。って、おい、待て待て！断るのが早いぞ。実は、年明けてからすぐに『カサブランカ』のコレクションがあるんだが、その男性モデルが一人足りないんだよ。お願い亨、頼まれてくれないか？』

げ。

なんだって、そんな面倒な事を頼もうとするんだ、この人は。そもそも俺はモデルじゃないし、『カサブランカ』のコレクションと言えば、あの母親と祖母も毎年観に行ってる。なのに、モデルなんか絶対嫌だ。煩いに決まってる。

「嫌です、お断りします。すみません、絶対無理です。」

『たーのーむっ！！！！僕がこんなに頼んでも無理って言うわけ？』

「嫌ですよ、マジで。大体、『カサブランカ』ってレディースだけじゃなかったでしたっけ？なんで男のモデルが必要なんですか。メンズの服出すんですか？」

『ああ、メンズラインのモデルじゃなく、エスコート役っていうかな。あくまでも『カサブランカ』はレディースラインだけなんだけど、今回はランウェイ歩いて行く時に男のモデルがエスコートする事になったんだよ。』

「へえ…。て言うか、まだコレクションの内容って秘密なんじゃないんですか？桐生さん。」

『ああ、ここまで聞いて嫌だとは言わせない作戦だ。亨、出る。』

「嫌です。用件それだけだったら切りますよ。俺、まだテストの採点が残ってるんです。」

直も食い下がろうとした桐生さんだったが、テストと聞いて少し大人しくなった。どうせ、義妹の事でも考えてるんだろうな、このシスコンは…。

『…お前、今なんか失礼な事考えてないか？』

「いや？どうせ、義妹の事を考えてるんだろうなと思っただけです。当たり前でしょう？」

『…ちつ…お前、本当に嫌な奴だな。じゃあ、唯の点数は？赤点取って無いよな？』

舌打ちまでした桐生さんに苦笑しながら、この点数は言ってもいいのだろうかと一抹の不安を抱いた。この点数の悪さ、前回の非じゃないぞ。しかも、案じている通り赤点だし…。俺が黙ったので、大体は察したのだろう。桐生さんは、少しだけ暗い声で「赤点なんだな」とボソリと呟いた。

『…何点なんだ…？』

「24点です。」

『にじゅ…っ！…そうか…唯…父さんに雷落とされるな…可哀想に…。』

俺としては、可哀相なのは神崎の頭だと思ったが、流石に言うのは憚られるので止めておいた。

年号は適当、人物は正体不明の奴ばかり、説明問題は最早問題の意味を成してはいなかった。いつそのこと採点をしないでそのまま返そうかと思った位だ。

「桐生さん、『鉄砲』『設楽ヶ原』『織田信長』『武田勝頼』使って長篠の戦いを説明出来ます？」

『うわっ、なにそれ、懐かしい！えーっと？あれだろ？』織田信長が設楽ヶ原において、鉄砲を用いて武田勝頼率いる武田軍を退けたってやつ。』

「神崎は『織田信長と武田勝頼が設楽ヶ原で鉄砲の練習をした』って答えたんです。」

『…随分とざっくりした答えな上に、なんか間違ってるな…。』

真面目に書いてるのが哀愁を誘う。

基本的に神崎の答案には空欄がない。空欄が無いのはいいことだが、数を撃つても当たらないときは当たらないもので、ほぼ完璧に間違えている。はつきり言って、24点でも取れた方だと思う。

「神崎は再試があるので、桐生さんもちゃんと置いておいて下さいよ。ちゃんと日本史理解しろって。」

『再試…。じゃあ再試が良かったら補習は無しなのか？』

「そう言う事です。補習は放課後か冬休み返上ですから。」

『冬休み返上とかって最悪だな。僕が唯という時間が無くなるじゃないか。』

端から聞けば、彼氏の様なセリフに軽く呆れて、次いで悠生の事を更に哀れに思った。

俺だったらこんなシスコン兄がもれなく付いてくる彼女なんて、絶

対にお断りだ。しかも兄だけじゃないし…。

『お前、また失礼な事考えてるだろ。』

「気のせいですよ。じゃあ切りますよ、いいですか。」

『ちっ、ムカつく。あんなに可愛い唯の事考えて何が悪いんだ、全く。ていうか、やっぱりモデルの件は考えて直す気にはならないか？』

「しつこいですね、嫌ですって。なんだったら翼に話してみましようか？まああいつも嫌だつて言いそうですけど。大体、俺らに頼む位だったら、桐生さんがやったらいいじゃないですか。一時期だけとは言え、やってたじゃないですか。ねえ、『広告界の伝説』。」

『ははっ…古い話を持ち出すねえ、お前は。まああれは、唯におねだりされて受けてみたら受かっただけだし、受けるつて決まったからには本気出さないとね。そしたらいつの間にかあんな事になっただけなんだけどさ。だから、僕がモデルをやる事は無いよ。』

神崎からおねだりつて…。そんな昔からシスコンだったのか…。しかもそれが今や『広告界の伝説』とまで言わしめる逸話になっているとは…。いやはや、シスコンもここまで行くとすごいな。

『亨…お前失礼すぎるぞ。』

「何でもありません。じゃあとりあえず翼に聞いてみますよ。ま、十

中八九断られると思いますがね。」

『ああ、頼むな。じゃあな。』

そう言っつて電話が切られ、ふと笑った後、俺は冷めたコーヒーを飲みながら残ったテストの採点を再開した。

第44話（後書き）

唯の学校は、一学年8クラス。

うち、2クラスが中学入学組、3クラスが高校入学組、残り3クラスが持ち上がり組となります。

中高入学組は試験を受けて進学して来たのに対して、持ち上がりは理事長と3人の教師との面接と小論文だけ。

あくまでも隔たりは無いものの、授業の内容には若干差があります。

第45話

「神崎ちゃん、英語満点でしたよ。聞いたところによると、数学と国語もほぼ100点らしいですね。凄くないですか？」

金曜日の放課後、日本史準備室で仕事をしていると、悠生が缶コーヒーを二つ持って入ってきたので、有り難くコーヒーを貰い、ついで休憩も兼ねて悠生の話を聞いてやった。

意気揚々とテストの事を話す悠生を見て、軽く溜め息をついた。

そりゃあ自分の惚れてる子が、自ら担当している英語で100点を取って嬉しいんだろうが、こっちは赤点取られてる。おまけに24点の最低点。

見事に神崎の担任に絶句された上に、もう一人の日本史のクソジジイにも下びた笑いと嫌みな言葉を献上された。

「遠藤先生の教え方が駄目なんじゃないですかあ？私のクラスで、赤点を取った生徒は居ませんでしたよ。それより、補習授業にならないように追試でしっかり点数取らせて下さい。ま、日本史以外は平均90点以上取ってる神崎なら、ちゃんと教えれば簡単なものでしょうから。頼みましたよ、遠藤先生。」

いちいち反論するのも面倒くさいのでさっさと準備室に戻った。

準備室には一応クソジジイの席もあるのだが、あいつは大概職員室の方に入り浸っているので、ほとんどこの準備室は俺一人の部屋と化している。

その為、よくこうして悠生や龍前寺が来たりする。

「そう言えば、亨さんの所はどうだったんですか？日本史。赤点い
ました？」

「神崎が赤だ。」

「うっそ！？真面目に！？ちなみに何点なんですか！？」

「24。」

「…うわっ…。」

あーあ…と言う感じに口元を覆った悠生は、コーヒーを一口飲んだ。
俺もそのコーヒーを飲んだが、微妙に甘めのコーヒーが疲れを癒や
す。

「じゃあ、追試ですか。他に再試受ける子いるんですか？」

「ああ、当日休んだのが二人いるから、そいつらと一緒に来週再試。
まあ、問題は同じだから大丈夫だとは思うんだがな。補習は流石に
…。」

「あー…補習もありますもんねえ。そう言えば、補習授業って亨さ
んじゃないんでしょう？」

「そう、俺じゃなくて、そっち。」

顎をしゃくって、誰もいない席を示す。
途端に、悠生の顔が嫌そうに歪んだ。

「うわー、ザビエル！？最悪っすね。」

「ははっ、ザビエルって…。」

くつくつくと笑ってザビエルと呼ばれたクソジジイの席を見た。
本当、たまにしか来ない席なのに、何故か教材やらプリントやらが散乱している。整理しろと言ってやりたいが、一応あっちの方が先輩なので黙っているのだが、そもそもあまり準備室に来ないので、言うタイミングも無い。

だがどうにかして欲しいのは事実で、職員室にいるクソジジイに黙って全部棄ててやろうかというも思っている。

そのクソジジイの寂しい頭頂部の有り様を見てザビエルと呼んでいるのは生徒達だが、言い得て妙なわけで。今や教員達の中でもザビエルで通じるようになってる。

実際、あの男はモデルとなったザビエルの様な生き方はしていないのだが…。

むしろ比べるだけザビエル…いや、イエズス会に対する冒涜だ。

「だって、ザビエルじゃないですか。ていうか、名前何でしたっけ。」

「

「お前、いくら何でもそれは失礼すぎる。谷野^のだよ、谷野。」

「あー…そういや、そんな名前でしたねえ。でも、ザビ…おっと、谷野先生が補習とかよくやりますね。あの人、面倒くさいの凄い嫌ってるじゃないですか。噂じゃ、矢野が受け持ちのクラスで赤点なのって、問題をわざと簡単に作ってるって聞いたんですけど、本当なんですか？」

確かにそれはある。

俺のクラスとは少し進行状況も違うのだが、基本的に谷野が作る問題は簡単だ。もしくは、採点が甘め、だからこそ赤点が出ない絡繰りがある。

一応テストの設問に関しては一定の基準がある為、谷野が、とりあえず赤点を出さないように作られた問題を、学但はなかなかOKを出さない。毎回毎回テストの度に、ギリギリまでテスト問題作成に苦慮している谷野の姿はいつしかテストが始まる恒例行事となっている。

「多分、谷野が作ったテストなら神崎も赤点じゃなかったと思う。」

「ははっ！そんなに簡単なんですか？」

「俺やってみただけど、十分で出来た。」

「マジですか！俺もやってみたい！問題ありますか？」

手元にあつた問題を悠生が面白そうに解いている間、明日神崎に教えてやる事になる教材をパラパラと読んでいた。

とりあえず、後で祖母に電話をして俺が神崎に勉強を教えてやる旨になつた事を説明して、渡瀬にももう一度、彼女の住んでいるマンションの住所を教えねばと考えていると、悠生が顔を上げた。どうやら解き終わつたらしい。

採点してやると、イージーミスはあつたもののほぼ満点だった。

「懐かしいですねー、日本史！というか、本当に簡単でした、これ。いくら持ち上がりとは言え、こんな問題でいいんですか？」

「いいはずはないな。そろそろ理事長が動き出しそうだし。来年度にはいないんじゃないか？」

くつと口端を歪めて笑つと、悠生が軽く身を引いた。

「うわぁ、亨さんこわーっ……。ま、同情する気になりませんけどね。俺もザビエル嫌いだし、何よりも神崎ちゃんを見る目が嫌い。」

心底嫌そうに言った悠生の言葉が引つかかって、もう一度聞いた。

「何だ、それ？」

「亨さん、気付いてませんでした？ザビエルが神崎ちゃんを見る目が、すんげえ舐めまわす様に見てるの。幸い、神崎ちゃんは気付いてないみたいけど、アレ、マジでヤバイ。もし再試が駄目で補習を受けるのが神崎ちゃんだけだったりすると、危ないと思うんですよね。」

「本当か？」

うんうんと頷いた悠生が、放送で呼び出されてしまったのでその話は終わったが、何とも言えない感じがする。

悠生がああ言っている以上、確かに補習で二人きりにさせるのはマズい…。

これは、本格的に再試で合格点を取らせないといけなくなったな、と少し焦りにも似た思いが俺を支配した。

その後マンションに帰り、早速祖母に電話をした。

珍しく俺からかかってきた電話に初めは訝しがっていた祖母だが、事情を話すと快く請け負ってくれた。

「じゃあ、渡瀬を迎えにやるのは午前中にして下さい。俺も時間を見計らって行きますから。」

『そうね、そうするわ。亨が来るまで、マフラー編んでもいいしね。あ、でも雅さんがいるわねえ。』

…いるのか。

「母さんに神崎を会わせないで下さい。嫌な予感しかしないので。」

『善処するわ。じゃあね、亨。早く来なさいね〜。』

祖母の楽しそうな声に何やら嫌な予感がしたのだが、聞かなかったふりをして祖母との電話を終えた。

第46話

予定より早い時間に実家に着くと、出迎えた渡瀬がやけに上機嫌で驚いた。

我が家の執事は、父が生まれる前から仕えているらしく、まさに家の事を知り尽くしている。

小さい頃はよく、爺、爺と言って困らせたものなので、その影響からか、未だに俺や翼の事を『坊ちゃん』扱いするので、少し困る。

「おはようございます、亨坊ちゃん。大奥様と奥様は、唯様を連れて奥様の自室にいらっしやいます。」

「おはよう、渡瀬。…神崎は早速、母さんに捕まったのか…。」

「左様でございます。」

…案の定だ。

何やら耳を澄ませば、キヤーキヤーと母のはしゃぐ声が聞こえてきて、思わず眉間に力が入る。

それを見て、渡瀬がくすくすと笑っているので、溜め息を一つ付いた。

するとそれを聞いた渡瀬が、どこか関心したように口を開いた。

「唯様はとてもお可愛らしいお嬢さんでいらっしやいますね。私や後藤に対して敬語は不要だと仰いましたよ。『神崎様』と言つのも止めてくれと。」

「ああ、まあそうだろうな。」

そりゃあ単なる高校生だしな。

桐生総一郎の義理の娘って言ったって日常を見る限り、ワガママに育てられている感じもないし。

あのシスコン兄妹にベタバタに甘やかされていていそうなのに、あそこまで素直に育ったのは、奇跡だ。

きっと亡くなったという神崎の母親がしっかりとした人だったんだろう。

「それも踏まえ、私も後藤もその他の使用人共々、最早、唯様の愛らしさにメロメロでございます!!」

…

は？

怪訝な顔をした俺を見ていた渡瀬は、素早く俺の背後に回り、背を押し始めた。

何だと思いつつ後ろを振り返るも、ニコニコと笑う渡瀬が直も背を押し、先を促す。

「さあ、亨坊ちゃん、唯様がお待ちでございますよ。お早く行って

差し上げて下さいまし！この渡瀬、唯様のお可愛らしい姿を保証いたします！！」

耄碌もじろくしたか、渡瀬…！

だがよくよく見ると、そこにいたメイドまでもがうんうんと頷いているのを見て、これは駄目だ、本気だと確信した。

母の毒牙がここまで…。

しょうがないので言われた通り、『魔のピンクの間』に足を運ぶと開け放たれたドアの向こうにいたのは、ピンクのメイドだった。

いや、正確に言うと、ピンクのフリッフリのメイド服と、ブリッブリのフリルがたっぷりのエプロンを付けた神崎だ。

俺に気が付いた神崎は、軽く狼狽えたが、そこにそもそも元凶である母、雅と、その母とノリノリで神崎で遊ぶ祖母、珠緒の姿が見えたので、軽くキレた。

遊ぶつもりだったら帰るぞと言うと、慌てた神崎が着替えようとしたのだが、まだ遊び足りない母がゴネた。人形遊びが好きな母の事だ。このまま黙っていると、一日が呆気なく潰れる。つか、潰される。

ふと思い立ち、携帯のカメラを使ってメイド姿の神崎を撮った。これを桐生さんに送ってやろうか…。

この写真を桐生さんに送ると、すぐさま俺に電話がかかってくるだろう。それもすごい勢いで。

その光景が、他人の俺ですら手に取るようにわかるのに、そこは義

妹。自分の義兄の性格はわかっているらしい。心持ち青くなつた神崎が母達を追い払い、ようやく着替えてくれるようになったので、またはーっと溜め息を付いた。何だか朝から疲れるな…と既に帰りたくなつた。

とりあえず、着替えている神崎を待つためにリビングでお茶を飲んでいて、ふと携帯で撮つた写真を何気なしに見ていたら、覗き込んできた母がニヤリと笑つたのを見て、少しばかり顔が引きつった。何時も、この顔をした母がする次の行動が読めない。祖母は我関せずで、のほほんとお茶を楽しんでいるので当てにはならない。

一触即発の雰囲気の中、ようやく神崎が現れ、その時にはもう母の興味は神崎しか無いので、ある意味助かった。

しかし、変則で仕掛ける母に、簡単には油断をする事が出来ないのだが。

話題は何時の間にか、神崎が着ている服の話になっていた。黙つて話を聞いていると、どうやら自分で編んだらしい。

自分は体が小さいからすぐ編めると言っているのだが、どう見ても売っているものと遜色がないそのカーディガン。やはり器用だなと関心していると、母が自分にも編んでとねだつた瞬間、神崎の目が変わった。

他人に編むのが苦手だと言って断る彼女に、不思議そうな顔をしている母と祖母。

苦笑しながら俯く神崎は手持ち無沙汰を隠すかの様に、手に持った

カップをいじっていた。

この前の様に機嫌が急降下し、怒りこそしなかったが：
なんでそんなに泣きそうな顔をしてる？

俺より年下の、それも教え子の中にはそんな風に笑う子はいない。
それほど彼女は、年に似合わない笑い方をする。
何を抱えているのかはわからないが、この話題は美奈の言っていた
とおり、神崎の地雷なのだろうなと思った。

辛そうに笑う彼女をそれ以上見たくなくて、話を断ち切って勉強を
させようと立ち上がったって、神崎を促す。

当初はリビングでしようと思ったが、ここじゃ先程までの雰囲気も
あり、幾分空気が悪い。

それに、母も祖母もいるので気が散るだろうと思い、自分の部屋で
やろうと連れて行こうとしたら、母が余計な一言をくれたので、怒
鳴っておいた。

その時にはもう、あの悲しそうな顔をしていなかったの、内心ほ
っとして部屋に神崎を押し込んだ。

ただ、もうあの顔はもう見たくないなと頭の片隅でぼんやり考えて
いた。

第47話

俺の部屋で勉強を教えるのは良いが、困った。
何が困ったかと言えば…

「適当に年代書くなっつってんだろ！」

びくりと身を竦ませた神崎の、あまりの日本史に対する関心の無さ
だ。

いや、関心が無いわけではないだろう。資料を紐解きながら説明
してやると、一生懸命見入っているから。
だがしかし、それが実にならない。

英国数は満点だったと悠生が言っていた。

確かにあつちは記憶する教科ではないが、如何せんこの落差は酷い。
とは言えようやく何とかなってきたので、様子見も兼ねて谷野が作
ったテストをやらせてみることにした。

「とりあえず、これ練習問題だからやってみる。簡単だから。」

「はい。」

せっせと問題を解いている神崎を尻目に、自分はパラパラと教科書
を読んでいた。確かに範囲は広がった。だが、あと一学期を残して

となると、悠長にやってはいられないのが実情だ。
残す三学期でどこまでやれるか……。多分世界大戦以降はやれないだ
ろうなと考えていると、神崎がぱっと顔を上げた。

「終わりましたー。」

「ああ、お疲れ。採点するから少し休憩していいぞ。」

「はい。やったあ。」

そう言っただけで神崎はふわっと笑った。それはさっきの笑みとは違うも
ので、年相応のもののように思えた。と言っただけで、幼い。童顔も相ま
って、やはり高校生には見えない。

うーんと体を伸ばしている彼女を横目に、採点し始める。

間違えている箇所もあるが、大分マシな解答に少し安堵した。
予想通り谷野の問題は神崎にも簡単だったようだ。持ち上がりのク
ラスがこの程度の問題で、本当にいいのかと改めて心配になる。

簡単だったと言っても、やはり間違えているのは俺が作った物と同
じ問題だ。

どうやら江戸時代の三大改革である『享保、寛政、天保の改革』が
特に苦手らしい。

俺の手が止まったのを見た神崎が、手元にある採点済みの解答用紙
を覗き込んで来たので少しビビった。

近い。

いくら何でも近すぎるだろう。

体を寄せてきたので、長い髪がサラサラと机に落ちた。鬱陶しいとばかりに顔にかかったそれを耳にかけたのだが、どうも子供のくせに仕草が大人びている。多分悠生だったら、身悶えするほど喜ぶだろう。

色んな意味で。

胡乱マヌシ気に見ていた俺に気付いた神崎が、どうかしたんですか？とばかりに首を傾げた。

無意識か、こいつ…。末恐ろしい高校生だ。

「お前…こんなに近くてどうも思わないわけ？」

「あ、すいません。近かったですか。」

そう言って身を引いたのだが、全く焦りって言うのが感じられない。多分、この位の距離感なんだろう。あのシスコン兄妹と。

今度桐生さんに言っておいたほうがいいのかもしれない。

「あんまり無防備になるなよ。お前、そういう所鈍そうだから。」

「はい？無防備？」

「普通、今みたいに近かづいたりしたら男は勘違いするぞ。気をつけるよ。」

「……はあ……？……そう言えば同じ様な事、最近言われたんですよね。先生、高橋さんってわかりますか？高橋零。お兄ちゃんの親友なんですけど。同じ大学でしたよね？」

「零先輩な、知ってる。うちの大学で一番頭良かったんじゃないか、あの人。院に進んでから国家一種取って、確か国交省だか総務省に入ったんじゃないか。」

零先輩は桐生さんの親友で、俺もよく飲みに行ったり、遊びに付き合わされていたりしていた。明るく気さくな人で、真っ直ぐな性格をしている人だった。

それでいて優秀な頭脳の持ち主だった。大学院に入ってそこを主席で卒業し、あっさり入庁したかと思ったら、ものの二年かそこらで退官したと話で聞いた。

久しぶりに桐生さんと会ったと思ったら、どうやら未だに零先輩と連んでいるらしい。そして言葉尻を取る限り、一緒に仕事をしていると思われる。相変わらず、あの二人は仲がいい。

「高橋さんにも言われたんですよ。『簡単に男を部屋に入れちゃ駄目だよ』って。別に高橋さんだったら何てこと無いんですけどねえ。」

「おい、ちょっと待て。零先輩との話の内容がわからないんだが。」

おいおいおい。

いくら何でも無防備過ぎるだろう。確かに零先輩が忠告するのもわかる。

しかも的を得てると来たもんだ。本人は何のことだか全く理解していないが…。

話を聞くと、父親の書類を取りに来た零先輩を、自分以外は誰もいない部屋に上げようとしたらしい。そこは先輩がきちんと断った上で、更に説教をしたようだが、なんで説教されたかわかってないなら、意味がない。

「桐生さんもちゃんと言ってやりやいいのに…」

「それも言っていましたね。『秀人も教えてやればいいのに』とかなんとか。」

「そうだな。お前は女の子なんだから、もう少し自覚って言うのを持ちなさい。そんなだったら襲われても文句言えないぞ。」

「私を襲うって事は、相手はロリコンですね！？うはー…」

…

天然ここに極めりって感じた。

こつも自分自身に対しての危機感が薄いとは思わなかった。マジで一回桐生さんに忠告がてら説教しないとイケない。

義妹は無防備すぎるよ。

「…マジでお前よくこれまで何にも無かったな。告白されたりしたんだろ?」

「告白? …… あー! あれは全員冗談でしたよ。だって、なんか呼び出されたのはいいんですけど、結局告白らしいものは全然されてませんもん。」

神崎はけらけらと笑っているが、悠生に聞いた限りではそうではないらしい。確か遊んでるので有名な生徒も告白したと言っていたが…。

「俺は二年の加藤にも告られたって聞いたけど。」

「かとう? 二年の… 加藤… 加藤… ああ!! 体育館裏の!」

「体育館裏? 呼び出されたのか?」

「そうなんですよー。一人で体育館裏まで来てねってウインクされたんですけど、その瞬間いきなり青ざめて、いや、やっぱりいいや! っつて。結局何だったんだかよくわかんないんですね。」

……

何となくわかった感じが…

「…近くに生徒会の役員がいなかったか？」

「そう！よくわかりましたね！！龍前寺会長と篠宮先輩が後ろから声かけてきてですね、『神崎ちゃんには指一本触れさせないわ』とかなんとか…。意味不明ですよ。」

なる程。

どうやら生徒会の圧力と言うのはこの事らしい。

道理で神崎に浮いた噂が無いわけだ。あの生徒会をバックに持っているこいつに、おいそれと告白なんて出来ないわけだ。くわばらくわばら。

「…大変だな、お前も。先生は心配で泣けてくるよ。」

「おっさんくさいですよ、先生。お兄ちゃんより年下のくせに…っ
てお兄ちゃんも年明けたら三十なんですよ！。いい加減、ふらふら遊んでないで身を固めて欲しいんですけどね。」

「…ふらふら遊んでる…」

「遊んでますよ、お兄ちゃん。一応上手く隠してますけどね。恋愛音痴のくせに。」

桐生さん、愛する義妹が軽蔑の眼差しで貴方を見ていますよ。

ていうか。

「おっさんくさいって何だ!!」

「うっ!話の流れでそこはスルーなんじゃないんですか!!」

「誰が流すか!大体桐生さんが遊んでる事より、お前が今遊んでるんだろ!!見ろ、俺が作ったのと同じ所間違えるぞ!江戸時代の改革は、享保・寛政・天保!徳川吉宗・松平定信・水野忠邦!!徳川吉宗はわかるだろ?暴れ 坊將軍のモデルだ!!」

「暴れ 坊將軍って何ですか。平成生まれにわかるように言って下さいよ、昭和生まれっ!!」

ふんつと顔を背けた神崎に、ブチつと俺の何かが切れた。

「…ほおーう…。どうやらとことんおっさん呼ばわりする気なんだな。わかった、じゃあ俺も甘やかすのは止めよう。スパルタ方式だな。知ってるか、古代ギリシアのスパルタから派生した言葉で、別名拷問教育だ。」

「…拷問…?」

「手加減無しだからな。」

それから渡瀬が昼食だと呼びに来るまで、悲鳴混じりの神崎の絶叫が俺の怒声と共に、穏やかな日曜の遠藤家に響き渡った。

部屋から出てきた神崎の憔悴しきった顔を見て驚いた渡瀬は、俺に非難がましい目線を送り、彼女には痛ましい者を恭しく労るかのよう^{うやうやしく}に接していた。

後から渡瀬にこっそり耳打ちされた。

「唯様をいじめる坊ちゃんを情けなく思います。」

と。

第47話（後書き）

おまけ

「亨…唯さんから魂が抜けているように思えるのだけれど…」

「知りません。」

「唯ちゃん、もう私が守ってあげますからねー！怖い亨はいないわよー。」

「聞こえてるぞ。」

第48話

珍しく昼は洋食だった。

しかも料理長が腕によりをかけたと見える。いくら家が金持ちだとは言え、俺ですら滅多にお目にかかれない料理がずらりと並んでいる。

基本的にうちの食事は雇っている料理長が作るのだが、たまに一品だけ珍品が出る場合がある。そう言う時は大概祖母か母が料理長にリクエストをするか、自分で作った物なのだが、それが卵かけご飯だとかお好み焼き、たこ焼き等が出される事が幼い時からよくあった。

昼飯とかだったらまだいい。問題はそれらが出るのは夕食だという事だ。

高校生の食べ盛りに卵かけご飯……。いや、別に文句は言わない。好きか嫌いかわねれば、好きな方だ。だが、夕食にそれだけぽんと出された時には、翼と二人で泣いた。いや、父も祖父も泣いていた。

当の本人達はお腹いっぱいだわーと言って満足げだったが、腹を空かせた男共は気を利かせた渡瀬が夜食を持ってくるまで堪え忍んだという、大して思い出したくもない思い出がある。

そんなほろ苦い経験を思い出しながら、やけに豪勢なフレンチを食べながらきゃいきゃいとはしゃぐ身肉と、丁寧にフォークとナイフを使う教え子をどこか他人事のように思いつつ、黙々と食べた。

テーブルマナーが完璧ねと誉める母に、海外によく行っていたと神崎が答えているのを、食後のコーヒを飲みながら黙って見ていた。そう言えば、クリスマスもパリに行くとか言っていたような気がする。だったらなおのこと、補習は受けたくないだろう。

だけど、高校生のくせにクリスマスにパリかよと呆れてもいた。まあ、当然ながら桐生さんは行かせたくないみたいだが、連れて行くのは桐生総一郎だと言っていたし、それはそれでいいのだろうけど。

気が付くと母達の会話の内容は、その桐生総一郎の話になっていて、そして『カサブランカ』のサプライズだなんだの事で盛り上がっていた。

『カサブランカ』と言えば、桐生さんのモデルの件を翼に話しておかねばならないだろう。とは言っても、あいつも十中八九断るだろうが。

確か『カサブランカ』のファッションショーは、毎年同じ日に開催されるはず。だとしたら、その日は確か平日だ。だったら尚更出れるわけがない。しかも、俺だって学校がある。そうなるとやはり桐生さんの頼みは、聞けない。誰か他の人に当たってもらおうしかないだろう。

…て言うか、神崎が一言『お兄ちゃんがやればいいじゃない』って言えば、全ては解決しそうなものなのだが…。

そんな事をつらつら考えていると、急に祖母から話を振られたのだが、内容をあまり聞いてなかったのと、答えようがない質問だった

ので、断りを入れて席を立った。
神崎がじーっと見ているようだったが、彼女とは視線を合わせずに、庭に出てそこにあるイスへと腰掛けた。

帰ってこないわけではない実家だが、今ではずいぶんと足が遠退いているのも事実で。今いる庭で、よく翼や従兄弟達と走り回っていた事を思い出す。

俺は大学生の時にこの家を出て、祖父が所有しているマンションへと居を移している。

元はビル一棟丸々分譲だったのだが、最上階のペントハウスは売りに出さずに祖父名義の物となっていた部屋を譲り受ける時に、祖父と一つ約束をしている。

『女は連れ込むなよ』

と、祖父は意地悪く笑った。

元々自分の部屋に女を連れ込まないので、その祖父の約束はしなくてもよさそうなものだったが、これから見合いとかになってその約束を盾に取れば、自分のテリトリーは守られる。そう考えて、今もその約束は有効だ。

遠藤グループ総帥の祖父は、既に八十を迎えようかと言っただが立派に健在で、「ひ孫の顔を見るまで死なん！」が口癖である。

ついでに、俺に有り余るほどの見合い話を持ってくるのもこの人なのだ、絶対的運命論信者の祖母によって、その辺はうまくあしら

われている。翼はその際たる被害者だが、自分には彼女がいますと言って祖母を味方に付けた翼は、なんとか釣書の山から逃げている。

そう言えば今日はまだ祖父の姿が見えないが、多分趣味の市場巡りにでも行っているのだろう。

一大グループの総帥のくせに護衛も付けずにふらふらと出歩く祖父は、普通に見かける年寄りのような格好で、築地や太田市場をフラリと立ち寄り、帰ってくるると活のいい魚や、新鮮な野菜を買ってくる。それが当たり前のように食卓へ上がるのだが、撒かれた護衛達からは悲鳴混じりの苦情が上がり、息子である父からも再三言われているのにも関わらず、祖父はフラリと出歩く。

そんな祖父を敬愛して止まない翼も、実は市場巡りが好きだ。一時期、市場関係者の中で『あの遠藤グループの総帥が孫と二人でマグロの競りを見学してる』と囁かれたのだが、実際その姿を目にした者は少ない為、収束したらしい。

そう思っていると、後ろから人の気配がして振り返ると、スーツ姿の翼が立っていた。言ってた通り、今日も仕事だったようだ。

「よっ、亨、お帰り。」

「お前もな。今日も仕事か？サラリーマンは大変だな。」

「ははっ、それに月曜からロンドンに出張だしな。それよりさ！唯ちゃん来てるんだろ？どうだった、母さん。」

「…俺が来たとき、既にコレ。」

そう言つて、ピンクのメイド姿がやけに似合う神崎の写メを翼に見せた。母の秘蔵中の秘蔵であるあのピンクのメイド服、あの母が力を入れないわけではない。それがわかっているからこそ、翼にその写真を見せた。

「どれど……こっ……れは……すごいな……」

「…だろ？引き剥がすの大変だったんだ。」

「そうだろうな。…このメイド服、母さんが大事に大事にしてたやつだろ？確かオーダーメイドだって聞いたけど。」

オーダーメイド…。

一体誰に着せるためにオーダーしたのか考えたくはないが、それを難無く着こなす神崎。

可哀想に、母のおもちゃ決定だ。

絶句していた翼もようやくシヨックから立ち直ったのが、マジマジと写メを見始めた。

「んー…でもさあ、確かに可愛いな、唯ちゃん。」

「…は？」

「これさー、ロリ系好きな奴にはたまんないかも。そう思わない？
アキバとか行ってもそうそこまで可愛い子いないんじゃない？」

……

「秀人さんが可愛がるわけだよな。こんなに可愛かったら、義妹と
は言え愛でる気にもなるわ。唯ちゃんが妹だったら、僕もシスコン
になってるかも。」

どうしよう、翼が壊れた。

「…た…たすく…？」

「あ、僕ロリ系好きじゃないから安心しろ。犯罪者にもなりたくない
いし。ちなみに僕の好みは、僕のハニーみたいな癒し系だから。で
も、唯ちゃんは別かなー。こりゃーファンだね、ファン。」

そう言つて、スキップでもしそうな感じで皆がいるリビングへ向か
った翼を見て、何か恐ろしい物でも見てしまったかのような恐怖感
に襲われた。

ハニー…。

双子の兄が、自分と同じ顔をしている翼が彼女の事をハニーと呼ぶ。
それは、ジンマシンでも出るんじゃないかと思う程の衝撃だった。
いや、マジで。

あんな姿を見たら、有紗の翼に対する執着心もあっさりと崩壊するんじゃないだろうか。

その事に軽く身震いをして、リビングへと戻ろうと立ち上がった。秋晴れとは言え、既に季節は終わりを迎えようとしているので、日あたりはいいこれも風が冷たい。ずっといると寒い。少しばかり冷えた身体を温めようと、手をさすった。

これから本格的に冬が来るなと思いつながらリビングに入ると、翼が信じられない物を見たと言う風に俺を見た。

双子の勘と言うやつだ。すぐに翼の隣に立った俺は手渡された一枚の写真を見て、時間が止まった。

薄々、どこかで感じていたんだろうと思う。

その事に気が付かなかったわけじゃない。

そんな可能性があることはどこかで感じながらも、そんな都合のいい偶然なんか滅多にあるもんじゃないと否定していた。

だけど、手元にある、今この瞬間に俺が見ているこの写真は、全ての偶然を必然に変える。

俺は、この人を誰よりも尊敬している。

俺が、教師になったのを見てもらいたい人。

会つのを躊躇っているのは、まだまだ俺が教師としては未熟だからで。

どうせだったら、しっかりと教師面した俺を見てほしいと思って、会いたいのを我慢している。

それなのに

あっさりと貴方は俺の前に顔を出す。

憎たらしいくらいに。

俺が祖父母や両親より尊敬して、敬愛してやまないその人の名は

「千歳先生」

第48話（後書き）

次から唯に戻ります。

第四十九話

「千歳先生って、先生、私の父を知ってるんですか？」

まさか先生の口から、お父さんの名前が出てくるとは思わなかった。しかも、翼さんも先生と同じ反応だ。雅ちゃんと珠緒さんは、さっぱりわからないと言う感じだし、どうした事か、先生と翼さんは私をじっと凝視しているし…。

「千歳先生が父親…じゃあ…」

「…ああ。そうだろうな…。間違いないな。唯だよ。」

「…大きくなったな…」

…あのー…誰か説明してもらえないですか？

なんか、二人とも懐かしいモノを見る目で私を見てるんですけど。しかも、何気に名前呼び捨てにされたし。

それから二人は、二人にしかわからないような話を始めた。困った私は、珠緒さんにヘルプを求めた。珠緒さんも二人の反応がどうなっているのかわかっていない風で、ヘルプヘルプと助けを求める私を見て、二人に声をかけてくれた。

「ほらほら、あなたたち、唯さんが困ってるじゃない。とりあえず座りなさい。どういう事か説明してちょうだいな。」

「そうよ？二人とも、唯ちゃんのお父様を知ってるようだけど…」

そう言われて、私と向き合う形で腰掛けた先生と翼さんは、相変わらず写真をじっと見ていた。先に口を開いたのは翼さんだ。

「唯ちゃんのお父さんって、この千歳先生なんだよね？」

「はい、そうですけど。」

「…隣にいるのは祥子さんだね。元気にしてる？」

「あの…母は昨年亡くなったんです。」

「え…亡くなった…？」

「はい。癌だったんですけど、発見された時にはもう手遅れで…。それでも余命六ヶ月の告知より、半年長く生きました。」

翼さんはシヨックを受けているようで、手で顔を覆った。先生は知っていたのか、お母さんが死んだと言う事実にはピクリと反応したけれど、癌だったと言う事を話すと少し苦しそうに顔を歪めた。

「そうか…。ごめんね、辛い事を思い出させて。」

「あ…はい。」

「ところで、唯ちゃんって名字『神崎』だよ。千歳先生はどうしたの？…ちょっと聞き難いけど、桐生さんと祥子さんが再婚って事は、離婚したの？」

どうしよう。

多分、先生と翼さんはお父さんが生きてると思ってる。
なんて言えばいいんだろう。

多分、私の考えは気のせいじゃない。

二人はお父さんを知ってる。

それもお母さんと私の事も知ってる。と言うことは、私がまだアメリカに居た頃か、それ以前。

その頃のお父さんを知っているのなら、亡くなっているのを知らせられるのは苦痛かもしれない。だけど、今現在、私の戸籍は『桐生』だし、お母さんの事を聞かれた時点である程度、わかっているのかもしれない。

「…あの、二人とも私の父を知ってるんですか？」

そう聞くと、答えたのは意外にも先生だった。

「俺達がアメリカに居た頃、千歳先生と出会ったんだ。ちょうど近所に公園があつて、その近くの病院で外傷外科医として働いた。」

「…セントラル病院の？亨、なんであなたが病院のドクターと知り合いなの？怪我でもした？」

「いや、母さんと父さんがいない間に、よく病院へ遊びに行ってたんだ。その時、千歳先生にいろいろ教えてもらったりして…。そう、だから祥子さんも知ってるし、お腹に居た頃の君も知ってる。唯、君をね。」

「え？私？」

きよとんとする私を尻目に、翼さんは思い出すようにいろいろ教えてくれた。

お母さんのお腹の中ですごく元気だったとか、生まれた時は本当にちっちゃくて触るのが怖かったとか、初めて歩いた時、お父さんは感激のあまり泣き出したとか。いろいろ。

「唯はね、いつまで経つても僕の名前呼べなくてね。最後まで『たしゅく』のままだったんだよ。亨の事はすぐ呼んだんだけどね。』
とーるとーる』って。」

「千歳先生と祥子さんは『おとーたん、おかーたん』だったな。」

やはり懐かしむように語られる先生と翼さんの会話に、何故か私は

疎外感に悩まされた。

その感情が自分では処理しきれないまま、なおも二人の話は続く。

「本当に腕のいいドクターだったんだ。僕も医者になろうかなとか
一時期真面目に考えたよ。」

「お前が医者とか無理だろ。先生の所に運び込まれた血まみれの急
患を見る度に顔背けてたくせに。」

「それで笑うんだよ、病院のスタッフや先生。酷いと思いませんか？
おばあ様。」

「まあ、翼に医者は向かなかったってわかったからいいじゃないの。
仕方ないわね。」

くすくすと笑い合う、仲の良い家族をどこか遠くで見っていた。

私が望んでも手に入らないモノ。

私が気が付く前に失ったモノ。

私がいる、家族は本当の家族じゃない。

違う。

私だけが違うんだ。

羨ましいと思うのも、悲しいと思うのも筋違いだっ
てわかってる。ただ、こうして目の前にいる幸福しあわせせそ
うな家族を見ると、叶わぬ事を願ってしまう。

どうか、お父さんとお母さんを私に返して

『お前なんて、あの家の厄介者でしかないんだぞ。お情けで置いて
もらってるのに、血が繋がった家族だとも思って勘違いするなよ。』

遠い記憶が蘇って、私を蝕んでいく。

「父は亡くなりました。」

「「え？」」

「信号無視のトラックに突っ込まれたんです。その時、同乗してた祖父母は即死、父もその一週間後に一時的に意識を取り戻したものの、大量出血を起こしてそのまま亡くなっただけ聞いてます。」

「「死んだ？千歳先生が？」」

「私が二歳の時です。だからもう『千歳先生』はいないんです。すみません、ちよつと失礼します。」

そう言つて席を立ち、渡瀬さんに化粧室の場所を聞いて、急いでそこに逃げた。

後ろから「そんな…嘘だろ」という声が聞こえたけど、耳を塞いだ。

化粧室の扉が閉まつた瞬間、膝を抱えてかがみ込む。

お父さんとお母さんの事を、先生達の口から聞いた事が私の心に思いがけない孤独感を生んだ。そして同時に、忌まわしい記憶を必死に頭の中から追い出す。

それはポケットに入れてあつた携帯が着信をしたのに気付くまで、私はその体制のまま、ただ小刻みに震えしゃがみ込んでいるだけだ

つ
た。

第四十九話（後書き）

唯の心情編。

どうやって唯の孤独感を表現したらいいのか、心底悩みます。未だに悩みどころ。

ちゃんと読者の方々に伝わっていればいいのですが…。

第50話

ばたばたと音をさせながらリビングを立ち去った神崎を、ただ呆然と見ていた。

母や祖母は彼女の事を心配しているようだったが、俺にはその余裕が無かった。

千歳先生が死んだ

その言葉を信じたくない。

だけど、あの子が嘘を付いているとは考えられない。

俺は、彼女が生まれたその日を知っている。そして、それを涙ながらに喜んだ千歳先生も。

390

『唯一無二の大切な子供。だから、唯。』

そう言って照れた様に、でも確かに幸せそうに話していたあの人はもういない。

「おる、おい亨、大丈夫か？」

はっと気が付くと、翼が俺を呼んでいた。心配そうに様子を窺う、

俺と同じ顔の、兄。

ああと声を返したものの、思いがけず掠れた返事に翼は眉を下げた。

「……ちゃんと詳しい事を聞かなきゃわからないけど……唯が二歳の時に亡くなったって言うことは、僕達が日本に帰ってから一年経ってないうちに……」

「……………」

「事故か……。祥子さんも大変だっただろうな。それなのに、その祥子さんも亡くなって……」

そう言っつうなだれた翼を、母が容赦なく責めた。

「そうよ！一人になって寂しい思いしてるのに、ぺらぺら思い出話するんだもの！唯ちゃんが泣いてたら、あなた達のせいですからねっ！全くもう、女心がわからないで、図体だけ大きくなっちゃうなんて！情けないったらないわっ！」

いや、それは流石に理不尽だ。

そう思ったのは翼もだったらしく、俯いていた顔を急いで上げ反論し始めた。

「いや、母さん達だつてえらい乗り気で聞いてきたじゃないか！何で、僕達だけが責められるわけ！？」

「だあってー！まさか唯ちゃんの子供時代の事聞けると思わなかったんだもーん！」

もーん、じゃないだろ。

内心、母にそう突っ込みながら、リビングを出て行ったきり戻って来ない神崎…唯の事をぼんやり考えた。

俺の記憶にある唯は、まだよたよたと二、三歩歩ける覚束ない足取りと、覚えてたての言葉を舌つ足らずの口調で話す赤ん坊の頃のもので、あんなに悲しそうな…傷付いたような表情をするようなものはなかった。

千歳先生が死んだと言った、あの時。

翼と思い出話に夢中になっていてわからなかったが、確かに出て行く寸前、あの子の顔は強張っていた。

自分達が話していた昔話が、そんな顔をさせてしまった罪悪感を感じていたのもあった。一向に戻ってくる気配のない彼女を心配して立ち上がるうとしたら、祖母にやんわりと止められた。

「しばらくそっとしておきなさい。」

「…でも…」

「二歳の時に亡くなったのなら、唯さんにお父様の記憶は無いでしょう。そこをあなた達が知っているから、少しばかり嫉妬してるの

よ。だから、少し…ね？」

「…そうですね。」

そう言っただけで微笑んだ祖母を見ながら、祖母に言われて初めてその事に気付いた自分に、少しへこんだ。

そんなに早く父親が亡くなったのなら、確かに千歳先生との記憶が無いはずだ。それに、最近母親まで亡くしたのなら寂しくないはずがないのに、そこを俺と翼が懐かしそうに話していたから。

嫉妬と言う感情が果たして合っているかどうかは、あの子にしかわからない。だけど、その言葉が間違いではないだろうなとも思った。

未だにぎゃーきゃー騒ぐ翼と母を、よく騒ぐなと眺めていると、携帯を片手に困ったような表情を浮かべる神崎がリビングに戻ってきた。

どうしたんだと思い、立ち上がって側に寄ると、手に持っていた神崎の携帯が鳴った。その着信を見るなり、文字通り彼女は飛び上がった。

「ああっ！！来たっ！！」

「…は？」

着信にビビった神崎は、すーっと息を吸って、次の瞬間、勢い良く俺に頭を下げた。

「ごめんなさい、先生！！」

「え？」

「先生をパパに売りました、ごめんなさい！！！！」

俺がその言葉の意味を理解するより早く、彼女は携帯に対応し出す。

「もしもし、パパ？あのね、詳しい事は先生に聞いて？怒っちゃ駄目だからね！？はい、先生。パパが話したいって言ってます。」

はいっ！と渡された携帯を条件反射の様に受け取ったのはいいが、どのような状況になっているのか頭をフル回転させ、なんとなく把握出来る、とんでもなく嫌な予感しかしなかった。

神崎が落ち込んでいる時に、タイミング良くかかってきた電話。溺愛しているという噂のパパ：桐生総一郎がその微妙な声を聞き逃す訳がない。

出たくねーなーと心底思いながらも、渡された携帯は未だに通話中の表示がされている。仕方なく覚悟を決めて、神崎の携帯を耳に当てた。

「変わりました、遠藤です。」

『唯に何をした。』

第一声がこれだ。

しかも電話なのに、腹に響く低い声。

怖えなあと思いつながら、平然を装って対応する。

「娘さんのご両親と知り合いだったんです。それで、昔話に花が咲いてしまって。こちらの気が回らなくて、娘さんに悲しい思いをさせてしまったようです。大変申し訳ありませんでした。」

『…千歳と？』

「お知り合いなんですか？」

『千歳と俺は幼なじみでな。ふうん…なるほどな、唯が動揺するわけだ。…先生つて言うのも呼びにくいな。君、名前は何て言うんだ？』

「亨です。」

『トオルね。今晚予定はあるか？』

「は…？」

『イエスカノーで答える。空いてるか？』

「イエスですけど…。何ですか？」

『唯を連れて店まで来い。飯食いながらでも千歳の事教えてやるよ。ああ、そう言えば、秀人がお前たちは双子だって言ってたな。遠藤部長もいるのか？もし、彼も暇だったら一緒に連れてこい。店は唯が知ってるから、って事で唯に代われ。』

あまりの展開の早さについて行けず、言われるがままに神崎に携帯を返すと、彼女はあ！？と声を出して慌てだしていた。

「ちょ…ちよつとパパ！勝手な事しないで…って、レイフのお店の場所？わかるけど…。ええ！？やだっ！！ま…っ！！ちよつと、もし、パパ！？」

切れてるし！と携帯を睨め付けた神崎は、また俺に頭を下げた。

「もー、本当にごめんなさい！うちのパパが迷惑かけて…！！食事とかいいですよ、本当！私から言っておきますから！！」

そう言っって頭を下げていた神崎を目聡く見つけた母は、事のあらましを聞くなり俺の腕をガシツと掴んだ。

痛い。文句を言おうと母を見ると、これは駄目だと悟った。目が異様に輝いている。

「行きなさい、亨！翼ー、翼も行くのよー！」

「えー？駄目ですよ、雅ちゃん！パパが無茶言ってるだけなんですからー！」

「あらー、いいのよ？桐生総一郎がお誘いしてくれたんですもの。無碍に断るわけにはいかないわ。それに、翼は前に仕事を一緒にしたのよね？報告も兼ねて行ってらっしゃい」

「え…でも…」

「いいよ、行っても。亨、お前も断らないだろ？」

なあ？と同意を求めてきた翼は明らかに楽しんでるようだが、まあ桐生総一郎に会ってみたいと思っていたのも本音としてはある。何より、千歳先生の事を知りたかった。

だから、あたふたと困っている神崎の頭に手を置いて、一通り撫でくりまわした後、行く。と短く答えた。

第50話（後書き）

節目50話のはずなのに、まだまだ先は長そうです。
次は唯です。

第五十一話

まさかパパから電話がかかってくるとは思わなかったから、うずくまったりまま、表示も見ずに電話に出た。

やっぱりパパなだけはある。異変を感じたのか、何があつたと執拗に問いただした挙げ句、言わないんだつたら連れて帰るぞとまで脅された私は、結局少しだけ話した。そのまま電話を切ったのだけれど、それで満足するパパじゃない。案の定、またかけてきたパパに、先生を売った。

そのツケがまさか、ディナーを一緒にとるだなんて…

一応嫌だつて断った。断つたんだよ、うん。

それなのに、聞く耳を持たないパパは強引で、ご丁寧に店まで指定してきた。それなのに、誘いを先生が受けるとは思わなかった。しかも翼さんも混みで…。

レイフのお店か。お母さんが死んでから行ってないなあ…。元気がな…。

そんな事を考えていると、先生にぐりぐりと撫でられていた頭を解放されて、軽く目眩を起こしてしまった。

思わずふらついてしまったので、手近にあつたものに手を伸ばしたら、それは先生で軽くハグするみたいなた体勢で、もたれかかっていた。

「あ、すみません、ふらついちゃって。」

「いや、別に。…て言うか本当に唯なんだな…。デカくなった、本当に。とは言え、細すぎる。もっと飯食え。」

「…おっさんくさいですよ、先生。なんか久しぶりに会った親戚のおじさんみたいな。」

ははははとお互いに乾いた笑いを上がったところで、さてそろそろ離れようかなと思った矢先、頭を鷲掴みにされた。ちよーつとお！痛いんですけどー！！

「さつきからおっさんおっさんと…。おい、翼、俺達はこの中じゃおっさん扱いらしいぞ。」

「うわー、泣けるね。一応僕達、秀人さんよりは年下なんだけどね。」

「おっさんじゃないのー、一回りも違えば。女子高生よ、女子高生。ピチピチの。そんな子から見たら、あなた達は三十前のおじさんなのよ。」

ねーと雅ちゃんに同意を求められ、思わず頷こうとしたら、ギリギリと捕まれている手の力が心なしか強まった。

痛いってばー！！

「痛いっ！！」

「おつと悪い悪い。力加減が出来なくてなあ。なにせおっさんだから。」

「本当にそう言う所は年長者なんですよね。やだやだ、パパやお兄ちゃんと違って暴力的な人って。」

「桐生さんと比べるのが間違ってる。」

先生はそう言って、ペシツとおでこを軽く叩いてから、ようやく頭を離してくれたけど、髪がぐっちゃぐちゃで鳥の巣みたいな事になっていた。

それに更にムカついて文句を言おうと思ったけど、珠緒さんがニコニコとこちらを見ているのが見て取れて、ここがどこだったか思い出して、少し恥ずかしくなった。

うわ、みつともない。

急いでボサボサの髪を手櫛で直して、騒いってしまった事を謝ろうと珠緒さんに頭を下げた。

「ごめんなさい、人様のお家で騒いでしまつて。」

「あら、いいのよ。賑やかなのは良いことだもの。それよりも、元気になったみたいね。よかつたわ。」

ふわつと微笑んだ珠緒さんの笑顔は優しく、何故だか少しだけ

すぐつたい。

お祖母ちゃんがいたら、こんな感じなんだろうな…と思ってしまった。

お父さんと一緒に事故にあって亡くなった祖父母を知らない私は、お祖父ちゃんとかお祖母ちゃんという存在がよくわからない。

アメリカにいる、お母さんの叔母さんもいるけれど、一年に数回しか会えないし、パパの祖父母って言う人達にも会ったことがない。前にお兄ちゃんとお姉ちゃんが教えてくれたけれど、パパの両親、弟とは疎遠と言うか、縁を切っているらしい。だからお兄ちゃんも、祖父母や叔父の顔は知っているけど、親しい関係ではないと教えてくれた。パパもあまりその辺の事は話さないし。

よくわからない事ばかりだけれど、珠緒さんの持つ雰囲気、ぼんやりとした『お祖母ちゃん像』と重なってしまったのも事実だった。

「ねえ、亨、午前中は貴方が独占したんだから、午後からは私が唯さんを借りるわよ。いいわね。」

「…神崎、再試頑張れそうか…。」

「う…。頑張ります。て言うか、やらなきゃヤバいですよ！今度駄目だったらパパが…。」

雷どころの騒ぎじゃないんですー…。

尻すばみに沈んだ声を聞いて、翼さんが首を傾げた。

「唯って…あ、もう呼び捨てにするけどいい？」

「あ、全然大丈夫です。」

「そう、じゃあ唯ね。唯、再試って…赤点取ったの？亨が教えてるってことは日本史で？」

「…そーでーす…」

力なくうなだれた私は、翼さんの表情がわからなかったけれど、多分哀れんだ目で見られてるんだろうなと思う。だって、先生が翼さんに「24点」って小声で言ったの聞こえたし！

キー！！バラさなくてもいいじゃん！！何が悲しくて、翼さんに恥を晒しているんだ、私…。こりゃあ、追試で絶対合格点取らなきゃ！

403

改めて意気込んだ私は珠緒さんを見た。

とりあえずは再試を忘れて、珠緒さんのマフラーだ。どうなってるんですかと聞くと、やはり大変な事になっているらしい。じゃあ見せて下さいねと言うと、いそいそと毛糸と編み棒が入った袋を持ってきて、徐に取り出した。そして、その手に握られている物を見て私は驚愕した。

「さあ、唯さん、これね？やっぱり毛糸遊び化しちゃったの。どうすればいいのかしら？」

…こ…これは…。

その場にいた、珠緒さん以外の全員が息を飲んだのがわかった。先生と翼さんは、同じ格好で止まっているし、雅ちゃんは目を見開いて止まっている。渡瀬さんまで、給仕していた手を止めて、珠緒さんが持っている物を凝視していた。

「あら？みんなどうしたの？」

一人だけ時間が止まっていない珠緒さんが、訝しげに声をかけるが、このマフラー…？をどうすればいいのかわからず、私は思わず天を仰ぎたくなった。

「「猫だ」」

双子が呟いた言葉に、心の中で同意した。

珠緒さんが持っていたのは、マフラーとは絶対に言えない代物…最早毛糸玉化してしまい、それに申し訳ない程度に引っかかっている編み棒の残骸らしいものだったから…。

これをどうすればマフラーに出来るんだろう。いや、マフラーよりこっちの方が難しかったと思うんだけど。

気を取り直して、そのマフラーもどきを手にとってじっくり観察してみると、編み目がどこかわからなくなっている。

これはもう一から編み直した方がいい、絶対。

「珠緒さん、申し訳ないんですけど、ここまで絡まっちゃったと解した方がいいです。編み目もわからなくなっちゃってるので、編み直しましょう。大丈夫、頑張りましょうね！」

「やっぱり？はあー、やっぱり難しいわねえ…。」

「じゃあここから解していきましようか」

そう言つて、珠緒さんが糸を解していき、私とその糸をまき直す。しばらくそれをしていると、いつの間にか先生達がいなくなつて、雅ちゃんが私の様子を楽しそうに見ていた。

「あれ、先生達いつの間に出て行つたんですか？」

「さつき二人で出て行つたわよ。それにしても、やっぱり女の子はいいわねえ。うちは男の子ばかりだから、女の子らしい事が出来なかつたの。お義母さんも楽しいでしょう？」

「そうねえ。いいわよね、こういう女の子の子供している雰囲気。うふふ、唯さん、今日だけとは言わず、いつでも遊びにいらつしやい。私や雅さんがいなかったら、渡瀬や他の皆にもてなすよつに言つておくから。」

「え！？いやいや、そんな…そんなに気を使つてもらわなくてもー

…」

頻繁に来る気はないですから。と言えない気弱な私を許して下さい。
やけにほんわかとした空気の中で、珠緒さんがマフラーもどきを解
す、しゅるしゅると言う音と、私達の声だけが優しく部屋の中を包
んでいた。

第五十一話（後書き）

…唯と亨のキャラが変わって行っているような気がする。
…いいかな…。

第五十二話

しばらくそのまま糸を解していると、全て解き終わり毛糸玉になっていた。これから一から編み直す事になってしまったとはいえ、私は特に苦ではない。珠緒さんはわからないけど…。

エコだなんて言うで大袈裟だけど、馴染んだ糸の具合は好きだし、また新しく生まれ変わる工程が好きだから。とは言っても、これは珠緒さんのマフラー。ちゃんと編み上がりを見届けねば！

「あ、じゃあ始めましょうか。とりあえず、編み始めまでは出来ますよね？」

「えーっと、こうだったかしら？」

「う、はい、そうそう、ここに糸をこうかけて…」

一度は失敗したものの、今度は慣れたのか、順調に編み上げていく珠緒さんを見ていた雅ちゃんが、はあくため息をついた。

「凄いわー、お義母さん、しっかり編めてますよー！」

「うふふ、やっぱり唯さんの教え方がいいからかしら。わかりやすいのよね。」

「あはは、あんまり誉めると舞い上がりますから、その辺で…っと、珠緒さん、そこ外れてますよ。」

そんなやり取りをしつつ、結構早いペースで編んでいく珠緒さんに感嘆しつつ、たわいのない会話を楽しんでいた。

「ねえねえ、唯ちゃんは彼氏いないの？」

「いませんよ。私、義兄や義姉と違って全くモテないんですよー。」

「あら、こんなに可愛いのに。」

「あはっ、ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですよ。」

「お世辞じゃないわよー、ねえお義母さん？唯ちゃんは可愛いですよね？」

同意を求めるように雅ちゃんが珠緒さんを見ると、凄く真剣に編んでいて、声をかけられる雰囲気じゃなかった。

と、その時翼さんが一冊のアルバムを手にリビングに入って来て、私と雅ちゃんの座っているソファアの隣に腰かけた。

「翼さん？どうかしました？」

「うん、唯に見せたいものがあって。千歳先生の事…今話しても大丈夫？」

翼さんに心配そうに顔をのぞき込まれたけれど、さっきまでの動揺していた気持ちはパパに少しだけ吐露していたから気持ち落ち着いていた。

だから大丈夫ですよと答えると、翼さんはほっとしたような笑みを浮かべた。

「そう？さっきはごめんね。つい、思い出しはしゃいじゃって…」

「いいえ、さっきは私も失礼な態度を取ってすみませんでした。」

「ふふ、いいよ。でもね、僕達が記憶にあるのは、本当に小さい頃の唯だったからね。こんな奇縁って滅多にないし、この機会に僕達を兄だと思っていよいよ。秀人さんの他に兄、いらない？」

翼さんはそう言うと、身を乗り出して私の頭を優しく撫でた。

なんだかくすぐつたい気持ちがあるけど、こんなお家の人を兄だなんて恐れ多い。て言うか、先生もそれに含まれるんだよね。

…遠慮したいなあ…。と考えていると、顔に出してしまったのか私の顔を見て、翼さんが苦笑した。

「そんな嫌そうな顔されると傷つくなあ。ねえ、母さん、こんな妹欲しくない？」

「欲しいわっ！！！！！」

雅ちゃんに、がっとう手を掴まれた。びっくりして、思わず目を見

開いて雅ちゃんを凝視すると、凄い勢いで抱き締められる。

「そうよ、うちの子に…ああ、どうしてあなた達は三十前なの!？
唯ちゃん、一回り離れた彼女ってどーお？駄目よね、嫌よね、やっ
ぱり。でもでも、翼は彼女持ちだけど、亨は彼女いないはずだから、
どうかしら？あー、でも可愛い唯ちゃんを亨の毒牙にかけるのは酷
よね。どう思う、翼。」

「うーん、亨次第かなー。でも、その線もありかあ。いいんじゃない
い？小さい頃、唯は僕より亨の方に懐いてたし。亨もね、まんざら
でも無かつたんだよ。だから千歳先生の方に唯が行っちゃうと、不
機嫌だっただからだね。」

雅ちゃんに抱き締められたまま昔話を聞いているけれど、どうもお
かしな方向に話が進んでいる気がする。

…私と先生がどうしたって？

「唯が名前呼ぶのだったって、亨の方が早かったし。さつきも言ったけ
ど、僕は最後まで『たしゆく』だったんだからね。最後に別れる時
唯は泣かないくせにずーっと亨にくっついてたよ。あんまり離れな
いから、祥子さんが困って引き剥がそうとしたんだけど、よちよち
歩きの赤ちゃんの癖に凄い力で亨にしがみついていたんだ。」

ひーひーひー!!!は…恥ずかしすぎる!!!

何でそんな子供…赤ちゃんか。の頃の赤っ恥を晒さないといけない
の。しかも、その話じゃあ私が先生にべったりだった様に聞こえる

し！いや、べつたりだったんだろっけどさ！
だけど、だけどおお！！

わたわたしたまま、珠緒さんを助けを求めて見ると、こんな騒がしい状態なのに、我関せずで真剣にマフラーを編んでいた。凄い集中力…。

あ。

「珠緒さん珠緒さん、一つ編み目が外れてますよ。それから、ここまで編み上げちゃったら少し編み方変えましょうか。」

「あら、そう？えっと…」

と言いながらせつせと編んでいく。

どうやら大丈夫そうだなとそのまま様子を見てみると、テーブルの上にあるバムが広げられていた。中に収まっていたのは、お父さんと一緒に写っている翼さんと先生だった。

「ほら、これが生まれたばかりの唯。ちっちゃいでしょ？」

「うわー…なんか恥ずかしすぎるんですけど…」。

「きゃー…って…翼、この写真って生まれたばかりじゃないの。まさか病院にいたの、あなた達。」

「あー…そうなんだよね。ちょうど日曜日で、亨が遊びに行ってたから祥子さんが産気づいたらしくてね。しかも、運悪く千歳先生が仕

事中で。で、亨が急いで千歳先生に連絡したらしいよ。」

…先生ってそんな時から…。

「で、駆けつけた千歳先生の車に同乗して、そのまま生まれてくるのにも立ち会ったんだって。あ、もちろん待合室でらしいけど。僕はその後に病院へ訪ねたら、呆然としてる亨を見かけて、どうしたって聞いたらこれだもの。驚いたってもんじゃなかったよ。」

それで撮ったのがこれ。と言って、一枚の写真を私に差し出してくれた。

この写真は見たことがない。と言うか、生まれたての私を撮った写真というのは、せいぜいおくるみに包まれて寝てるやつとか、お父さんかお母さんが抱いているやつだった。まさか、こんなシワシワの小猿みたいな写真があるとは思いませんでした。

「…お父さん嬉しそう…」

「泣いてたからね。」

「泣いてた…？お父さんが？」

「わんわん泣いてたよ。あんまり泣くから、祥子さんに叱られてた。それから、この人…えー…っと…なんとか外科部長？にも、困った奴だなって言われてた。」

この人と写真を指さされた先にいたのは、今のパパぐらいの年の人で、白衣を着てお父さんとお母さんと他のスタッフらしい人達と一緒にに写っている。病院のドクターや看護師達と写っているその写真は結構数があつて、その中の一枚に、見知った人が写っていた。

「外科部長って言う人はわかりませんが、この人はわかりますよ。キース・ケネディ。心臓外科の権威って言われてるドクターです。」

「唯ちゃん、ドクターケネディを知ってるの？あの有名な？」

有名…。まあ、そうか。あんな変人でも一応は権威だし。

「あー…知つてると言うか何というか…。パパのライバル？みたいな…。お母さんが好きだったらいいですよ。よく知らないですけど、父が亡くなってモーシヨンかけられたんだけど、タイプじゃなかったからフっちゃったのよねーって母が。だから来日した時にたまに会つと、凄い勢いで僕の娘にならないかって…あれ、どうかしました？」

なんか見られてるんですけど。

さつきまで凄まじい集中力を発揮していた、珠緒さんまで手を止めて私を見てるんですけど。

「祥子さんって…。」

「？よく知らないですけど、モテたらしいですよ。パパ曰く、ですけど。パパは母と結婚する時、大変だったってよく愚痴ってますよ。まあ、パパと再婚した母の方がやっかみとか色々凄かったですけど。私にもいっぱいイヤミとか言われましたしねえ。」

懐かしいなあ。

美人なモデルさんとか、綺麗な女優さんとかいっぱい…邪魔よって言われたなあ。と言っても、そこで引き下がるお母さんじゃなかったから、倍にして返してたけど。しかも、お母さん見た目が若いから、自分より全然若い女の人達より、年下だと思われてた事もあったなあ。

…あれ？どうかした？

何かさつきにも増して見られてる気がするんだけど。

「どうかしました？」

「…いえ…凄いのねと思って。大変だったわね。それじゃあ唯ちやんも大変だったでしょう？」

「子供だったので、そんな事は大した事は無かったですよ。今は桐生の姓を名乗っていないので、昔より全然。」

もう全然比較にならない位！

昔はもう、お兄ちゃん狙いの人だとか、お姉ちゃん狙いの人だとか凄かった。取り入ろうなんて考えの人はまだ良かった。あからさまにキツイ事言ってくる人とか、普通にいたし。

それを考えると、今は穏やかな物だと思う。同じ中学出身者は綾乃しかないし、そもそも名字を変えているから同中生でも、名前だけでは私と判断出来ない。はず。まだ卒業から一年も経っていないけど、中学の友達と遊ぶって言うことも無いわけではない。だけどそこで、逐一私の名字の事とか聞かれないし、話す事も無い。他校の生徒に関しては個人情報に対して厳しいらしい、今の高校を選んだと言うのもあるので、他校生から声をかけられると言うこともない。

そもそも、私はモテないし。ナンパなんかされた事無いし。綾乃や愛理ちゃんはされてるのに…。

…軽く凹む。

やっぱリアレか、童顔だから!?身長が153cmしかないから!?うんうん考えていると、何やら勘違いをされて翼さんに、大層哀れまれた。

416

「…何かいろいろ大変だったんね…。」

「そんなことないですけどね。あ、珠緒さん編めました?じゃあここから編み方変えますから…」

編み物に熱中した私と珠緒さんを除いた二人が、どんな顔していたかは知らないけれど、とりあえず、私の赤ちゃん時代の写真や、お父さんお母さんの写真を仲良く見ていた。時折私も話に入ったりして、和やかな雰囲気心地よかった。

「あれ、そう言えば…唯、夕食ってどこに行けばいいの？店は聞いてるんだよね？」

あ、そうそう、忘れてた。

パツと顔を上げると、いつの間にか先生までいた。いつからいたんだろう。

「あのー、パパの知り合いのイタリアンのお店で、レイフ…ラファエル・ガネッティのお店分かります？丁度、レイフが来日してるからここでって言われたので。本当は正装で行かなきゃ入れないんですけど、本人が着飾る必要はないし、貸し切つてあるからって言ってるみたいなんです…け…ど……って、どうかしました？」

あれ、凝視再び？しかも先生も増えたよ？私が首を傾げると、雅ちゃんがガシツと私の肩を掴んだ。
なに！？雅ちゃん怖いんですけどー！！！！！！

「ラファエル・ガネッティ？イタリアの自分のレストランで十年連続三つ星を取っている、ラファエル・ガネッティ？そのラファエル・ガネッティと唯ちゃん、知り合いなの！？」

「えっ！？はっ、はい！！！」

パパのね！！

それを言わないまま、雅ちゃんの怖い顔と、少し呆れ顔の翼さん、驚いた顔の先生、黙って微笑んだままの珠緒さん。四者四様の表情に私は晒された。

「唯…心臓外科の権威、ドクターケネディとも知り合いで、今度は十年連続三つ星シェフのラファエル・ガネツティ…」

「マジかよ…お前凄いな、人脈…。」

皆さん、呆れた様に見ないで下さいよ。

第五十二話（後書き）

次は亨です。

第53話(前書き)

話中の『』会話はイタリア語です。

第53話

ラファエル・ガネッティの店までは、家から車で三十分。実家に自分の車で来ていた俺が、翼と神崎を同乗させる形で店まで車を走らせた。

乗り込む際に神崎が、不思議そうな顔をしていたのは、多分こいつが乗った事のある車と違ったからだろう。わざわざ学校に、こんな車に乗って行かないだろうと思いなながらも、今乗ってきている車は大分派手なのは自覚していた。

BMWの左ハンドル。

神崎が乗り込む時に、居心地悪そうにしていたのを見て見ぬフリをして、助手席に翼を乗せた。万が一誰かに見つかったら危ないと思つての事だが、ガネッティの店にそうそう見知った顔がいるとは思えない。いくら、金持ち学校と裏で揶揄されようが、それはあくまでも一部の生徒で、ほぼ大半は一般的な家庭環境の生徒ばかりだ。それにガネッティの店は予約が一年待ちらしい。母情報だが。

車を走らせていると、神崎が俺の車について聞いてきたのだが、何か俺ではなく翼が答えていた。

「亨はね、他にもう一台持つてるよ。駐車料金だけでも月相当払ってるはずだから、唯、聞いてみれば？」

「先生、いくら？」

おい、遠慮無しかよ。
その言葉をまるつきり無視して、話の話題を桐生さんの事にすり替えた。

「桐生さんの車の方が凄いだろ。マセラティ乗ってるじゃないか。」

「マセラティだかなんだか知りませんが、私あの車嫌いなんですよ。ついでに言うとパパの車も嫌いです。いかにもな車なんです。」

意外に思い、バックミラーで神崎の方を見た。不思議に思ったのは翼もだつたらしく、後ろを振り向いて理由を聞いていた。

曰わく、独身男が女を引っかけるために乗る車だからとの事だつた。

「なる程ねえ。」

翼がくすくす笑いながら神崎の話に頷いていた。と言うことは俺の車もそうだが、翼の車も当てはまるんじゃないだろうか。翼の愛車はジャガーだ。しかもスポーツタイプ。

いやはや、神崎は全く女子高生らしくない。ま、車に興味持つようなタイプじゃなさそうだし、それで別に構いはしない。そう思いながら他愛の無い会話をしていると、道が空いていたのもあって、思ったよりも早く店の前に着いていた。

「あ、パパの車ありますね。」

「どれ？」

神崎が駐車場に停まってある車を見て、声を上げた。桐生総一郎が、女を引つかけるために乗る車ってどんなのかと思っていると、彼女が指を指した先にはベントレーがどんと駐車されていた。

コンチネンタル・スーパースポーツ。

「…派手だな」ね」

「でしょ。」

思わず二人で呟いた言葉に、神崎は即座に同意した。その派手な車の隣に駐車して、後ろのドアを開けてやる。すみませんと言いながら出て来た彼女が入り口に目をやると、一瞬で笑顔になった。こんな風に笑った顔は子供みたいだと思っただが、気分を悪くするだろうなと思っただけで言わないでおいた。

「レイフー！」

「ボナセーラ、ユイー！」

あっという間に俺の側から居なくなっただかと思っただら、いかにもシエフっぽい外国人とぎゅーぎゅー抱き合っていた。

なるほど、あれがラファエル・ガネツティか……。写真ではチラホラ見たことあるが、根っからのマスコミ嫌いである有名なガネツティの写真は、大概が若い頃のものだ。今現在の実物は、その頃より大分横に広がっている。言っちゃ悪いが樽っぽい……。呑気にそんな事を観察していると、翼が入り口にもたれてその熱烈な歓迎の様子を見ていた長身の男に気付く、俺を小突いた。

「亨、あれが桐生総一郎だ。」

そう言われて、思わずマジマジと見てしまった。

あー…なるほど…。十人中九人は卒倒しそうな程の色気が漂っている。言うなれば、歩くフェロモン。しかも、円熟味を増して更にその深みを増している。

確か、五十代だったよな。うちの父親と対して変わらないはずなのに、何だろう。この差。自分の父親を悪く言うつもりはないけれど、明らかに桐生総一郎の方が若く見える。男から見てもいいオトコ。なるほどなあと納得するより無かった。自分の父親も年の割には若く見える方だが、桐生総一郎がもっと若い。

日本ファッション界の雄と言われた桐生総一郎。身につけている時計もそうだが、高価そうに見えないのに、絶対高い。洗練された大人の男って感じ。

これがもしも自分の親だったらどうよ。自分に彼女いたとしたら、絶対オヤジに靡くと思う。親と女を巡って対立って、ありえないだろう。修羅場すぎるし、そんな女は手を出さない。

これがもしも、有紗だったとしたら。だけど、あいつはそれでも翼

の事を諦めたりはしないだろうな、と目の前の光景を見ながら、ぼんやりと思った。

：しかし、自分の娘が（義理だが）いつまでもあんなに密着していいいいのか？確か親バカだって聞いたが…。それに、見てみぬフリをしたが、ガネットィの頬にキスしてたぞ、あいつ。海外の挨拶だとは知っているが、一応ここは日本だろう。それに、レストランの敷地内とは言え、ここは外だぞ。

そんな考えが伝わったのか、神崎とガネットィがハグしている所から、俺達が出っ立っていた所に視線を寄せた桐生総一郎は、俺達の顔を見るなり、微笑ともれない笑い顔を向けて、俺達の方に歩いてきた。

「初めましてと、久しぶり。悪いが、どっちがどっちだ？おい、唯、こっちに来て紹介しろ。」

「はい。『レイフ、もういい？』」

『まだ抱きしめたりないなあ。だけど、相変わらず小さいんだね、コイは。』

『それでも成長したんだよっ！まあ身長は止まっちゃったけどね。』

『ははははっ！可愛いのは変わらないんだから、そのまま変わらないでくれると嬉しいね。さあ、僕にも彼らを紹介してくれるか？』

おいおいおい…イタリア語が喋れるのか、こいつ。
俺も、英語とイタリア語とスペイン語はわかる。だけど、イタリア語に関しては喋れる程度のものでしかないのだが、それでも神崎とガネットの会話は理解出来る。
訝しげな表情をしていた俺と翼の顔を見た桐生総一郎は、ああと破顔した。

「唯は英語とイタリア語、フランス語が出来るんだ。後者二つは会話が出来ただけだと唯は言うが、識字も出来る。謙遜は日本人の美德だが、あいつは自分の事を卑下しすぎる傾向にあってな。」

「そうなんですか。」

「おい、唯。どっちがどっちなんだ？」

きゃっきゃきゃっきゃとガネットと戯れていた神崎が、ようやく俺と翼の側に来た。頓着なく俺と翼を見分けた神崎に少し驚いたが、とりあえず桐生総一郎に挨拶をした。

「はじめまして、挨拶が遅れましたが、遠藤亨です。娘さんの学校で教師をしています。」

「はじめまして、桐生だ。娘が世話になってるな。君だろ？唯の日本史の先生って。」

「ええ、はい。」

「悪いな、赤点取らせて。しっかり叱っておいたから、追試で頑張れるようにしてくれ。」

「わかりました。」

ふっと笑って俺を見た桐生総一郎は、次いで翼と久しぶりの挨拶を交わっていた。神崎の方を見ると、しっかりガネットィに肩を抱かれていて、しきりにイタリア語で通訳していた。ガネットィにも挨拶しようと思つて、イタリア語に頭を変換した。

『はじめまして、トオルです。』

『おや、君もイタリア語が話せるのか？』

『少しだけ。「神崎、通訳しなくていいぞ」

意外そうに俺を見ていた神崎が、ガネットィに通訳しようとしていたので、それを止めさせた。まあ別に通訳してもらう程、言葉に不自由はしない。ガネットィと握手を交わして、皆で他愛のない挨拶程度の会話をしていると、神崎がくしゃみをした。その途端、桐生総一郎がガバツと神崎に覆いかぶさった。

『レイフ、中に入るぞ。唯が風邪引いたらどうする。』

『相変わらずお前は過保護だな。ま、中に入るのは賛成だ。さあ、

ユイ、温かい食事を用意したからいっぱい食べるんだよ。ユイはもう少し太った方がいいんだから。』

『太るのはいやだけど、レイフの作ったものは美味しいから好き。楽しみにしてるね。』

……二人とも、桐生総一郎が覆いかぶさっている状況を見事にスルー……。嫌がる素振りすら見せない神崎に、大物の予感がする。相変わらずっていう言葉が怖い。まさかいつもこうなのか？

いや、考えるまい。考えるな、俺。

見る、神崎なんて文句すら言っていないじゃないか。

ふと翼を見ると、翼も唾然としている。スキンシップにしては親密すぎる密着状況に二人して驚いていると、神崎が「何してるんですか、寒いから入りましょうよ」と声をかけてきた。もちろん、桐生総一郎に抱き付かれたまま。そうだなと気の抜けた返事を二人ですて、レストランの中に入る直前になってようやく桐生総一郎が神崎を離れたのだが、今度は頬にキスしていた。一瞬だったが間違いない。しかしそれでも、微動だにしない神崎は、全く気にしない風だった。

「…突っ込むべき…？」

「言つな、言つたら、何かもつと知りたくない事が出てくる気がする。」

メディアに出ている桐生総一郎のイメージがガラガラと壊れていく。全てではないが、既に半壊くらいしている。食事が終わるまでに俺達は無事でいられるだろうか。

そんな俺達の必死の思いを知る良しもない神崎は「パパ、しつこいとのおもハグしよう」としている父親を一蹴して、再び大物感を感じさせた。

第53話（後書き）

压倒された遠藤兄弟。だけど総一郎パパからしてみれば、まだまだ軽いジャブ程度の愛情表現だったり…（笑）

第54話

聞いていた以上の溺愛ぶりに、初めはどうなるものかと冷や冷やし
ていたが、意外にも食事の時は普通だった。ガネッティはシェフに
徹するらしい。三ツ星シェフが作る美味しいイタリアンに舌包みをう
つて、有意義な会話。桐生総一郎も案外気さくな人柄のようだ。そ
う思っていた。

今の今までは。

「唯、ブロッコリー食べ。」

「やだ」

「唯、口開ける」

「やーだー！！！！」

親が聞き分けのない子供を言い聞かせるようにしているのはいいが、
その様子が凄い。わざわざ口までブロッコリーを運んで食わせよう
としている。それを必死に拒絶しているのは、誰あろう神崎だ。そ
っぽを向こうとした顔が顎をガシッと掴まれ、ブロッコリーが目の
前にスタンバイ。食べ、嫌だの攻防がさっきからずっと続いていて、
完全に俺達を忘れている。

なんか昔もこんな事あったような…。

「昔もミルク飲むの嫌がった時、千歳先生こうだったよな。」

「ああ。ガンとして飲まなかったな。」

懐かしい光景を思い出した。初めての子育ての千歳先生と祥子さんは、悪戦苦闘しながら一日一日唯を育てていた。たまにミルクを飲ませるのを手伝ったりしてみただけれど、唯は機嫌が悪い時なんか絶対飲まなかった。仕方なく祥子さんに渡すと不思議と飲むから、それを見てムキになって、もう一度飲ませようとすると、唯はべええと吐いた。ブロッコリーは単純に嫌いなんだろうが、そんなところは成長していない。

「あー、もう、食べないっいたら!!」

「身体にいいんだぞ、ブロッコリー。」

「じゃあパパが食べればいいじゃない。ほら、中年だし、野菜生活、野菜生活。ね？」

その中年はにこーっと笑った。それはそれは魅力的な。そして背後が真っ黒な。

ひくっと引きつった俺と翼は、思わず姿勢を正していた。

「おっと、悪いな。このバカ娘がブロッコリー食わないから、千歳の話出来なくて。」

「いえ……」

そう言うしかない。実際、ブロッコリー問題が噴出するまでは和やかに千歳先生の話も聞けたし、祥子さんの事もぼつぼつと教えてくれていた。

それにしても、千歳先生と桐生総一郎が幼馴染だったという話は驚いた。しかも家が近かったらしく、小さな時から一緒になって遊んでいたらしい。千歳先生の実家は老舗の和菓子屋で、本来ならば跡を継いでもおかしくなかったのに、それを先生の両親は医者の方に進む事を承諾してくれたようだ。何故かその話になった時話に入っ
て来なかった神崎は、食べないブロッコリーをフォークで行儀悪く
つんつん突いていたのを、桐生総一郎に見つかって今に至る。

「亨が日本史の教師になったのって、千歳の影響か？」

「え？」

「千歳は歴史が好きだったからな。特に日本史。それなのに、娘にはその脳みそが受け継がれなかった。残念だなー、唯。」

「うるさいよ！」

なおもブロッコリーとにらめっこしている神崎を他所に、まさか桐生総一郎からそんな話が出ると思わなかった。確かに千歳先生の影響は受けた。医者の方も考えてなかったわけではない。しかし、俺が生と死に向き合って、それに携われるような人間ではない事がわかってから、その考えは打ち消した。そして次に選んだのが教師の

道だった。それも日本史の。

昔遊びに行った時、先生は城について熱心に教えてくれて、いろいろな時代小説を貸してくれた。主に戦国時代の比率が多かったが、それでも千歳先生のレクチャーが面白かったおかげで、俺自身も歴史に興味を持つようになった。今でこそ歴女だなんだと言うけれど、俺は結構年季が入っていると思う。

俺が教師になると言った時、両親はわかってくれたし、祖母も了承してくれた。しかし、グループ総帥である祖父はあまりいい顔をしなかった。祖父が俺に目を掛けてくれたのは知っていたが、俺はあえてその道を選ばなかった。それに、遠藤グループの後継者は翼だと決まっている。かと言って、翼一人が背負いきれるものでもないし、そこで俺は祖父と一つ賭けをした。その賭けは今も続行中だ。

「ああ、パパが修学旅行でナンパしたってお父さんにバラされて大変だった…いったー!!」

「だからあれは千歳のせいだって言っただろ！」

デコピンをされた神崎を見ながら、話題を祥子さんに移した。と言っても、まだ亡くなって一年しか経っていない事を考えると、あまり聞くのも失礼だろう。そう思って少しづつ聞いてみると、やはり話の中心は何故桐生総一郎と再婚したかと言うことだ。この話題は神崎も身を乗り出してきた。どうやら詳しく知らないらしい。いつもはぐらかされるとぼやいていたから。

「内緒だ、内緒。そうべらべら話すもんでもないしな」

そう言つて笑つた顔が何故だか悲しそうに見えたのは気のせいだろうか。

だが、翼がお墓参りしたいと言うとその表情は消えた。しかし、千歳先生と祥子さんの墓が別々な事実には驚いた。

「お父さんは神崎のお墓に入ってますよ。お母さんは違います。墓地も違いますし。」

「墓地まで？」

何故だ？

あんなに先生と祥子さんは仲睦まじかつたのに、何故墓はおるか墓所まで違う。ああ、そうか。再婚したからか？翼も同じ疑問が浮かんだのだろう。俺達の顔を見た桐生総一郎が苦笑して、神崎にキッチンにいるガネットとデザートを作つてこいと席を外させた。神崎も特に文句は言わず、真っ直ぐキッチンに入っていくのを見送つて、桐生総一郎が口を開いた。

「墓参りか……。どっちにも行つていいが、千歳の墓は少しわかりづらい場所にあるんだよなー。案内してやればいいんだが、あいにく俺はコレクションがあるから忙しくてな。」

「唯が行けばいいんじゃないんですか？あ、男と一緒にだから駄目とかですか？」

「ははっ、そんな簡単な事…簡単じゃないが…ま、それもあるが。」

あるのか。まあ、今まで見てきた光景を考えればさもありなん。翼が言った理由を違うと答えた桐生総一郎は、グラスに入った水を一口飲んで一息置いて、神崎が行けない理由を話した。

「唯は神崎の家から反対されてるんだ、千歳の墓に近づくなっとな。」

「え…？」

「そもそも唯が今、神崎の姓を名乗ってるのを知らないからいいものの、知ってたら絶対に使わせないだろう。」

「嫌われてるって事ですか？」

「嫌われてる。まあ…そうなんだろうな。千歳には姉と妹がいるんだが、特に妹が、両親が亡くなる原因にもなったアメリカ行きを企画した祥子を許せなかつたらしくてな。特に俺と再婚してからは、千歳を裏切ったと思ったんだろう。その許せない対象に唯も加わった。だから唯は身内の中で肩身が狭いんだよ。法事にも出させてもらえなくてな。」

あまり詳しく聞くのも失礼なのだが、いまいち納得出来ない。神崎が肩身の狭い思いをしてるのはわかった。だが何故、祥子さんと神崎を恨むんだ？

「…事故が起きたのは七月でな。」

「七月…七月って確か唯の誕生日…」

「そう。唯の二歳の誕生日に日本にいる両親を招いて、なかなか会えない孫娘を祝ってもらおうと企画したのが祥子だった。そして喜んで賛成してくれた千歳の両親は、事故で即死。千歳も一週間後に死んだ。唯の叔母はなかなか親離れ出来ない奴でな。それに千歳も相当慕ってた。なのに一気に奪われたんだ、誰かを恨みたくなるのも当然だろう。ただ、その矛先が祥子だったんだ。千歳が死んでも唯と暮らして行けるぐらいの共有財産やら千歳の保険金があったんだが、千歳の遺骸は日本にある神崎の墓に埋葬された。両親共々な祥子は葬儀には出たものの、日本で執り行われたからな。知り合いもいなければ、顔見知りもない中で葬儀は辛かっただろう。ましてや千歳を亡くしたばかりだったからな。」

「…そうですか…」

「唯は千歳の娘だからそれなりに扱われてたんだが、祥子が俺と再婚するって決めた時、二人とももう神崎とは縁を切るって言われたんだよ。もう墓にも来るなってな。」

「そんな。」

いくらなんでも、姪だろう。あんまりじゃないか？

「唯の従兄弟共も親から言われてるらしくて、唯も遠慮して近寄ろうともしない。まあ、今となつてはそれで良かったのかもしれないが。」

どこか遠くを見ているような目で、神崎がいるキッチンの方を見ていた桐生総一郎は再び俺達の方へ視線を戻すと、苦笑してまたグラスに手を伸ばした。

「喋り過ぎたな。ま、千歳と祥子を知ってるならいいか。だから、唯は千歳の墓には行けないんだが…どうする？場所は教えてやるが…」

「ええ、教えて下さい。自分達で場所は何とかしますんで。」

こんな事を聞いて、さすがに神崎に案内させるわけには行かない。もしも親類に鉢合わせでもして、またあんな泣きそうな顔を見るのは正直堪える。

翼もつんつんと頷いている所を見ると、どうやら同じ考えらしい。短い間に随分距離が縮んだものだ。満足そうに笑んだ桐生総一郎は先ほどまでの寂しげな雰囲気から、再び和やかな雰囲気に戻っていた。

「そうか。祥子の墓の場所も教えてやるよ。そこは唯に連れて行ってもらえばいい。」

「いいんですか？さっき…」

「唯に変な気起こしたら、俺が墓に埋めてやるから安心しとけ。」

冗談だけだな。とにっこりと笑ったのだが、全く目が笑っていない。俺は大蛇に睨まれたカエルの様に、背中にとらだらと変な汗が流れているのがなんとなくわかった。

第54話（後書き）

夫婦間相続の事とか、死後のお墓問題とか間違っているかもしれないが、あくまでもフィクションという事で…。

第55話

「デザートはミルフィーユだよ」

神崎の明るい声がなんとなく重い雰囲気を打ち破った。その事に何と無くほっとしつつも、神崎が置かれている状況を考える。

身内である神崎家から父親を参る事を許されず、従兄弟達からも距離を置かれている。踏み込むべきではないとわかっていながらも、どこかで昔の幸福そうな三人を思い出して、今のままではいけないのではないかと思うのだが、それは俺が口を挟む事ではない。

俺は神崎の担任ではない。単なる一教科を教える教師だ。そこまで俺が一人の生徒に親身になる必要はない。ないと思っっているのに、気になって仕方が無い。

「ミルフィーユさくさく」

見る、悩みなんて何にも無さそうな顔でデザートを頬張っているじゃないか。どことなく調子っぱずれな鼻歌まじりのご機嫌モードだ。そう、俺が心を砕くことなんてない。例え、それが昔可愛がっていた唯であろうとも。

「唯、俺のもやる。ほら、あーん。」

「む。あーん。」

「美味いか？」

「んー!!」

「良かったな。」

しっかし…

「本当に仲いいんですね…」

俺より早く翼が言った。さすが俺の片割れ。考えている事は同じだったか。

しかし、翼がそう言ったのにも関わらず、桐生総一郎は至ってけろっとしていた。神崎も少しだけ恥ずかしそうにしていたが、否定はしなかった。

この状態で育つたのだとしたら、神崎が美形音痴になったとしてもおかしくない。むしろ、同情すらしてしまう。これからこの先、神崎に彼氏なんて出来ないのではないのか…。可哀想に…。

思っていた事が表情に出てしまったのか、神崎が怪訝な表情で俺を見ていたが、黙っていた。

雛鳥に餌付けするように、自分のデザートまでせつせと食わせていた桐生総一郎だったが、携帯が鳴ったらしく、すまないと断って席を立った。

どうやら仕事の話なのか、頻繁に業界用語らしい言葉が飛び交っていたが詳しくはわからない。

そのまま視線をテーブルに戻すと、デザートを二人分平らげ満足そ

うにしている神崎をどうやら呆れた目で見てしまったようだ。あれだけ食って、あの細さはどういいう事なんだろう。

「お前、細いくせに意外に食うのな。」

「そう、それ僕も思った！唯って痩せの大食い？」

「いや、別にそう言うわけじゃないですよ。普通だと思えますけど…まあ、先生やお兄ちゃんが知ってる女の人とは違うかもしれませんけど。」

へつと吐き捨てる様に言われた言葉にムカツときた。どうしてこいつは、チクチクと…。隣を見れば翼は声を殺して笑ってやがるし…！

「おい…」

「ぶっ！ヤバい、亨お前、当たってるじゃないか…っ！くっ！あーヤバい、腹痛い…っ！」

「でしょー？あのー、先生とお兄ちゃんって類友でしょ？絶対そう！」

至極無邪気に問われたが、流石に俺の堪忍袋がキレかけた。

「おい、お前いい加減に…」

「まーでも、お兄ちゃんは今彼女いないですけど…いたことあるのかな…でも、先生って彼女いるでしょ？」

サラッと桐生さんについて凄い事を聞いたが、あえて聞かなかった事にする。でも、俺に彼女はいない。だけど、なんで一生徒に私生活に口を出されなきゃいけないんだ。神崎が言う彼女。有紗の事だと容易にわかった。

「お前に関係ないだろ。」

自分で思ったより冷たい声が出た。目に見えてビクツと怯えた神崎を翼が宥めるように声をかけたが、俺は謝る気も宥める気も無かった。

校内で有紗との噂があるのは知っている。だからこそ迂闊な事は言えない。別にこいつがベラベラと喋るような類の子じゃないのはなんとなくわかる。しかし、どこから波及するかわからない。既に有紗との関係は切ったし、彼女とは恋愛感情も無かった。それを今更外野にどうのこうの言われるのは正直言っ、ウザイ。

「亨…唯が怖がってるぞ。」

「だから？いちいち俺の私生活にまで口を出されるなんざ不愉快なんだ。それを詮索されるのを嫌がって何が悪い。」

「…ごめんなさい。調子に乗りすぎました…」

しゅんとし、ビクついている神崎を宥めている翼を見ながら、なんだか俺が悪者みたいな気持ちになった。別に悪い事をしたつもりはない。俺と神崎はあくまでも、教師と生徒なのだから。

「悪い、急に仕事の電話が入った……って……空気悪いな……。何かあったか？」

電話が終わって、戻ってきた桐生総一郎が席に着いて一応場は落ち着いていたように見えたが、流石は娘バカ。すぐさま娘の様子がおかしいと気付くと、問い詰めはしなかったが、訝しげにしていた。そんな義父に不自然なまでの笑顔を貼り付けて、食事の感想を述べている。その様子を見ていて、少しだけ罪悪感がこみ上げたが、謝る気は無かった。

『食事はどうだったかな？』

ガネットイが食事の感想を聞きに来て、今度こそ本当に笑んでいるようだったが、桐生総一郎はそんな彼女の様子をつぶさに見ていた。

『レイフ、今度はいつ来日するの？』

『うーん、わからないなあ。今度はユイがイタリアにおいで。ついでだから、ヒデトとミナも一緒に来ればいいよ。』

そんな会話を交わしている二人を見ていた桐生総一郎が、俺を見た。

「で？」

「で？…って何ですか？」

「何でうちの唯が怯えてるのか説明しろ」

「…別に何でも。俺の私生活を突っ込まれそうになったので、注意していただけです。」

「ふん…。」

納得していない様な口調だったが、それ以上は追求されなかった。何となくだが、この人は気付いている気がする。

「さて。唯、悪いが、急に仕事が入った。明日朝一の便でN・Yに行かなきゃならない。だから、今日これから会社に戻っているいろやらなきゃいけなくなつたから、」

「ああ、うん。わかった。気を付けて行ってきてね。」

「何か欲しいものあるか？」

「ない。」

「ティファニーのネックレスだな。わかった。」

「いらないうって言ったじゃん。」

「はいはい、じゃあ気を付けて帰れよ。再テストもちゃんと頑張れ。じゃないとマリベルが悲しむぞ。」

「わーかってるよ！いってらっしゃい。ティファニーとかいらなからね！！」

文句を言いつつも、俺達が見ている中で麗しき義父と娘が、ぎゅーっとハグしている。んでもってダメ押しで頬にキス。

黙って何も言わないまま目の前の光景を見ると、名残惜しそうに手を離れた桐生総一郎が俺達に視線を寄越した。

「と言うわけで、悪いが俺はこれから仕事だな。すまないな、慌ただしくて。」

「いえ、いろいろ貴重な話が聞けて良かったです。N・Yまでお氣をつけて。」

「僕からも、ありがとございました。久しぶりに桐生さんと話が出来て良かったです。唯の事も聞けましたし。」

「そうか。じゃあ、迷惑ついでに唯を送ってやってくれ。マンション知ってるんだよね？」

外野で反対の聲が上がったが、それは無視らしい。こくりと頷いて肯定を表すと、じゃあ頼むと言われた。

正直、あの気まずい空気で神崎を送るのは気が進まない。だからと言って、夜になってからあのマンションまで一人で帰らせるわけには行かないし。途中で翼を実家で下ろしてから、神崎を送って、それから俺のマンションに帰ろう。

そう算段を付けていると、桐生総一郎に肩を組まれた。何事か思っただけを見ると、とても五十代とは思えない男の顔が近くにあった。色気がありすぎる。

「お前、何だか嫌な予感するんだよなあ…」

「何の事です…って何なんですか、これ。離してくれませんか」

必死の攻防虚しく、がっちりと組まれた肩が外れずに、耳元でやけに低い声で囁かれた。

「唯に手え出したら、俺がお前墮とすからな。覚悟しとけ…バンビ。」

バンビと呼ばれたその瞬間、俺の腰が落ちた。

近くに椅子があつたから良かったものの、無かつたら確実に床に崩れ落ちていた。そんな俺を楽しそうに見下ろしていた桐生総一郎は、ガネットイとも二言、三言交わして、固い握手をして去っていった。去り際に娘をハグして行ったのはご愛嬌ってところだろう。

「亨？大丈夫か？」

「くそ…腰にきた…」

多分顔は真っ赤だと思うが、構ってられない。耳元であの声は反則だ。

男の俺でも腰にくる。

『先生、どうしたのかな？具合悪くなったの？』

『ユイはわからなくていいよ。だけどまあ…ソウの威力が効かない存在も珍しいね。』

『？意味わかんない。』

わからなくていいぞ。

神崎に心の中でそう呟いて、赤くなった顔を覆い隠した。そうして、俺と桐生総一郎の初対面は幕を降ろした。

第55話(後書き)

次からは唯

第五十六話

パパに何か言われたのか、顔が真っ赤な先生を気にしながらレイフと話していると、そろそろ帰ろうかと翼さんが声をかけてきた。先生は大丈夫かなと気にしたけれども、なんとか持ち直したようだ。一体何を言われたんだろう。一応は翼さんに聞いてみたけど苦笑してはぐらかされてしまった。

レイフに美味しかったよとお礼を言って、ぎゅーっとハグをして、ほっぺにちゅーして別れた。今度はイタリアにおいでって言われたけど、学生が簡単に行けるもんじゃないよ、レイフ。まあ、お兄ちゃんに言えば連れて行ってくれそうだけど、ご飯を食べる為だけにそんなワガママは言ったられない。そんな事を考えていると、翼さんが先生となんだか言っているようだったけど、私が関係なさそうな話だったので聞かないで、あえて車の外の景色を見ていた。

久しぶりに叔母さん達の事を思い出す。叔母さんにはあまりいい思い出はないけれど、お父さんのお姉ちゃんはそのなりに優しくかった。ただそれはお母さんが居なかった時に限られていたけども。

神崎のお墓ももう何年も行っていない。お父さんの法事にも。行きたいと思うし、お線香の一本でもいいから上げさせて欲しいと頼んでも、やはり許可は出なかった。悲しいと思うよりも、単純に寂しかった。

だからお母さんは、お父さんの遺品と写真を飾っていた。それが遺影や位牌代わりである事にはもう慣れた。

それに、会った事のないお祖父ちゃんお祖母ちゃんの命日が私の誕生日だったこともあって、私は自分の誕生日があまり好きではない。

自分の誕生日を祝うために訪米した二人が死に、それにお父さんまで亡くなってしまったという事実が、私の誕生日に対する価値観を決定付けた。

お母さんも私のせいではないと言ってくれたが、その重荷は生涯消える事はないのだろうと思う。

それに、知っているのだ。私の誕生日を祝ってくれて興奮した私が寝静まった後に、お母さんがお父さんの写真の前で一人で泣いていた事に。お母さんからお父さんを奪ってしまった罪悪感と、神崎の家から拒絶されてしまった痛みは未だに癒える事がない。

そんな事を考えていると、いつの間にか遠藤家のやっぱり大きい屋敷の前で車が停まった。

あ、そうか、翼さんを降ろしてから私のマンションまで送ってくれるんだっけ。わざわざ悪いなあ……。しかもこれから先生と二人きりだし。それにさっき怒らせてしまった事もある。

有紗先生と喧嘩でもしたのかな……。あんなに否定するっていう事は付き合っていないのかもしれないし。いや、でもキス現場見たしなあ……。しかも、あの時先生が乗ってた車ってコレなんだよねえ……。

そう、今私が乗っているこの外車がそのキス現場（現車？）だ。流石に助手席に乗る事は出来ない。だってそこは彼女席だし。お嬢様か！と言われようが後部座席から助手席に移動する気なんてサラサラ無かった。

ようやく長い庭？も抜けて車止めらしい前まで来ると、翼さんが降りて私のいる後部座席までわざわざ回ってきてくれて、おやすみと言ってくれた。

「じゃあ、唯、またね。」

「また…の機会があるかわかりませんが、さようなら。」

そうやってにっこりと笑っておいたのだけど、何故か翼さんが動こうとしない。じーっとなられて見られているのは何で？首を傾げて、何ですか？と疑問を口に出して見ると意外にも翼さんは笑った。

「ああ、ごめんごめん、ハグしてくれないのかなと思って。桐生さんにもガネットィにもしてたのに、僕にはないのかなーって思ったんだよね。」

「…して欲しいんですか？」

「そりゃあねえ。はい、唯、おいでー」

「おい、翼…本気が、お前。」

運転席から呆れたような声が聞こえたけど、まあハグならいいやと思っ、後部座席のドアを開けた。

暖かい車内と違い、外はやっぱり寒い。うう…寒い…と首を竦めながら、翼さんに抱きついた。やっぱり人肌は暖かいなーと思いつながら、コアラのように抱き付いていると、後ろからキヤー！！と言う声が聞こえたような気がした。

「あ、あっち見ちゃ駄目だよ。ほらほら、寒いからね、早く車乗って。じゃあねー、気を付けて帰ってね。亨、安全運転でな」

「…お前…はあー…まあいい。父さん達にもよろしく言っておいてくれ。じゃあ後は頑張れよ。」

「ん？あれ、もういいんですか？じゃあ、翼さん、おやすみなさい。」

「うん、おやすみー。」

ひらひらと手を振って見送ってくれる翼さんを残して、遠藤邸を後にした。

車内は…何て言うか、ビミョーな空気が流れていて、そのビミョーな空気を壊さないように、壊さないように…

「おい。」

「げー！」

「げって何だ、げって。お前、大概失礼な奴だよな。」

先生の言葉にムツとしたけど、思っていた事が声に出してしまったんだから仕方がない。せっかく空気を壊さないようにしていたのに…と内心嘆息していると、バックミラー越しに目があった。

「お前、祥子さんの墓参り行くのに都合のいい日あるか？」

「え？あー…っと…ちょっと待ってくださいね。」

そう言っつて携帯のスケジュール帳を開いて、バイトのある日を確認する。やっぱり休日の方がいいだろうし、それにお墓参りだったら早めに行った方がいいのかもしれない。とりあえず年内だよねと思いい、カチカチと確認し、十二月の第二日曜日はどうだろうと思っつて聞いてみた。

「この日はどうですか？ちょうど冬休みの前だから…あ、逆に先生方っつて忙しいですよー。」

「いや、そうでもないだろ…わかった。第二日曜日な。空けておく。」

「すみません、クリスマス前の忙しい最中に…。」

心の中で有紗先生にも謝ろうとして、また自分の失言に気が付いた。途端に無言になった先生の不機嫌オーラが車内を包んで、またいたたまれない気分になってしまった。

無言の空気が痛い。痛すぎる。早く着け〜早く着け〜と念仏の様に唱えていると、前方を曲がった車に見覚えがあつて、思わず運転手と助手席に座っている人を見ると、車はこちらに気付く事無く、そのまま手前の建物の駐車場へと消えて行った。

「ねえ、先生…その建物っつて…」

「あ？どれだ…って、ラブホだろ。なんだ、冗談でも入りたいとか言うなよ。」

「…言いませんよ…」

自分の目が信じられずに、車の中からもう一度建物を仰ぎ見て、自分でも血の気が引いていくのがわかった。

その時携帯へ着信があり、表示された名前に内心震えた。

「…出ないのか？」

「……………」

「おい、どうした？」

先生が何か言ってるけど、聞こえなかった。

相変わらず手の中の携帯は軽快に音を鳴らしていて、私が出るのを待っている。

表示はお姉ちゃん。

だけど、何を言えばいいのかわからない。

お姉ちゃん、彰義さんが浮気してるの知ってた？

そんな事は絶対に聞けない。

第五十七話

しつこく鳴る携帯をじつと見続けていると、出ない事に諦めたのか
ようやく着信が止まった。正直助かった。今お姉ちゃんと話をして
も、絶対変な答えしか返せないと思う。とは言え、週二で訪ねてく
るお姉ちゃんの事だ。それまでにはなんとかしないとイケないだろ
う。忘れる事が出来なさそうだけど。

彰義さんがホテルに入ったのは間違いない。しかも、隣に乗ってた
のはお姉ちゃんじゃなく、お姉ちゃんよりもっと大人しそうな人
だった。あんなにラブラブだった二人に何があつたのかはわからな
いけど、とにかくわかつているのはお姉ちゃんは浮気の類を嫌悪し
ているっていう事。パパとお姉ちゃん達のママが離婚したのも、彼
女が浮気をしていたっていうのも原因の一端だったらしいし、それ
でなくとも先生の女癖の悪さに対する、あれだけの罵詈雑言を考え
ると…

修羅場だ。絶対に修羅場だ。

「…先生。お姉ちゃんね、ホイス・グレイシーが大好きなんです。」

「…は？」

「グレイシー一族最強の男、ホイス・グレイシーにマジ惚れで、あ
まりに好きすぎてグレイシー柔術習ったおかげで、お姉ちゃんはパ
パとお兄ちゃんを袖車絞めで失神寸前まで追い込んだ事があるんで
す。」

あれはすごかった。倒れてるお兄ちゃんはピクリとも動かず、パパは必死にタツプして白旗上げてたけど、お姉ちゃんは力を緩める事が無かった。落ちる寸前お母さんが現場に遭遇、それで事なきを得たけど、それからは桐生家ではお姉ちゃん最強と言う私達だけの暗黙の了解が出来た。

それなのに…それなのに彰義さんが…あのひよろい、もやしっ子の彰義さんがお姉ちゃんに勝てるわけがない。

どうしよう、どうしよう。お姉ちゃんが怒り狂って、彰義さんに関する節技かけるのかな。いや、絞め技かけてる画が浮かぶ。勿論加減無しで。ちよつと見たいと思っちゃったけど、それはさすがに悪すぎる。

「なんだ、いきなり 그레이シー一族とか。美奈がなんかしたのか？」

「…へ？…あ、いえ…何でもないです。何でも…」

「ふうん…ところで、お前んとこのマンションの前に横付け出来ないんだが」

え？

言われた通り車止めの場所を見ると、トラックが道を塞いでいた。

仕方ないから地下駐車場の場所を教えて、そっちに行ってもらった。レイフのレストランに行く前に、先生の駐車料金いくら？とかって聞いたけど、それはパパにも言えることで。うちは三台も駐車スペースを確保している。勿論パパ、お兄ちゃん、お姉ちゃん。お兄ちゃん達はパパに幾らか払ってるらしいけど、総額で幾らかなのかわからない。

ぼんやり考えながら、キュキュキュとタイヤの鳴る音が響く駐車場。

さて、明日はバイトだし早めに寝ようかな。あー…勉強もしなきゃ。せっかく先生に休日返上で教えてもらったんだし、再テストは落とせない。となると、少しだけおさらいしてから寝よう。

こうやって現実逃避したい。だって、今頭がぐちゃぐちゃでこんがらがっている。先生がお父さんの知り合いだったって言うだけでも衝撃的なのに、彰義さんの浮気現場を見てしまった。勉強もしなきゃいけない。もういっぱいいっぱいだ。

それなのに、現実って言うものは常に人の思惑なんかには構うわけがない。

「おい、あそこのエレベーターの前で下ろす…って…神崎、美奈がいるぞ。」

「え？」

「ほら、あのベント。美奈だろ？」

ベント…。確かにお姉ちゃんはベント乗ってる。でも、何でこんなにタイミングよく…ってさっきの電話ー!？

「え、うそ、なんで？」

「さあな。美奈の隣に横付けするから待て。」

ブアンとクラクションを鳴らしてお姉ちゃんに合図した先生は、言葉通りお姉ちゃんの横に車を停めた。

車から出て来たお姉ちゃんの手には相変わらずナイト用のリードが握られていて……って言う事は……

「ナイトー！！！！！」

「わんっ！」

いっそいで先生の車を降りた。ナイトもお姉ちゃんの助手席に大人しく乗っていたのに、ドアを開けるやいなや飛び出してきたのをがつりと受け止める。おお、この重量感。やっぱりナイト太ったよ！がっしがっしとナイトと熱い包容をしていると、ほったらかしにしていたお姉ちゃんがガバツと覆い被さってきた。

461

「唯、あたしはー！？」

「あ、ごめんね。お姉ちゃん、どうしたの、いきなり？」

「またナイトを頼みたくてね。あたしこれからグアムで仕事なのよ。だから、一週間よろしくね。ついでに、今日泊めて？って言うのを電話で聞こうと思ったのに、唯ったら出ないんだもの。どうかした？」

「え」

「ところで、あたしの目端に写ってる男は幻よね。なんで唯がこい

つの車に乗ってるの？駄目よお、いくらなんでも、教師だって最近じゃおかしい奴なんかザラだから。」

「おい、聞こえてるぞ…!」

あ、先生忘れてた。

ナイトと一緒に先生の方を見ると、車の窓から上半身を乗り出しているようにして私達を見ていた。

お姉ちゃんを見るとあからさまに嫌そうな顔をしているし、先生は先生で微妙な顔で私達を見ている。そんな二人に挟まれた私とナイトはどうすればいいんだろうねーとお互いに首を傾げている状況。地下駐車場で。

幸いにも誰も通らないからいいものの、往来があつたら邪魔なはず。ちよちよちよつと少しだけ移動して邪魔にならない場所に移ると、少しばかり大人しくなったナイトを側にお座りさせて、車にいる先生を見た。相変わらず無言のままお姉ちゃんと睨み合っている。

「あの、先生ありがとうございます。」

「いや、別に。じゃあな、ちゃんと復習しとけよ。」

「うわっ！先生っばい！！いやー！！！！」

「先生だもん。お姉ちゃん少し黙っててね。」

そう言つときぎゅうううと抱き付いている力が強くなった。苦しい…。

「美奈、大事な妹が苦しそうだぞ。」

「うっさいわね。」

「……あ、そう。じゃあ親父さんにも宜しくな。」

「はい、わかりました。言っておきます。運転気をつけて下さいね。」

ああと短く返事をした先生が走り去った後、お姉ちゃんが明るくエレベーターまで誘ったのはいいんだけど、彰義さんの事、どうしよう。

「唯？どうかした？」

「えっ！？ううん、何でもないよ！それより、お姉ちゃんグアム行くの？」

「そうよー。何かお土産欲しいものある？」

ないよと返事を返すと、口を尖らせて猛抗議してきた。いっぱい買ってきてーって言われる方がいいんだそうだ。

「そう言えば、パパも明日からN・Yだって言ってたよ。相変わら

「忙しいね。」

「そうらしいわね。お兄ちゃんも明後日から一週間香港だつて言つてたわよ。だからナイト預けに来たの。ねー、ナイト？」

「わんっ！」

あ、大丈夫そう。だったらこういう感じに話を持っていかなきゃ。それに、先生の車で送ってもらったことも言っておかなきゃ。変な勘違いされたら先生に迷惑かけるしね。

「そう言えばね、今日レイフに会って来たよ。ご飯も食べてきた。」

「嘘、レイフ来日してたの？いいなあ、あたしも行きたかったなー。呼んでくれたら行ったのに。何、パパと行ったの？」

「そうそう。あとね、先生とお兄さん、翼さんっていうんだけどね。お父さんの知り合いだったの。お母さんも知ってて、私がお母さんのお腹の中にいるときも知ってた。一歳になるまで遊んでもらってたらしいよ。」

「えー！？なにそれー！？」

今日あつた事を話して、くすくす笑いながら部屋まで着くと、いろいろ聞きたいけど明日は早いからって言うことで、お姉ちゃんはシャワーを浴びて少ししてから寝てしまった。

私はと言うと、お姉ちゃんがシャワーを浴びている間に、お姉ちゃ

んの分の朝食の準備をしてから少しナイトと遊びつつ、今日の復習がてら勉強。いつしか時間も遅くなってきていたので、私もシャワーを浴びてから濡れた髪を乾かしている時に、ふと思いついたのは彰義さんの事。何時までも隠し通せるわけがないし、嘘を付いてまで彰義さんを守るつもりもない。それでも、お姉ちゃんが傷付くのは嫌だし、泣かないお姉ちゃんが泣くのかと思うと辛い。ふわふわと温風で髪が舞う中でどうすればいいんだろうと考えこんでいる内に、知らず知らず足が書斎に向いていた。

お父さんの写真を手にとって、じっと見る。

私がお母さんのお腹にいた頃を知っている先生と翼さん。私が覚えていないお父さんとの思い出がある二人。

つくづく不思議な縁だなと思う。お兄ちゃんの後輩だったし、パパの仕事相手でもあった。いろいろと張り巡らされた糸みたいな物があるのだとすれば、私は一体どこにいるのだろう。

「ねえお父さん、どうすればいいのかなあ。もしもお父さんだったらどうする？」

私一人が呟いた言葉を、側に寝そべっていたナイトだけが聞いていた。

第五十七話（後書き）

ホイス・グレイシーのファンの方、間違ってたらすみません…。

第五十八話

いつものようにナイトに起こされ、眠い目を擦りながらむくりと体を起こす。起き抜けのぼーっとした頭で、隣に寝ているお姉ちゃんを見下ろした。

何でお姉ちゃんがいるんだっけ……。あー、そうだ。昨日泊まっていたんだ。ついでに今日からグアムに行くって言うってたなあ。

お姉ちゃんが部屋に泊まる時は、客室のベッドではなく私のベッドと一緒に寝る。何故だか、私のベッドはダブルサイズ。ダブルなんて一人で寝るには広すぎるのに、お姉ちゃんが買ってあげるからとごり押しされて、結局根負けした私は、自分のベッドとして使っている。お姉ちゃんがごり押ししてまで買った理由は直ぐにわかった。泊まるーと押しかけた時、私と一緒に寝るためだったという事は……。もそもそとベッドから降りて、ナイトを引き連れて部屋を出た。歯磨きやら洗顔を終わらせる頃には、寝ぼけていた頭も覚醒し、着替えてナイトの散歩に出掛けた。

だいぶ寒くなってきた風に身震いしつつ、たつぷり一時間の時間をかけてナイトと散歩をして来た。見逃せない程ではないものの、やっぱり太ったナイトには運動をさせなければ！

帰って来た時には珍しくお姉ちゃんが起き上がっていて、相変わらずの低血圧つぶりを披露していた。そんなお姉ちゃんを見つつ、ナイトの脚を拭いて部屋に上げ、水を与えてから朝食を作る。

いつもと変わらない光景だけれども、相変わらず胸にもやもやと残っているのは彰義さんの事で。

元々内緒話の類が苦手で、どうしてもはつきりさせておきたい時は、玉碎覚悟で本当のところを聞いてみたりした。まあそれが、幸とな

った記憶はあまりないけれど。でも、そうして心の平穩を保つのは必要だと思う。

かと言って、直にお姉ちゃんに『彰義さんが浮気してるの?』とも聞けるはずもなく…。

なんとなくベークルサンドを作る手が重い…。レタスやらトマト、ベーコンと目玉焼きを挟むだけの簡単なサンドイッチは、見かけに通りに量が多いが、お姉ちゃんはこれをリクエストしたのできつと食べてくれるだろう。

昼からのバイトだから、割とゆっくり出来ると思いながらナイトにエサを上げていると、バツチリ決まったお姉ちゃんが挨拶代わりとばかりに抱き付いてきた。まあ何時もの事なので、私もぎゅうつと抱きつくとほっぺにちゅうされた。いつも思うんだけど、パパもお兄ちゃんもお姉ちゃんも、ちゅう好きだよな。…ま、いつか。

「「いただきまーす」「」

もぐもぐと食べている時に、帰国する日などの細かい事を聞いた。一週間だというから、あちらからのメールは毎日するねという満面の笑顔付きで。

和やかに朝食を取っていると、お姉ちゃんがふと言葉を零した。

「そう言えば、彰義君にも最近会えてないんだよねー。」

「ぐっ…!」

「やだ、唯、大丈夫? はい、お水。」

「ん…」ほっ、ありが…」ほっ！」

急に言うんだもん。予想してなかったから、驚くよ、そりゃあ。とは言え、水を飲んで息を整え、涙目になってるなと自覚しながらお姉ちゃんを見る。心配そうに覗きこんではいるが、その顔はあくまでも私を気にしているのであって、彰義さんの事を微塵も疑ってはいなさそうだけど。

「大丈夫？」

「う、うん。大丈夫だよ…それより彰義さんに会えてないって…」

「そうなのよねー。昨日もね、グアムに行く前に会う約束してたのに、急に仕事が入ったって。まあ、営業職だから、休日出勤なんて事はいつもだったんだけどね。最近本当に忙しいのか、前みたいに会えてないの。寂しいけど、私も仕事で予定がなかなかつかないし、難しいわねー。」

「…そうなの…？」

「うん。ここに来て倦怠期かー。クリスマスに期待しようかな。」

「そ…そうなんだー…」

あはははと引きつった笑い顔をしている自覚はあるものの、それがお姉ちゃんに追求される前に出なければいけない時間になったらし

く、慌しくベーグルサンドを頬張っているお姉ちゃんに、憂いの思いはないようだ。朝食を全部食べ終わり、ナイトの頭を撫でてハグしてお姉ちゃんは出て行った。

急に静かになった部屋で、一人でもそもそとベーグルサンドを食べるけれども、どうにもこころにも食欲がわかない。こんな事は珍しいけど、私が大抵こんなもやもやしている気分の時は、食欲にもろに出る。なんとか最後の一口まで食べ終わると、嫌な気分を一蹴するために部屋を掃除することにした。

綺麗な部屋には、綺麗な気が宿るというらしいので、いつもはやらない窓拭きなんかもしてみる。抜群に透明感を増したガラスから見える空は、今日も青い。

幾分気分が回復して、次々と掃除していると、バイトの時間になっていた。

「おはようございます。」

「おはよう、最近めつきり寒くなったねー。」

「そうですね。あ、桜さん、見てくださいよ。昨日、新しいマフラーが編みあがったんです。」

「へー…ほうほう、なかなか凝った編み方だねえ。さすが唯ちゃん。」

昨日と言わずに、一昨日あたりに出来上がっていた新しい赤のマフラーを今日初めておろした。凝った編み方と言われても、そうかなーと言う感じだけど、桜さんから言わせれば凝っているらしい。

お客さんの入りも上々で、ふとお客さんが切れた時に、お姉ちゃんの事を漏らしたのがきっかけで少し話が盛り上がった。

「桜さん、もしも。もしもの話だけど、自分の知り合いの人が、恋人と違う人を連れてるの見た時、桜さんだったらどうする？」

「ん？具体的に言うത്？」

「例えば…私の友達の彼氏が、他の女の子とラブホ行って「殴る。」…なく…即答ですか…？」

「当たり前じゃない。見て見ないフリなんて、あたし出来ないし。二股とか本当最悪。男をボコボコにしてやらないと気がすまないかも。だって、自分の友達を裏切ってるんだし、その浮気してる女にも誠実じゃないんだもん。」

「そうですねえ…。」

うーん…。桜さんの意見も最もだ。

二股かあ…。付きあった事がない私には男女の事はよくわからないけど、やっぱりもやもやしたままなのは駄目だ。お姉ちゃんがグアムから帰国したら、ちゃんと聞いてみよう。それがどういう状況になるのかはわからないけれど、何も知らないまま嘘付かれてるのは良くないと思う。

黙りこくった私を見た桜さんは、怪訝そうな顔をしていたけど、笑ってごまかしておいた。

私は密かな覚悟を決め、お客さんが入って来たのを見て元気よく、

いらっしやいませと声を出した。

第五十八話（後書き）

次話は亨。遂に、亨の祖父と父が出てくる予定です。

第59話

神崎を送り届けて、携帯で友人に連絡を取ろうと思って取り出そうとしたら無いのに気付いた。

確か、翼に神崎のピンクのメイド服を見せてから使ってない。まさかガネットの店に置いてきたわけじゃないし、だとしたら家か。仕方が無い。今日は実家に泊まろう。そう思って、マンションとは反対方向の道路へと車線変更した。

帰る道すがら、神崎の様子がおかしくなったホテルの前を通った。なんだって、神崎はいきなり様子がおかしくなったのだろう。確か、前の車がホテルに曲がった辺りから黙ってしまった事から推測すると、乗っていた人物が知り合いか何かだったのだろうか。俺からは乗っている人物まではわからなかったが、神崎には誰が乗っていたのかわかったのもしれない。

しかも、なんでいきなり脈絡もなく美奈の事なんか…。

しかしまあ、美奈は気が強いと思っていたが、実際にグレイシ・柔術まで習っていたとは。今度桐生さんに聞いてみようと思う。確か、美奈にも付き合っている彼氏はいたはずだ。確か一般人だと言うので公にされてはいないが、高校の時から彼氏だと聞いた事がある。あの美奈にしては、長い。『あの』と言うとまたキャンキャン言われるので黙っておくが、美奈の彼氏だ。相当我慢強くない限りはやっつけていけそうにないと思うのだが…。

つらつらとそんな事を考えながら実家の敷地に入って行くと、丁度父の送迎の車が車止めの前にいた。俺も自分の車を駐車スペースに停め、ちゃっかり俺を待っている父の所へと急いだ。

「おや、久しぶりだね。亨。」

「父さんも元気そうだな。翼から聞いてたけど、相変わらずだ。」

「そうそう変化はあるもんじゃないよ。今日はどうしたんだい？」

「昼間に携帯を忘れてったから、今日はこっちに泊まるつもりで。おじい様もいるんだろ？」

「そうだね。」

終始ニコニコと微笑む父、遠藤グループ現CEOである遠藤蒼偉^{えんとつせい}。
57歳。

この人ははつきり言って、謎の一言に尽きると思う。笑顔を絶やすことがないお陰で、何を考えているのかよくわからない。まあ、そのお陰で若いと言えば若いのだが、さすがに先程まで目の前にいた桐生総一郎ほどではない。

笑った顔は確かに俺達に似ているのだが、父が声を荒げた事は俺が今まで生きてきた中で一回もないように思える。父はそれほど穏やかな人だ。よく考えれば祖母の穏やかな性格を継いだのだろうが、あの祖父の血はどこにいったんだと不思議に思うほど。叔父や叔母の性格は絶対に祖父譲りなのに…。

俺が教師になりたいと言った時も、「いいんじゃない？」の一言で許してくれた。怒られた経験がないからこそ、一番逆らってはいけない人なんだろうなと思う。そこは翼も同じ考えらしい。幼い頃から父を怒らそうと考えた事は無かった。まあ、その分母親に叱られて育ったが。

「そついえば、雅さんが桐生総一郎の娘さんが来るって騒いでいたよ。」

「ああ…。母さんの趣味に付き合わされてた。ピンクのメイド服着てな。」

「ははは、雅さんらしいねえ。」

「お帰りなさいませ、旦那様。おや、亨坊ちゃん、如何されました。」

渡瀬が出迎えに玄関まで来ると、父は颯爽と母さんのいるであろうリビングへと向かった。それを少し呆れた目線で見送って、渡瀬に今日は泊まる旨を伝えると心無しか嬉しそうな顔をした。確か自分の部屋に携帯を置いてあったんじゃないかと思って、自室に向かおうとするとしゃがれた声が背後からかった。

「亨じゃないか、久しぶりだな。」

「おじい様。元気そうでは何よりですね。」

「お前…、その言葉使い止める。きーしょーいー!」

「…てめー、その口調の方がきしょいつつんだよ!」

祖母と違い、この家で口汚い事を言っても許されるのは祖父だけだ
と思う。と言っても、こんな口を利くのは俺しかないが。

遠藤グループ総帥、遠藤愁清^{えんどうしゅうせい}、御年79歳。

戦後の財閥解体を生き抜き、現代の遠藤グループの礎を築きあげた
雄であると共に、今や伝説の域に達した経営の仏様：らしいが、俺
からすれば、飄々としたお節介なクソジジイであることに変わり
は無い。

経営に関する眼は確かで、今でも家に政財界のお偉いさんだとか
祖父の意見を聞きにやってくることもある。如何にも昭和を生き
抜いたジジイの貫禄があるものの、祖母、珠緒の尻に完全に敷かれて
いる。なまじ祖母がおっとりしているからそう見えないのだが、家
にいれば否が応でもわかる。あの祖母の作った毛糸の残骸を見て、
祖母を猫と称したものの、結局は首に巻いて出かけていたのを何回
も見た事がある。誰が編んだのかわかりきっているからこそ何も言
わなかったが、今となってはそれがよかったのか…。

「遂に見合いでもする気になったか。」

「見合いなんかしねえって何回言わせれば気が済むんだ。あーあ。
遂にボケたか。全く。」

「なんじゃとー！珠緒ー！！亨が苛めるー！！！！！！」

「だからそれがキモイって言ってんだよ、ジジイ！！」

うふふふと笑いながら祖父を諷める祖母を見ながら、ようやく自室

へと行けた。机の上に置かれている携帯を確認すると、何件か着信が入っていたが、メールで返信をしてリビングへと向かった。

「あれ、亨、帰ったんじゃないかったのか？」

「携帯忘れてな。面倒だから今日泊まる事にした。」

「ふーん、ま、いいけどね。久しぶりに全員揃ったねー。」

「それはいいけど…女の子の華がないわ…。ねえ、蒼偉さん。」

「どうしたの、いきなり。ああ、桐生総一郎の娘さんね。どうだった？」

「可愛かったわー…。」

「そうなのかい？」

うつとりと頬を染めた母、雅をうんざりとした眼で眺めながら、そういえば桐生さんのモデルの件を思い出した。父と母は神崎の事に夢中だし、祖父と祖母もその話に入っている。母に知られると五月蠅いので、なるべく穏便に済むように翼に小さな声で聞いた。

「桐生さんから相談あったんだけど、一応お前にも聞いておくって言った以上、聞いておかなきゃなと思って。ちなみに俺は断ったんだけどな」

「桐生さんって秀人さんの方？うん？何、一体…。」

「『カサブランカ』のコレクションが年明けに開催されるの知ってるか？」

「うん、毎年同じ日だからね。それがどうかした？」

「モデルやらないかって誘われたんだが、お前やるか？」

露骨に嫌そうな顔をした翼を見て、「だよな」と苦笑した俺は桐生さんに断りの電話を入れなければいけないと思ったのだが、さすがに耳聡い母が気付いた。

心無しかキラキラと目が輝いているように見える…。なぜだか堪らなく嫌な予感がするのは気のせいではないだろう。

「たす「嫌だね」まだ何も言っていないじゃない。」

「言いそうな事がわかるから嫌だって先手打っておかなきゃね。」

「も…じゃあ、と「俺はもう断ってあるから無理」なんなの、この子達ったら！蒼偉さん、何とか言っっちゃってちょうだいな！」

「そんな事言ってもねー」と渋る父ではなく、祖母が母の味方をしたようだ。今まで祖父と話していた祖母は、くるりと身体の向きを変えて俺達に向き直った。柔らかい笑顔を浮かべたその顔を見て、母の時同様嫌な予感がしたは、俺だけではないと思う。

「私も見たいわー。」

「……………仕事がありますから。」

「有休取りなさいな。」

「駄目です。」

「もう。面白みの無い子達ねえ。せつかく、唯さんのご両親の結婚記念日だって言うのに。」

「え…?」

「あら、知らなかったの?と言っても、私達もさっきちらっとだけ唯さんの口から聞いたばかりなのだけねど。ねえ、雅さん?」

父に構って貰っていた母も、その事を思い出したのか身を乗り出して俺達に訴え始めた。

「そうよー。『カサブランカ』のコレクションって毎年同じ日でしょう?それって、唯ちゃんのご両親の結婚記念日だったんですって。何でも、桐生総一郎が唯ちゃんのお母さんのウェディングドレスを作ったんですってよ。あなた達、桐生総一郎に会ったんでしょ?何か言っただけ無かった?」

「いいや…。」

「何も言って無かったよ…。」

「でも、自分の再婚した奥さんが亡き親友の奥様だったなんて…。因縁めいたものを感じるわー…。」

「それでも自身のブランドのコレクション日を毎年その日にしたのも凄いなあ。どっちも彼にとって大切な人達だったんだろうね。」

父の言った言葉を反芻しながら翼の方を見ると、やはり同じ様な表情をした翼がそこにいた。

第59話（後書き）

ようやく出ました。双子の父と祖父。

亨と親子仲、祖父との仲は悪くないです。

エンドウソウイ
遠藤蒼偉

57歳。

現遠藤グループの最高経営責任者（CEO）。翼、亨の双子の父であり、妻・雅を一直線に愛する愛妻家。妻を『雅さん』と呼ぶ。弟と妹がいるが、いずれも性格は似ていない。

母、珠緒の性格を受け継いだのかおっとりとした穏やかな性格をしているものの、双子からは怒らせると絶対怖いという認識を持たれている。

危険認識能力に長けているため、母・珠緒が作るバレンタインチョコの危険性を誰よりもわかっている。その為、仕事に託^{かこ}けてよく逃げる。

エンドウシユウセイ
遠藤愁清

79歳。

現遠藤グループ総帥。戦後の混乱期を乗り越え、尚且つ高度経済成長とバブルを乗り越えさせ、発展させ世界的企業に育て上げた経営の仏様と称された雄。現在は経営を息子・蒼偉に任せているものの、その伝説的な経営手腕を乞われて自宅に人を招いて経営術を披露している。

双子の祖父であると共に、蒼偉の父。妻は珠緒。警備を撒いて、市場巡りをするのが趣味。

早くひ孫の顔が見たいので孫二人に見合いを薦めて結婚を促しているが、運命絶対信者の妻によって阻まれている。

第60話

『カサブランカ』のコレクションの日が毎年同じ日なのは有名で、それはレーベルが立ち上がりから今まで変わる事がない不文律。それを聞いた瞬間は信じられないように思ったものの、記憶の中を辿ると確かに千歳先生達の結婚記念日は年明けだったような事を思い出す。

千歳先生と親友だったという、桐生総一郎。そして、千歳先生の妻だった祥子さんを、自分の後妻へと選んだ。傍から見れば、親友の妻を寝取った裏切り行為にも見える。それなのに、自らのブランドの発表日は親友の結婚記念日で…。

そう考えると、三人の関係というのはなかなか複雑な人間関係だったのかもしれない。さすがに詳細を聴くのは憚られるが、ふと、この歪とも取れる関係のせいで神崎が千歳先生の実家から嫌われていたのかもしれないと思った。

「それで…翼も亨もやっぱり出る気はないの？」

「え…？ああ、出ませんよ、おばあ様。翼、お前は？」

「遠慮しておくよ。ステージに上がるだけで緊張しそうだから。」

「じゃあ、俺桐生さんに電話してくるから。」

母と祖母が相変わらず残念そうにしていたが、俺は二人には構わずに自室に戻り桐生さんに電話をかけた。

『もしもし？どうかした？』

「この前の返事、『カサブランカ』のモデルの件ですけど。翼にも聞いてみました。やっぱり嫌だって言っていました。すいません。」

『えー！？マジでか！！うわー、香港行く前に決めておきたかったのにー！』

「桐生さんやればいいんじゃない？」

『僕は駄目だよ、もう裏方に徹してるから。』

良く言う。

裏方があんなにメディアに出るもんかと思いつつながら苦笑する。

「香港？桐生さん香港行くんですか？」

『うん、明後日から。』

「さっき桐生さんの親父さんに会いましたけど、親父さんもN・Y行ってくて言っていましたけど。」

『あー、そうそう。忙しいんだよね、今の時期。それなのにパリにクリスマス休暇がてらに唯と一緒に行くってどういう事なんだろうね！あー、僕も行きたいのに！！…って、ん？いつ父さんに会ったの、お前。』

「ディナーに誘われたんですよ。ラファエル・ガネットィの店に。」

「レイフの？」と言って桐生さんは少し驚いたようだった。そう言えば美奈にも会ったな…。

すげーな、俺。今日一日で桐生家制覇だぜ。

『今日は唯が世話になったな。お前の家の皆さんにも感謝してるって言っておいてくれない？』

「いや、それはいいんですけど…。桐生さん少し聞いてもいいですか。」

『何？』

「神崎って…妹さんって千歳先生の娘なんですよね。」

『……………は…？お前、何で千歳さんの事知ってるの？』

「千歳先生と祥子さんと知り合いなんですよ、俺。と言っても、本当に偶然知ったんですけど…。」

そう言っつて、俺が千歳先生に出逢った経緯などを話すと少しだけ驚いているようだった。電話口で啞然としているのがわかったが、すぐに気を取り直したように元の口調に戻っていた。

『はー…なるほどねえ…』

「祥子さんって亡くなったんですよね？」

『一年前にね。ガンが発見された時にはもう手遅れって言われたんだけど、余命宣告の半年より長く生きたんだ。これ、あんまり唯の前で言うなよ。唯、一気に顔から表情無くなるから。』

桐生さんに厳しい口調で言われた通り、確かに祥子さんが亡くなった話をしていた時に神崎の顔から表情が消えていたような気がする。母親である祥子さんを亡くして一年。まだたった一年。

唯一の肉親である母親と死に別れた事というのは、あの子にとってまだまだ生々しいものなのだろう。

小さな身体のくせに、神崎は色々と抱えている。

その支えがこの家族達なのであろうが…。

『え、待って。ていう事はなに。お前と翼は唯の生まれた時の頃を知ってるわけ？』

「生まれたっていうか…祥子さんのお腹にいるころか『いいなー』
『…声張りますね…』」

『僕も美奈も唯の生まれた時の頃知らないんだよ。父さんは知ってるんだけど…ていうか、父さんの場合は失われた二歳から四歳の頃まで知ってるからね…。本当にズルイよな。そう思わない？』

「 思いません。」

『あー…可愛かっただろうなー、赤ちゃんの頃の唯…。』

桐生さんがつつとりと脳内パラダイスにトリップしたところで、この電話を切るうと確信した。

滔々と妹が赤ちゃんの頃は可愛かっただろうなと連呼する桐生さんに愛想を付かして電話を切って、少し息を付いた。

なんだか、今日一日で随分な事があった気がする。大した事ではないと思っていたはずなのに、それが自分の尊敬する千歳先生の事だったと思うと、自分が思っていた以上に気を張っていたのかもしれない。

ふと古いアルバムが目に入り、思わず一冊を手を取った。

アメリカにいた頃の写真が修められているそれは、両親は知らないだろうが千歳先生と祥子さん夫妻と一緒に撮った一枚が修められている。もちろん唯もいるのだが、まだ小さい頃の写真なのであいつは絶対覚えていないだろう。

千歳先生に抱かれた生まれただけの唯と、その隣に寄り添って幸せそうに微笑む祥子さん。

この二人がもうこの世にいないなんて信じられない。

それに、こんなに幸せそうに微笑んでいる祥子さんも、一年前までは先生の親友である桐生総一郎の妻としてその隣で笑っていたはずだ。なかなか複雑な三角関係だったのだろうか。

まあ、それを知っているのは桐生総一郎と千歳先生と祥子さん達の、当事者達だけなのだろうが。

パラパラとアルバムページを捲っていると、パリりと色あせた一通の手紙が落ちた。

懐かしい。これは、日本に帰ってから半年後に千歳先生から届いたエメール。

今の様にインターネットがそんなに普及していなかった時代、忙しい先生とは頻繁に手紙のやり取りは出来なかったけど、確かに一通の手紙が届いた時には飛び上がるほど嬉しかったのは覚えている。返事を書いたけれど返事は来なかった。それを酷く寂しいと思ったものだが、ドクターの仕事が忙しいものだと思って我慢していたけれど、実際は亡くなっていたのだと思うと胸が痛い。

届いた手紙の内容事態はすぐ力が抜けるような内容だったのだが、その中に一枚の写真が入っていた。

幼い時の唯の渾身の一枚と思わしき、笑顔満開の写真。考えてみれば先生も相当な親馬鹿だったのは間違いないと思う。女の子だったというのもあるかもしれないが、それでもこの写真は力が入っているように思えてしょうがない。

ふと笑みが零れた。

今の娘の姿を見れば、千歳先生は喜ぶだろうか。それとも嘆くだろうか。

あんな美形家族に囲まれて、美形音痴に、そして鈍感に育ってしまった娘を。

「でかくなつたな、唯も…。」

ぽつりと呟いた声が部屋に反響する事は無かった。

第61話

週末にいろいろとあったものの、週の始まりは律儀にやってくる。久しぶりに実家に泊まった。相変わらずな両親の様子に安堵し、また祖父母の元気そうな姿も見られた事にほっとする。

なんだかんだ言いつつも、うちの家族は仲がいいと思う。それこそ俺の友人なんかは親子関係が破綻している奴も結構いる。資産家と言えは聞こえはいいが、普通の家より金と人と権力が絡んでいる分、親子と言えど複雑な関係になるのも珍しい事ではない。

祖父は色々と画策するのが好きだが、父の方が策を弄する事では上を行く。あの何を考えているかわからない表情を読み取るのは、生み育てた祖母でも無理なのではないかと時々思う事がある。俺も翼も父からは実際的に害を与えられた事がないので安心してはいるが、敵に回すと色々と厄介な人だとの共通認識で一致している。

祖父が先代から守り育てた遠藤グループは、父の代で更に巨大なものになった。あの巨大企業を率いるには、やはり父が相応しいのだと思う。

そんな父もそろそろ孫の顔が見たいのか、少しばかりそう言った事をチラツと話すようになったのだが、俺は例に漏れず聞かなかつたふりをして過ごし、翼も翼で苦笑するに留まっていた。

コンコン

授業が無い空き時間、次の授業の資料を探していると部屋のドアがノックされて来客を知らせた。

「はい。」

「おはようございます、亨さん。」

「悠生、お前授業は？」

「俺も空きなんですよ。暇なんで遊びに…」

「暇って…。仕事しろよ。」

「まーまー！！あ、これ差し入れです。食ったことあります？」

差し出された棒は、一個十円の駄菓子。苦笑しながらもそれを受け取ると、悠生も持っていた一本をもさもさと食べ始めた。

「亨さんって、こんなの食います？」

「食つぞ。って言っても、最近は滅多に食わないけどな。」

「意外！お坊ちやまってこんな駄菓子食わないで生きてるのかと思つてた。あ、怒らないでくださいね。」

ちやつかりと俺を貶して、すかさずに謝りを入れた悠生を呆れたように見やり、ため息をついた。

お坊ちやまつて…。ま、確かにそうなんだが。
家は金持ちにしては比較的寛容な方で、そもそも祖母と母があまり金持ちな考えをしていないせいで、色々とさせてもらっていた。買い食いもその一貫で、ちゃんと手伝いをして駄賃を貰ってから駄菓子屋まで翼と二人で買いに走ったのは懐かしい思い出。まあ、警護のメンバーがしつかりと後ろに付いていたのもなかなか異様な光景だったと思うが。

「うちはそんなに縛りきつくないからな…って、お前なにその雑誌。」

「あ、俺、桐生美奈が表紙なんで買ったちゃいました！」

「……好きなのか？」

「好きですねー。すっげー綺麗なカラダしてますよね。しかもこの雑誌、兄の桐生秀人も載ってるんですよー！同じページではないですけど。」

「……………」

「桐生秀人も凄いですよね。中学まではイタリアに居て高校・大学は日本でしょ。よくこっちの学校についていけましたよね。確か高校は超進学校で、大学は国立の最難関学部！顔も頭も良くて、更に才能まであるなんて、神は二物も三物も与えましたよね。」

「…そうだな…」

「しかし、凄い美形兄妹ですよー、この二人。父親の桐生総一郎

も相当ない男だつて言う評判ですけどね。本物見てみたいなー！」

お前の好きな神崎の家族だぞ。

とはまさか言えないので、黙って悠生の桐生家談義と大人しく適当に相槌を打つことで歪む顔を何とか誤魔化した。大学も少し調べれば俺の出身校だとわかるはずだが、さすがにそれはなさそうだ。

確かに桐生さんは機転が働くし、頭がいい。零先輩がいなかったら首席だつて取れたと思うが、それは記憶の中だけに書き留めておく。過ぎた事をあれこれ言っても、しょうがない。

なんでも悠生は、美奈がモデルを始めた頃からのファンなのだそうだ。高校生の時に始めたはずのモデル業を無難にこなしていた美奈が、ある雑誌での一枚が美奈の仕事に対する気持ちを変えた。

…のだそうだ。

力説する悠生の話の流れを聞きながら、次の授業で使う資料を再び探し始めた。

「あの当時は所詮父親の七光りだとか言われてたし、兄の秀人も『Dupont』の広告で伝説作つてたでしょう？その見方が大勢を占めてた時に、いきなり変わったんですよね。後のインタビューで、あの一枚の事話した事が一度だけあって。何でも、自分のお姫様が撮影所に来ててその撮影を見てたとか…。いやー、あんなに綺麗なのに不思議ちゃんって！これが所謂ギャップ萌えてやつですかね！？」

神崎だ。

間違いない、神崎がその場に居たはずだ。じやなきや美奈がお姫様がいたとかっていう不思議ちゃん発言をするはずがない。あいつは不思議ちゃんキャラなどでは断じてない。あいつはもつと強かな女だ。それでいて、グレイシー柔術も身につけている猛者だ。」

そんな美奈にやる気を出させた神崎。
やはりあいつは凄い。

桐生家全員の力の原動力に違いない。だからこそあの溺愛っぷりなのか。いや、違うか。」

「つかぬことを聞くが…神崎はどうなんだ？」

「神崎ちゃん？神崎ちゃんと桐生美奈を比べてどうするんですか。あくまでも桐生美奈は芸能人じゃないですか、実際付き合っただら迷う事無く神崎ちゃんです！」

「…へー…」

遠い目をしてる自覚はある。だけど悠生はと言うと、美奈の載ってる雑誌を熱心に読んでいるし、声をかけないままにしておいた。

美奈のファンでありながらも、神崎を選ぶこいつ。

だが美奈も美奈で、桐生さんから大切な妹だと大切にされているし、父親の桐生総一郎だってそうだろう。

もしも。

現実にはありえないだろうが、美奈を蔑ろにして神崎と付き合うような事があったら、確実にあの二人の強烈な視線だけで射殺されるのではないかと危惧してしまう。

なかなかコイツも茨の道を歩むなど、どこか皮肉気な頭でぼんやりと考えた。

第61話（後書き）

次は唯に戻ります。

第六十二話（前書き）

少し、急展開します。

第六十二話

遂にやってきた再テスト日。水曜日の放課後に指定された教室へ来いという通知があつたのは週明けで、月曜、火曜と死に物狂いで勉強した。勿論その勉強がてらバイトに行ったり、パパとお兄ちゃん、お姉ちゃんとの電話にメール攻撃を毎日返し、その忙しい中でもお姉ちゃんと彰義さんとの関係に頭を悩ませたりしていた。そのお陰で少し寝不足だ。

最近寝不足の頻度が高いような気がする。ちゃんと睡眠時間は取れているはずなのに…やはりN・Yから電話をかけてくるパパのせいなのかもしれない…。

ふあー…とあくびをしながら、昼休みのお弁当を食べる。もちろん、ちゃんと日本史の再テストぶんの勉強したノートがご飯のお供だ。特に素敵とも思えない徳川秀忠の肖像画を見ながら、秀忠さんの事業を頭の中に叩きこむ。そう言えば来年の大河に出るとか、出ないとか綾乃が言つてたような気がする。正直そんなに興味はないけれど、綾乃が好きな俳優さんが出るとか出ないとか…。私はテレビをあんまり観ないので、俳優の名前を言われてもピンと来ないのが実情だ。

「神崎ー、お客さんだよー！」

「はいはい。ちょっと待って下さいねー。」

クラスメイトの男子から声が掛かって、じーっと見ていたノートから目を上げた。教室の入り口にいるのは四人程度の女の子達。よく

見るとリボンの色が違う。という事は、持ち上がりクラスの子達か。一体何の用だろう。

はて？と疑問に思っていると、その子達がズカズカと教室の中に入って来た。クラスの子達が嫌そうな顔をしていたけれど、それに私は気付く事が出来なかった。

「神崎さん？ちょっと顔貸してくれない？」

「私の顔はレンタル出来ませんが。」

あれ、何で怒ってるの？

「あなた、馬鹿にしてんの？」

「してませんよ。されたと思ってらんだったら、それは自分が馬鹿な事をしてると思ってるからでしょ？」

「っ！！いいから顔貸しなさいって言うてるのよ！！」

「だから、私の顔はレンタルしてませんって。それに、今私忙しいんです。明日とかじゃ駄目なんですか？」

「あなたに断る権利なんてないのよ！！さっさと来なさいよ！！」

えー、面倒くさい。それに、今少しでも勉強しないと放課後の再テストに間に合わないんですけどー。そう言っと、彼女達はあから

さまに人を小馬鹿にしたような笑い声を漏らした。

「あんだ、再テストなの？ 新入生代表までやっておいて？」

「やーだー！ 途中組なくせに頭悪いわけー？ 再テストって超恥ずかしいー！」

「あの一… あなた達は何しにうちのクラスまで？ 早く用件言っても
らえませんか？ 勉強する時間なくなっちゃうんですけど。」

カチンと来たけど、でも再テストなのは事実だし反論は出来ない。
なのでぐつと言葉を飲み込んで、彼女達を教室から出て行かせよう
と思った。それに心無しかクラスの雰囲気が悪くなっているような
気がする。今まで談笑していた皆が彼女達を凄いい目で睨みつけてい
るのは気のせいではないだろう。今は生憎綾乃と愛理ちゃんが購買
部にお昼を買いに行っているので不在だけど、いたらものすごい憤
慨していたらうな。

「ここで言っちゃってもいいわけ？」

にやりと笑ったリーダー格の子。名前何て言っただけな…。吉田
…吉田…吉田？ あれ、吉田だっけ？

「良いですよ。」

彼女が何を言っちゃってもいいのか、さっぱりだ。

名前を思い出そうとするけれど、やっぱり出て来ない。参ったなー。

「じゃー、言うけど。あんた、翔様と付き合ってたの？」

「……は…？」

龍前寺会長と私が付き合ってる？

何がどうして、どこがどうなってそうだったのさ。

「とぼけるんじゃないわよ！あたし達見たんだからね、電車で一緒に帰ってるの…！」

「翔様の降りる駅通過してあんたと一緒に駅から降りたじゃない！」

…えーつと…。それはこの前の日本史で撃沈した日の事かな？

ああ、そういえば確かに会長と一緒に帰った気がする。でも会長とはマンションの前で別れたし、駅で降りたっただけで付き合ってるって直結するのは安易過ぎるような気がするのだけれど。

あー、もしかしたらマンション見られた？会長と付き合っている云々より、そっちの方が何気にマズイ。万が一見ていたらヤバイので、話の本筋を逸らそうと話を続けた。

「会長が降りる駅、把握してるんですか？」

「当たり前じゃない！！翔様を見るために、毎日毎日同じ電車に乗ってるんだから！」

「うわー…ストーカーっばいですねえ…」

「なんですってえ！？」

「あ、気に触ったんならごめんなさい。ていうか、私と龍前寺会長は別に付き合ってるんですけど。それに、私が付き合ってると思ってましたんですか？駅での事以外にあるんでしょう？」

全く、偉い誤解をされたもんだ。迷惑、迷惑。

「すみません、会長。心の中で謝っておくので、許してくださいね。」

「はあ！？あんなに翔様と仲良くしてるじゃない！！」

「それだけで私と会長が付き合ってるって考えたんですか？早計過ぎますよ。それに、そう言う事は直接会長に言えばいいじゃないですか。何でいちいち私に聞きにくるんですか。私だって急がしいんですよ。それなのに、私の都合をまるっと無視して勝手に勘違いして怒鳴り込んでくるなんて、それこそ会長が嫌がりそうなものですけどね。」

「ほんつとムカつく、この女！！」

「だから。ムカつくのはこっちだって言ってるんですよ。自分達が

勝手に早とちりしておいて私に逆ギレしてんじゃないって話。わかつたらさっさと出て行ってくれませんか？ほら、皆にも迷惑かかってるでしょ？」

ぐるりと見回すと、明らかにクラスの皆が彼女達に冷たい目線を送っていた。そもそもあまり仲が良くない持ち上がりの子達がうちのクラスに来て、好き勝手に喚き散らしたのが気に入らなかつたのだろう。もしかしたら煩すぎた…？あー、あとで皆に一言謝っておかなくちゃ。折角の昼休みなのに…。

と思っていると、彼女達のうちの一人が広げていた私のノートを取り上げた。

「ちよつと！」

「あんた、再テストなんですよ？って事はそれに不合格だったら補習？うわ、いい気味〜！」

「補習つて遠藤先生が教えるんじゃないんですよ？ザビエルよ、ザビエル！」

「だから何！！ノート返してよ！！！」

「返して欲しかったら、もう翔様に近づきませんって土下座しなさいよ。」

「あははっ！それサイコー！！ほら、返して欲しいんですよ？だったら早くしなさいよー！！！」

なんでそんな事しないといけないの。私何もしてないのに!!
ギリツと唇をかみしめて彼女達を睨んでいると、それまで状況を見ていたクラスの子達が堪りかねたように怒った。

「お前等いい加減にしろ!!人のクラスに来て何言ってるんだよ!」

「馬鹿なのはおめーらだろ!何勝手にうちのクラスに入って来てんだよ!!馬鹿は馬鹿なりに持ち上がりだけでるんでるや!!」

「そうよ!神崎さんにノート返しなさいよ!」

「大体土下座!?唯ちゃんは今会長と付き合ってるじゃないってはっきり言ってるじゃない!それなのに自分達だけで判決下してんじゃないかってのよ!!」

「おい、誰か会長呼んで来い!!こいつらの自己中っぷりで神崎が迷惑してるって言えば、お前等どうなるかわかってんだろうな!!」

騒然となる教室。周りから物凄い勢いで怒鳴られている彼女達は明らかに面白がっていた表情を強張らせ、今や身を寄せ合っている。それでも強きな姿勢を崩さないのはさっきから私に突っかって来たリーダー格の彼女だった。

「うるっさいわね!!ちょっと頭いいからっていい気になってんじゃないわよ!」

「あ？大体持ち上がりの日本史の担当って、谷野だろ。あいつが作ったテストでいい点取れてても、遠藤の作ったやつと比べりゃあなんクズだろ。」

「それで良い気になってんじゃないとかって言われてもねー。」

「っ…！どいつもこいつも、中途組のくせに…！！」

「おい、それ俺達中途組に対する宣戦布告だつて捉えてもいいんだろうな。丁度いい。他の中途組のやつらも外で見てる事だし、ためーら持ち上がりと中途組、全面戦争と行こうか。」

え…！？ちよつと、それはマズイよ！何でそうなるの！？

何気に廊下側を見ると、ギャラリーが出来上がっていて他のクラスの子達がうちのクラスの様子を伺っている。明らかに憤慨している子もいれば、我感せずと言った子もいる。前者は高校入学組、後者は中学入学組っていう感じだ。

わわわ、皆落ち着こうよ！私だったら大丈夫だからさ！と、思ったら目の前で私のノートが破かれた。

「あ…」

「面白いじゃない！受けて立つわよ…！ほら、返してあげる！もっとも、読めれば。だけどね！」

「わっ…！」

咄嗟に手で顔を庇ったけど、その手に当たる衝撃。彼女達は腹いせのように、私のノートの残骸を私目掛けて投げつけて息荒く出て行った。

何人かが私のところに来て、心配そうに「大丈夫？」と声をかけてくれたけど、曖昧にしか笑えなかった。そんな私の様子を見たクラスの子達がまたしても怒ってしまい、結局昼休みの終了のベルが鳴るまで教室は怒りの渦に巻きこまれた。

第六十三話

「違つぞ神崎！そこは日野富子だ！！」

「唯ちゃん、頑張つてね！！絶対あの子達見返してやるうね！！だから、ここは刀狩じゃないよ？太閤検地。似てるけど、全然似てないからね。」

…。

誰か…助けてください！！

何が悲しくて、六時間目のSHRが私の勉強会になつちやつたんだよう！！しかも一対クラス全員つて比率がおかしい！

あの波乱の昼休み。五時間目が始まるまでうちのクラスはおるか、隣のクラス、はたまた学年上がつてまで大騒ぎになった。一応は授業が始まるつていうことで一旦は落ち着いただけけれど、火はまだ燻っていたようで。六時間目のSHRの時間を担任に直談判したクラス委員長の一言で、私の再テスト対策と言う名のイジメ（善意の）が始まつてかれこれ三十分…。

担任のおじいちゃん先生もニコニコと笑っているだけだし（点数が思わしくなかった私を救済するためなんだから、ま、仕方ないでしょう。頑張りなさい。と言われた）、たまに脱線して余計な話になるのだけれど、それでも内容はさっきの子達の事だった。

あの子達は熱狂的な会長ファンで、中学の頃から追いかけているら

しい。かく言う龍前寺会長も持ち上がり組なのに、理事長特権なのかもしれないが、クラスそのものは中途組に入っている。

とは言え、ちゃんと入学試験は受けているようだし、それもほとんど満点だったというのだから筋金入りの秀才だ。

そんな会長を好きになる子達は必然的に多く、同学年で一番熱狂的なのが私のノートを破った子、吉田さん（仮）らしい。排除するのはお手の物で、学年が違ってもそれは構わないという情報が同じクラスの子達からもたらされた。

被害を受けたのは私一人だったはずなのに、それがこんなにもクラス全員の反感を買うとは正直思っていなかった。特に男子の勢いが思いのほか強すぎて、若干私は困惑している。救いを求めるように、隣に座っていた綾乃に助けを乞うた。

「綾乃…、私もう駄目…」

「頑張れ唯！！負けちゃ駄目だよ！！諦めたらそこで試合は終了なのよ！！」

「そうだ、林の言う通りだぞ！！安西先生の言葉を思い出せ、神崎！！」

熱い…熱すぎるよ、皆！！

私は全中に出るか出ないかの瀬戸際のミッチーなの！？

あの光景に遭遇しなかった綾乃と愛理ちゃんは、パンを買って帰って来たらクラスが騒然としているのに驚いて、さっそく皆から事の

あらましを聞いた。

途端に怒ったのは綾乃だ。私のボロボロになったノートを見て憤慨した綾乃は、龍前寺会長の所に行こうとした。それをなんとか押し留めて、ふと愛理ちゃんを見ると何とも言えないような顔で私を見ていた。

「唯ちゃん…再テスト大丈夫なの？ノートこんなになっちゃって…」

「うーん…テスト自体は無傷だったから問題自体はわかるんだけど、先生の事だし。問題は同じでも答えを変えてそうなんだよね…」

「あー、うん。確かに。遠藤先生ってそういう感じの問題作成するよね。引っかけでは無いにしても、解答が選択じゃないのが多いもんね。」

「そうなのー。だから覚えられないいい！！」

「…ねえ、じゃあさ…」

につこりと笑った愛理ちゃんの顔が今までにないって位輝いた。その光景を私は忘れないと思う。
やけににやりと笑った皆。
背筋が凍った。

その結果。

「神崎ー！！負けるなー！！だからここは淀殿だぞ！！織田信長の

姪っ子なんだぞ！」

「朝鮮出兵は二回だ。ちなみに、石田三成も行ってるんだぞ。」

「江戸の三大改革はね、大飢饉が起こったときに発布されてるのよ。」

「分化とかは大丈夫？遠藤先生、写真付きの問題出してるみたいだから覚えておこうか。」

ありがとう、皆……。あれ、前が滲んで見えないな。私ったら嬉しすぎて涙が出てきたよ。

口が大きく開くのは気のせいだよね。

「神崎——！！寝るな——！！」

「はっ！ね……寝てない！！寝てないよ——！！」

*

「じゃあこれから再テストを始める。机の上の物、出しているものは全部片付ける。それと……」

「……………」

「廊下にいるお前等！さつさと部活なり、帰るなりしろ！！」

「えーっ！」

「えーじゃない。これは再テストなんだから、お前等関係ないだろ。さつさと散れ！ほら、解散！！」

先生が蹴散らしたうちのクラスのみんな。応援してくれるのは嬉しいけど、さすがにやりすぎだよ。あれから一時間。皆の猛しごきによってなんとか問題の内容を理解した私は、緊張しながら指定された教室にいた。しかもクラス全員に見守られるようにして…。

いい加減大丈夫だよと言っても、なかなか皆も承諾してくれなかったのだけれど、さすがに先生の一言で渋々ながらも部活に行ったり帰宅の途に着いたりしてくれた。まさに鶴の一声。感謝します、先生。

再テストを行うのは、赤点取った私と風邪で休んだ隣のクラスの女の子。それと、忌中だということで休んだ子の三人。とは言え、他の二人は余裕で点数を取っている子達なので、真に点数が末期なのは私だけ。これは真面目にやらなければ、今日SHRの時間まで使って教えてくれた皆に申し訳がたたない！！やけに気合を入れた私を、先生が不審そうな目で見ていたのに気付くことは無かった。

第六十三話（後書き）

ごめんなさい、スラムダ ク好きなんです。ミッチーが好きなんです。山王戦でボロボロ泣いたんです。

ちなみに。歴史の解答ですが、間違っていたら教えてください。手元に資料がないまま覚えていた記憶だけで書いてしまったので。三成は朝鮮出兵に参加していた記憶があります。

第六十四話（前書き）

ちよつと後半いやな感じになります。

第六十四話

カリカリカリカリ…

机の上をシャープペンが立てる音と、時計の針の音、そしてグラウンドで部活をしているサッカー部や野球部の練習している声が聞こえる。

教室の中はそんな感じで、ただひたすら目の前の問題を解いている三人の生徒に、それを監督している担当教官。今は本を読んでいるみたいだけど、随分と分厚そうなものだ。何を読んでいるのかまではわからないけれど、先生って今流行っている本とかは読まなそうだな。何と無く…イメージとしては。だけど。

テストとは全く関係の無いそんな事を頭の片隅で考えながら、問題を解いていく。予想通り、本試験の時とは解答が違う。というか、ほとんどが記述になっている…。おー！？

とは言え、先生にわざわざ教えてもらったのもあるし、みんなに直前詰め込みみたいな感じでSHRを利用して教えて貰った事は無駄にはなっていないかったようで、結構解答欄を埋める事が出来ている。しかも、あれだけ口をすっぱくして教え込まれた『享保、寛政、天保の改革』も書けてるよ！！私、凄い！！

一人むっふっふとニヤニヤしながら問題を解いていると、隣のクラスの子が終わったらしく、席を立って先生の所に答案用紙を持って行った。そのまま帰れるのかなと思ったら、なんとその場で採点するらしく、五分後ぐらいに「よし、合格」と言われたその子は笑顔で教室を後にして帰って行った。その後しばらくしてもう一人の子

も出来たらしく、やはりその子も「合格。帰っていいぞ」と言われ
て私に「頑張れよ、神崎」と言つて何故かガッツポーズをされたの
で、へらつと笑つて小さく返しておいた。

残つたのは勿論私だけで…。気まずいよね、気まずいよ。しかも
う一時間近く経つてるし。あと三問。でも三問。それも説明記述の
問題が残つた。一番嫌いなのに、これ。
うんうんと頭を捻らせていると、放送がかかった。

『遠藤先生、遠藤先生、お電話が入っておりますので至急職員室ま
で。繰り返しします。遠藤先生、お電話が入っております。至急職員
室まで。』

放送が終わると、先生は本から顔を上げて私の方を見た。

「神崎、お前まだかかりそうか？」

「あ、あと三問なんですけど…。」

「三問か…終わったらそれ持って資料室まで来い。多分俺の電話も
終わってるだろうから。いいか？」

「あ、はい。わかりました。」

「よし、じゃあ頑張れよ。」

そう言つて先生は教室を出て行つたので、結局残つたのは私一人つていう事に。先生がいなくなつたから、かえつて緊張しないで気が楽になつたな。そう思うと自然にシャーペンも動くもので、残り一問と言つところでガラツと教室の戸が開けられた。

「あれ、神崎一人か？」

「あ、はい。遠藤先生は電話がかかつてきたらしくて、終わつたら資料室まで持つて来いつて言われてます。」

「ふう〜ん。生徒一人を残してカンニングするとか思わないのかなあ、遠藤先生は。」

いきなり入つて来たのは、持ち上がり組の日本史担当の谷野先生だった。正直私はこの先生が苦手だ。

と言つのも、怖いと言つ潜在的なものもあるのだが、それ以上に言葉がキツイ。現に、今も。カンニングなんてしないのに、わざわざこういふ風に生徒を貶すような事を言うばかりか、同じ教師だと言つものにも関わらず教師の悪口を平気で言う。その事を微塵も悪いと思つていないのは明らかで、逆に自分の悪口が聞こえたとすぐさま注意しに飛んでくる。クラスメイトはおろか、多分学年中、いや全校生徒に好かれてないと思う。

このカンニング発言にムカツとしたけど、何も聞いて無いようにそのまま問題を解くために視線を下ろした。この教室に何しに来たのかわからないけど、早く出て行つてくれないかな。谷野先生のつけてる整髪料なのかなんなのかわからないけど、すっごい匂いがキツイ。絶対つけすぎだと思う。パパやお兄ちゃん、高橋さんはこんな匂いさせないから、もう鼻についてしょうがない。しかも締め切

った教室だから充満するのも早い…！

うんざりしながら問題を解いていると、やけに匂いの根源が近くにあるように感じて顔を挙げてみると、すぐ目の前に先生が立っていた。そして覗きこむように私の答案用紙を見てきたので、思わず後ろに仰け反ってしまった。

「あ…あの…？」

「気にしないで続けて。神崎は記述問題が苦手なのかな？やけに鉛筆の進みが遅いようだけど。」

「え、いや、あの…」

「駄目だなー。ここは問題をちゃんと読むんだ。ほら、ここ。生類憐れみの令はー、」

「や、あの…っ！もう終わりました！私、これ持って資料室に行きますからっ！」

前にいたはずがいつの間にか隣に移動していた先生が、私の肩越しに答案用紙に手を伸ばす。その弾みで、と言った感じに顔を手の平でなぞられた。

ざわっと鳥肌が立った。

ヤバイ。何だかわからないけど、私の中の危険信号が真っ赤かにサイレン鳴らして光ってる。何だろう、この嫌な感じ、この雰囲気。

睨まれたカエル…ではないけれど、それぐらい背中に冷や汗ダラダラにかいている気がする。

私の焦った顔を見た谷野先生がニヤーツと笑って舌なめずりをしたのを見た瞬間、全身が総毛だったのがわかった。

普段鈍いとか、鈍感だとか、天然だとか言われているけど、パパ達にいつもいつも言われている事がある。

『お前みたいなのはやっとしたのが好きな変態もいるんだから、気を付けることには越した事ないぞ』

ヤバイ。

どうしよう、パパ。変態がここにいる…っ…!!

第六十四話（後書き）

ごめんなさいね、変態だしちゃって…。

第六十五話（注意）（前書き）

未遂ですが、暴行描写があります。ご注意ください。

第六十五話（注意）

へへへへへ、へん、変態が！！

まさか私に欲情する変態がこんな近くにいたなんて！！あれほど童顔で、どう欲目で見ても中学生ぐらいにしか見えないと皆から言われていた私が！！

あれ、でも最近じゃアロリ系が好きな人もそれなりに市民権得て来てるからな。でも、犯罪は駄目だと思う。ていうか、駄目でしょ！！

谷野先生は相変わらず私の近くに立っていて、私は逃げたいと思っていたのだけれど足が動かなかった。こういう場面に遭遇した事がないのは当たり前で、確か前にお姉ちゃんが対処法を教えてくれたけれど正直それどころではない。

もしかしたらただの偶然…という淡い期待は抱いてはいけなかったのか、谷野先生は私の髪を一房手に取ると、それを弄び始めた。

「あ…あの…」

「ああ、神崎の髪は綺麗だな。何使ってたらこうサラサラになるんだ？」

それ言った所でどうしようもないでしょーーーー！！！！！！先生、ハゲ散らかしてるのにーーーー！！！！！！

と声に出せない絶叫をしていると、匂いまで嗅ぎ始めた。ちよっ…ちよっとおおおお！！！！

どうしよう、逃げなきゃ…。逃げなきゃマズい。遠藤先生は真っ直

ぐ資料室まで来いって言っただから、もうこの教室には戻ってこないかもしれない。それ以前に、この光景を見られたくない。万が一誤解されたら嫌だし、今のクラス間の状況を考えたら今の状況は非常にマズい。

今日ですらあの騒ぎだ、こんな…私がセクハラを受けてるのなんて彼女達からしたら絶好の好機に決まってる。これでも桐生総一郎と結婚したお母さんの娘だ、嫌がらせなんて山ほど受けてきたからそういうネチネチしたイヤな部分も知り尽くしている。もしかしたら…と考えたくは無けれど、この状況を作り出したのが彼女達ではないかと疑いたくもなってしまう。そう言う負の部分を出してしまっただけ、今の状況をどうしようも出来ない自分が齒がゆくて仕方が無い。

黙ってセクハラを受けている私に気をよくしたのかわからないけど（わかりたくない）、ますます顔を私に近づけてきた谷野先生は、俯いている私を覗きこむようにしてきた。

「神崎はー、カレシ、いるのかなー？」

「……先生には、関係無いと思いますけど……」

「んー、それじゃあ答えになってないんだよね。うちの学校って男女交際禁止ではないけど、神崎は生徒会長が狙ってるっていう噂があるんだよ。気付いてたかい？」

知らないし！

大体、私が彼氏いようがいまいが関係ないじゃん！！
もう駄目だ、逃げないと。ええい、動け足！！動け、私の身体！！

もうテストなんてどうでもいい、自分の貞操の危機だもん、そんな事言ってられない。

がたつと椅子を後ろに引くと、急いで何も持たずに逃げようとする。けれど、それを力づくで止められた。腕に強い痛みが走って、思わず顔を顰めた。痛みの元を見ると、谷野先生が私の腕をギリギリと掴んでいるのが見えた。

「どこ行くのかなー。まだテスト、終わってないでしょう？」

「はなっ…放してください!!」

「駄目だなー、神崎は。だから日本史だけが赤点なんだよ？ほら、僕が教えてあげるから…」

そういうなり、目の前が塞がれた。いや、抱きつかれた。

ひつという悲鳴も先生のシャツに飲み込まれて、もがいてるはずの腕は拘束されて動けない。その間にも、先生は私の脚に手を伸ばしてるのが感覚でわかった。

「細いなー、神崎は。もつと食べないと駄目だぞ。ああ、でもすべすべだね。若いっていいなあ…」

「っひっ!!…やっ!やだ!!はなっ…はなしてっ!!やめて!!」

「んー、可愛いねー。やっぱり入学当初から目をつけてた甲斐があったなー。しかし、神崎はおっぱい大きいね。何カップあるのかなー?」

何これ、何これ、何これ。
一体、何、これ。

恐怖ばかりが先に立って、何も出来ない。もがいているはずなのに、目の前の人が男の人なのだと改めて認識するしかない。認識したくない、こんなの。

やだやだやだ！

パパ、助けて、お兄ちゃん、お姉ちゃん、助けて！

いつの間にか押し倒されていた私の口を塞ぎ、目の前に押し掛かる男の顔が涙で歪む。口を塞がれて叫ぶ事も出来なくなった今、はあはあと荒い息がかからないように顔を背けているけれど、それでも抵抗をやめようとは思わない。

ここで抵抗を止めたら絶対犯される。こんなところで、しかもこんな変態が相手だなんて絶対いや。

自由になった片腕をがむしゃらに動かしていたら、変態男の顔面にヒットした。その瞬間拘束していた力が緩んで、その隙に逃げようと思って身体を起こそうとすると、凄い力で引き倒された。そして思いつき殴られていた。

「このっ！！大人しくしろよ！！」

殴られた事がショックなのと、こんな状況に陥っている事への恐怖が私の動きを鈍化させた。悲鳴を上げたいのに、声が出ない。ただ

ポロポロと涙が出てガチガチと震えが止まらない。そんな私を見て満足したのか、変態男は私の脚の間に割って入った。そして、制服の上から胸を鷲掴みにされたと思ったら、ブラウスを引きちぎられた。

「…っ！！」

「あー、やっぱり予想通りだ。白くてハリがあって、綺麗なおっぱい…」

と呟いた変態男が私の胸に顔を埋めようとしたところで、ガラッと教室の扉が開いた。

入り口に立って唾然とした表情で私達を見ていたのは、遠藤先生と、早乙女先生の二人だった。

第六十五話（注意）（後書き）

ごめんなさい、書いていて本当に嫌になりました。今回。
次は亨の視点になります。

第66話

「じゃあ失礼します。わざわざありがとうございます。」

電話の受話器を置き、これをとってくれた教師に礼を言う。

電話の相手は教材の業者で、内容に少し不備があったので使っている全学校に連絡を入れているとの事だった。俺としてはそう大した問題ではないのだが、そこはその会社の方針なのだろう。結構前から使用している教材なので、そういうアフターケアをしていると覚えておくだけでも大分違う。

ふと職員室を見渡すと、随分ガラリとしていた。俺は職員室に居ずに資料室で仕事をしているので滅多にこの時間にここにはいない。まあ放課後なので部活に行っている教師もいるだろうし、各自の部屋にでも言っているのかも知れない。そう言えば谷野もいないが、単純に席を外しているのだろうと思って職員室を後にした。

「遠藤先生！」

「さお…悠生。」

「ねね、亨さん！明後日暇ですか？合コンしません？」

「断る。」

「えーーーー！？即答！？」

資料室に向かう途中、悠生に呼びとめられたので何かと思えば下らない。ふと時計を見ると電話がかかってきてから既に十五分は経っている。これくらいならば神崎も終わったかもしれない。と言う事は、待っているあいっがにいるので、合コン合コン煩いこいつを何とかしないとイケないわけだ。面倒くさい。

「俺を誘うな、勝手に一人で行け。」

「…相手CAなんですよー…？」

「はっ。」

「うわ、鼻で笑った！！亨さん、CA興味無し？」

「ノーコメント。って、お前神崎がいいんじゃないのか？」

「意味深すぎますよ、そっちの答えの方が。あ、神崎ちゃんですか？んー、とりあえず様子見で！」

どうも悠生はチャライ。見た目はいいとおもつ。目元が涼しげなメガネ男子なので好きなタイプには受けるだろうし、人好きのする性格も拍車をかけている。ただ、直球でチャライ。

神崎が好きなのも、美奈が好きなのも単なるミーハー心から来ているものなのではないかと時々疑問に思うときがある。まあ、後者はモデルの仕事を生業としているのでミーハーなものも領けるが、前者に関しては、女子高生と教師と言うある種禁断のような雰囲気が好きだけなのかもしれない。一概には言えないが、多分当たらずと

も遠からずだと思っ。

思わずふーっとため息を付きそうになって、手元に先程まで読んでいた本がないのに気付いた。

「あ。」

「どうかしました？」

「本忘れた。悪い、ちょっと教室に寄らないと。」

「あ、じゃあ俺もいきますよ。何の本読んでたんですか？」

「昔読んだ本。最近懐かしくなってまた読み出したんだ。」

「あー、そう言うのわかりますね。あらすじとか内容わかっているのに、ついつい読んじゃうんですよねー。」

まさに。

アメリカに居た頃、千歳先生から貰った本がある。それは英語で書かれた本だったけれど、俺はそれを食っているように読みふけた。なんて事は無い日本から英語に翻訳された本だったのだけれど、英語で読むのではまた赴きが違って見えてくる。そんなギャップが楽しくて、ついつい読みふけた本だった。

先日実家に泊まった際にふと本棚を見ると、数ある本の中で一冊だけ古びた本が並んでいたのが目に付いた。翼と取り合うようにして読んだその本は大部くたびれてしまっただけれど、それでも中身は綺

麗なもので、懐かしさを思い出して読むと止まらなくなった。結局、全部わかつているのにも関わらず今も直愛読書として君臨している。

「あ、そういえば！神崎ちゃんて思い出したんですけど…聞きました？」

「あー、聞いた聞いた。下らない事してるなと思ったけどな。」

「まあ持ち上がり組も悪い子達じゃないんでしょうけど、どうしても中途組に対して何かあるんでしょうねー。」

確かに根は悪くないだろうが、今回は明らかに持ち上がり組に非があるのは誰の目にも明白で、流石に彼女達の担任もクラスに行くなり随分と説教をしたらしい。それで改善すればいいのだが、すでに一年だけの問題では無くなっている様相を呈し始め、元々仲が良く無かった持ち上がりと中途組との全面对決のようになってきている。

それを収集するのは生徒会の役目だと思うが、今回はその生徒会もなかなか難しい立場に立っているようだ。と言うのも、会長が龍前寺であるが為に起きた今回の騒動、簡単には治まりがつかないのかもしれない。

「俺は龍前寺が絡んでるって聞いたぞ。」

「ああ、そうそう。何でも、ちょっとかい出した子達が龍前寺のファンだかららしくて、だから神崎ちゃんが邪魔だーみたいな感じらしいですね。」

「モテる男も辛いな、龍前寺。」

くつくつと笑っていると、急に悠生が真剣な顔になった。
メガネの奥が光ったように見えたのは気のせいかな？

「でも真面目に、神崎ちゃんに何かあったらとか考えたら、俺抑え
きかないかも。」

「イジメとか？クラスで護ってるっていう話だし、あいつもあいつ
で敵を作るような性格もしてないだ。どう考えても。そういや、
お前テコンドーやってたんだろ？だったら素人相手に抑えきかない
とか言うんじゃないよ。」

「…そりゃあテコンドーやってましたけど…」

「部活にテコンドーなくて残念だったな。」

「…俺もそうですけど、亨さんって何か武術やりました？遠藤家
だったら何か習わせたりとか…」

「あー……一応護身術は習ったかな。」

「」…護身術…」

うちの警護メンバーからな。とは言わないでおいた。
遠藤家お抱えの警護メンバーは、元警察官だったり、自衛官だった

り。はたまたSPだったりと多種多様な出身者ばかりで、その為に彼等から万が一に備えて護身術を習っていた。凄いもので、一度身体に染み付いた身を護る術は忘れる事がなく、危険な目に遭った事はないけれど、それでもケンカや何かでボコボコにされると言う事は無かった。

でもまあ、素人に本気を出せるわけもなく…。

そう言えば美奈もグレイシーの使い手らしい。しかも父と兄を落としたりらしいし。

案外悠生と美奈っていう組み合わせも、アリなのかもしれない。

テストをしている教室の近くまで来ると、さすがに人はまばらで、随分と廊下は静寂に包まれている。話しているのは俺と悠生だけだし、窓が締め切られていても、グラウンドからは野球部やサッカー部員の盛んな掛け声だけが少しだけ聞こえてくる。

そんな中、ガタンと言う机か椅子の転ぶ音を聞いた。もしかすれば、まだ神崎が問題を解いているのかもしれない。一人になった途端、いつもの授業中のように眠ってしまったのかもしれないが。

全く、仕方ねーなーと思いつつもどこかそれを許している自分がいるのに驚く。

週末にかけて知ってしまった神崎のバックヤードを懐かしく感じながら、教室の後ろのドアを引くと、谷野に押し倒されて恐怖しか映していない神崎と目が合った。

第67話(前書き)

ちよつと過去話。

第67話

「おはようございますー！」

「あれ、随分早いのね。おはよう、亨くん。あれ？翼くんは一緒にやらないの？」

「翼は今日母さんの用事に付き合っつて、それから来るつて言っつてましたよ。それより、祥子さん、動いてて大丈夫？もう予定日過ぎてるんでしょ？」

郊外の閑静な住宅街。

千歳先生と祥子さんの住んでいる一軒家に、俺はいつものように遊びに来ていた。

さして大きくもないが小さくもない、いたって標準的な広さのその家は元々祥子さんが育つて来た実家で、現在は夫婦二人で暮らしている。その家の近くには祥子さんの叔母さん夫婦も住んでいて、いつしか俺と翼はそのアットホームな家に入り浸るようになった。

母はその事を知らないが、父は多分警護しているメンバーから話を聞いたのだと思う。この前父から書斎に二人とも呼び出されて「あまり迷惑をかけてはいけないよ」と苦笑しつつも、少しばかり厳しめの小言を貰った。それに俺も翼も頷いて「わかつている」と答えておいた。

当時俺達一家は、高級アパートと言われる家に住んでいたのだが、そのあまり機能的ではない完璧さにすぐに嫌気がさした。日本にいた頃もある大きな屋敷に使用人達はいたし、いつも綺麗だったのだが、多少なりとも散らかっていた方が人が住んでいるという実感が

湧くものだ。しかし、このアパートにそれは似合わない。わざと散らかした先からメイドがどんどん片付けていってしまうのだ。

そんな完璧アパートに辟易した俺と翼は、学校から帰るとすぐさま病院や千歳先生の家に直行するようになっていた。病院と先生達の家自体は距離は近い。だが現実的に子供が二人で訪ねてくることに少しばかり困った顔をするものの、彼等夫婦は自分達を追い返すような真似はせず、むしろ祥子さんお手製のアップルパイなども御馳走になる事なども多かった。

そんな夏のある日曜日、俺は朝から彼等の自宅に遊びに来ていた。千歳先生はあいにく、休みだったのに緊急の呼び出しをされたらしく病院へ行ってしまったと、祥子さんが笑いながら教えてくれた。随分と大きくなったお腹をふうふう言いながら抱えている祥子さんは、三日も予定日を過ぎているのにも関わらず、まだ産まれる兆候がないらしい。

「どこかのんびり屋さんよねえ、この子。」

「ねえ、祥子さんはさ、どっちだと思っの？男？女？」

「うーん…どっちでも嬉しいんだけど、亨くんは男の子の方がいい？」

「そうだね、俺と翼と一緒にサッカー出来るじゃん！！」

「あはははは！じゃあこの子は二人にとっては弟的存在にあるわけねー。あ、ねえ！じゃあ女の子だったら？」

「女の子？だったらサッカー出来なくなるよね。うーん…女の子だったら…母さんが喜びそうだな。」

俺と翼を産んだ後、「可愛い女の子が欲しい！」といつも言っている母だが、そうは問屋が卸さなかったらしい。なかなか上手くないもんだなと、今ではもう諦めているようだ。それでも自分達の従姉妹などに対してはかなりのおせっかいを焼いているので、構われた彼女達からは少しだけ煙たがられている。本人には可哀想なので言っではないが。

「女の子だったら、祥子さんに似そっだよな。」

「あら、千歳君にもきつと似てるわよ。そうね…結構鈍いところとか。」

「鈍いって…先生って、どんくさくないでしょ？」

「性格の話ね、千歳君の性格！ちゃんとしているように見えて、あれで結構鈍いのよ。あ、内緒だけだね。」

そう言ってクスクスと笑っていた祥子さんが、ふいに眉を顰めた。

「祥子さん？どうかした？」

「……あれ……？…うそ……え、ちょっと…今くるわけ？」

「祥子さん？」

「と、亨くん：病院に電話掛けて、千歳君呼び出してもらえるかな…どうも陣痛が始まったみたいなの…」

「えー！？本当！？大丈夫、祥子さん！！」

「うん、まだ大丈夫だけど…ちょっと電話が遠くて…お願い、千歳君に電話して？」

「わ、わかった！！」

焦った俺は、震える手で千歳先生が勤める病院に電話をかけた。出たのはいつもアメをくれたりする受付のオジサンだったが、俺が祥子さんの陣痛が始まったと教えると、慌てて千歳先生を呼び出してくれた。

電話口に出た先生は、俺よりもはるかに焦りまくっている声で様子を聞いてきたので、電話を直接祥子さんに手渡した。

一言、二言か話すと俺に電話を戻して来て、「話したいんだったら」と言っので電話に出た。

『亨、俺が戻るまで祥子を頼むからな！』

「わかった！でも早く来て！」

『おうー！じゃあ、よろしくな！』

そう言っただけ電話は切られた。

それから千歳先生が来るまでの、短い様で長い時間が本当にどうすればいいか全くわからず、逆に祥子さんに気を使わせていたんだと思う。あまりにテンパリすぎて、今となってはほとんど覚えていない。

気が付いたら病院の待ち合い室の椅子に座っていた俺の隣に翼が座って、「大丈夫か？」と聞いて来たので、それで正気に戻ったという感じだ。

祥子さんと一緒に分娩室に入ろうとしていた千歳先生は、祥子さんから駄目だとお達しが出たらしく、大人しく…と言っても、一枚のドアを隔てた廊下側でうろろしすぎて不審者のようだった。他の先生方や、看護師などに苦笑されていたのだが、それでも彼が置かれている状況をわかってはいるらしく、肩に手を置かれたりして励まされ、事務の若い男の人には大げさに背中を叩かれていたりしたのに抗議していた。

結局陣痛が始まってから出産にかかった時間は、初産にしては早いものだった。

母子共に健康ですよとお墨付きを貰ってから、それから俺と翼は病室に通された。

「祥子さん、大丈夫？」

「先生も…大丈夫？なんか、さっきジャクソン部長に呆れられてなかった？」

「うっ！お前から見てたのか！！」

くすくすと笑いながら俺達の会話を聞いていた祥子さんが、大分疲れた顔をしながらも、それでも相変わらずの柔らかい表情のまま、抱いていた赤ちゃんを俺に差し出してくれた。

「この子、女の子なの。ごめんねー、サッカー出来ないね。」

「翼も亨も、この子を抱いてもいいぞ。まだ頭が座ってないから、こう、頭に手を当てる支えて…そう。さっき生まれたばかりだから、しわくちゃだけど、絶対可愛くなるぞ、この子。」

「今から親バカ？全く、困ったパパになりそうねー。どう？赤ちゃん抱いた感想は？」

感想も何も。

余りに小さすぎるその子は、それでもしつかりと呼吸をしている。ちゃんと身体も温かいし、赤ちゃん特有の匂いもさせている。確かに顔はしわくちゃで、正直サルっぽいなーとか失礼な事も思ったけれど、くわぁ…と小さな口であくびをした瞬間、俺は何とも言わない感情に包まれた。

「…っわ」

「小さいねー…手とか本当に小さいや。ほら、僕の指手の平全部で握ってるし。」

「ね、先生。この子に名前は付けた？」

俺と翼が仰ぎ見た彼等は俺の質問に対し、満面の笑みで答えた。

「唯。神崎唯。」

「「ゆい？なんでゆい？」」

「俺の愛する祥子が産んだ、俺の唯一無二な宝物。だから唯。」

「ゆーいー、ほら、パパが貴女に名前を付けてくれたわよ。良かったわねー。」

「ああ、ほら、なんか嬉しそうに見えないか？」

「あら、本当ね。」

そう、あの時確かに笑い合っていた彼等二人はもう居ない。

その名前を付けた娘を、この世界に遺したまま。

そんな二人に大事に思われて、この世に生まれてきた娘…唯が何故、谷野に押し倒されてこんな状況になっている。

俺は無意識のまま入って来たドアを後ろ手で閉めると、未だに彼女に押し掛かったままの男の襟首をおもむろに掴むと、あらん限りの力でそのまま後ろに引っ張った。

ガターン！と机とイスに突っ込んだ男を無視し、俺は着ていた白衣を脱ぐとそのまま彼女をそれを着せてやった。

そして、今までに出したことはないほど低い声でその辺に転がっている男に声をかけた。

「おい、何やってんだ、お前。」

第67話（後書き）

ジャクソン部長に関しては、詳しくは『カサブランカ』の千歳編で書く予定ですが、まだ総一郎が終わりません。取りあえずは病院内の絶対権力者でもある外科部長です。

第六十八話

「何してんだ、お前。」

いつも怒られる時以上の低い声。

自分の長くて今は乱れた髪の間隙から目の前に立ちふさがっている人物を見上げると、顔は見えないものの、圧倒的な憤怒を纏っているようだった。

どこかぼんやりと…しかし混乱した頭でその光景を見てみると、ふわりと香った匂いに気が付き、その在所を探せば、それは白衣で。

谷野先生の匂いがこびり付いている私の身体、それがとても耐えられるものでは無かったのに、何故か遠藤先生の着ていた白衣の匂いが不安と混乱を抑えてくれているように感じて、少しだけ…ほんの少しだけホッとする。

そう言えば今し方、先生が私に白衣をかけてくれたなと思い出し、自分の格好を今更ながらに自覚した。

元々短い方では無かったとは言え、膝上のスカートは太腿^{ふともも}まで捲れ上がっているし、制服のブレザーは片腕だけが辛うじて引っかかっている状態で、引きちぎられたブラウスはボタンがいくつか飛んでいた。ボタンが意味をなさなくなったブラウスからは完全に下着が覗いている。付けていたブラは一応無事だったけど、胸に残った赤い指の跡を見るや否や、血の気がザツと引いた。

目線を移して両手首を見ると、そこにも押さえつけられた時に付いた赤い痣。

今までに起こった事をフラッシュバックさせた私は、ガタガタと震

え先生が羽織らせてくれた白衣を必死に握り締めて前を合わせた。身を縮こませて今起こった事を辛うじて堪えていると、すぐ隣から声がかかった。

「神崎ちゃん、大丈夫!？」

早乙女先生だと言うのは声でわかったが、顔を上げる事が出来ないふと、頭に何かが触れる感触がし、その瞬間私はひつと言う短い悲鳴を上げて、その感触を振り払った。

「あ…ごめ…」

私が振り払ったのは早乙女先生の手だったらしく、振り払われた手を見て驚いた様な表情を見せた先生に対し、私は罪悪感に襲われた。しかし、そんな私の内心を知ってか知らずか、いつものようにへらつと早乙女先生は笑った。

「もう大丈夫だからね。何にもされてない？」

「その状態で何もされてないわけないだろ、馬鹿。」

先ほどの低い怒声とは一転、呆れたような声音をさせた遠藤先生はその秀麗な顔に心配そうな表情を乗せ、私の前にしゃがみこんだ。

「神崎、お前あいつに何された。」

「ちよつ！直球すぎ、遠藤先生！！」

「お前は黙ってる。神崎、俺と早乙女にはどう見てもお前が谷野に襲われてるようにしか見えなかった。一体何があった。」

「…あ…あ、あの……………」

先生方の心配そうな顔にも、間違いなく怒りの色が見え隠れしている。だけど、私がただ震えて声を出せずにいる中で、場違いなほどの裏返った声で「違う！」と叫ぶ谷野先生がこっちに向かって来たのが見えた。

その姿を見て私は反射的に身を引いたけれど、それより早く先生達が立ちふさがってくれた。

「僕が襲った！？何を馬鹿な事を言うんだ、君ら！！」

「どっからどうみてもめえが襲ってただろ。」

「だから違う！神崎が誘ったんだ！あの子がテストの答えを教えてくださいって言うから！勿論、何を言ってるんだって叱ったよ？それなのに神崎は一步も譲らないんだ！そればかりか、自分から迫ってきたんだ！」

私は目を見開いて、その言葉を反芻した。
どう考えても私が谷野先生に迫った記憶なんてないし、テストの答えを教えてくれって頼んだ覚えもない。

「…っ！ち…ちが…！！私何も…！」

反射的に顔を上げて反論すると、意地の悪そうな顔と目が合った。
この顔は、さっきまで私に押し掛かっていた時にしていた表情…。

「ああ、もしかして色仕掛けをしてまで再テストに受かりたかったんだね。まあ確かに24点は無だよ。だけど、自分からブラウスを引きちぎるって言う行動はどうかかなぁっておも」

バン！！！！

突然響いた音。それは遠藤先生が机を思い切り叩いた物だとわかる
のには数秒かかった。何故なら、それ以上に怒りのオーラがビシビシ
感じられたから。

「…悠生……」

「は…はい…！」

「生徒会の誰か呼んでこい。今なら篠宮か誰かいるだろう。」

「生徒会？」

「出来れば龍前寺がいい。それから理事長に話持ってください。」

そう冷たく言うと、早乙女先生は「はい」と言う短い言葉を発した。「ちょっと待て」と焦っている谷野先生を完全に無視し、踵を返した早乙女先生。

だが、早乙女先生がドアを開けようと取っ手に手をかけた瞬間、につこりと満面の笑みを浮かべた愛理ちゃんがそこに立っていた。しかも何故か、その手には私のノートを破った持ち上がりの彼女の髪の毛が握られて……

え？

「唯ちゃん大丈夫？あのねー、遠藤先生、早乙女先生。この子主犯格。はい、これ証拠。」

そう言っつて髪の毛を鷲掴みにしていた反対の手からぷらんと差し出されたモノ。それは彼女の物らしい携帯で、その光景を呆然と見ていた私達は愛理ちゃんの真っ黒すぎる笑顔を見た。

「なんかねー、唯ちゃんが襲われてるところをケータイで撮ってたみたいですよ。あ、谷野先生、勿論先生の変態行為も入ってますから。唯ちゃんが誘ったとか、そんな可笑しな事言っつて言い逃れ出

来ませんよ。」

「え…愛理ちゃん…？」

「うふふ、谷野先生？逃げたら私達総出で追いかけますからね。勿論、地獄の果てまで」

……。

「藤田ちゃん…？全員って何の事かな…？」

「ああ！早乙女先生は知らないかもしれませんがね！！実はうちの学校には、唯ちゃんの公式護衛会、通称『唯姫を護ろう 皆の衆』っていう会があるんです。」

え。

なにそれ。

そこにいた愛理ちゃん以外が固まった瞬間だった。

第六十八話（後書き）

あれ…シリアスになるはずが…。
愛理の詳しいプロフは次回！

第六十九話

「大丈夫？うわ、唇切れてるから血が出てるし…あ、タオル冷やしておいたから頬に当てて。」

「う、うん。ありがとう、愛理ちゃん。」

そう言われて、冷たいタオルを頬に当てる。多分これから腫れ上がってくるだろう。週末にはパパ達が帰ってくるから、それまでには腫れが引けばいいのだけれど…。

パパが今の私を見たら、絶対激怒すると思う。

これは推測ではなく、確信。

『カサブランカ』のコレクションを間近に控えているのに、私の事で余計な心配をかけたくないと思って、先生にもそう言った。だけど、当たり前に戻って来た答えは「馬鹿な事を言うな」だった。

私は、保健室の中をこまごまと歩き回って私の世話を焼いてくれる愛理ちゃんを見つつ、ここに来るまでに起きたちょっとした修羅場を思い返した。

*

愛理ちゃんの突然のカミングアウトに驚いた室内にいた全員が絶句していると、早乙女先生が恐る恐るといった感じで声を出した。

「…『唯姫を護ろう 皆の衆』…？」

「はい、そうです。」

「藤田……なんだそれ…?」

「え。…亨さんも知らないんですか…?」

「ああ、初めて聞いた。」

「あー…公式って言っても限りなく非公認に近いものですからね。知らなくても当然だと思います。でも、会員数は全学年合わせて相当数いますし、中等部と大学部も合わせると多分遠藤先生のファンクラブの会員数超えます。あ、ちなみに会長は篠宮先輩なんですよ！！」

にっこりと笑った愛理ちゃんは、篠宮先輩の名前を聞いて逃げ出そうとした女の子が暴れだしたので、掴んでいた髪の毛を離した。だがそれも束の間、今まで私が聞いた事の無いような物凄いドスの効いた声で「逃げたら地獄見るよ」と一言。その言葉にビタツと青白い顔で固まった彼女は、愛理ちゃんがここに来る前に連絡しておいたという生徒会の役員達に身柄を拘束されて連れて行かれた。

彼女が去り際、「あたしは何も悪く無いわよ！！！！」と叫んだ声が廊下に反響し、しばらくそこに留まっていた。それを聞いた私がまたしても俯いたのを見た愛理ちゃんは、気を取り直すように保健室に行こうと言ってくれたので大人しくそれに従うことにした。

谷野先生に関しては、学担の先生が連れて行ってくれた。その際、

私の顔を見た学担の先生は一気に顔が青ざめてしまったように見えた。そして、遠藤先生達にも一応職員室に来るようにと言うと私に「大丈夫か？」と声をかけてくれたので、それに頷いておいた。

だから先生達が出て行った後に、ほっと息をついたものの、やっぱり手は震えたままだ。

保健室に行こうと思ったところで腰が抜けてしまったし、相変わらず身体は小刻みに震えているはで全然脚に力が入らない。それを見た愛理ちゃんが、心配そうな顔で「おぶったげようか？」と言ったけれど、流石にそれは断った。なにせ、逆に愛理ちゃんが私に潰されそうだし。

ごめんね…こんな時ですら、乙女心はあるんだよ…と思いつながら何とか立とうとしていると、ふわっと目の前が覆われたと思っただけで、つと身体が浮いた。

その時ふわりと香ったのは、相変わらず気持ち落ち着かせるような香り。

だからかもしれない。

あれだけ嫌だと思っていた谷野先生の感触を思い出させるような固い腕に、身体を持ち上げられても特に嫌悪感なんか感じなかった。

「…え…？」

「悪いな、保健室まで我慢しろよ。」

そう言った遠藤先生に抱きかかえられて…ていうかお姫様だったことさ。私には、一瞬何が起きたのか解らず、じーっと先生の顔を見てい

た。
ああ、お兄ちゃんとまた違ったイケメンだなー。うわあ、お肌ツルツル…と関係無い事を思っていると、早乙女先生の声で現実に戻って大いに慌ててしまった。

「ちよっ…！亨さん…！」

「うるせえな。お前、先に職員室行ってる。俺もこいつを保健室に連れて行ったら直ぐに向かうから。」

「だからって、亨さん、神崎ちゃんをお姫様抱っこって…！」

「…や、ややや…！やだ、先生下ろして！」

「だってお前立てないんだろ。悪いな、今男に触られるのは嫌だろうが、少し我慢しろよ。』それに、お前の保護者の呼び出しの事も少し話しておかないとな。』

いきなりイタリア語で話し出した先生に驚いたものの、内容が内容なだけに、びくりと強張った身体。それを他所に、先生はすたすたと歩き出した。

後ろで早乙女先生が「ずるっ！」って言った気がするけど、その意味がよくわからないので放っておいた。

保健室までの短い道のりの最中、先生はさっき使ったイタリア語ではなく英語で聞いてきた。元々シカゴで二年間過ごしていたらしいので、その発音は綺麗だった。

『パパは今N・Yにいるんだろ。いつ帰って来るんだ。』

『……週末には帰国しますけど……』

『週末か……。理事長から連絡入るかもしれないが、一応な。多分、お前のパパが呼び出されるだろうな。』

『……ないで……』

「は？」

「言わないで！……お願い、先生、言わないで下さい！！」

縋り付くように。

抱きかかえられているにも関わらず、先生に縋り付いて懇願する。

こんな事、パパやお兄ちゃん、お姉ちゃんに絶対知られたくない。悲しませるのはわかってる。怒ってくれるのもわかってる。

それでも、こんな事、絶対に知られたくない。

必死に言わないでと言う私を、先生は上から射抜くような鋭さを持った目で見ていた。

「馬鹿言つな。お前自分が何されたかわかってるんだろ。」

「それでも！パパに……私の事で心配かけたくないんです！」

「ふざけんよ、お前。たまたま。運よく俺達があの場合に居合わせなかつたら、谷野にやられてたかもしれないんだぞ。それなのに、言わないで？お前、あの人にどれだけ遠慮してんだ。そんなに狭量な人じゃないだろ。」

「…だ…だって……だ…だ…」

「こんな事があって、知らなかった方が逆に心配かけるってわからないのか。」

そう言うと、先生はガラツとドアを開けた。

いつの間にか保健室に来ていたらしい。どうやら保健医さんは留守だったようで、誰もいない保健室の中、カーテンのかがついていたベッドに座らされて項垂れていると、頭上からはあ…とため息が聞こえた。

きっと私のワガママに呆れたのだろう。頭ではちゃんと心配かけているのはわかっているけど、どうしても知られたく無かった。

ぎゅうつとスカートを握り締める。ぽんと頭に柔らかな感触があったのでそろそろと視線を上げると、困ったように笑う先生がそこにあった。

「もっと、自分の父親に甘えてやれよ。」

「…え？」

「千歳先生だったら、絶対オペ放り出してでも駆けつけたに決まってる。それだけ、お前はちゃんと大切にされてきてたんだ。今更、義父だろうが、義兄だろうが、甘えたところで単純に嬉しく思うにしろ、嫌がるなんて事はないんだから。」

「……………」

「桐生さんも同じ、美奈も同じ。お前が信頼してるのなら、ちゃんと甘えてやれ。」

グリグリと頭を撫で回されて、離される。

それを少し寂しいと思ったのは、きつとさっきまでありえない状況にあったからだ。そうに違いない。

人肌恋しいのかもしれない。

あんなことがあったのに、どうしてか先生の側は居心地がいいと思ってしまう。

ふと、視線を移すと自分にかかっていた白衣が目に入った。そう言えば教室でかけられたままだったんだ。

「あの先生、白衣……」

「いい、着てる。」

「え、でも……」

「藤田が今荷物持ってくるから、それにジャージも入ってるだろ。それが来るまでは着てる。別に返すのは後日でもいいから。」

コンコンとノックの音がして、ガラッとドアを開けて入って来たのは噂の愛理ちゃんで、その手には私の荷物があつた。

「唯ちゃん…大丈夫？」

「愛理ちゃん…何とか大丈夫だよ。」

「じゃあ、藤田。こいつ頼むな。後から様子見に来るから。」

「わかりました。」

そう言って、保健室を出て行った先生を見送ると、先程爆弾発言をした愛理ちゃんと保健室に二人つきりになった。

第六十九話（後書き）

申し訳ないです。愛理のプロフは次に回します。ちなみに…藤田愛理
理って言うのがフルネームです。
今更ですが…

第七十話（前書き）

六十八・六十九話の愛理の話していた内容を変更しました。

第七十話

「ねえ、愛理ちゃん…さっきの話って…」

愛理ちゃんは、先程何やら良くわからない事を言っていたような気がする。

確か、公式なんかかかんとか…。

頬を冷やししながら愛理ちゃんに聞くと、彼女はベッド脇にパイプ椅子を出してすぐ側に座った。

ちよつと照れ笑いのような、バツの悪いような笑顔を浮かべながら。

「あのね、『唯姫を護ろう 皆の衆』って言うのは、唯ちゃんに変な虫が付かないように先手を打っておく、もしくは排除するって言う会なの。」

「虫？蚊とか、ゴツキーとか…そう言うの…？」

虫って何だろう。そりゃあ確かにゴツキーは嫌いだけど…。

「…ああ、うん。そう言う感じね。」

「？」

「まあ、とにかく。篠宮先輩が発起人でもあり、会長でもあるのね。だからこそその組織力と団結力と実行力！だから唯ちゃん、安心して高校生ライフを送れるわよ！！」

「あ、ありがとう…？」

力説している愛理ちゃんをどこか遠い目で見ながら、頬を冷やすためにタオルを冷たい方へとたたみ直していると、「もう一回水に濡らして来るね」と愛理ちゃんが言ってくれたので有難くその言葉に甘えた。

そう言えば…どうして愛理ちゃんがあの場合にいたんだろう…。

ぼーっとしたまま考えていると、ブルリと悪寒がしたので着ていた服をかき合わせた。

ふと目線を落とすと、先生の白衣がちょうど私の体をすっぽりと覆うようになっている。こんなに体格差があるんだな…とぼんやり考えていると、愛理ちゃんが戻って来た。

ありがとうと言って冷えたタオルを受け取ると、私は彼女に質問を投げかけた。

「ねえ愛理ちゃん…もういつこ聞いていい？」

「うん、何？」

「どうして愛理ちゃんは、あそこにいたの？」

「…うん。聞かれると思ってた。あのね…『皆の衆』会の事もある

んだけど、唯ちゃん以外のクラスの全員で話し合ってた矢先だったんだ。あの子…吉川さんって言うんだけどね。吉川さんって、会長の事好きすぎて結構中等部の頃からイタイ事してたみたいなの。まあ、これはもう知ってるかもしれないけど、だからこそクラスで話し合ってたんだ。吉川さんなら絶対唯ちゃんに何かするって。だから皆で決めたの。唯ちゃんを皆で護ろうってね。」

「クラスで…？」

「うん、そう。だから綾乃もわかってたから放課後に言ってたでしょ？』誰かに呼び出しかされてものこのこ行ったら駄目だからね』って。だけど今回は誰もこんなことになるとは思っても見なかったとは言え、どこかで危険信号鳴ってたのかもしれない…。だから、なんか急に不安になって私教室に残ってたの。他にもクラスの子が何人が残ってたんだけど、私はたまたま喉乾いたから購買部に行くのかなと思って廊下歩いてたの。そしたら、再テスト受けてた子と会ってね。その子に唯ちゃんの様子を聞きたんだけど、遠藤先生もいるから安心かなって思ってたんだ。そしたら遠藤先生が呼び出されたじゃない？」

愛理ちゃんが言う言葉に、首を縦に動かす。

そう、遠藤先生が呼び出されてからあの状態が…。

あの光景を思い出し、再び悪寒がしてふるふると震えてしまう。はっと気付いた愛理ちゃんが、ベッドに横になった方がいいよと寝かせてくれた。

「唯ちゃん…大丈夫？」

「…だいじょ、ぶ…。」

「ちょっと、ごめんね。」

そう言うと、私のおでこに手を乗せた。ひんやりした手が気持ちいいなど、目を閉じる。すると、愛理ちゃん短く「うわっ…！」と声を上げた。

「ちょっと…！唯ちゃん熱あるよ…！」

「…ねっ…？」

「待つて！体温計、体温計…！あ、あつた…！」

急に慌て出した愛理ちゃんをボーっと横になりながら見ていると、体温計が差し出されたので大人しく体温を測った。ピピピピッと電子音が鳴って表示を見る頃には、私が感じている寒さはもうどうしようもなくなくなっていた。

「うつそ…！37.7…！！え、どうしよう…保健室の先生は外出中だし…」

「…ねむ…。」

「えー？どどどどどっしよう…。とりあえず暖かくしないと！毛布、毛布…」

焦っている愛理ちゃんをどこかおかしく思いながら、そこで私の意識は途切れた。

第七十話（後書き）

『唯姫を護ろう 皆の衆』について。

会員資格：神崎唯に多大なる護つてあげたい願望がある人間。

会員規約：抜け駆け厳禁。何時いかなる場合も、姫と想いを通じるような事があつた場合、大人しく会員達のやっかみと八つ当たりを覚悟する事。

龍前寺父が理事を務める学校全体（中等部・高等部・大学部）で、会員数は遠藤亨ファンクラブ、龍前寺翔ファンクラブの総数を超えるぐらいの規模を誇る。

会長は高等部生徒会副会長、兼、剣道部副部長・篠宮奈津美。

フジタエリ
藤田愛理 16歳

唯の高等部からの友人。性格は至ってノーマルだが、たまにドSになるときがある。

唯・綾乃と三人でよく遊んだりしているが、高校からの友人なので唯の家庭事情をまだ知らない。

『唯姫を護ろう 皆の衆』の会員。

第71話

神崎を保健室に送り届けた後、すぐに職員室へと向かおうとしたが一向に怒りのボルテージが下がらない。

神崎のクラスの担任ではないものの、図らずも事件の関係者になってしまった手前、一応の立ち位置というものの線引きをはっきりしておかないければいけない。

その為には、今の頭に血が昇っている状態を一旦冷却しておく必要がある。どちらかに肩入れしすぎもいけないし、だからと言ってこのまま有耶無耶に、ましてや被害者である彼女がされていた事を無かった事にするべきではない。

悪しき者には罰を。それが正解だ。

とは言え、目の前で起こっていたあの『悲惨』の一言で尽きる出来事をそう易々とは忘れられそうに無かった。

谷野に押し掛かれた神崎の脅えた表情と、父に言わないでくれと懇願していたさっきの必死な顔。どちらも子供がする顔ではなかった。

それを考えれば、自然と眉間に皺が寄るのがわかった。またしてもイライラが募る。

そう言えば車の中に煙草が入っている。冷静になるために、とはい訳がましいが一本吸って、このイライラを解消しておこう。思いついたが吉とばかりに、車を置いてある駐車場へと足は向かっていた。

駐車場に向かっている時にふと、考える。

いつもは滅多に吸わないタバコ。

吸うのは大概女を抱いた後。

口に残る抱いたばかりの女の味を忘れたくて。

タバコを覚えたのは、高校卒業と同時だったような記憶がある。俺の当時の記憶は酷く曖昧で、タバコを吸い始めたのと時を同じくして女遊びを始めた。大学に入ったばかりだった俺は、そこから短期間の間に酷く荒れた。

『遠藤』の名前に寄って来る女なんて大した事は無い。綺麗だと言われている、可愛いと評判。そんな女に限ってがめつく、笑顔なのに腹の中では何を考えているのかわからない。全く持って女という生き物は本音と建前で生きているなと思う。

事実、俺の容姿がいいのも相まって寄って来る女は尽きることがなかった。それは今も変わらないけれど、あの頃は誰でもよかった。

付き合っている、そうやって毎日が過ぎると思っても、現状に納得しない女が望んだ言葉だけは絶対に言わなかった。

言う必要も無かった。

欲している言葉を得られない事への憤りは、そのまま女の浮気へと発展。結局はなんの言葉も口に出さないうまま、付き合う・別れるを

繰り返した。

苛立つ毎日と若さゆえの性への興味。そんな事を続けているうちに、だんだんと喫煙量も増えた。

そんな荒れた生活を繰り返していた俺が、女関係もタバコも落ち着くようになったのはひとえに、祖母のおかげだと思っている。

「亨、貴方随分とご盛んのようねえ。」

「…おばあ様、これまた随分と下品で…」

「あら。こんな事で動じる私ではありませんよ。」

「そうですか。」

「そうです。とは言え、亨。貴方タバコの吸いすぎですよ。もう寄ってくるだけで匂いが…私がタバコ嫌いだと言う事を忘れたのかしら？」

祖母は根っからの嫌煙者で、その影響なのか、祖父も父も非喫煙者である。叔父だけは隠れて吸っているようだが、やはりこの家では吸わないように気を使っているらしい。あのガサツさな感じからは全く見受けられない気遣いを考えると、やはり祖母には誰も勝てないようだ。

祖母がタバコ嫌いだと言う理由だけではなく、毎日派手に遊びまわっていた俺は実家に帰ることが滅多になくなり、自然と家族との時

間も減った。一応大学が同じな翼とは会っていたが、学部が違つたためにそう密に会っているわけではなかった。

この時はたまたま実家に用があつて帰つて来たのだが、その短い帰省時間に祖母に捕まつたのである。

「亨、貴方がこんなに荒れていては、あの子も浮かばれないわよ？」

「……っ！…放つて置いて、くれませんか…」

「そうしたいのは山々なんですけどね、貴方がこんなにも苦しんでいるのを見るのは忍びなくて…。心配しているのは私だけではないのよ。愁清さんもそうだし、蒼偉も雅さんも。翼だつて心配しているの。亨、見て見ぬふりは止めなさい。」

「それが、余計なお世話なんですよ。俺の事は放つて置いてください。」

「放つておけたらいいんですけどね…。だけどそんな事はしないわよ。私は貴方の祖母であり、味方なのだから。だからこそ、亨にはしっかりと現実から逃げないで立ち向かつて欲しいの。ちゃんと貴方には側にくれる家族がいるの。それを下らない虚勢を張つて拒否するのは許さないわよ。」

いつもはぼわぼわしている祖母の厳しい口調に、瞠目する。だが、それに対して出た俺の言葉はまたしてもそんな祖母の想いを真っ向から否定するものだった。

「俺の、何がわかるって言うんですか。俺の何が!」

「亨、もうあの子は…真尋まひろはいないのよ。真尋の事を本当に想っているんだったら…」

「煩い!!真尋の事は…あいつの事は口に出さないでくれ!もう放っておいてくれ!!」

そう言っただけの中、実家を飛び出した記憶が今もなお忘れられない。

あの後、頭をしつかりと冷やした俺はすぐ濡れで実家に戻り、祖母に謝罪した。そんな俺に祖母はどこか泣きそうな顔で頭を拭いてくれたけれど、大学を終えるまで…教員免許を取得し、今の学校に入るまで派手な女関係は止む事は無かった。

ただどこのお陰で、タバコの量は減った。以前のように日常的に吸うことが減り、大分俺の精神状態も落ち着いていたが、それでも何年も経てもなお、女を抱いた後は吸う癖が残っている。

昔の事を思い出していると、いつの間にか駐車場に着いていたらしい。キーで開錠し、タバコの箱を取り出した。あいにく後二、三本しか残っていない。今日の帰りにでもコンビニで新しいのを買うか…。

そんな事をつらつらと考えながら、タバコを口に咥えて火を着けた。

第72話

車に寄りかかって紫煙を吐く。

今はもう十一月だと言う事もあって、五時前だと言うのにあたりは大分暗くなっている。幸い、うちの学校の駐車場には大型の照明が設置してあるので、夜遅くなくても暗すぎるというほどではない。校舎との距離もそう離れていないので、校舎内の照明からも明かりが漏れているのを考えれば、そんなに暗くなったという感じもない。

この一本を吸い終わったら、職員室に行かなければならない。それから理事長にも会って話を通さなければ。

そう言えば、神崎が『桐生』姓だというのを理事長は知っているはずだった。と言う事は、今回の件も彼女に有利に働くようにしてもらいたいものなのだが…。

「遠藤先生！」

後ろから声がかかって、その声に一瞬眉を顰めたが、直ぐにそれを消した。

「なんですか。」

「校長先生と教頭先生が探してましたよ。直ぐに職員室に来るようになって。」

「そうですね。わざわざごうも。」

そう言つて最後の一口を吸い、煙を吐き出しながら携帯灰皿に吸殻を押し付けた。車の中にそれとタバコの箱を投げ込み、さっさと呼びに来た教師の脇をすり抜けて職員室へ向かおうと踵を返した。

しかし、無視された事が彼女のプライドに傷が付いたのか、有紗が「ねえ」と待ったをかけた。

「ねえ、何があつたの？一年の学年主任の先生が走り回つてるし、生徒会室は凄い騒ぎになつてるわ……。亨だったら知つてるんでしょ？だから職員室にも呼ばれてる。」

「お前が知るような事じゃない。」

「そんな。せつかく面白そうな事が起きてるつていうのに、それを知らないのはどうかと思うし。ね、何があつたわけ？」

ウキウキと全くの見当違いの事を口走る有紗に、こめかみが波打つのが自分でもわかつた。

神崎が襲われたのは、面白い事でも何でも無い。

あの子が恐怖で打ち震えているのが、こいつにとつてただの学校で起きた一つの娯楽でしかないのなら、有紗は何も知る必要はない。むしろ、口の軽そうな有紗に何かを漏らしたら、あつという間に全校生徒に広まるだろう。そんな事こそ忌避するべきだ。

ただでさえ良く無かつた俺の機嫌が更に悪くなつたのを見て、有紗は自分の失言に気付いたのか、口に手を当てて黙り込んだ。

不機嫌極まりない目で彼女を一瞥し、さっさとその場から離れよう

と思ったのだが、それを更に引きとめられた。二度も引きとめられた事へのイライラが蓄積していると、有紗がしな垂れ掛かってきた。

「亨がホテルでも何でもない場所でタバコ吸うのって珍しいわよね？」

「お前に関係ない。放せ。」

「うふふ…ねえ亨、学校でするのって、興奮しない？」

「…有紗、お前とはもう関係ないんだ。さっさと放せ。」

「そんなの私が納得したとでも？ね、昔はよくしてたじゃない。私見た事あるのよ？真尋さんと…」

ただでさえ良くない機嫌で、その名前を出されたことで、俺の機嫌は最下層まで急降下した。

しな垂れかかってきている有紗の身体を引き離すと、間髪入れずに顎ごと手で掴んだ。

そして低い声で、有紗に最後通牒を突きつけた。

「…お前が、真尋の名前を口に出すんじゃないよ。」

自分の失言を完全にわかったのだろう。俺は女に手をあげる主義ではないが、そんな俺がここまでと言う事が彼女にとって驚愕だ

ったのだろつ。

手を離してさっさとその場を後にしようと思った時、最後の足掻きとばかりに背後から怒鳴られた。

「私が翼を忘れられないって言うけど！亨だつて、真尋さんの事、いつまでも引きずってるじゃない！！それなのに、自分の事棚上げにして、忘れられないとか、言わないで！！」

職員室に戻ると、そこには校長・教頭・一年学担・神崎の担任、そして悠生が揃って谷野を囲んでいた。その他の教員が見受けられないので、校長以下が人払いしたのかもしれない。

俺が入室したのを見て取った校長が、目線でこちらへと促し、そして今後について話し合った。

生憎理事長は、午後から出張になってしまい、明後日：つまり金曜でないと学校に戻って来ないらしい。とは言え、校長と息子である翔からも連絡は行っているらしく、迅速に対応すると言ってくれたようだ。

その言葉を聞くなり、明らかに顔色が悪くなった谷野がブツブツと「僕は悪くない」と繰り返しているのが癪に障った。

「とりあえず、谷野先生。あなた、理事長が帰って来られるまで自宅待機処分にします。正式な処分の決定は理事長が帰って来てからと言う事になります。懲戒免職も覚悟しておきなさい。」

そう校長が言うと、動揺していた谷野が妙な動きを見せた。それは一瞬の事だったので、ただの気のせいかとも思ったが、校長と教頭が職員室を出て行くこうと背を向けた時に谷野が暴れ出したのだ。

「僕は悪くないんだ、全部、全部あの子が悪いんだああーっ！！！！何でわかってくれなの！僕が悪いわけじゃないのに！神崎が、あの子が僕を見つめて勘違いするからああ！！！！だから僕は誘いにのったんじゃないか！！全部、あの子がああああ！！！！」

テーブルを引っくり返し、椅子を蹴り倒し、そう絶叫していた谷野に焦りつつ、何とか落ち着かせようとしていた先生方を尻目に、俺は酷く醒めていた。

あいつが何をして、こんな愚物を勘違いさせたのかはわからない。確かに神崎には無防備すぎるくらいがあっだし、あんな無防備では勘違いする奴も出てくるだろう。

だからと言って、無抵抗で嫌がっている相手に向かって暴力で屈服させようとし、あまつさえ、彼女の身体を強引に奪おうとした。それは完全に間違っている。

俺は無意識の内に暴れている谷野の近くまで行くと、椅子を振り下ろそうとしている手を逆の方向に捻ると、そのまま後ろに押し倒し、自分の体重を掛けた膝で完全に動きを封じていた。

あっという間の出来事にぽかんとしている面々を放って、谷野の耳元でボソリと呟いてやった。

「叩けばホコリが出そうなお前の事だ。いつそ、逮捕されてから家宅捜索でも受けるか？この、変態野郎が」

俺に押さえつけられたのと、言われた事に対しての恐怖感が勝つたのだろう。大人しくなった谷野を校長らに押し付けて、俺は職員室を後にした。

途中慌てて悠生が追いついて来たが、保健室に行くときだけ言うと途端に静かになっていた。

二人して連れ立って保健室まで行くと、保健医の先生と藤田が深刻そうな顔でカーテンの閉められたベッドを見ていた。

「熱？」

「はい…あの、唯ちゃんの熱がどんどん上がって…さっきまでは普通に話も出来てたんですけど、あつという間に38 超えちゃって…」

「どうやら単純に疲労もあるんだろうけど、精神的なストレスが相当あったのね。可哀想に、殴られているから頬も腫れちゃって…腕とか、手首とか…見てられないもの。」

ちらりとカーテン越しのベッドを見るけれど、姿までは確認出来なかった。

どうでしょうか…という保健医の呟きは、悠生の一言で破られた。

「あの、親御さんに連絡しないといけないじゃ…」

「あー…今こいつの父親、海外で週末でないと帰って来ないんだと。兄姉もいるようだが、二人とも仕事で国内にいないらしいな。」

「え、マジで…。じゃ、あ…神崎ちゃん一人って事になります…よね…?」

「あたし、付き添ってあげたいけど、弟がまだ小さいんで家に帰らないといけないし…。どうしよう…」

…。

とりあえず神崎を病院に連れて行った方がいいのではないだろうか。そう提案すると、そうねと保健医から短い返事を貰い、何故か俺がその病院に連れて行く羽目になった。

第73話

「全く、何でこいつなんかに……」

「おいおい、折角外来まで降りて来て俺が診てやってんのに、何て言い草だよ。」

「人様の子供なんだからな、丁重に扱ってやれよ。」

「へーへー。って言っても、脱がせたりするのは女性看護師だから気にすんなよ、亨。」

神崎を連れて来た病院は、俺の幼馴染の一族がやっている病院だった。まあ、この辺では一番でかいので学校側としても当然なのだろうし、春の健康診断なんかで派遣されるのもこの医師だったりする。

さすがに俺の幼馴染の家だとは知られてはいないだろうが、なんとなく学校で顔を合わせたりすると気まずいと言うか、変に気を使うので疲れる。

特に、こいつ。

伏せった神崎に点滴を打とうとしている男、さたきこうすけ佐田恭輔。

大病院である佐田病院を支えて行く一族では、四人兄妹の末っ子でありながら一番のエリート。専門は脳神経外科。

俺と同じ年でありながら早くもポスト天才医師として巷では有名であるのだが、本人は至ってちゃらんぽらんな性格をしていて、逆にそれが、周囲のプレッシャーをもつもしない鈍さを兼ね備えた強靱な性格を作り出している。

俺が神崎を病院に連れて行くことになって、その場所を聞いた時、少しだけ嫌な予感がしたのだがやはり俺の予感は当たらしい。担当は脳神経外科のくせに、俺が連れて来ると聞いた途端わざわざ夜間外来に向いて来た。まあ有難いと思っべきなのだろうが、俺に抱きかかえられた神崎を見るなり一言。

「亨、お前ついにそんな幼子にまで手を出したのか…しかも暴行つて…洒落にならんぞ。お前んとこのおばあ様が悲しむに違いない…！」

その言葉をすぐさま一蹴し、さつさと神崎を診察させ今に至る。

一応神崎が桐生総一郎の義娘である事は説明し、そして持病やら何やらが無いが。その辺は学校の保健医から聞いていたらしく、学校の健康診断の結果をふんふんと見ながら彼女の身体を診ていた。

腫れた頬には湿布をし、赤く痣になってしまった手首には包帯を巻いてくれた。訝しげな顔をしながらも、恭輔は神崎の傷を的確に治療してくれた。

俺がこう至った経緯を話すと、いつもはおちゃらけたこいつも、流石に眉を顰めて聞いていた。

「なるほどなあ…。大変な事だったな、この子。女の子なのに可哀想なもんだ…」

「…ああ、本当にな。」

「警察には…」

「ああ。手は打ってある。」

そこまでやってやる義理は無いと思いながらも、俺は警視庁にいる友人に少しだけ話をしていた。

神崎から被害届が出ていない以上警察は何も出来ないと言いながらも、「わかった、少し調べて見るよ」と請け負ってくれた友人に対し、後でなにかしら奢ってやらなければいけないと思った。

恭輔を見ると、ポタポタと落ちる点滴を調節しながら神崎の様子を見て、「大丈夫そうだな」と言い、また俺の向かいの椅子にどかりと座って言葉を続けた。

「なあ亨、親御さんって、あの桐生総一郎なんだよな。連絡しなくてもいいのか？」

「あの人、今N・Yにいて週末じゃないと戻って来ないんだと。桐生さんも仕事で香港、美奈もグアムで撮影らしい。」

「てことは、帰って来るまでこの子、一人つきりってわけか。…それはちょっと、なあ…。今点滴打ってるが、今日一日は熱下がらんだろうし。」

「まあ、可哀想だとは思いますが仕方ないかもな。一応コンシエルジュがいるマンションに住んでるんだし、いざとなったらここに入院させりゃあいいし。」

「はあ！？発熱如きで入院させるわけないだろ。」

少し大きな声で恭輔と話していたのが不味かったのか、看護士長らしき人に厳しい顔で注意されてしまったのでお互い口を噤む。
は…とため息を付いたのはやはりお互い様で、先に口火を切ったのは俺だった。

「こつなつたら…おばあ様に頼むか…」

「は？お前んとこのおばあ様に？何で？」

「こいつ、おばあ様の『編み物の先生』なんだよ。知り合った時期自体はつい最近だが、すぐさま仲良くなったみたいでな。今やうちの母親までお気に入りだ。」

「…お…おば……雅さんまで…」

「恭輔、別におばさんで構わないぞ。実際そう言われてもおかしくない年だし。」

「いや！雅さんはそんな、おばさんとか呼べない！！怖くて呼べるわけないじゃん！！お前、自分の親だからって怖くないとも思ってるだろ！！」

「……………」

「うわ、何その嫌そうな顔！そう言う顔されると傷付くし…！」

「さて、おばあ様に連絡すっかな…」

「話聞けよ！！亨の馬鹿！！」

「うるせえ。」

恭輔を診察室に残し、自分は電話をかけるために外へと出た。いくらコートを着ているとは言え、さすがに冷える。

祖母に神崎を看病してもらおうと言うのは突発的な考えだったが、流石に熱を出し、襲われた直後の今、側に誰かいてやる方がいいだろう。そう思つて、一番最初に浮かんだのが祖母だった。

面倒見のいい祖母の事だ。多分断らないだろうとは思つが…。呼び出し音を聞きながらそんな事を考えていると、実家に電話が繋がった。

『はい、遠藤でございます。』

「もしもし、亨だけど。」

『これはこれは、亨坊ちゃん。いかがなさいましたか？』

「すまないが、おばあ様はいるか？」

『大奥様でらしたら、今日は大旦那様とご一緒に歌舞伎をご覧になられておられますよ。』

「ちつ。そうか…。じゃあ、母さんは…」

『奥様なら、いらっしやいます。お換わりになられますか？』

「ああ、頼む。」

祖母がいないのは想定外だが、この際母の方がいいのかもしれない。もしかしたら徹夜になったりするかもしれないし、そうでなくとも母の方が神崎を気に入っている。

まあ、流石の母と言えど、病人相手にはしゃぐこともないだろう。ただ、神崎の腫れた頬と、起きてしまった惨状の事を知れば煩いだろうが。

少しだけ身震いしたのは単なる寒さ故の事だと思い、電話口から聞こえる母の声に耳を傾けた。

第73話（後書き）

佐田恭輔 サタキョウスケ 28歳

亨の幼馴染。大病院である佐田病院の医者一族のうちの一人。四人姉の末っ子。専門は脳神経外科。性格はざつくばらんで、医師の仕事に関してはかなりの慎重派だが、その他の事に関しては雑。亨の母、雅が怖い。

第七十四話

何か物音がして、その音でふっと意識が浮上する。

熱い。

物凄く熱い。

なんでこんなに熱いんだろうと思って身体を擦ろうと思うのだけれど、それも身体が重くて叶わない。

目を開けようとして驚いた。何かで接着されたんじゃないかと思うほど、目が開かない。

それでも何とか頑張ってたけなしの力を振り絞って目を開けると、視界に入って来たのは見覚えの無い真白い天井だった。

「……え……」

ここは…一体何処だろう？

一応動かせる首をぐるりと天井から横に向けると、細いチューブが見えた。その終着点を辿って見ると、どうやら私の腕にあるらしい。発着点はといえば、頭上にある点滴からそれは伸びていた。

確か私は学校の保健室にいて…そう言えば愛理ちゃんが熱があるよとかなんとか言ってたような記憶がある。

うーん…そこから記憶がないってことは、多分私が意識を失ったかなんかしっちゃったのだろう。そしてそれを見かねた保健の先生か担

任のおじいちゃん先生かが病院に連れて来てくれた…んだと思う。
なんにしても一言御礼を言わないといけな。

「あ、気が付いた。どう？身体起こせそう？」

ぼんやりする頭でいろいろと考えていると声がして、そちらを見る
と病院服を来た人が立っていた。IDカードを見ると『佐田恭輔』
と書かれていて、それでその人が医師なのだと判断。先生の問いに、
「ぼーとしながらも頷いて返事を返した。」

「丁度点滴も終わったところだったな。はい、腕出して。針抜くか
ら。」

と言われて大人しくチューブが伸びた腕を出す。いつの間にかジャ
ージに着替えさせられていたのに気がつく。多分愛理ちゃんが着替
えさせてくれたのだろう。

本当にいろいろと迷惑をかけてしまった。でも愛理ちゃんがいなか
ったら、あの時確実に私は…。

そこまで考えて、意図せずぶるりと震えた身体を抱き締めるように
小さくさせると点滴の後処理をしていた佐田先生が気が付いた。

「まだ熱あるみたいだから、今日は、と言わずに明日も大人しく寝
てるんだよ。学校は休んでもいいから。って…あ、もしかして皆勤
賞とか狙ってる？」

「…あの、い、いいえ。狙って無いです。」

「じゃあ明日休んじゃえ。」

ケラケラと笑ってカルテに何かを書いている先生を苦笑して見ていると、カラカラと入り口のドアが開かれた。

「お、亨ってばナイスタイミング。この子目が覚めたぞ。」

「ああ。じゃあ、連れて帰れるか？」

「おう、いいぞ。明日は学校休むように言っておいたから、学校の方には言っておいてくれ。なんだったら今週一杯休めるように診断書でも付けてやるけど。どうするー？桐生さん。」

しばらくぶりに桐生と呼ばれて、一瞬間が空いた。それを見ていた大人二人が訝しげな顔をしたものの、その反応は単に具合が悪いからだと思われたらしい。

ふるふると首を振って診断書はいらないと示すと、「そう？」「と佐田先生がカルテにまた何かを書きこんでいたのを、やはり熱の下がりきらない頭でぼんやりと見ていた。

桐生 唯。

捨てようとしている名前と呼ばれることほど、自分の身勝手さを思い知る事はない。

だからと言って、勝手に名乗っている『神崎』と言う姓もまた、自分のワガママの結果でしかなく。

結局は、私は私のみままで。

でも何かに依存したくて堪らない。

寂しくて、寂しくて。

全部のぬくもりを拒否しているのは私なのに。

「おい、どこか痛いのか？」

「…え…？」

「泣いてる。」

先生に指摘されて気が付いた。

どうやら私は涙を流していたらしい。のろのろと手の平でそれを拭おうとしていると、目の前にティッシュが差し出された。

「あ…ありがとうございます、ます…。」

「別に。」

むっつりと言う先生に萎縮しながら、涙を拭いているとふと疑問が浮かび上がった。何で先生がここに？

「…あの、なんで先生がここにいるんですか？」

「は？俺が連れて来たからに決まってるだろ。」

「な、なんで遠藤、先生が…。保健室の先生とか、担任の先生とかじゃない…」

「俺が車持つてて、尚且つお前の色々な事情を知ってるからだろ。全く、何で俺が…」

「…す、すみません、なんか…」

如何にも面倒くさい事この上ない。みたいな顔で言う先生に、少しゅんとしてると佐田先生が抗議の声を上げた。

「亨！病人相手にきつい事言うんじゃないっつーの！！」

「病人がいるのに、お前みたいに大声出す方が問題だろ。」

「うっわ、ム力つく！ね、桐生さん。こいつ、本当に先生してる！
？俺どうしても信じられないんだけどさ！..!」

「..あ、あの..?」

「ほら、帰るぞ。恭輔の馬鹿は放って置いていい。どうせコイツが
興味あるのは人の脳味噌だけだしな。」

「失礼な！！俺は女の子にも興味ありますー！！..!」

喧々囂々。

目の前で繰り広げられている光景を啞然として見ていると、先生が
私に言った。

「母さんがうちに連れてこいって言ってる。どうする..?」

「?????なんで、雅ちゃんが..?」

「お前、今日本に三人ともいないんだろ。心細いと思って、本当は
ばあさんに頼もうと思ったんだんだがいなくてな。母さんに頼んだ
ら二つ返事で『連れて来い』って。」

「..雅ちゃん..でも、あの、私、あの..ナイトが..」

「ナイト..ああ、あの犬か。大丈夫だ、母さんも父さんも犬好きだ
しな。」

「はいつ！俺、質問！！」

「……………なんだ、恭輔……………」

嫌そうな声で佐田先生を見た遠藤先生は、これでもかという位嫌そうな顔をしていた。

「なあなあ！雅『ちゃん』ってなに！？あのおば……………雅さんを『ちゃん』付け！？亨、一体この子何者！？」

「普通の女子高生。」

「嘘だ！！お……………雅さんを『ちゃん』付けだなんて！！俺の世界が崩壊するぐらいの衝撃だ！！ねね、桐生さん。君本当に何者！？」

「……………あの……………」

「気にすんな。こいつは母さんに対しての恐怖心が尋常じゃないから。」

あの雅ちゃんに対して、恐怖心？

「雅ちゃんに？」

「また言った！！凄いや、この子……………そう思うだろ、亨……………」

「……帰るぞ、神崎。」

一向に興奮したまま収まりを見せない佐田先生に見送られて、私と先生は病院を後にした。

第七十五話

賑やかな佐田先生はどうやら先生のお友達みたいだったみたいで、しかも雅ちゃんに恐怖を抱いているらしい。あんなに優しい雅ちゃんをあんなに怖がるなんてどうしてだろう…。そう思って病院から帰る途中、マンションまで送ってもらった車の中で先生に聞いてみると実に不可思議な答えが返って来た。

「恭輔の奴、母さんを昔『おばさん』って呼んだ事があってな。その言葉を言った瞬間、あいつの顔色がみるみる内に変わったんだ。言われた母さんは俺達には背中向けてたからよくは知らないが、相当怖かったんだろうな。後から翼が『母さんのオーラがどす黒かった』って言ってたから。」

「…み…雅ちゃんって、怖いんですね…。覚えておきます…。」

この頃になると点滴が効いてきたのか、大分身体は楽になって普通に会話出来るようにはなっていた。とはいえ、流石に精神的なショックもあったので、私がぼつぼつと呟いた言葉に先生が一言一言返すという感じだったけれど。

しかし。

私はこれから遠藤邸にお邪魔するのだろうか。こんな格好で？ いやいや、あれは先生が気を使って言ってくれただけであって、本気じゃない。そう。どうしてどうして、生徒の分際でわざわざ先生の実家に…しかも日本有数、いいや、世界でも有名な『遠藤

家にどうしてお泊りなんかできようか！

…とはいえ。いくら反対しようが何を言おうが、結局それを却下されまくった私はしょうがなく先生の言う通りにあの大豪邸にお泊りする破目になった。
なんてこった。

会話も途切れ再び車内は静かになった。ぼんやりと車窓を見ていると、いつの間にか見慣れた道路に入っていた。ここまで来ればあと少しでマンションまで着く。

ナイト、待つてるだろうな。今日は朝しか散歩行けなかった。きつと行きたくてウズウズしてるはず。そうなると動きたくて仕方ないナイトが、大人しく車に乗るはずがない。

「先生…やっぱり私…いきま」却下。」「…だってナイトが……車に…そうだ。先生、この車に犬乗せたくないでしょう？だとしたら…」

「ラブラドルだろ、あの犬。だつたら余裕。」

「…ですよねー…」

どうして今日に限ってヴォクシーなのよう…！！て言うか、先生何台車持つてるんだろう。そう言えば翼さんが二、三台って言った記憶がある。…けっ、お金持ちめ。

だけど、広めの車内が思ったよりもリラックス出来る環境になっていてほっとする。カーフレグランスの香りはしないし、小うるさい音楽もかかっていない。まあ私が病院帰りだからなのかもしれないし、それはカーナビが付いている隣のパネルにi podがあるの

でなんとなく。だけれど。

なんとなく後部座席でそんな観察をしていると、信号が赤に変わって車が停まった。

先生は運転席から顔を覗かせて「大丈夫か」と聞いてきたので、頷いておいた。既にマンションは見えていて、この信号を超えればもう何百メートルも行かないうちに着く。それを確認すると、凭れていた身体をのそのそと直し、エントランスに行く準備をした。取ってくるものと、必要な物。あとはナイトのハーネスと、エサとペットシート…。結構荷物あるかもしれない。

…こんな状態で荷物持てるかな、私…。

少し心配して頭の中でいろいろと考えていると、マンションに着いた。

「じゃ…あの、すぐ取ってきます。すみませんけどナイトも連れてくるので…ちょっと時間かかるかも…」

「……………荷物結構あるか？」

「え？はい、あると思います。ナイトのものとか、私の着替えとか……………」

「だよな…。どれ、俺も行く。勿論、部屋には入らないで玄関で待ってるから、とりあえず持てない荷物は俺が持ってやる。」

「え、いや、あの……………」

「ほら、行くぞ。」

と言つて、先生は車を降り、わざわざ後部座席のドアまで開けてくれて私が降りるのを待っていると、すたすたとエントランスまで歩いて行ってしまったので、慌てて追いかけた。

「おかえりなさいま……なっ……なんてことっ……どうなさいました！桐生様！」

「あ、ただ今帰りました、羽生さん。え？あ、あの？」

何時ものように笑顔で帰宅を迎えてくれたコンシェルジュの羽生さんが、珍しく焦った表情をしている。どうしたの？と思ったのも束の間、ああ、きつと湿布を貼った頬の事だなど予想が付いた。

「あ、あの、羽生さん……」

「大丈夫ですか！？何かあつたんですか！？」

「う、うん……。あの、あの、ね……？」

「こんばんは、この子の学校の教師をしています、遠藤と言います。この件に付いては現在対処中ですので、どうか心配なさらずに。」

先生は大いに慌てている羽生さんにそう言つと、羽生さんも落ち着きを取り戻したのか、いつものように
平静を保ってくれた。

それでも心配そうに声をかけてくれる羽生さんに対し、苦笑しながらも「大丈夫」と言うことができた。玄関ゲートを開ける際、あとでもう一回来ますねと言つて、そのままゲートをくぐりエレベーターに乗り込んだ。

勿論先生も一緒に。

私の部屋は五階の一室で、すぐに着くんだけれど…如何せん沈黙が痛い。早くナイトに会いたいよう。

あ。

忘れてたけど、ナイトって若い男の人嫌いなんだよね。…大丈夫かな。

第七十六話

二人エレベーターに乗り込んでみたものの、やっぱり無言で。もうこの居たたまねなさって、半端ない。

私の住んでいる部屋は五階にあつて、今はまだ三階の表示が出ている。早く着け！って思うけども、こればかりはしょうがない。あまりの居たたまねなさに思わずため息が漏れそうになった時、先生が口を開いた。

「身体の方は大丈夫か？」

「あ、はい。なんとか。やっぱり点滴打ったのがよかつたんだと思います。元々寝不足だつたつて言うのもあつたので。」

「寝不足？」

「はい。パパが今N・Yに居るので時差が…」

「…ああ。なるほど…」

どうやら先生にはそれだけでわかつたらしい。

N・Yと日本では時差が結構あるので、あつちから電話がかかってくるときは時間が遅いか早いか。なるべく仕事で疲れているパパに負担が少ないように夜に取るようにしていたのだけれど、やっぱりそれが悪かつたみたいだ。それに、忘れてたけど再テストの勉強も頑張つてやつてたし。

…そう言えば…。

「あ、あの、先生。私の再テストってどうなつたんですか？」

「あ？ああ、あれか。後から早乙女に解答用紙渡されたけど、採点はまだだ。って言うか、この状況でよくテストの事思い出したな。」

「…だつて、クラスの皆が一生懸命教えてくれたし…。それに先生にも休み潰して教えて貰ったのに…なのにこんな、事になっちゃっ…。」

そう。頑張らなければいけなかつたんだ、私は。なのに、こんな状況になつてしまった。

本当はテストの事もどうでもよかつた。でも、谷野先生が私がテストの答えを教えて欲しいから。誘われたって言い張つてた。つまりは、私が悪かつた。

そんなの冗談じゃない。あのテストは皆が私に一生懸命教えてくれた結果であつて、私が不正を働いたという証拠になつては全員に申し訳がたたない。

だからこそ、あのテストで汚名を返上する必要があるのだ。

幸いにして、谷野先生が来る前には最後の二問を残していただけだつたし、その二問だつて押し倒される前に解答欄を埋め終えていた。採点はまだだつて言ってるから点数はわからないけど、私が記入した答えは皆から教えて貰つた答えだ。何も私は恥じる事はない。

そう、頭ではわかっているのだけれど、やっぱり身体が谷野先生について考える事に拒否反応を起こすみたいだ。
全部言いきろうとしたのに、声が詰まった。

目が熱い。

あれだけ泣いたのに、涙腺は留まる事を知らないみたいだ。思わず俯いて涙が流れないようにしていると、頭に何か重さを感じた。

「…え？」

「お前の言いたい事はわかってる。だけど、今はそんな事考えなくていいから。とにかくさっさと荷物取って、人の居るところで安心してる。とりあえず恭輔が言ってた通り、明日は学校休め。…っか…今週ずっと休んでろ。身体の方も本調子じゃないんだから。」

そう言った先生に、ぐりぐりと乱暴に頭を撫でられた。髪の毛が静電気を纏ってふわーと浮いている感じがしたけど、なんでだろう。別にいいやって思えた。

「とりあえずオヤジさんにはメールでもいいから連絡入れて置けよ。うちに泊まるにしても、保護者の許可貰わないと…」

頭に乗ったままの手の平で相変わらずぐりぐりと撫でられていると、ポーンという電子音とともにエレベーターのドアが開いた。

反射的に開いたドアの方を見ると、そこにはお隣さんが私と先生を

見しおまよふよつといた。

第77話

泣きそうになった彼女を思わず撫でていた。
なんでだろう、別に俺がこんなことをする義務はないのに。

だいたい子供のくせに、いろいろと遠慮しすぎなんだ。

俺達教師に対しても、他の友達やなんかに対しても。義理とは言え父親にすら遠慮して「言わないで」と頼みこむ。そんな子供らしからぬ神崎に対して、若干の苛立ちを感じていたのは否定出来ない。

そう言う苛立ちを何故感じているのか、俺にも理解出来て居ない。

正直俺がここまで首をつっこむ必要は無い。まああの場に居合わせただけの教師であるのは仕様が無いとしても、わざわざ警視庁にいる友人や恭輔に対して彼女の事を頼んだも、なまじ実家に連れて行くだけの必要は全く無い。

にも関わらず、俺はそれを全部している。

テストの事を言い出す神崎に少し焦った。と言うのも、確かに悠生から解答用紙を受け取ったのだが、その解答用紙自体が事件を思い出させるような事になっていたからだ。

大半がぐちゃぐちゃになった解答用紙。所々破れている箇所もあった。にもかかわらず、神崎が答えたであろう解答そのものは無事だったのは、不幸中の幸いだったと思うしかない。

神崎が答えた解答を見て、谷野が苦し紛れに言っていたデマカセが頭にリフレインする。

つまり、『神崎が答えを教えて欲しいがために、自分に誘いをかけ

てきた』と言う愚の骨頂としか思えない言い訳。

確かに神崎は日本史が苦手だ。

俺が半日かけて教えたにも関わらず、相変わらずわからない箇所はそのままで。そう言えば再テストの前に教室にわらわらと集っていた生徒達だって、SHRを潰して神崎の再テストの勉強に当てたと聞いている。

つまりはそれだけ一生懸命勉強したのは、こいつ自身。彼女自身は皆のお陰だとも言いそうだが、実際は皆が教えて、それに付いて行った彼女の頑張りのお陰だ。

その甲斐あってか俺がざっと見た限りでは、合格点は軽く超えていたようにも思える。

神崎を病院に連れて行くという厄介事を押し付けられたせいで俺もバタバタとしていたのだが、そう言えばその解答用紙は持って帰ってきたような気がする。落ち着いた夜にでも採点してみようと思いつつ、彼女の頭を撫でる手は相変わらず、そのままのポジションをキープしたままで。

エレベーター内が乾燥しているのもあってか、ぐしゃぐしゃにした髪がふわふわ浮いている。静電気が来る事はないが、あまりやっていると痛い思いをするのは自分だ。そろそろ止めておかないと…と思うのだが、何故かそこから手を離すことをしないまましていると、エレベーターが目的の階へと到着したらしい。

静かにドアが開くと、そこには明らかにぶっ飛んだ人物が俺達をきよとんと見ていたかと思っただ次の瞬間。

「やー！だー！ー！つ！！！！唯っちつたら男連れ込んでるううー！ー！ー！！！！なー！に！？しかも現在進行中でラブラブ中！？」

「ま、マリアさ…声大き…」

「やー！ん！唯っちの彼氏ってちょーイケメンじゃなー！ー！い！！！！！しかも大人！！ヤダ何？禁断の恋っていうやつ？いやー！ん！！マリア超好き、そう言うの！！」

「ちっ…ちがつ、マリアさん、違うから！！」

「いいのよ、言わなくて！アタシ応援するわ！ねね、彼氏の人って名前何て言うの？いいじゃない、唯っち教えてよおお！」

「え、遠藤先生…」

「先生！？ヤダなに、このイケメンったら先生なの！？学校の！？なるほどー。だったら禁断の恋テンプレね！！高校教師と女子高生…いいわー…萌えるわねえ…」

うっとり顔を輝かせているマリア。もとい…見るからに二丁目の香りがする人物。

つーか、化粧をしようがスカートを穿こうが、如何せんガタイが良すぎる。剥き出しの足は筋肉質なのが見て取れるし、手術済みなのかわからないが、明らかに豊乳すぎるそれは女では滅多にあり得ないデカさだ。

思わず目眩をしそうになって神崎の頭から手を離して目頭を揉んでいると、マリア（仮）が目敏く俺に興味を持ったらしい。

「ヤダー、本当にイケメンだね。総様には劣るとしても、秀人ちゃんに匹敵するイケメンだわ!!」

「…総様…?」

「あらヤダ、知らないの!? 総様は唯つちのパパ!! アタシのモロ好みなのよねえ。」

その『総様』を想っているのか、うつとりと頬を染めるオカマをかなり引きながら見ていると、袖を引かれた。

見ると神崎がすまなそうな表情をしていたので、多分彼女もこのテーションに引いているのだろうと思える。

「す、すみません…」

「いや…なにあれ。お前の知り合い?」

「あの…お隣さんなんです。五月雨マリアさんって言って、新宿でお店持つてるんですって…お兄ちゃんとお姉ちゃんが行った事あるらしいんですけど、お兄ちゃんがげっそりして帰って来た事があった…。お姉ちゃんに聞いても詳しい事教えて貰えなかったんです。」

「……………二丁目か…」

「はい。後になってパパに聞いたら、大方キスでもされたんだろうって。」

…ご愁傷様としか言い様がない。
なまじ桐生さんは完璧ストリート。カマ連中に掘られなかっただけ
良かったと言っべきか…。

「あの、行きましようか…」

「…いや、俺はここで待つ「ヤダなーに!?二人で早速ラブラブ
?んもー、本当にラブラブすぎてマリア暑iiii!誰か冷まして
え!」…玄関に入れてくれ。」

「…わかりました…」

マリアに気力を搾り取られる。そう思ったのだが、神崎がきつと彼
女(彼?)の方を見ると断固とした口調で言った。

「晋平!^{しんぺい}今からお店なんですよ!?!早く行きなよ!?!」

「晋平って呼ぶんじゃないねー!?!?!?!」

野太い声でそう言うと、尚も何か言いたそうな神崎を睨むとやっと
湿布に気付いたのか急に真面目な顔になった。

「唯っち、その湿布どうしたの?」

「ぶ、ぶつけたの。」

「…ふーん…。まあ、そう言う事にしといてあげるわ。さて、アタシそろそろ店行くわね。」

「うん。行ってらっしゃい。気をつけてね。」

「はあ〜い。あ、イケメン彼氏！ちょっとちょっと！！」

満面の笑みで手招きされているのだが、これは警戒するべきか。本能が五分だと告げている以上、結論を出すのは俺自身。

神崎が見守る中、しょうがなしにマリアの側に近寄った。

マリアは神崎の方に笑顔で手を振ると、俺の肩を後ろに向けて喋りだした。

「あれ、男に殴られたんでしょ？」

「…ああ。」

「相手がどうなったか聞いていいかしら？」

「とりあえずは謹慎中。理事長が帰って来次第、懲戒処分だろうな。」

「…って事は相手は教師ってわけ。なるほどね…ふーん…」

至極真面目な顔になったマリアを尻目に、どうも神崎に関わっている人間は彼女に対して過保護になる傾向があるなと改めて思っていると、目の前のオカマがやりと不敵に笑った。ぞわりと反射的に寒気が背筋から立ち昇ってくるのと同時に、直感で思った。

神崎と付き合う奴は苦勞する。

絶対にそうだ。

のちに俺は、この直感が正しかったことを思い知る。

第78話

顔が思いつきり引きつりつつも何とかマリアに別れを告げると、当の本人からは盛大なリップ音付きの投げキスを飛ばされた。それを叩き落としたと思ったのも束の間、マリアは「若いつていいわねー！！羨ましいわっ！ぶほほほほっ！！」と笑いながらエレベーターの中へと消えて行った。

そして今、俺は何故か物凄い勢いで真っ黒な犬に唸られている。

以前何回か神崎を送り届けた時に感じた通り、こいつは高校生という立場には似合わないほどのいいマンションに住んでいた。さつき通って来たのでわかっているがコンシェルジュがいるフロントに、静脈認証のオープンゲート。各階専用キーが付いたエレベーターに、極めつけに住んでいるフロアに部屋が二件だけというマンション。まあ二部屋しかない部屋の内、隣人があの小煩いニューハーフのマリアだと言うのはマイナスポイントだとしても、それでもいい物件に住んでいると思う。

まあ俺の住んでいるマンションがペントハウスなのでこの物件自体に何も言うつもりはないが、それでも父親が娘を相当に可愛がっている様には、驚くよりも正直呆れが勝った。

なるべく表情に出さないままマリアが去った後、妙に疲れた神崎がガチャガチャと玄関を開けているのを見ると、そこには何回か見たことのある黒いラブラドルが興奮ぎみだが、大人しく鎮座し

ていた。

「ただいま、ナイト。いい子でお留守番してた？」

「わん!!」

「んー、そっかそっか。」

「わふっ!!」

と、頭を撫でたり、身体を撫でたりと仲睦まじげな飼い主と飼い犬のやり取りを黙って見ていたのだが、ふと犬が俺の方に視線を寄越した。その途端、主人が帰って来た嬉しさから尻尾をパタパタと干切れんばかりに振っていたそれが、突然止まった。そして、物凄い勢いで吠えられた。大型犬なだけあって、吠えられると煩い。

「わっ!!こら、ナイト!!」

「……………」

「すみません、先生。ナイト、こら駄目でしょ?ほら、落ち着こっ
?ね?」

吠え立てる犬の首に抱き付いて何とか大人しくさせようとしている
神崎のお陰かどうかはわからないが

、本人（犬）はまだ納得していないようだったが何とか吠えるのだけは収まった。

とは言え、まだ不穩に睨まれて唸られているが…。

吠えられることが無くなった俺は、一応ほつとして辺りを見回した。広めの玄関、すぐそこにはシューズラックが並んでいて、美奈のものらしい靴が並んでいる。あいつは、ほとんどここに荷物置いてるんじゃないかと思うほどの靴の数。それに呆れたものの、一応は他人の部屋なので深く詮索はしない。最も、美奈の事なんぞ知りたくも無いが。

廊下が延びている先にはドアで仕切られた部屋があり、多分そこはリビングだろうと予想が付く。きつとこの分だとかかなり広めのリビングだと予想を付けつつ、ふと壁に掛けられた写真が目についた。

義妹の頬にキスしている桐生さん。

義妹に思いつきり抱き付いている美奈。

義娘の肩を抱きつつ満面の笑みを浮かべる桐生総一郎。

…やっぱり桐生家の三人は神崎の溺愛度が半端無い。

改めて神崎を敵には回したくないと思う。

見てはいけない物を見てしまったからではないが、素直に思った事が口に出していたらしい。

「…いいとこ住んでんな、お前…」

「う…元々パパが仕事用に借りてたんですけど…一人暮らしするって言った時にここにしろって。私はこんな広い部屋は嫌だって言ったんです。…言ったんですけど……」

「…ああ、言わなくていい。何と無くだがほとんどわかったから…」

そしてその予想は多分外れていない。

まあここならセキュリティも万全そうだし、そうそう泥棒だとか変質者とかは入れない。あれだけ娘を可愛がっているあの人のことだ、生半可な物件では一人暮らしなんかさせなかつたんだろう。

まあ、家賃なんかは父親が払っているらしいし、彼女一人分の食費や携帯料金は自分のバイト代で払っているようだ。以外に堅実と言うか、何と言うか。

とは言え、これだけ分不相応なマンションに住んでいても、そう言ったちゃんとした金銭感覚があるのは安心する。

これだけ甘やかされているように見えても、ちゃんと現実は見えているらしい。

「ナイト、駄目だよ。唸っちゃ。ほら、機嫌直して。これからお出かけるんだよ。」

「きゅーん？」

「だからごめんね、今日は散歩行けないけど、先生のお家は庭が広いから。だから明日一杯走りまわれるよ？」

「くうーん…」

「よし！じゃあ私仕度してくるから。ほら、おいで！先生、本当に中入らないんですか？待ってもらっている間、お茶出しますけど…」

「いや、いい。と言うか、それよりも…」

と俺が言い掛けたその時、彼女の部屋の電話が静かなリビングの空間に響いた。

第七十九話

リビングに設置してある固定電話から着信を告げる音が鳴っている。それに気付いてリビングの方を振り返る。

「あ、電話……先生、ちょっとすいません。」

先生に断って急いでリビングまで行って、表示も見ずに近くに置いてある子機の方の電話に出た。大概こちらはキッチンカウンターの方に置いてあって、玄関に近い。

「はい、桐生です。」

『唯か？良かった、帰ってたか！』

「あれ、パパ？どうしたの？」

『「あれ、パパどうしたの？」じゃないだろう！！何回電話したと思ってるんだ！携帯に出ないわ、マンションに帰ってると思って電話しても出ない！心配するに決まってるだろう！！』

うわ……お、怒ってる……！

しかもすごい機嫌悪いし……！

思わず電話を耳から離して恐れおののいていると、離しているのが

解っているのか物凄い大声でこちらを呼ぶ声がした。

『唯!!お前ちゃんと聞いてるのか!!』

「き、聞いてるよう……。でも……まだそつち朝でしょう?。」

『朝って言うか、まだ早朝だけだな。』

「……う。早朝なのにそんなに大声出しちゃ駄目だよ。血圧上がったやうよ?。」

『その大声上げさせてるのは誰だ。ったく……。唯、Skype 繋げ。顔見ないことには話が出来ない。』

「……すかい……。なにそれ?。」

すかいぷ?

新しいゲームか何か?

かと思つたら、電話口の向こうから盛大なため息が聞こえてきた。

『前に秀人が繋いでやっただろう。インターネットでテレビ電話出来るやつだよ。』

「……そんなのあったっけ……?。」

『……………』

「…………え、だって、私機械苦手だし。『すかいぷ』なんて言われてもわかんないよ。…あ、でもちよつと待って！玄関に先生がいるから聞いてみるね！」

『…おい、ちよつと待て。先生って誰のことだ。』

「え？パパもこの前会ったでしょう？遠藤先生だよ？」

そう言うと、何か静かになったのをおかしく思ったけれど、その『すかいぷ』だか何だかを説明する為には機械音痴の私では駄目だ。絶対に。

何せスマートフォンだろうがi podだろうが、基本的に操作方法がわからない。最近の…って言っても私が育った世代は既に世界はハイテク機器で溢れていて、それが私には全く合わなかった。シンプルイズベストとはよく言ったもので、私は携帯もほとんど通話かメールしかしない。一応中学の時に持たされた携帯だけど、それを今も使っているのは何も新しい機種にするのが面倒なわけではない。実際、地味に機械オタクのお兄ちゃんにもスマートフォン持たない？って言われているけど、使い方がわからないって事で断っている。

最新機種！って躍起になって、頻繁に増設している綾乃とは本当に真逆だな！。

インターネットもたまにするけど、それは家にお兄ちゃんが持ち込んだ…と言っても最新モデルの格好良いパソコン（VAIOのデスクトップって言うやつらしい）で細々とやっているだけ。流石にパソコンは使いこなせないとヤバイとと思っているので、何とかエクセルとかは使えるように頑張っているけど、基本興味が無い。歴史と一緒に。

その歴史の先生と言えば、相変わらず玄関先でナイトに唸られていた。

私が来たのがわかると、すぐさま足元に纏わりついてきたので電話を持っていない方の手でナイトの頭を撫でてやると、お礼！とばかりにべろんと手を舐められた。それに微笑んでいると、先生が「どうした？」と声をかけてきた。

電話口を押えて先生に「すかいぶ」って言うのを聞く事にする。

「先生、『すかいぶ』って知ってますか？」

「スカイプ？Skypeの事か？」

「インターネット使うやつらしいんですけど…知ってます？」

「ああ、知ってるけど…。それがどうした。」

「パパがその、『すかいぶ』って言うのに繋げって言ってるんですけど、意味がよくわからない…」

「……………電話、桐生さんか。ちょっと貸せ。」

手を差し出して電話を要求すると、先生がパパと話始めた。最初こそ、受け答えだけだったみたいだけど、なにやら専門的な言葉が行き交っている。うん、駄目。私の許容範囲外。

だからパパと話をしている先生をナイトの身体を撫でつつ見ていると、それまでは宙を見ていた先生が急に視線を私へと寄越した。

ん？

「…出すわけないでしょう。貴方、俺を一体なんだと思ってるんですか。………つちつ………いいえ、何も。じゃあ、いいんですね。はい……はい……じゃあ五分後に。はい、わかりました。」

そう言つと、先生は電話を切つた。

あれ、いいの？と思つたその時、先生が口を開いた。

「俺がSkype繋いでやる。悪い、少し入つて良いか。」

「え？あ、はい。何かわかんないですけど、やってくれるんですか？その、『すかいぶ』……？」

「ああ。桐生さんにも許可取つたからな。繋いだら俺外出てるから。」

先生はそう言つと、「お邪魔します」と言つて靴を脱いだので急いでスリッパを用意した。

第七十九話（後書き）

Skypeについてはよくわかってません。間違ってたらすいませ
ん…。

第80話(前書き)

なんかいろいろと間違っている可能性大です。パソコンに詳しい方、大目に見てください…。

第80話

「おじやまします」と形だけの挨拶をし、相変わらず犬に唸られながら廊下を進む。

きつと、いや絶対この犬は俺の事が嫌いだ。飼い主である神崎に何回も注意されてその時は尻尾を振って彼女の方へ行くけれど、いなくなつた瞬間唸りだした。確信する。こいつは絶対俺が嫌いだ。

俺としても犬は好きだし、賢そうな犬なので触つてみたいと思つたが明らかに敵認識されている以上、それはするべきではない。唸っている以上、咬まれる可能性も大いにあり得る。触らぬ神、ならぬ触らぬ犬に祟り無し。だ。

入るつもりは無かつた神崎の部屋に足を踏み入れる原因ともなつたSkypeだが、繋いでもいいものかと内心疑問に思っている。なにせ、パソコンのカメラを通じてN・Yにいる父親と言葉通り面と向かつて話すのだ。谷野に殴られて腫れてしまつた頬に、白い湿布を貼っている事など容易に知れてしまうだろうに。

多分神崎はSkypeを理解していない。それは先程の会話で薄々勘付いた。

一応「あちらにも顔映るぞ」と忠告してやった方がいいのかもしれないが、義父である桐生総一郎の娘を心配している声を聞いた以上、繋いでやらないといけないだろう。

Skypeの事で話をする際、不機嫌そうな声とやはり心配していたのだろう。どこかほつとした感じの声で少しだけ会話をした事を思い出す。

『Skype 繋いでやってくれ。リビングに秀人が唯に買ってやったデスクトップがあるから、それにいろいろと入ってる。しかもあいつはご丁寧に脇のメモにいろいろと書き込んでたから、それを見ればわかるはずだ。』

「わかりました。」

『なるべく早く頼むな。顔を見ないうちには安心出来ない。』

経緯をどこまで知っているのか解らないが、神崎が襲われたと言う事は知っているらしい。だからこそこんな時間（N・Y 時間で朝の三時、四時頃か）に電話をかけてきたのだろう。

そう言えば前に理事長も神崎の事情を知っているとかが言っただか？だとすれば、今は出張中で学校にはいない理事長から直に連絡をもらったのかもしれない。

その出張中の理事長もすぐに帰ってくるだろうし、谷野の処分はわかりかし早いだろう。

問題はそれを携帯で撮っていた生徒の方だ。持ち上がり組の吉川とか言った生徒で、確か親が五月蠅いので有名なのでは無かったか。モンスターペアレンツまでは行かないらしいが、それでもあの娘の言う主張をそのまま真に受けてギャンギャン喚くのだろう。少し考えただけでウンザリするが、関わってしまった以上、事がどういう風に収まるのか見届ける義務がある。

何より、このまま被害者である神崎が元通り学校に通えるようになるのか。そして、事件のせいで彼女が男性恐怖症にならなければい

いのだが。
それが本当の問題だ。

広いリビングに案内されて一番先に目に飛び込んで来たのは、入って右側に設置された大型のテレビと白いソファ。ガラステーブルの上には小物が置かれ、涙形のクリスタルが印象に残った。また、テレビの近くには桐生総一郎が言っていた通りのパソコンがあり、モニターがないのを見るとどうやらテレビがモニターの代わりになるやつのようなのだ。

左側にはカウンターキッチンがあり、システムキッチンとこれまた大型冷蔵庫や流行家電がちらほらと見える。

俺がリビングに通されての第一声。

「どこぞの新婚の家だよ、これ…」

呆れるほどの高校生らしからぬ部屋の広さと、置かれた家電やインテリア。まるでモデルルームのようなのにも関わらず、住んでいる人の温もりがある事から、ほとんどマンションを購入したての新婚夫婦のような部屋だなと率直な感想を述べてしまった。

あまりの完璧さに、思わず笑ってしまったのはしょうがない。しょうがないとしても、隣で犬を従えて若干しょぼんとしている神崎をフォローするためにかける言葉を、俺は持ち合わせていない。

「…パパやお兄ちゃん達が来るたびに家具とか家電が増えていくん

です…もう置くところないって言っても聞いてくれなくて…」

「わふっ！」

「お姉ちゃんに至っては、買い物してきた服とかメイク道具とか全部私のものだって言うし。本当に置くところが無くなりそうで怖いです。」

「……………気の毒に……………」

「ありがとうございます……………」

なんとなくげっそりとした神崎に促されるまま俺はパソコンを起動させ、置かれてあったメモに目を通しながら繋げていく。五分後と言ったものだから悠長にしてられないなと思いつつも、桐生さんがいろいろと弄っているらしいパソコンはサクサク進む。

俺もそろそろもう一台買うべきか…と悩んでいるのを思い出しつつ、あと少しで繋がる時になって、そう言えば…と思い出した。

パソコン画面から目を離し、神崎の姿を探すとキッチンに彼女はいた。香ばしい香りを漂わせつつ。

「おい、神崎。」

「はい？あ、先生、コーヒーはブラックですか？砂糖かミルク入れます？」

「あ？いい、別に。」

「いいですよ、遠慮しないで下さい。その、『すかいぷ』？やっつて貰ってるお礼ですから。」

「…じゃあブラックで…」

「はい、わかりました。」

全く気を使う奴だなと思いつつも、出されたコーヒーを有難く受け取った。さつきタバコを吸った時に多少イライラは収まったが、やはりカフェインの方が慣れていいのか落ち着くのが早い。少し熱めの濃いブラックを一口飲んで、ふうと一息付くと、目の前のパソコン画面にもう一度視線を戻した。

「お前Skypeってどう言うものか知ってるのか？」

「？知りません。私機械駄目なんですよ。」

「……だろうな……。あのな、Skypeってテレビ電話と同じだ。つまりこっちでもライブ映像が観れる。逆に言えば、お前のパパにもお前がライブで観えるって事だぞ？」

「…えー………つと……？つまり？」

「湿布して痛々しいお前が、お前を溺愛してるパパに丸見え。」

その会話をしている最中も手は止めない。

なんの反応も無い神崎を不思議に思ったものの、あと少しという所

でようやく気付いたのかがしつと腕を掴まれた。
びっくりして腕を見ると、神崎が泣きそうな顔で俺の腕を両手で掴んでいた。

「駄目、駄目駄目駄目駄目！！！！先生、駄目です！！やだ、繋いじゃ駄目です！！！！！」

「……って言ってもな……」

「お願い、先生！やだ！何の心の準備も出来てない！！！」

「……悪いが、それは聞けない。」

少し罪悪感を感じたものの、そのままキーを押した。

『きつちり、五分だな。感謝する、先生………唯、お前その顔………』

大きなテレビ画面の向こうには、絶句する桐生総一郎が映っていた。

第80話（後書き）

申し訳ないですが、ころころ視点変わります。

第八十一話

テレビ画面に映し出されたパパの啞然とした顔を、こんな顔するのは珍しいなと思って見ている私は結構図太い。

はず。

「……ぱ、パパ……お……おはよ……？」

『……………』

「……………」

「あー…俺あっちに行ってますから、どうぞ気兼ねなく話し」先生もそこにいる』……………わかりました……」

お…重い。

通夜か葬式かって位、リビングの空気が重い。それに何か息苦しい。あれ、この部屋広いはずなのに…と違ってちらっと見回して見ても、朝学校に行く時となんら変わらない見慣れた部屋であることに変わりはない。

テレビの前に置かれたソファーに正座してパパの方を見ようとすると、ただ、やっぱり怖くて見れなくて。だから先生の方をそろりと盗み見てみると、先生は先生で私が出したコーヒーを飲みながら事の成り行きを見ていた。

三人ともが黙ったままだった。
その静寂の均衡を破ったのは、意外にも先生だった。

「今日娘さんをうちの実家で預かる事にしたんですが、宜しいですか？」

『それはどういう事だ？』

「熱を出して、さっきまで病院で点滴を打ってたんですよ、この子。一応医者に安静にしてるって言われたみたいですが、流石に一人にしておけないでしょう。きりゆ…秀人さんと美奈…さんも日本にいないらしいですし、誰か彼女を看てくれる人が近くにいますか？もしもいたらそちらに連絡を取ってもらって、そちらの方に連れて行きますが。」

『…いないな……しかし、いいのか？君の実家って、遠藤のご両親や総帥夫妻もいらっしやるんだろう？』

「先程連絡を入れたら二つ返事で快諾しました。なんだったら、誰かが帰国するまでうちで預かりましょうか？」

え？

さ、流石にそれは…！！

そう言おうと思ったのに、パパが先に返事をしてしまった。

『ああ、それがいいな。申し訳無い、俺が帰国するまで世話になっていいか。』

「わかりました。うちの母に言っておきます。」

「ちょ…っ!」

『だ、そうだ。唯、彼のご好意に甘えて、遠藤家で暫く世話になつてろ。俺が帰国するまでだから、そう日数はないだろうが、あまり迷惑をかけないようにな。それと、先生。俺からも宜しく頼むと伝言して貰えるか?』

「はい、わかりました。」

あれ…もう決定?

私の意志は!?!一言も言っていないよ!?!

あまりに素早く決まってしまった決定に、流石に抗議の声を上げようと思っただけけれど、やっぱりパパに制された。

『そうと決まれば唯、仕度してこい。ああ、そうだ、ナイトも連れて行ってもいいのか、先生。』

「構いません。祖父母、両親ともに動物好きですから。」

『それは結構。重ね重ね申し訳無いな。』

「いいえ。」

『ナイト!』

「わんっ!!」

『唯を部屋に連れて行け。唯、数日分の荷物でいいからな。よし、ナイト、行け!』

「わっふ!」

ナイトはパパに絶対服従。ナイトの中のピラミッドの一番とんがった部分に君臨しているのが、誰あろうパパだ。そんなパパの命令にナイトは逆らうわけもなく…。

素早くジャージの裾をぱくつと啜えたナイトに引きずられる様な形で、パパと一言も喋ってないのにも関わらずリビングを追い出された。

…一体なんの為の『すかいぶ』…?

自分の部屋の前にまでナイトに連れて来られたものだから、今更リビングに戻るわけにも行かず…。それに先生のお家に行くんだから早く仕度しないといけない。ずっと先生を待たせるのも悪い。諦めの境地になった私は仕方なく、クローゼットからカバンを取り出して必要な物を選び始めた。

何日もお世話になるわけでもないのに、とりあえずお兄ちゃん達が帰ってくる予定の二日後までの着替えがあればいいかな。

その間学校はお休みしないといけないけど、佐田先生が書類を書いてくれたし、それを申し訳ないけど先生から私の担任の先生へ提出してもらえば大丈夫だろう。

正直佐田先生の申し出は嬉しかった。

流石にさつき起きた事があったというのに、昨日今日で登校するのは怖い。今日で週の半分を過ぎたのだから、あと二日学校へ行けば土日挟む。その日数で私が殴られた痕は目立たなくなるだろうが、恐怖はそう簡単には消えない。

だけど、なんとか乗り越えなきゃ。

ふと、包帯が巻かれた手首を見る。

自分の身体がどうなっているのかはまだ確認していないけど、早くお風呂に入って全部流してしまいたい。

今日一日の事、全部泡と一緒に排水溝へ流せてしまえたらいいのに。

ぶるりと震え始めた身体を抱き締めるようにしゃがみ込むと、途端にナイトが近寄ってきてくれる。本当に名前の通り、騎士ナイトのような所作に思わず笑みが零れたものの、それが本当に笑えているのかどうかは彼にしかわからない。

くうんと湿布が巻かれていない方の頬に鼻を寄せてきたので、安心させるべく頭にちゅつと軽くキスをして「大丈夫」と呟いた。

荷物も大分纏まって、学校に持って行っているカバンから携帯を取り出した。

ピカピカと着信を知らせる光が点滅しているので、ぱかっと開いてみると、そこには何十件もの着信やメールが届いていて、それらのほとんどがパパだった。

そう言えばさつき、携帯に電話したとか何とかって言ったような気がする。って言う事は、相当前（一番最初の不在着信は私が保健室にいた頃の時刻だと思われる）から連絡を取ろうとして居てくれたって事だよな…。

…やっぱり龍前寺理事長から直に連絡が行ったんだろっな。

携帯の着信履歴を見ながら、少し頂垂れた。

あれ、そう言えば先生、『すかいぶ』切ったのかな…。

私がリビングを追い出される時は、テレビの画面にパパが映ってたような気が。って言う事は、まだ繋がってるかな？

荷物を持った私は、ナイトを引き連れてリビングへと戻った。そこにはやっぱりパパがテレビに映っていて、先生と何やら話しているようだった。

私がリビングに入ったのと同時に私に気付いた二人は、それまでしていた会話を止めしまった。先生の方を見ると、飲んでしまったのだろう。空のコーヒークップを持ってキッチンへと行ってしまった。お客様、しかも先生に洗わせるわけには…と言ったのだが、それはやんわり断られた。

先生がカップを洗っている間、私はパパと向かいあった。

「パパ、先生と何話してたの？」

『うん？まあ、いろいろと。それより、唯。準備出来たのか？』

「なに、その色々って…。準備は、うん。出来たよ。」

『そうか。じゃあ、俺が帰国したら迎えに行くから、いい子で待ってるよ。ナイトも。迷惑かけるんじゃないぞ。』

「わんわん！」

『よし。なるべく早く戻るからな。』

…早くって、パパ仕事は？

『一時帰国って言う形を取る。』

「え、だって……」

『唯。パスポートの準備もしてる。なんだったら、お前こっち…シカゴに行く事も視野に入れて置けよ。』

「…え…？」

『佐江子さえしさんが入院したらしい。』

「う、嘘…佐江子さんが？何で！？」

佐江子さんと言うのは、お母さんの伯母さん。つまり私の大伯母に当たる人で、彼女はアメリカ人の男性、アルバートと結婚して長年

アメリカに住んでいる。

シカゴに住んでいた時の家の近くに住居を構えていて、私も昔はよく一緒に遊んでもらっていたらしい。今もアメリカに行った時などは必ず佐江子さんの顔を見るために寄る事もあるし、この前電話した時は普通におしゃべり出来たのに。
それなのに、何で突然…。

『アル曰く、飼ってる猫が木に登って降りられなくなったのを助けてようとして木に登って落ちたらしい。』

「…っ！！そんな…どこか打ったの！？それとも、骨！？ねえ、パパ、どうなの！？佐江子さん、大丈夫なの！？」

『…落ち着け。腕にヒビが入ったとの事らしいが、入院するんだとアルは佐江子らしいよなんて言ってたが、お前は自分で確認するまでは安心出来ないだろ？だから、そっちの問題が事の他重大になるようだったら、シカゴにしばらく戻れ。いいな？』

「……………」

『唯、返事。』

「……………わ…かった…」

納得いかない私の返事を神妙な顔で待っていたパパに促されるがまあ、私は返事を返した。

心配しているパパの気持ちを考えれば、魔手の届かないアメリカに戻る事が一番いいのだろうけど、それでは根本的な解決になってい

ない。

とは言え、佐江子さんの事も気になるし…。だから、私は渋々ながら頷いたのだ。

そんな私の気持ちなんてわかりきっているであろうパパは苦笑しながらも、それでも少しばかりほっとした顔になっていた。

『いい子だ。よし、じゃあ行け。先生、この子を宜しく頼むな。』

「わかりました。では、実家の住所は…」

『ああ、いい。わかってるから。あの嫌でも目に付く豪邸だろ？』

「…まあ…はい。そうですね…」

『じゃあよろしく。今日の便で帰るから、多分明日には帰国出来ると思うから。じゃあな、唯。』

そう言ってパパは回線を切ったのか、テレビ画面は真っ暗になった。

…今日の便…？

あれ？今日の便って言ってなかった？

「今日の便か…素早いな…」

呆れたような先生の言葉が聞こえた、数秒後、私のはあ！？と素
っ頓狂な声を上げたのは言うまでも無い。

第82話

どことなく悄然としている神崎だったが、それも当然だろうと思う。遠く離れたN・Yから今日発ってくるんだ、仕事もほっぽり出して車の中で『ナイト』と言う名前の犬を膝に乗せた神崎は、静かに犬の頭を撫でながら何かを考え込んでいた。

傍らには小さなカバンと、出てくる際にコンシエルジュから渡された大きな箱。海外からの荷物らしいが、何が入っているんだろうと思うほどデカイ。それを疑問に思ったものの、流石に人の荷物の事までは聞くのは憚れる。

だから、終始無言のまま車は俺の家へと静かに走っていた。

その間、考えていたのは神崎の事で。

先程Skypeで話しただけでも、桐生総一郎の怒りは伝わった。神崎を犬に引つ張らせて部屋に荷物を纏めに行かせた後、何故か俺が彼と話す破目になったのだが、ひしひしとその怒りが画面越しにわかったのだ。

『龍前寺から電話があった。あいつも全部は把握しきれないんだろうが、それでも連絡だけは入れてきたからな。そこには感謝しているが、そもそもそんな変態野郎を雇っていたのも龍前寺だ。その辺もちゃんと直で聞いておかないと全くわからん。』

「…理事長も手を打とうとしていた矢先だったと思うんですが…」

『なんだと?』

「これはあくまでも俺の主観でしかないんですが、あまり教員レベル的に高いわけではなかったし、生徒内でも評判は良く無かったと言っことを考えれば、理事長も何かしらの考えを持っていたと思うんです。あくまでも俺の、考えですが。」

俺がそう言つと、黙りこくつた桐生総一郎は何かを考えるように腕を組んだ。

今まで気が付かなかったが、ローブだけを着ているのを見るとかなり焦っていた姿がありありと浮かぶ。それを指摘するやいなや、盛大なため息を吐いたかと思うと不機嫌そうな声で答え始めた。

『夜中の二時だぞ、二時!日本から電話がかかってきたのが!』

「と言つ事は、当然お休みだったわけですよ…」

『ああ。それも唯が襲われたつて言つ電話だろう。電話をしてきたあいつも詳しい状況がわからないからつて、用件を伝えただけで切りやがるしな。それから今まで唯に連絡を取ろうとしたのにも関わらず、携帯にも自宅の電話にも、そつちの部屋の電話にも出ない。全く、心臓に悪い。』

「あの、きりゆ…秀人さん達にも知らせたんですか?」

あのシスコン兄妹が、溺愛している義妹にこんな事があつただなんて知つたら何が何でも帰国してくるに決まっている。それこそ、今

日の便で帰って来そうな勢いで。
そう思ったのだが、返って来た答えは意外だった。

『あいつらには連絡してない。』

「え？」

『秀人も美奈も今が大事な時だって言う事は俺が誰よりもわかってる。それをいちいち唯の事で帰国したり、仕事を疎かにするのは、それは違うと思うからな。』

「でも、教えなかったら教えなかったで、逆に…」

『何も全く教えないって言うわけじゃない。あいつらもそろそろ自分の道をわきまえて欲しいと思っただけだ。唯もこんな事があつた以上、知られたくないと思ってるだろうしな。俺にも言うの止めろって言われなかったか？』

画面上で苦笑している彼の様子に、頷くことで肯定の意味を伝えた。すると、「やっぱりな」と呟いた後、大きく伸びをし、近くに置いてあつたコーヒーらしい飲み物を一口飲んでいたので、俺も神崎が入れてくれたコーヒーを一口飲んだ。
既に若干冷めているが、それでも美味い。

『唯の遠慮癖はどうしようもならんな。わかつてはいるんだが…祥子が死んだ時もそうだった。』

「…一年前、でしたか…」

『ああ。祥子が亡くなった時、唯は泣かなくなってな。秀人も美奈も、周りの人間は皆泣いてるのに、唯だけが泣かなかった。いや、違うな。泣けなかったと言う方が正しかったのかもな。』

「泣けなかった？」

『誰も彼もが『泣いていいんだよ』だの、『泣かないなんて冷たい』なんぞと勝手な事を言ってたが、結局は唯の精神状態も結構危なかったんだ。実際、ようやく泣くことが出来た一ヶ月後までの間、ほとんど何も食わない、不眠、無表情。あの一ヶ月の事は本人も良く覚えてないらしいが、見て来た俺達がわかってるからな。可哀想・不憫の域を遥かに越えて、唯っていう人間が壊れかけてた。』

「……………」

『その時にわかった。唯は俺達よりも祥子に甘えてた分、祥子がいなくなったら誰にも甘えられなくなっただってな。まあ、マザコンの気があったのかもしれないが、それでも祥子と唯は仲よかったかな。それまでは祥子が居た分俺達にも遠慮しなかったんだろうが、死んでからは無意識に一線を引いてるんだろうな。だから一人暮らししてるのも、その引かれてる一線なんだよ。』

神崎が桐生家に対して遠慮しているのは、何となくだがわかっていた。

でもまさか、そこまではつきりとした線を引いているとは思わなかったなので、単純に驚く。

が、俺がそこまで聞いていいのかどうかも正直疑問だ。

確かに俺は事件に関わってしまった、警察にいる友人にも少し頼み事をしてしまった。それが何故かはわからないが、なんとなく放っておけないのも事実で。

ただ単に、神崎が千歳先生の娘だったという事が意識下にあるのだとしても、俺が彼女の事情にそこまで首を突っ込んでもいいものだろうか。

いくら赤ん坊の頃を知っているとしても、そこまで関わる事はないし、本来であれば実家にも連れて行かなくていいはずなのに。

それなのに、どうして俺はここまで神崎を気にかけているのだろう。

黙ってしまった俺を不思議に思ったのか、桐生総一郎も黙った。

無言のリビングに神崎が出てきた音がしてそちらを見ると、小さいカバンを持って黒い犬を従えた神崎が立っていたので、出る前に親子で話もあるだろうと思ってカップを持ってキッチンに行った。流石に客にそんな事をさせられないと思った彼女が止めようとしたけれど、それをやんわりと断って二人が会話しているのを遠目で見ていた。

まさか神崎をアメリカに呼ぶとは思わなかったので驚いていると、懐かしい名前が出てきたのに思わず目を細めた。

『佐江子』

あのババア、まだ生きてたか…。

にやりと口許を歪ませていると、どうやら桐生総一郎は今日の便で帰国の途に着くらしい。

さすが。素早いな…と呆れつつも、半ば呆然としている神崎を連れて俺は実家へと急いだ。

第83話(前書き)

直接的ではないですが、下世話な会話が出てきます。

第83話

実家に着いた時点で既に時刻は夜になっており、その時間を考えれば父も帰宅しているはずだし、多分祖父母も帰って来ているはずだ。父には母から話が言っているだろうし、祖父母も同様だろう。

とは言え、父と祖母はいいとしても問題は祖父、愁清だ。

見た目は飄々とした好々爺（俺にはそうは見えないが）だが、一言口を開けば小言のオンパレード。まさに小舅の権化といったものなのだが、そんな祖父が神崎をどう思うかわからない。

ましてや生徒とは言え女を実家にまで連れてくるということは、俺が覚えている限りでは数年前を最後に、最近では全く無かったことを承知している祖父だ。

絶対に変に勘ぐるに決まっている。

それに祖父は人を見る目が確かなのと同時に、敵味方をはっきりと区別する性格だ。

味方にはどこまでも優しいが、敵には本当に厳しい。

敵にも懐柔策を与える代わりに周りを囲い込むようにじわじわと追い詰めて行く父とは違い、一気に瀬戸際まで追い詰める祖父。

どちらがいいのかと言われれば一概にどちらもいいとは言えないけれど、やはり二人とも『遠藤』を背負っているだけはあるのだ。

願わくば、後ろでうとうとと船を漕いでいる女の子に牙を向けなければいいのだが。

ま、母と祖母が神崎鼻肩な分、それはプラスにはなるだろうが。

静かに車で敷地内に入って、普段はもつと手前に停める車をもつと玄関に近いところで停める。

車が停まったことで控えていたのだろう、渡瀬がいち早く玄関から出てきて、俺が出ていくのと同時に後部座席のドアを開けた。

「おかえりなさいませ。」

「ああ、急に悪いな。おい、神崎。着いたぞ。」

俺達の声にぴくりと身を起こした飼い犬が、俺と渡瀬を見た後に主人を見上げたのだが、その主人はと言うと転寝うたたねが本格的に寝てしまつたらしい。彼が前足で起きるとアピールするのだが、疲れからか全然起きる気配が無い。

きゅんきゅん鳴いている犬を見て、渡瀬が苦笑しながら俺を見てきたのでしようがなく俺が座席まで乗り込んだ。この際、乗り込んだ瞬間に俺を見ながら唸った犬は無視だ。

「神崎！おい、起きろ。着いたぞ。」

「……………」

「うーじゃねえよ。着いたぞ、起きろ！」

と大きめの声を出しても一向に目を開ける素振りすら見せない神崎に、いい加減痺れを切らした俺は仕方なく抱き上げて運ぶ事にした。

「渡瀬、悪いがこれ持って来てくれ。それと、この犬。確か名前はナイトって言うらしい。エサと水やってくれ。」

「かしこまりました。」

「ああ、そうだ。こいつが泊まるの、どこの客室だ？」

「……………あの…それが……………」

「渡瀬？」

言いよんだ渡瀬を不思議に思いながら神崎を抱き上げた。

その際、一応熱が上がってないかを確かめるために額に手を当ててみたが、恭輔のところまで打った点滴が効いているらしい。そう言えば処方された薬も飲んでいたし、その効果で寝てしまったのかもしれない。

心配した熱もないようなので、唸る犬を引きながら膝裏に腕を入れて抱き上げた。

抱き上げてもしきる気配もないので、慎重に車から降りる。

それにしても、軽い身体だと改めて認識してしまう。

背もクラスの中では一番小さいみたいだし、最近の子は平均身長が伸びているって言うのにこれでは平均身長以下だろう。

それに端から見てもわかるが、こいつは全体的に細い。脚とか腕と

か、真面目に肉が付いてるのかと思うほどだ。

ふと、前に廊下で話していた二年だか、三年男子生徒の会話を思い出した。

『やっぱ神崎可愛いなー。』

『ああ。今年の一年の中でダントツだろ。童顔なのがまた…』

『でもガードがすっげ固えんだよ。固え分、誰かと付き合ってるとかって言う話聞いた事ねえのがあれだけど。でもよ、あれで男いたとかマジで泣くぜ？』

『つか、その男マジ羨ましすぎだろ！あの胸触れるし、挟まれんだぞ！…！』

『ホントだよなー。つか、何カップあると思う？』

『パツと見、Dじゃね？あーでも、身体が細いからなあ。俺ケツ派なんだよー…』

『ははははっ！いいじゃん、桃尻かもしれねーじゃん。しっかし、いいねえロリ巨乳。』

『せめて有紗ちゃんみたいな俺好みのケツしてたら…！』

バーカとケラケラと笑いながら去って行く生徒達の会話を実に高校生らしくて、本当に馬鹿だなと思ってくつつ笑いながら聞いてい

た時を思い出す。

まあ、高校生男子なんてそんなもんだ。どうしても性的に興味深々な年頃だというのは自分も経験上わかっているし、それを叱責するつもりもない。

騒ぎ笑い合っていた生徒達も、いずれは男の本能として処理出来る年代になるのもそう遠くないだろう。

…そうなってもらわなければ困るが。

だが、今となつては神崎がそんな下世話な猥談の種になっていることに若干腹が立っているのも事実。

桐生家全員で真綿で包むように…まさに手中の珠のように育てていた娘が、まさか強姦未遂の被害者になるなんて誰が予想しただろうか。

これから社会に出て行けば、もっと男女のそういったことが増えていくだろうし、いずれは彼女も誰かを好きになって結婚し、その男の子供を産むだろう。

本当に、今回の事で男性恐怖症にならなければいいのだが…。

俺の心配を他所に、固く閉じられた瞼からは何の表情も伺い知る事は出来なかった。

「亨、お帰り。」

父のその声で、俺は一気に物思いから現実に戻された。

第83話（後書き）

男子高校生の会話ってこんなもんですか？（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162p/>

編み物BABY

2011年11月22日02時52分発行